

朽木橋横穴古墳群
宮前遺跡

昭和58年3月

宮城県教育委員会

序

私達の生活している宮城県内には、祖先がのこした数多くの遺跡があります。これらの文化遺産は、豊かな自然環境と長い歴史の中で創造し、育ぐくんできたものであり、これを愛護し、活用するとともに後世に伝えていくことが現代の私たちの重要な責任であると考えます。

近年、地域の開発事業が進展するのに伴ない、埋蔵文化財の保護が重要視されできているのもその線に沿ったものであります。

本報告書は、宮城県教育委員会がこれまで発掘調査を実施した遺跡のうち、年次計画に従って整理した『朽木橋横穴古墳群・宮前遺跡』について、成果をとりまとめたものであります。

ここに、本書を刊行するに当たりまして、関係された方々の御協力に深甚なる敬意を表しますとともに、遺跡に対する御理解の一助となり、さらに学術上にも大きく役立つことを切に願ってやまない次第であります。

昭和58年3月

宮城県教育委員会

教育長 三 浦 徹

例　　言

1. 本書は宮城県教育委員会が主体となって調査を行なった遺跡の調査報告を収録したものである。
2. 本書に収録した遺跡は次の通りである。

古川市所在　朽木橋横穴古墳群（昭和48年度実施）

亘理郡亘理町所在　宮前遺跡（昭和49年度実施）

また、別に、昭和57年度発掘届一覧、宮城県文化財調査報告書一覧を掲載した。

3. 宮前遺跡の報告をまとめるに際し、渡辺泰伸氏（仙台育英学園教諭）から古墳時代中期の須恵器について助言をいただいた。
4. 各遺跡の執筆は調査時における調査員および現宮城県教育庁文化財保護課職員の協議を得て、下記の文化財保護課職員および旧職員が担当した。

朽木橋横穴古墳群　佐々木安彦（現仙台市長町中学校教諭）・阿部　恵

宮前遺跡　丹羽茂

5. 各遺跡の調査に関するすべての資料（出土遺物・諸記録等）は宮城県教育委員会において保管している。

目　　次

| | |
|----------------------|-----|
| (1) 耐木橋横穴古墳群 | 1 |
| (2) 宮前遺跡 | 71 |
| ○昭和58年度発掘届一覧 | 214 |
| ○宮城県文化財調査報告書一覧 | 220 |

くち き ばし
朽木橋横穴古墳群

目 次

| | |
|-------------------------|----|
| I. 調査の経過..... | 1 |
| II. 遺跡の位置と環境..... | 1 |
| III. 調査の方法..... | 7 |
| IV. 発見された遺構と遺物..... | 7 |
| 第1号墳..... | 7 |
| 第2号墳..... | 9 |
| 第3号墳..... | 10 |
| 第4号墳..... | 10 |
| 第5号墳..... | 11 |
| 第6号墳..... | 13 |
| 第7号墳..... | 13 |
| 第8号墳..... | 20 |
| 第9号墳..... | 24 |
| 第10号墳..... | 27 |
| 第11号墳..... | 30 |
| 第12号墳..... | 30 |
| 第13号墳..... | 33 |
| V. 考 察..... | 40 |
| 1. 出土遺物の年代..... | 40 |
| 2. 横穴古墳の構造と編年..... | 43 |
| 3. 横穴古墳の年代..... | 45 |
| 4. 朽木橋横穴古墳群の特徴と問題点..... | 46 |

調査要項

遺跡名：朽木橋横穴古墳群

遺跡記号：BA（宮城県遺跡地名表登載番号：27090）

所在地：宮城県古川市小野字朽木橋

調査対象面積：約1200m²

発掘面積：約500m²

調査期間：昭和48年4月25日～6月15日

調査員：宮城県教育庁文化財保護課 佐々木茂楨、小井川和夫、佐々木安彦、阿部恵

調査参加者：東北学院大学学生 木村浩二、鈴木実夫、千葉寿郎、新沼秀二、門馬真一郎

調査協力機関：古川市教育委員会

I. 調査の経過

朽木橋横穴古墳群は、宮城県古川市小野字朽木橋地内の丘陵斜面にあり、大崎北部地区広域農道の建設と係り合いをもった。

この農道は、江合川左岸一帯の古川市、岩出山町、田尻町、涌谷町などの広域農業団地の育成と農産物の流通合理化、生活環境の整備を図るため、宮城県農政部が主体となって昭和47年春に事業着手したもので、その延長路線は18.9km、幅員6mである。

朽木橋横穴群は、同農道の建設予定ルートにかかるため、宮城県教育委員会が昭和48年4月25日より緊急発掘調査を実施した結果明らかになつたもので、ルート内を主体に約40基程が群集している。路線敷内では円墳1基を中心に29基の横穴古墳が取り巻いている。

当初の設計では、古墳群のある山を大きく切り崩して直線コースの道路を造ることになつてゐたが、発掘調査が進むにつれて、複室構造をもつ特異な横穴が検出されて注目をあびた。これらのことから朽木橋横穴古墳群は北限地帯の横穴古墳としては極めて古い様相を示すものとしてその重要性が認識されるにいたつた。

この間、5月12日には地元市民を中心に現地説明会を開催して、この遺跡の学術的価値と意義についての普及につとめたが、その後ほどなく古川市の遺跡保存要請で関係者の協議の結果6月15日をもつて発掘調査が打ち切られることになった。この間に発掘した横穴は13基で、同ルート内の残りの円墳1基および横穴16基はそのまま保存した。

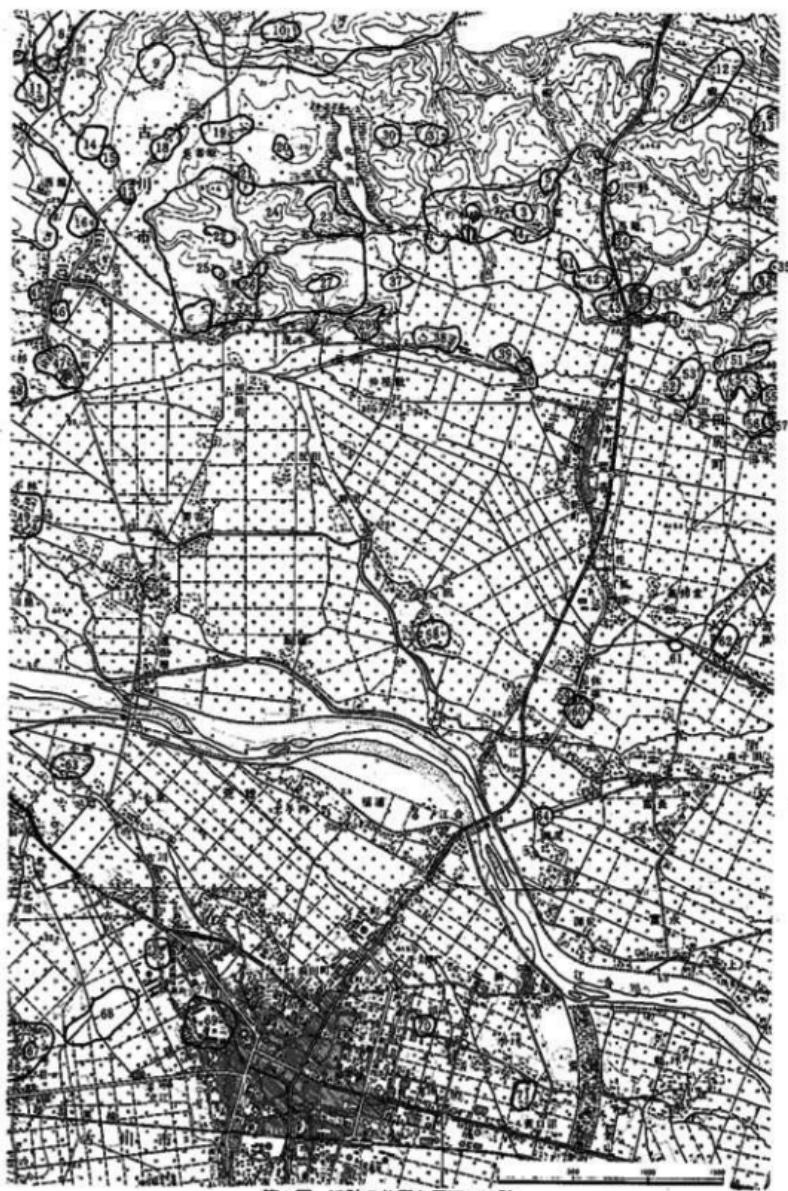
以来、路線変更による遺跡の保存に関する協議が関係機関の間で重ねられた。こうして最終的に朽木橋横穴古墳群はすべて現状のままの保存が決定した。調査で開口した横穴は埋戻しが行われ、広域農道は古墳群を右に避けて迂回され、昭和52年暮れに全線が開通した。

II. 遺跡の位置と環境

朽木橋横穴古墳群は国鉄陸羽東線陸前古川駅の北方約6km、古川市小野字朽木橋一帯に所在する。

古川市は宮城県の北西部に位置しており、東は遠田郡田尻・小牛田両町、西は加美郡中新田町、南は志田郡三本木町、北は玉造郡岩出山町、栗原郡高清水町に接している。

古川市の地形を見ると北部には奥羽山脈から派生した陸前丘陵の一部である築館丘陵が東に延び、起伏量の少ない丘陵地帯を形成している。中央部から南部にかけては、丘陵地帯の南麓を東南方向に流れる江合川や市の西端を東流する鳴瀬川とその支流多田川によって形成された肥沃で広大な大崎低地が広がつておらず、県内有数の穀倉地帯となっている。また河川の流域には、各所に自然堤防が発達している。



第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡

朽木橋横穴古墳群は北部丘陵地帯のほぼ南端に立地しており、東に樹枝状に枝分れしながらびてきた丘陵が、さらに南東方向に突出し、舌状丘陵状となった部分の南西斜面から北東斜面にかけて凝灰岩を穿つ構造されている。古墳群の位置する標高は約25~40m、水田面との比高は約10mである。現状は一部が畑として耕作されている他は山林となっている。

本横穴古墳群の位置する古川市小野地区一帯には多くの横穴古墳群の所在が知られており、これらは大字名から一括して小野横穴古墳群と呼称されている。そしてこの小野横穴古墳群はそれぞれが立地する小丘陵によって支群に分かれ、その小字名から馬籠、羽黒、白山、小高、姥沢、朽木橋、岩崎の各支群名が付されている。朽木橋古墳群はその中で最も西に位置している（第2図）。

大崎平野とそれを取り囲む丘陵地帯には数多くの遺跡の存在が知られ、その時代は旧石器時代から中・近世の各時期に亘っている。ここでは古墳時代の後期から終末期にかけてを中心に朽木橋古墳群を取りまく環境を概観したい。

古墳時代になると前期の前方後円墳と考えられる青塚古墳（古川市教委：1981）、塩釜式期の住居跡1軒が検出された留沼遺跡（手塚：1981）、中期引田式の標準式遺跡である引田遺跡などが大崎低地に形成された自然堤防上に立地するようになり、旧石器時代から弥生時代の遺跡が

第1表 周辺の遺跡地名表

| 番号 | 遺跡名 | 種別 | 時代 | 番号 | 遺跡名 | 種別 | 時代 | |
|----|---------------|---------|----------|----------|------------------|----------|-------------|-------|
| 1 | 朽木橋横穴古墳群 | 横穴古墳 | 秦代・平安 | 27 | 朽木橋遺跡 | 古跡地 | 秦代・平安 | |
| 2 | 小野横穴古墳群（朽木支群） | 横穴古墳 | 秦代・平安 | 28 | 唐松山遺跡 | 古跡地・横穴古墳 | 秦代・平安 | |
| 3 | 経糸小高遺跡 | 墓群・横穴古墳 | 秦代・平安 | 29 | 昭和町古墳群・昭和山遺跡 | 古跡地 | 秦代・平安 | |
| 4 | 小野横穴古墳群（小高支群） | 横穴古墳 | 秦代・平安 | 40 | 新江戸遺跡 | 古跡地 | 國文（後） | |
| 5 | * | （新田支群） | 内曲作・横穴古墳 | 秦代・平安・平安 | 41 | いもぐ原周辺遺跡 | 古跡地 | 國文（後） |
| 6 | 城崎遺跡 | 住居跡 | 秦代・平安 | 42 | 小野横穴古墳群（御園・白山支群） | 横穴古墳 | 秦代・平安 | |
| 7 | 若木遺跡 | 古跡 | 古代 | 43 | 鹿島遺跡 | 古跡地 | 古代 | |
| 8 | 野崎遺跡 | 古跡地 | 先史 | 44 | 一貫寺遺跡 | 古跡地 | 秦代 | |
| 9 | 化女塚遺跡 | 古跡地 | 國文 | 45 | 内林古墳群 | 古跡 | 秦代・平安 | |
| 10 | 長崎遺跡 | 古跡地 | 田代期・國文 | 46 | 下田遺跡 | 古跡地 | 後世・平安 | |
| 11 | 雨生式遺跡 | 城壁 | 中世 | 47 | 御田町遺跡 | 集落跡 | 御田（後）・古墳（後） | |
| 12 | 下田式遺跡 | 古跡地 | 仰生・後 | 48 | 一中遺跡 | 古跡地 | 仰生 | |
| 13 | 早良遺跡 | 古跡地 | 國文（後） | 49 | 呉小河遺跡 | 古跡地 | 秦代・平安 | |
| 14 | 上村遺跡 | 古跡地 | 先史 | 50 | 石舟田遺跡 | 古跡 | 近世 | |
| 15 | 牛山遺跡 | 古跡地 | 秦代・平安 | 51 | 度母山遺跡 | 古跡地 | 秦代・平安 | |
| 16 | 宮代遺跡 | 城壁 | 中世・後世 | 52 | 火神社横穴古墳群 | 横穴古墳 | 古墳（後） | |
| 17 | 虎鹿遺跡 | 古跡地 | 秦代・平安 | 53 | 天神山遺跡 | 古跡地 | 平安 | |
| 18 | 新井原遺跡 | 古跡地 | 國文・佐良・平安 | 54 | 足利城横穴古墳群 | 横穴古墳 | 古墳（後） | |
| 19 | 牛久越跡 | 古跡地 | 國文・平安 | 55 | 大坂遺跡 | 古跡地・城壁 | 秦代・平安・中世 | |
| 20 | 長者山遺跡 | 古跡地 | 國文 | 56 | 賀子塚横穴古墳群 | 横穴古墳 | 中世 | |
| 21 | 佐佐木三遺跡 | 古跡地 | 秦代・平安 | 57 | 日向城跡 | 城跡 | 中世 | |
| 22 | 山の上古墳群 | 古墳 | 古墳 | 58 | 西田城跡 | 城跡 | 中世 | |
| 23 | 若ノ谷地遺跡 | 古跡地 | 先史 | 59 | 秋葉城跡 | 城跡 | 中世 | |
| 24 | 御次跡 宮代遺跡 | 城壁 | 秦代・平安 | 60 | 城跡跡 | 城跡 | 近世 | |
| 25 | 美術遺跡 | 古跡地・古墳 | 秦代 | 61 | 馬込川遺跡 | 古跡地 | 佐良・平安 | |
| 26 | 日輪遺跡 | 古跡地 | 秦代 | 62 | 馬致加跡・馬致人遺跡 | 古跡地 | 秦代・平安・中世 | |
| 27 | 長者山A遺跡 | 古跡地 | 國文（後） | 63 | 小泉遺跡 | 古跡地 | 中世 | |
| 28 | 御田式遺跡 | 城壁 | 中世 | 64 | 御田遺跡 | 古跡地 | 古墳 | |
| 29 | 三輪田遺跡 | 古跡地 | 秦代・平安 | 65 | 菅原城跡 | 城跡 | 中世 | |
| 30 | 上原式遺跡 | 古跡地 | 國文 | 66 | 草の日遺跡 | 古跡地 | 古墳 | |
| 31 | 高山遺跡 | 古跡地 | 國文 | 67 | 唐塚古墳 | 古跡地 | 古墳（後） | |
| 32 | 御田式遺跡 | 古跡 | 古墳 | 68 | 竹の内遺跡 | 古跡地 | 古墳 | |
| 33 | 馬塚遺跡 | 古跡地 | 國文・秦代・平安 | 69 | 古川城跡 | 城跡 | 中世・近世 | |
| 34 | 小野横穴古墳群（若電支群） | 横穴古墳 | 古跡（後） | 70 | 御道遺跡 | 古跡 | 古墳（後） | |
| 35 | 小野横穴古墳群 | 城壁 | 近世 | 71 | 幸平城跡 | 城跡 | 中世 | |
| 36 | 度母遺跡 | 古跡地 | 國文（後）・古墳 | | | | | |

北部丘陵地帯に多く分布するのと大きく様相を異にしている。このような古墳時代前期に始まる沖積地への進出に伴うと考えられる経済的基盤の発達は、古墳時代後期から終末期になると大崎平野周縁に分布する高塚群集墳や横穴古墳の飛躍的な数の増大となって表わされてくる。

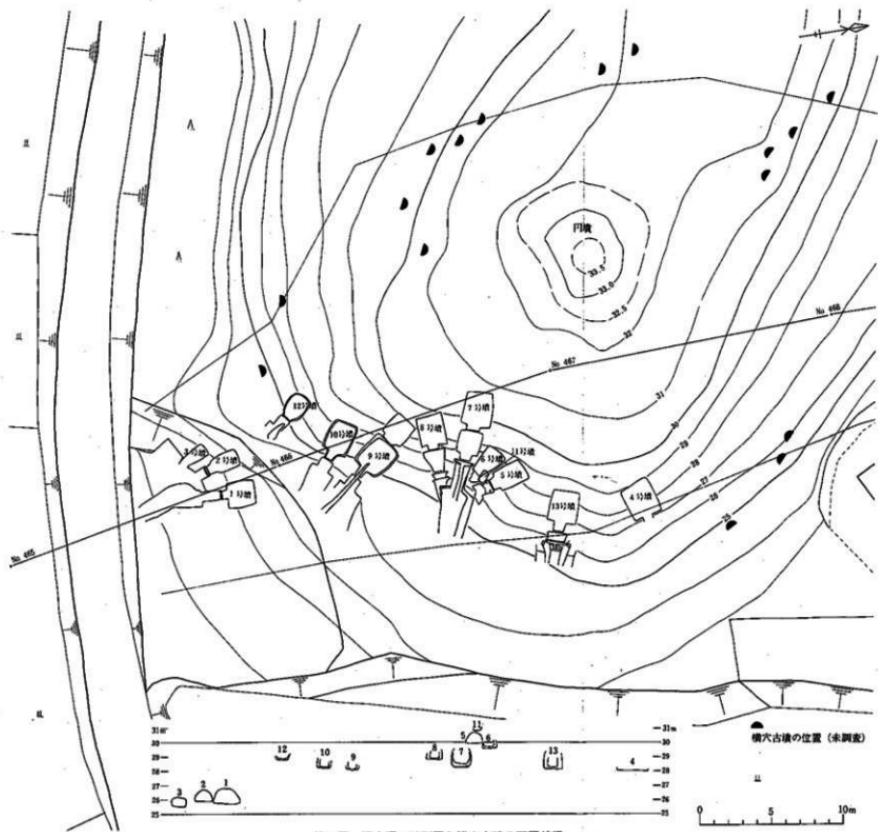
高塚群集墳の分布状況を見ると大崎平野西半部に分布が集中し、東半部では小牛田町内に分布が認められるものの概して希薄である。西半部の西縁には200基以上が群集していたとされる色麻町色麻古墳群（古川：1981）などがあり、ここから北縁西半にかけての丘陵地帯には塚原古墳群（古川市教委：1970）、日光山古墳群（古川市教委：1971）に代表される群集墳が一帯に多数分布している。そしてこれらのうち調査された群集墳はいずれも円墳で、内部主体は河原石積の横穴式石室をもっている。

横穴古墳群は大崎平野の南縁に松山町亀井田横穴古墳群（氏家：1981）や装飾横穴のある三本木町山畠横穴古墳群（氏家：1973）などが、東縁に涌谷町追戸・中野横穴古墳群（涌谷町教委：1973）などが、北縁にはほぼ中央に朽木橋横穴古墳群が含まれる小野横穴古墳群があり、その東には田尻町日向横穴古墳群などが、西には2.5kmの間に数百基が分布すると言われる川北横穴古墳群（平、加藤、氏家：1970）などが連続して分布しており、西縁には宮崎町米泉館山横穴古墳群（宮崎町教委：1973）などがある。横穴古墳群は大崎平野のほぼ全周に分布しているが、墳集墳の多い西縁では分布密度が低くなっている。

これらの群集墳や横穴古墳群の造営の背景は、集落跡などの発掘例が少なく十分明らかではないが、古川市名生館遺跡は7世紀末～9世紀末の官衙跡とも考えられており（高野、沖田：1983）、多賀城創建瓦窯である古川市大吉山瓦窯跡などの存在からも古墳時代終末期から奈良平安時代の大崎地方は比較的安定した社会環境にあったと思われる。



第2図 小野横穴古墳群



第3図 調査区・地形図と横穴古墳の配置状況

III. 調査の方法

発掘調査は農道路線敷内のはば南端部の畠に開口していた横穴古墳に第1号墳と命名し、表土を除去する作業から始めた。当初表土を除去したのは、この第1号墳の周辺と南東斜面の北端に玄室が陥没した状態で埋没していた第4号墳との間約40mの範囲で、ボーリング棒による調査も合わせて進めた。そして横穴古墳には発見順に第1～第13号の番号を付したが、その配列は第1号墳の南に第2、3号墳が、第4号墳と第1号墳の間に、北から南へ順に第5～第12号墳が位置している。また、第4号墳と第5号墳の間に第13号墳が、第5号墳と第6号墳の間に第11号墳が新たに検出されている。

検出された横穴古墳は土層観察用のベルトを残しながら、堆積土を排除することにしたが小規模な横穴古墳が多いこともあり、堆積土の状態を十分に観察、記録化することは出来なかった。

出土遺物については随時、写真や1/10、1/20の図面で記録化し、精査の終了した横穴古墳については1/20の縮尺で平面図、縦・横断図を作成し、写真を撮影した。

精査がほぼ終了した段階で、調査区全体を測量し、1/100の地形図を作製した。また、今回調査した部分以外の路線敷分についてボーリング調査を行ない、横穴古墳の存否を確認し、確認されたものについては地形図にその位置を記録した。

IV. 発見された遺構と遺物

今回の調査で検出された遺構は横穴古墳13基である。13基の横穴古墳のなかには玄室を2つも複室構造のものも含まれている。複室構造の玄室については手前の玄室を前室、奥を後室と呼称することとする。出土遺物には土師器、須恵器、鉄製品、金・銀環、玉類などがある。

第1号墳（第4図）

本横穴古墳は南斜面の東端にあり、全長約6mで西側にある第2、3号墳と前庭を共有している。

〔玄門〕 玄室の前端の中央からやや左よりにある。玄門の立面形は両側壁が崩落しており不明である。床面からわずかに立ち上がりを残すだけで、玄門前端床面には幅約12cm、深さ約8cmの閉塞溝がある。

〔玄門〕 玄室の前端の中央からやや左よりにある。玄門の立面形は崩落しており不明である。床面からわずかに立ち上がりを残すだけで、玄門前端床面には幅約12cm、深さ約8cmの閉塞溝がある。

〔羨道〕 羨道の全長は約1.3mで、両側壁とも平行に羨門に向っている。立面形は天井部が崩落しており不明である。床面は羨門に向って傾斜しているが、その上面にはほぼ平坦に円礫が

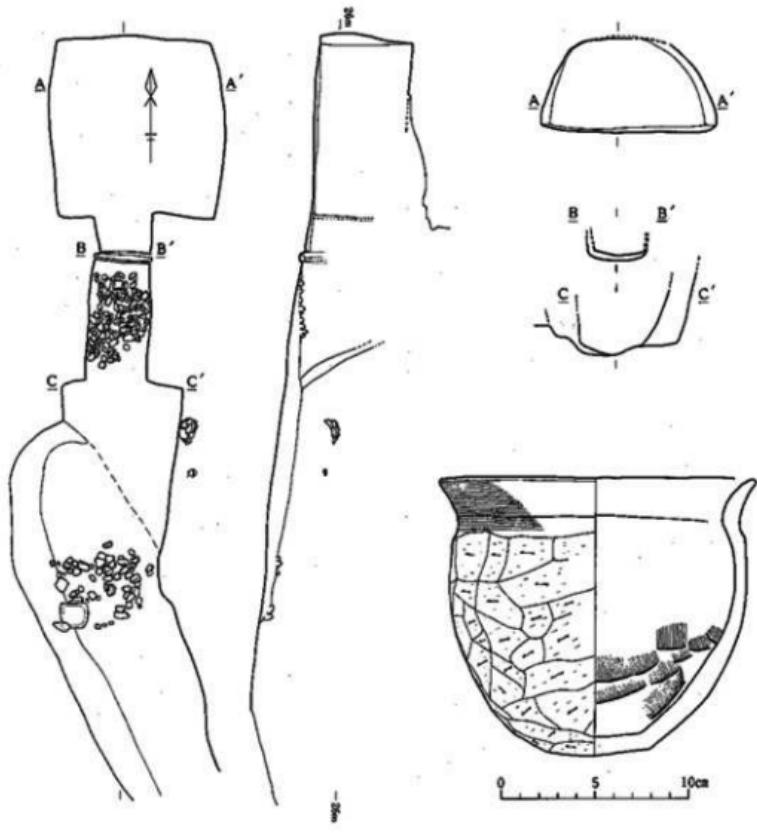
敷きつめられたような状態で認められた。

〔羨門〕 羨道前端の両側壁が右に約40cm、左に約30cm開き羨門となっている。羨門右側は約80cmの立ち上がりが残っているが、左側は15cmほどしか残っていない。

〔前庭〕 前庭部は右側壁で約2m、左側壁で約40cmほどを残して第2号墳の前庭部と思われる掘り込みによって切られている。平面形は羨門から前端に向って狭くなっている。床面は前方に向ってやや深く傾斜している。

〔出土遺物〕

羨門近くの前庭部堆積土上面から土師器甕が一括状態で出土している。



第4図 第1号墳と出土遺物

土師器甕 口縁部が外反し、体部がふくらむ小型の甕である。器面調整は口縁部内外面が横ナデ、体部と底部外面が横方向のヘラケズリ、体部内面はヘラナデが施されている。

第2号墳 (第5図)

第1号墳の西隣に位置している。全長約8mが検出された。かなり風化が進んで崩落が激しい。

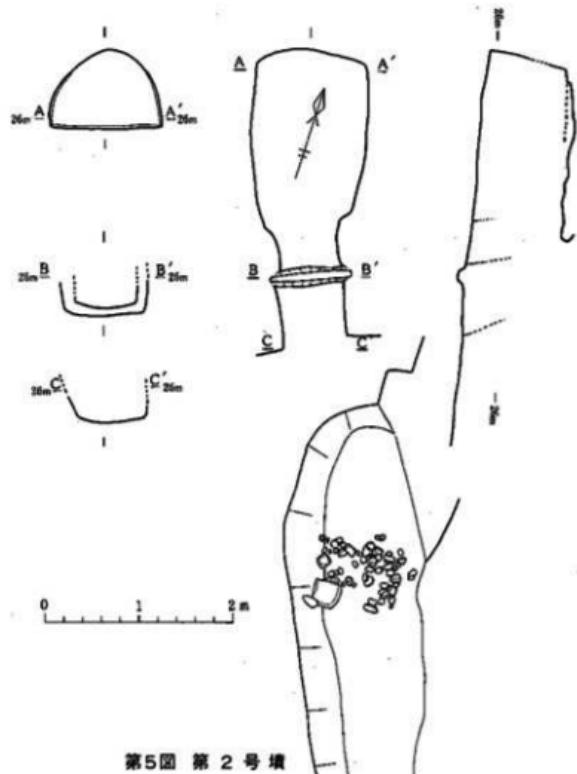
〔玄室〕 平面形はほぼ長方形で、奥壁はわずかにふくらんでいる。玄室の立面形はアーチ型である。床面は両側壁から中央部にかけてわずかに凹み、玄室前端に向って傾斜している。両側壁は奥壁付近が残存している。両壁の立ち上がり部分から天井部にかけて剥落している。天井部は玄室奥壁から約16cmのところまで残存しており、玄室前端にかけて剥落がみられる。

〔玄門〕 玄室前端のほぼ中央部にある。玄門の立面形は天井部が崩落しているため不明である。玄門の左側壁は崩落しており、右側壁がわずかな立ち上がりを残している。玄門前端の床面には幅約20

cm、深さ約8cmの閉塞溝がある。

〔羨道〕 幅約70cmで天井部はなく、わずかに残る両側壁が中心軸から右寄りに約60cm残存している。床面は前方に向ってゆるく傾斜している。

〔前庭〕 羨道の延長上に前庭部と思われる掘り込みが約4mの長さで認められ、第1号墳の前庭部を切っている。掘り込みの下端の幅は約1mである。この掘り込みの堆積土中に直径10cmほどの円礫や凝灰岩の切り石等



が含まれている。

〔出土遺物〕 出土遺物はない。

第3号墳（第6図）

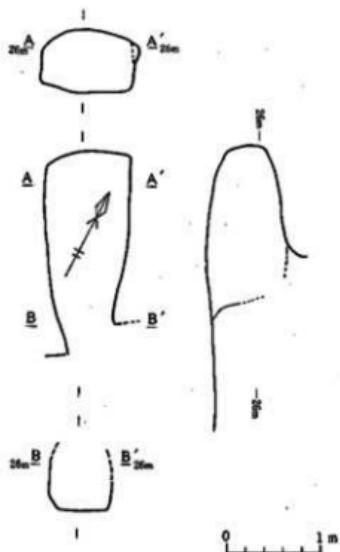
調査区の西端、第2号墳の左隣りにある。全長約1.9mと規模が小さい。

〔玄室〕 玄室前面に向って両側壁が狭くなつており、平面形は細長い台形状を呈している。玄室の立面形は奥壁から天井部にかけ、剥落が激しく不明である。床面は奥壁から約50cmのところから風化による剥離がみられ堆んでいるが、ほぼ平坦である。両側壁はわずかに残存しており、荒いノミ痕が認められる。玄門、羨道や閉塞用の施設はない。

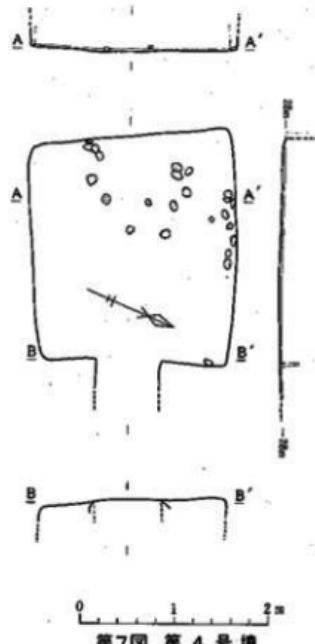
〔出土遺物〕 出土遺物はない。

第4号墳（第7図）

南東斜面の北端にある。路線敷きにかかる玄室から玄門の一部までの長さ約2.7mの調査を行った。



第6図 第3号墳



第7図 第4号墳

〔玄室〕 玄室の平面形はほぼ正方形である。立面形はわずかの両側壁を残し崩落しているため不明である。床面はほぼ平坦であり、床面直上には計24個の10cm前後の大きさの円碟が残存していた。

〔玄門〕 玄室前端のほぼ中央にある。長さ約30cmほどしか調査していないため、幅約70cmであることをしかわからない。また側壁もほとんど残っていないため、立面形も不明である。

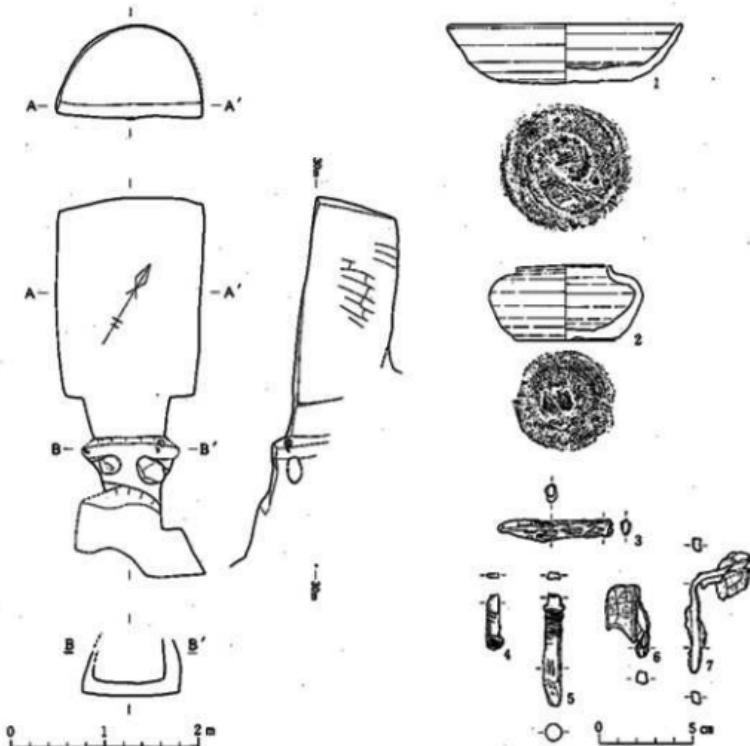
〔出土遺物〕 出土遺物はない。

第5号墳（第8図）

南東斜面の第4号墳から南へ約11m離れたところにある。約4mの規模をもっている。

〔玄室〕 玄室の平面形はほぼ長方形で奥壁がややふくらみをもつ。立面形はアーチ形である。床面は玄門に向って傾斜している。両壁面から天井部にかけて幅約10cmのノミ痕が認められ、ていねいに造られている。

〔玄門〕 玄室前端のほぼ中央部にあり、玄室前端の幅に比して幅広の玄門である。玄門後端より前端が狭くなってしまっており、平面形は台形となっている。両側壁は約50cm立ち上がりが残っている。立面形は天井部が崩落しているため不明である。玄門前端には幅約20cm、深さ10cmの閉



第8図 第5号墳出土遺物

塞溝がある。

〔漢道〕閉塞溝に接して約30cm床面が残り、その前半から前庭にかけて崩壊しているが、本来は約80cmの長さをもっていたと思われる。天井部はない。床面から浮いた状態で閉塞用に用いられた凝灰岩塊が溝と平行に両壁面に接して2個検出された。

〔前庭〕漢道右側壁の前端から側壁が約25cm右へ屈曲している。この部分から前庭部と思われるが、7号墳の前庭にすぐに接しているため詳細は不明である。

〔出土遺物〕

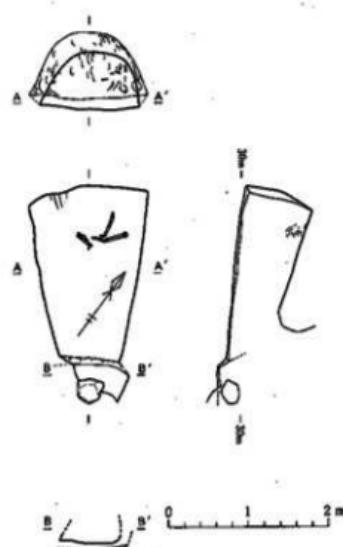
出土遺物には土師器、須恵器、鉄製品がある。

土師器壺、須恵器小型短頸壺、鉄製品（刀子、鐵鎌）は玄門床面から出土した。須恵器小型短頸壺は玄門右端の床面から閉塞溝にわずかに落ち込む形で出土した。閉塞溝の左右両端に近い所からはカスガイが1点づつ出土している。須恵器壺は前庭部右壁に接して出土したものである。

土師器壺 小破片で図示することはできない。

須恵器

壺（第8図1）体部から口縁部にかけて内窓気味に外傾する器形で、底部は回転ヘラ切り技法によって切り離されている。



第9図 第6号墳

小型短頸壺（第8図2）最大径8.2cm、器高4.0cmと小型で広口の壺である。直立する口縁部は0.5cmと短く、口縁部は角ばる。底部は回転ヘラ切り技法で切り離されている。外面の口縁部から肩部にかけてと内面底部とに自然釉が認められる。

鉄製品

刀子（第8図3）茎の茎先部分の破片である。把の木質部が全体に残っている。

鐵鎌（第8図4・5）いずれも長頭式鐵鎌の破片で、4は先端部、5は籠被と茎の境が棘状に突出しており、籠（矢柄）は竹である。籠の残存部には巻糸も認められる。

カスガイ（第8図6・7）6は閉塞溝の右端、7は左端で出土した。いずれも断面長方形の細長い鉄身が直角に近く屈曲しており、木質部も残る。

第6号墳（第9図）

第5号墳の南、約1.5m離れたところにある。第5号墳よりやや高い位置にある。全長約2.6mと比較的小規模のものである。

〔玄室〕 玄室の平面形は丸味を帯びる奥壁の長さに比して前端が狭いため、細長い逆台形に近い。立面形はアーチ形である。床面は玄門に向って強く傾斜している。左奥壁近くの床面にはノミ痕が認められる。奥壁には幅約10cmで弧状の突き刺し痕と思われるノミ痕が多数見られる。天井部は玄室前端に向かって低くなりながら1.3mほど残存しているがその前方は崩落している。

〔玄門〕 玄室と玄門を明確に区画する施設はない。玄室前端の床面と羨道床面との間に約15cmの段差があり、閉塞用施設となっている。

〔羨道〕 約35cmの長さの床面と右側壁だけが残存して、7号墳の羨道部に移行している。床面上から閉塞に使用したと思われる凝灰岩が1個検出された。

〔出土遺物〕

玄室奥の床面上から人骨が数点出土している。このうち2点は関節部を欠くが大腿骨で、2点は脛骨の骨幹部破片と思われる。以上から人骨は1体分で、その下腿部だけが残存している可能性がある。

第7号墳（第10図）

第6号墳の南（約1.3m）、発掘調査区のはば中央部に位置し、第5、6号墳より約1.5m、第8号墳より50cm低いところで検出された。複室構造の玄室をもち、全長10m以上の大型の横穴古墳である。前室は後室に比較して規模が小さい。

〔玄室（後室）〕 右側壁が玄門に向ってややふくらんでいるが、平面形は正方形である。天井部は約1.8mと高く、約50cmの幅で長さ1.6mほどがほぼ平坦に造り出されている。立面形は変形アーチ形である。床面は後室玄門に向って傾斜しており、台床、排水溝などの施設はない。

〔後室玄門〕 後室前端のはば中央部に位置している。両側壁の奥行は25～35cmである。立面形はほぼ平坦な四角形に近い変形アーチ形と思われる。床面は前室奥壁ぎわ床面と約5cmの段差がある。

〔玄室（前室）〕 平面形は左右両側壁がわずかにふくらむがほぼ長方形である。天井部は後室に比してやや低く約1.5mの高さをもつ。前室奥壁ぎわの天井部は後室と同様にはぼ平坦であるが、前端では丸味を帯びて変換線は認められなくなる。立面形は変形アーチ形である。床面はほぼ平坦で前室玄門に向って傾斜している。

〔前室玄門〕 玄門は前室前端のはば中央部に位置している。立面形は天井部が崩落しているが残存している部分から考えるとアーチ形である。奥行は約40cmで側壁はほぼ垂直に立ち上がる。

る。玄門前端には閉塞溝が検出された。閉塞用の溝は二重となっており、長さ130cm、深さ12cmの溝の中に長さ105cm、幅22cm、深さ10cmのやや小規模な溝がある。小規模な溝の中には直径10cm位の円礫が充填されている。

〔羨道〕 長さ約1.8mで閉塞溝部分で幅約1m、羨門部分で80cmと羨門に向ってわずかに狭くなっている。天井部は崩落によって失われている。床面は羨門に向って傾斜しており、その中央に閉塞溝に連続する幅約30cm、深さ約30cmの溝が中軸線に沿って前庭部までのびている。羨道部の溝中には閉塞溝と同様に直径10cm前後の円礫が密に充填されている。また、床面から5~20cm浮いた状態でも円礫群が認められた。

〔羨門〕 溝や段はないが羨道前端で、両側壁が左右に約60cm開いている。この部分が羨門と思われる。天井部が崩落しているため立面形は不明であるが右側壁で約20cm、左側壁で約80cm立ち上がりが残存している。

〔前庭〕 羨門前端から約2.8mまで調査を行ったが、前庭はさらに調査区外にのびている。両側壁は前方に向って狭くなっているため平面形は羽子板状となる。床面は側壁ぎわから中央に向って強く回んでおり、全体的には前方に向って強く傾斜している。羨道部から続く排水溝は羨門部から前庭部に約70cmのびた所で不明となる。

〔出土遺物〕

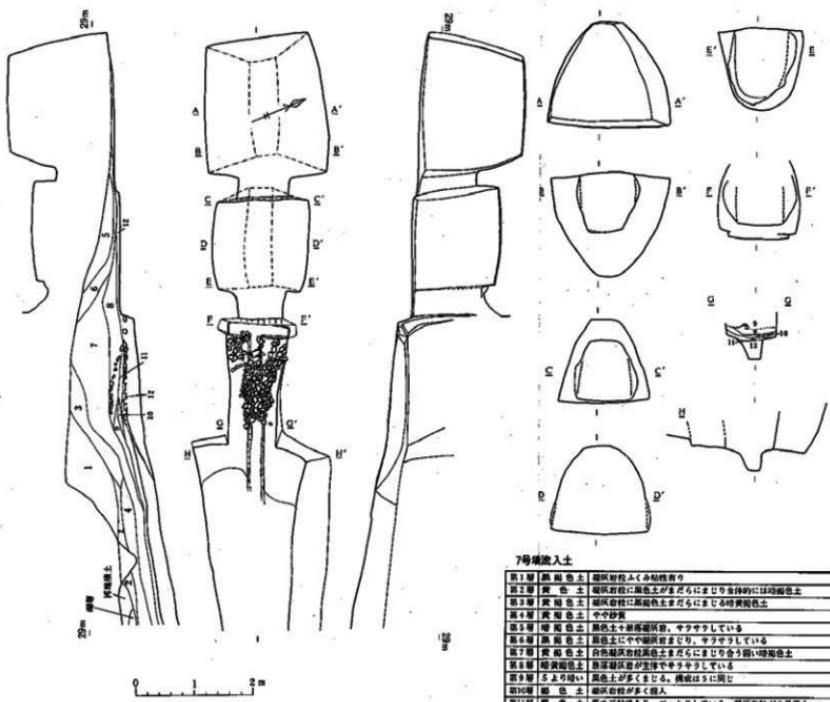
前室堆積土中から土師器壺、羨道堆積土の上部から土師器高壺、須恵器平瓶が出土し、前庭部堆積土中から多くの土師器（壺・高壺）、須恵器（壺・蓋・壺・甕）、鉄製品などが出土している。前述したように、この古墳の羨道部右上に第6号墳が、前庭部右上に第5号墳、左上に第8号墳が位置し、それぞれの前庭部がこの古墳の羨道部や前庭で重複していると考えられる。したがって羨道部や前庭部の堆積土から出土した遺物はそれらのいずれに伴なうものかは明確ではない。ここでは出土位置別に遺物について述べる。

〔前室出土遺物〕

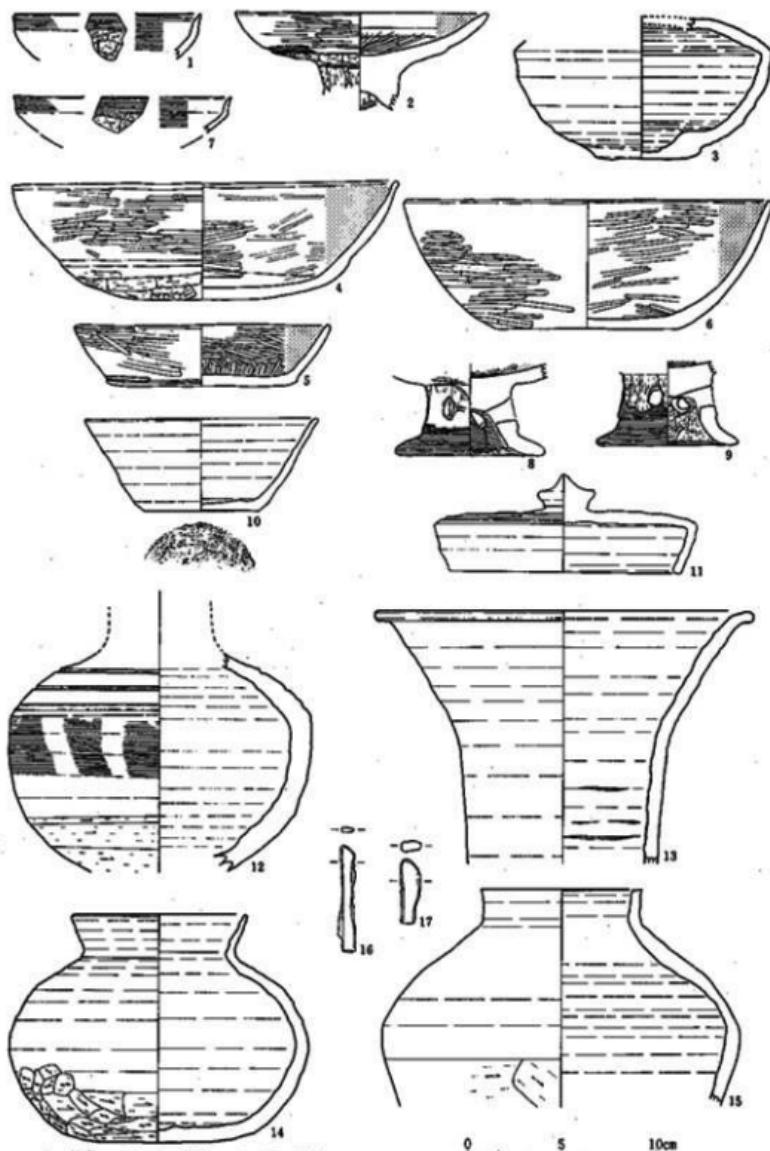
土師器壺（第11図1） 小破片で法量や全体の器形を知ることはできないが、外反する短い口縁部をもち外面中位と内面上端に段が認められる。底部は丸底となると思われる。調整は外面の段から上が横ナデ、段から下はヘラケズリされている。内面は横ナデで朱が塗られている。

〔羨道出土遺物〕

土師器高壺（第11図2） 脚部の下端を欠くものである。壺部は体部下端にわずかな段をもち、段から上は内窪しながら外傾し、底部は丸底気味である。器面調整は外面の段から上がヘラミガキ、底部はヘラケズリされ、内面はヘラミガキ、黒色処理されている。脚部は短い中実の柱状部と急激に聞く裾部の一部が残る。外面はヘラケズリ、内面はヘラナデおよび黒色処理が施されている。



第10圖 第7號墳



1. 瓷片 2. 3. 瓷底 4~17. 瓷底

第11圖 第7号墳出土遺物 (1)

須恵器平瓶 (第11図3) わずかにふくらむ肩部から底部にかけての破片で口縁部はない。外面の肩部から体部にかけて灰緑色の自然釉が認められ、内面底部付近にも自然釉が流れ込んでいる。内面にみられる釉は底部中心を若干はずれており、このためこの須恵器の器形は口縁部が中心からずれる平瓶の可能性がある。内外面ともロクロ調整が施されるが、外面体部下端と底部は回転ヘラケズリ後、ナデ調整が施されている。

(前庭出土遺物)

土師器

坏 (第11図4~7)

4・5は外面に段をもつものである。4は段が体下位につくもので段から上が内弯気味に外傾し、底部は丸底である。調整は外面が段から上はヘラミガキ、段から下はヘラケズリされ、内面はヘラミガキ、黒色処理が施されている。5は段が下端につくもので、段から上がやや内弯気味に外傾し、底部は平底である。調整は外面がヘラミガキ、内面はヘラミガキ、黒色処理が施されている。

6は段や沈線をもたないもので、底部は平底で、体部から口縁部が内弯気味に外傾する器形をもつ。調整は外面がヘラミガキ、内面はヘラミガキ・黒色処理が施される。

7は小破片で全体の器形や法量を知ることはできないが、外面に稜をもち稜から上は短い口縁部となり強く外反する。底部は丸底となると思われる。調整は外面の稜から上が横ナデ、稜から下はヘラケズリが施され、内面は口縁部に横ナデ、体部にヘラナデが施されている。

高坏 (第11図8・9) どちらも坏部の大部分を欠く脚部破片である。外面の柱状部と裾部の境に段をもち、柱状部はほぼ中央の対応する位置に外側からの刺突による一対の孔をもつ。坏部の調整は内面ヘラミガキ、黒色処理、外面下端の残る8はヘラケズリが施されている。脚部の調整は柱状部外面は継位のヘラケズリ、内面は8がヘラナデ、9がヘラケズリで、裾部は内外面ともに横ナデが施されている。

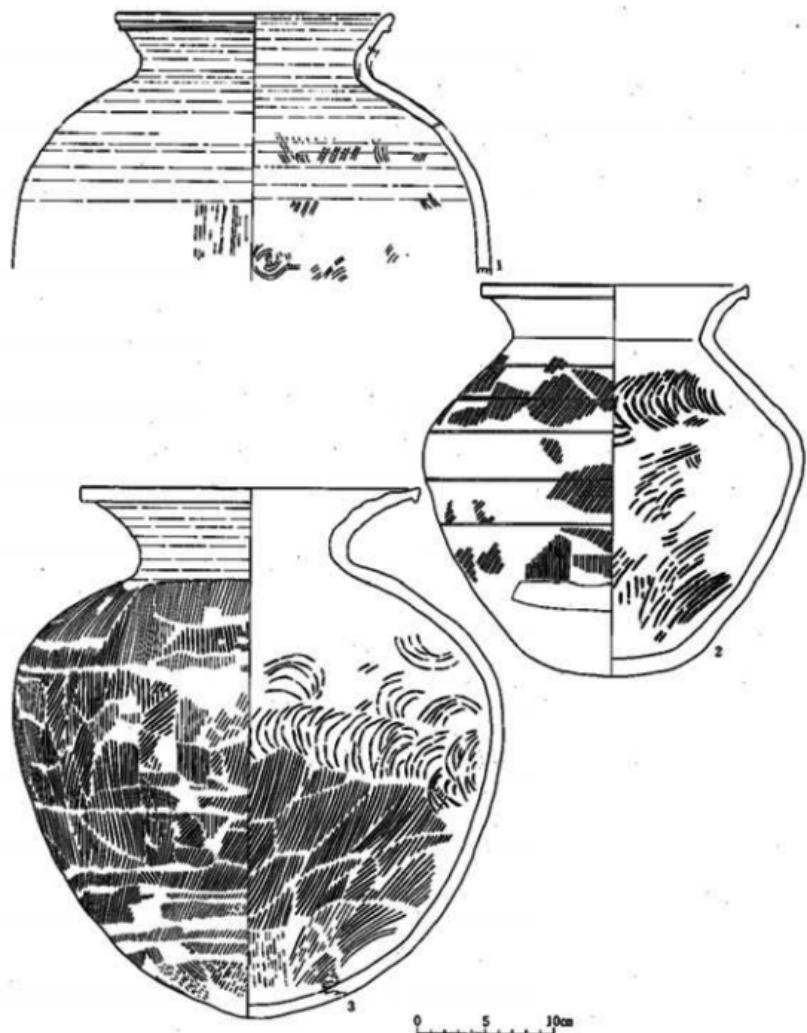
須恵器

坏 (第11図10) 体部から口縁部にかけて直線的に外傾する器形で4.9cmと高い器高をもつ。底部は回転ヘラ切り技法で切り離されている。再調整はない。

蓋 (第11図11) 比較的高い宝珠形のつまみをもつ。直線的な天井部から口縁部は強く屈曲して内傾している。口縁部は角ばっている。天井部外周に沈線が一条巡り、この部分には回転ヘラケズリが施されている。

壺 (第12~15)

12は口頭部と底部を欠くが、長頸壺と思われる。肩部は丸味をおび、三条の沈線が巡っている。肩部と体部の境は明瞭で、体部上半にはハケ目が、体部下半から底部にかけては回転ヘラ



第12圖 第7号墳出土土器（2）

ケズリが施されている。

13は口頭部だけの破片であるが、大型の長頭壺と思われる。口縁部は外反し、口縁端部で外方水平方向につまみ出され、口縁端は丸味をおびている。内外面共にロクロ調整が施されるが窓部内面には積み上げ痕跡も認められる。また口縁部内面には自然軸が部分的にみられる。

14、15は広口壺で、15は体部下半以下を欠いている。14は直線的に外傾する短い口縁部とソロバン玉状の体部をもつ。調整はロクロ調整で体部下半と底部外面に手持ちヘラケズリが施されている。15は直立する口縁部と緩い傾斜の肩をもつ。体部には手持ちヘラケズリが施されている。

甕 (第12図1～3、第13図)

1は体部下半を、第13図は口縁部と体部下半を欠くもので、第13図は大甕である。1～3は口頭部で外反し、口縁端部が下方につまみ出されて口縁帶となっている。1の口縁帶下端には1条の沈線が巡っている。2の体部にも5条の浅い沈線が巡っている。調整は口縁部内外面はいずれもロクロ調整で、1のロクロ調整は内外共体部上半まで及んでいる。体部外面にはいずれも平行タタキ目が認められる。2の体部下半にはヘラケズリが施されている。体部内面は2、3、第13図では上半に同心円状の、2、3では下半に平行のアテ目が認められ、3の上半には両方のアテ目がみられる。

鉄製品

鉄鎌 (第11図16、17) どちらも長頭式鎌の先端部で、片刃状となっている。



第13図 第7号墳出土遺物 (3)

第8号墳 (第14図)

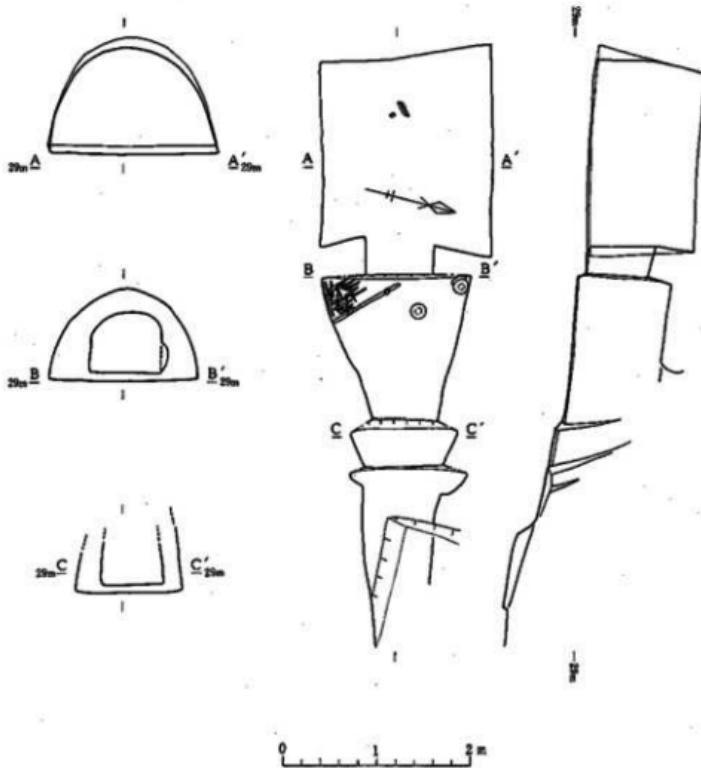
第7号墳の南隣りにあり、やや高い位置に検出された。全長約6.4mと比較的大規模な横穴古墳である。第7号墳と同様に玄室が複室構造をもつものであるが、前後室の形態に違いが認められる。

められる。

〔玄室（後室）〕 後室の平面形はほぼ正方形であるが、奥壁右側、前壁両端が突き出している。立面形はアーチ形である。床面は後室前端に向ってやや傾斜している。両側壁から天井部にかけてはていねいに構築されている。

〔後室玄門〕 後室の中心よりわずかに左寄りに位置しており、立面形はアーチ形である。玄門両壁は平行に立ち上がり天井部は低い。玄門床面と前室床面との間には約10cmの段がいくつ。

〔玄室（前室）〕 前室の奥幅が約1.5mあるのに対して前幅が約60cmしかなく、平面形は逆台形である。玄室前室のほぼ中央部から前方の天井部は崩落している。立面形はアーチ形である。床面は前端に向つて傾斜している。



第14図 第8号墳

〔玄門〕 前室と玄門は平面形ではその境は明瞭でなく、また天井部が崩落しているため立面形は不明である。玄門前端と漢道の床面との間には約10cmの段差がある。

〔漢道〕 前端から約30cmの所に床面にわずかな段差が認められ、左右両壁に幅20~30cm、深さ10~25cmの閉塞用の溝が掘り込まれており、この溝は高さ約80cmまで残存している。この部分の平面形は奥幅に対して前幅の狭い逆台形を呈している。ここが漢道で、溝部分が漢門とも考えられるが、それではあまりにも漢道が短い。溝部分に第1次の玄門があり、それが奥に移動した可能性もある。溝より前方は右側壁が第7号墳前庭と重なっているため不明瞭であるが前方に向って狭まる形態で溝部分より約1.6mのびる。

〔出土遺物〕

前室奥壁ぎわの床面上から土師器壺、須恵器壺、直刃2点を含む鉄製品多数が出土している。須恵器壺は右奥壁ぎわに3点重なった状態で、鉄製品は左奥壁ぎわに一括状態で出土した。後室からは数点の人骨片が出土している。また、前庭堆積土から土師器壺、須恵器小型壺が出土している。

土師器

壺 (15図1~5) 1は後室玄門前の前室床面で口縁を上向きに出土した。底部は平底風で体部は内弯気味に外傾し、口縁部は直立する。体部下端には浅い沈線が1条巡っている。調整は外面が口縁部では横ナデ、体部と底部はヘラケズリが施され、体部ではヘラケズリ後、ヘラミガキが施されている。ヘラミガキは底部の一部にもおよんでいる。内面はヘラミガキ、黒色処理が施されている。体部の内、外両面に積み上げの痕跡が認められる。

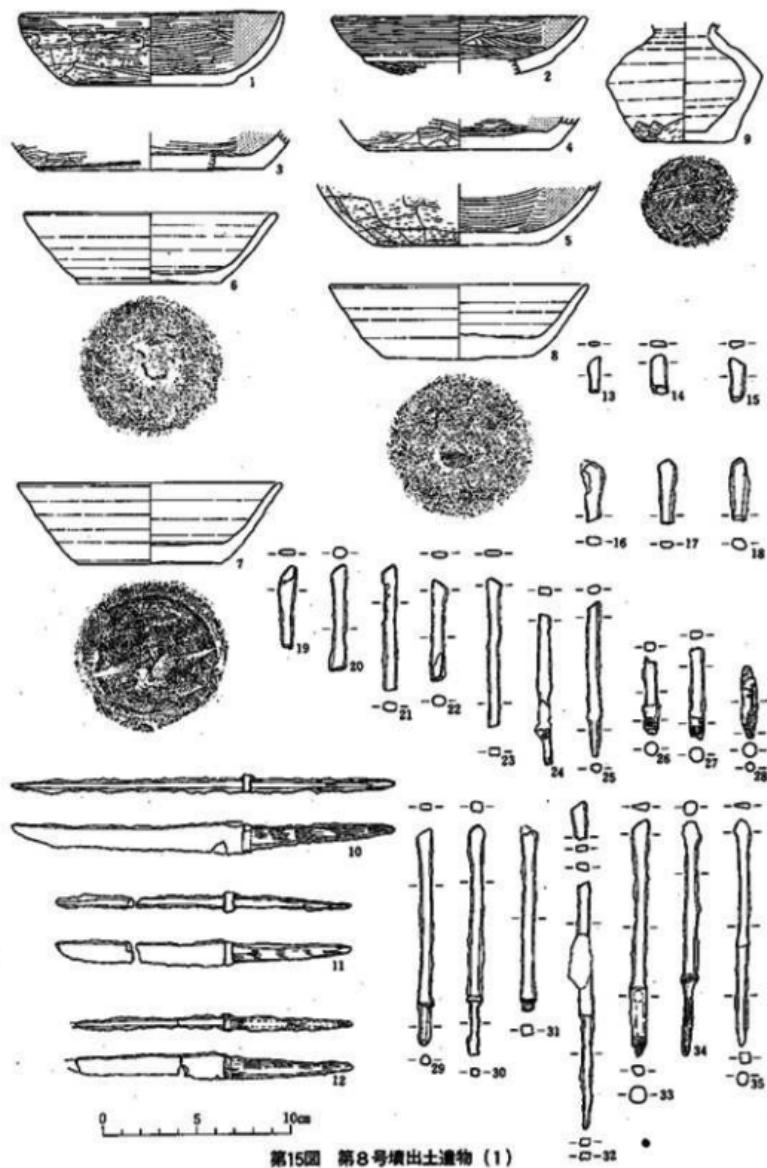
2~5は前庭部で出土したもので、完形のものはない。2は体下位に段をもつもので、底部は丸底である。調整は外面の段から上は横ナデ、段から下はヘラケズリされ、内面はミガキ、黒色処理が施されている。3~5は底部が平底のもので、いずれも口縁部を欠いている。3の体部下端には浅い沈線が1条巡っている。外面調整は3、4が体・底部共ヘラミガキ、5がヘラケズリで、内面はいずれもヘラミガキ、黒色処理が施されている。

須恵器

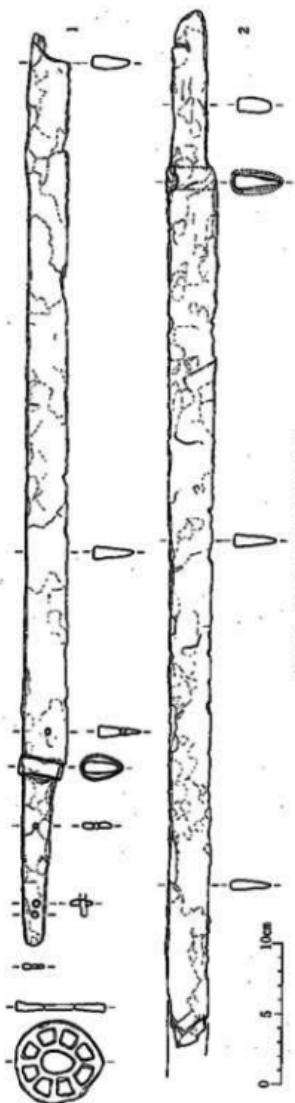
壺 (第15図6~8) 前室右奥壁ぎわで口縁を下にして3点が重なって出土した。6が最も上に、8が下にあったものである。いずれも体部から口縁部にかけて直線的に外傾する器形である。6・8の底部は回転ヘラ切り技法で切り離されており、切り離し後ナデ調整が施されている。7は手持ちヘラケズリが施され底部切り離しは不明である。7・8の底部は厚い。

小型壺 (第15図9) 丸味をおびたなだらかな肩部と直線的にすぼむ体部をもつ小型の壺で口縁部の大半を欠くが、口縁部は外反すると思われる。内・外共にロクロ調整で、体部下半と底部には手持ちヘラケズリが施されている。

鉄製品 前室右奥壁ぎわで一括出土したもので、直刀、刀子、鉄鎌がある。



第15圖 第8號墳出土遺物（1）



直刀 (第16図1、2) 2点ある。1は前室右奥壁に立て掛けられるような状態で出土したもので、2は床面上で横位の状態で出土したものである。1も本来は床面上に置かれていたものが、流入堆積土の関係で原位置から移動したものと思われる。いずれも平造、平棟で、鉈を欠いている。関の部分に縄が残るため、明確ではないが棟関と刃関をもつ両関造と思われる。

1の身幅は3.5cm、2では3.1cmである。1は茎に2孔の茎先孔と1孔の目釘孔をもち、茎先孔の身に近いほうの1孔には目釘が残っている。身にも刃関から2.5cm離れた所に刃開孔を1つもつ。また1には鍔が着装されている。鍔は鉄製で、倒卵形のものである。縁に向って除々に身厚となり、窓は8窓で、扇形に明瞭に切られている。

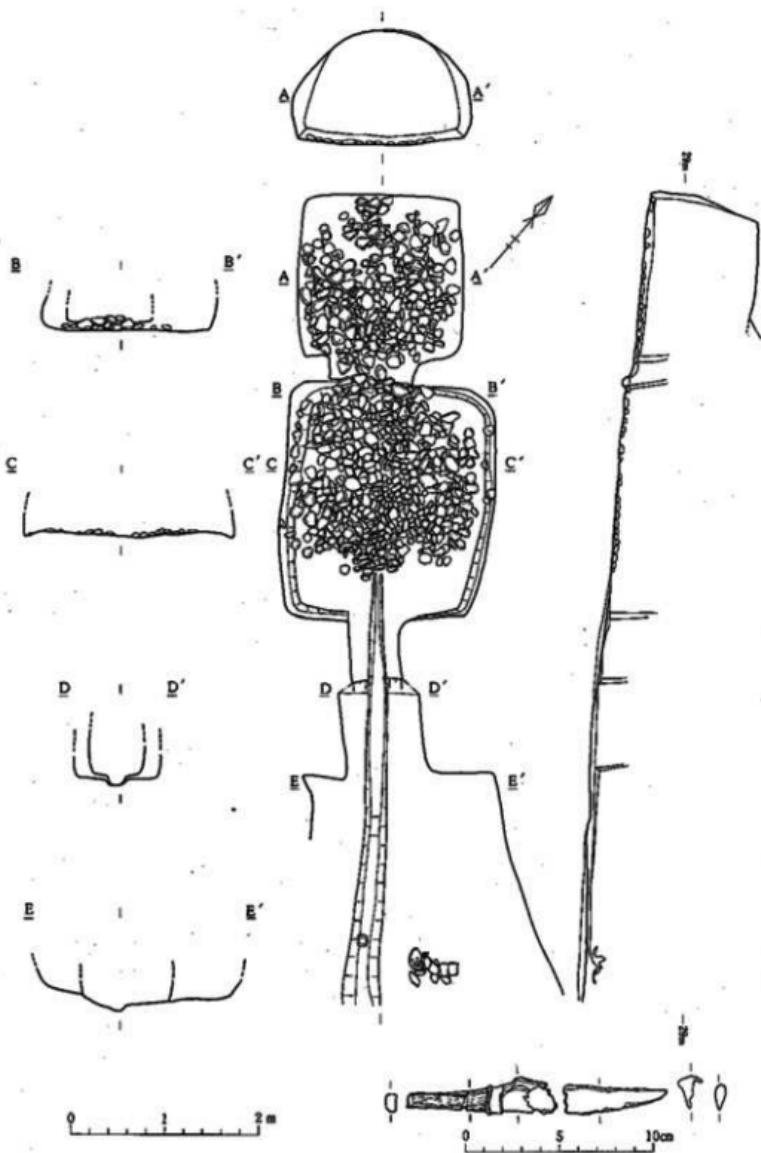
刀子 (第15図10~12) 3点あるが、12は鉈を欠いている。いずれも平造、平棟である。関は両関造となっており、関の部分に縄が残っている。10は全長20.3cmと11・12に対して大振で刀身にわずかな反をもっている。茎にはいずれも木質部を残している。

鉄鎌 (第15図13~35) ほぼ全体が残るもの6点、鎌身先端部破片11点、笠被から茎にかけての破片5点を図示した。いずれも長頸式鎌と呼ばれる笠被の長いものである。身の刃部形態は鋒化が著しく明らかではないが、大部分が片刃矢式で、34、35が片丸造りの整矢式と思われる。笠被と茎の境には棘状突起をもつものが多い。26~28・33は笠(矢柄)が残存しており、糸状のものが巻かれている。

第9号墳 (第17図)

第8号墳から約5m離れた南隣りに位置している。全長約8.5mの規模をもつ比較的大型の横穴古墳である。複室構造の玄室をもつが、前室に比して後室は小規模である。

〔玄室(後室)〕 後室の平面形はほぼ方形で、両側がわ



第17図 第9号墳と出土遺物 (1)

すかにふくらみをもつ。立面形はアーチ形で、天井部は奥壁から約1mが残存するが、その前方は玄門にかけて崩落している。床面には壁浴いを除き直径10cm前後の円礫が敷きつめられている。

〔後室玄門〕 後室前端のやや左寄り、前室に対しても左に片寄った位置にある。両側壁は床面から約40cm立ち上がるが、立面形は崩落のため不明である。床面にはやや疎であるが、円礫が敷かれている。玄門前端は前室をめぐる周溝となっている。

〔玄室（前室）〕 前室の平面形は各隅がやや丸味をおび、右側壁がややふくらむが、ほぼ方形である。立面形は崩落のため不明である。玄門部除く各壁ぎわには周溝が認められる。また、玄門後端から玄室内に40cm入った所から幅約10cm、深さ約10cmの排水溝が始まり、前庭部までのびている。床面には後室と同様の円礫がほぼ平坦に敷かれているが、排水溝の始まる前端部分にはない。

〔玄門〕 前室のほぼ中央に位置し、長さは約60cmと比較的長いが、幅は45cmと狭い。側壁は平行に立ち上がり、高さ約40cmまで残るが天井部が崩落してないために立面形は不明である。玄門前端には高さ約5cmの段がある。床面中央部を排水溝がのびている。

〔羨道〕 玄門と同様、右斜め方向に約90cmのびる。両側壁は高さ約30cmほど残っている。床面や左寄りを走る排水溝は幅約20cmと広くなっている。

〔渡門〕 段などの施設はみられないが、羨道前端から左に約40cm、右に約70cm屈曲している。壁の立ち上がりは約20cm残っている。

〔前庭〕 「八」の字状に開く、右側壁が約2.5m、左側壁が約80cmの長さで検出された。この前庭部は中心軸から右に片寄っている。床面には後室から続く排水溝が羨道から約2.4mの長さまで検出された。

〔出土遺物〕

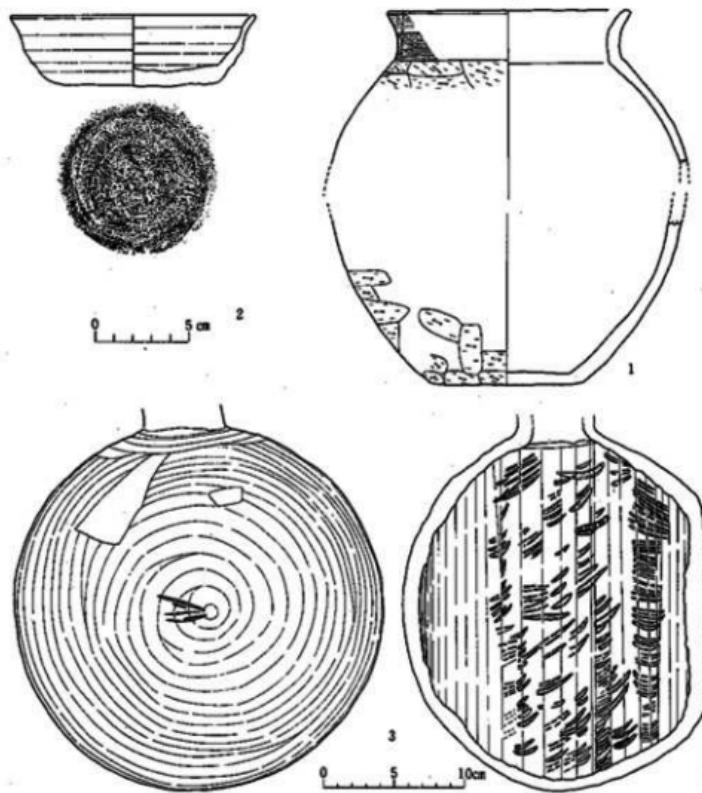
出土遺物には前室床面から出土した鉄製品（刀子）、前庭から出土した土師器（甕）、須恵器（壺、提瓶）がある。

土師器

甕（第18図1） 直接接合はしないが、同一個体の口縁部と底部と思われる。体部中央が大きくふくらむ器形で頸部にわずかな段をもち、口縁部はわずかに外反する。外面の調整は口縁部には横ナデが、体部と底部にはヘラケズリが施される。内面は器壁が荒れ調整不明であるが体部には部分的にナデ調整がみられる。

須恵器

壺（第18図2） 体部はやや丸味をもって外傾し、口縁部は外反する。底部は回転ヘラ切り技法で切り離され、再調整はない。



第18図 第9号墳出土遺物(2)

提瓶 (第18図3) 耳環をもたないが、体部の一方がふくらみ、一方が偏平となる提瓶で、口頭部を欠いている。体部外面は全体的にロクロ調整が施されるが、偏平部とその周辺のロクロ調整は回転ヘラケズリ後になされている。内面はタタキ後ロクロ調整されている。

鉄製品

刀子 (第17図1) 全体的に銹化が著しいが平造と思われる。間は棟間で、間には錆が残っている。茎には木質部が付着している。

第10号墳 (第19図)

第9号墳のすぐ南に位置し、ほぼ同じ標高にある。全長約5.7mの規模をもつ。

〔玄室〕 平面形は各辺が、わずかに弧状となるが長方形である。立面形は天井部が全く崩落

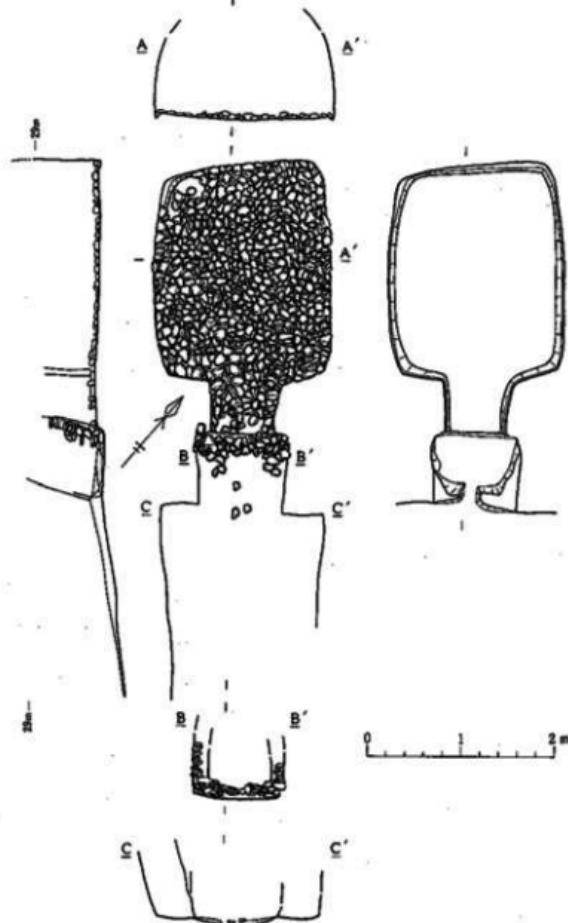
しているため不明である。左奥隅を除いた床面には玄門部まで9号墳同様な円礎がほぼ平坦にびっしりと敷かれている。床面の円礎をとりのぞくと各壁ぎわには周溝が巡っており、周溝は玄門の両側壁の前端までに達している。

〔玄門〕 玄室前端の中心に位置し、前端に向ってわずかに狭まる両側壁をもつ。玄門前端には高さ約10cmの段がある。

〔羨道〕 玄門より左右に10~15cm広くつくられ、羨門に向ってわずかに狭くなる。玄門近くの床面には、浅く大きな凹みがみられ、この凹みから前庭に向う長さ約20cm、幅約20m、深さ約5cmの排水溝がある。羨道奥の床面には玄門閉塞に用いられた円礎の積み上げが認められ左側壁ぎわで約50cm、右側壁ぎわで約35cmの高さが残存している。

〔羨門〕 羨門前端には高さ約5cmの段があり、両壁は羨道前端から両側に約40cm開く。左壁の高さ70cm、右壁で高さ約20cmが残る。

〔前庭〕 右側壁が2m、左側壁が約1.2m残っている。両側壁はわずかに前方で狭まる。床面は前方に向ってゆるく傾斜している。



第19図 第10号墳

〔出土遺物〕

出土遺物には玄室床面で出土した多数の鐵製品や、前庭で出土した須恵器などがある。



第20図 第10号墳出土遺物

須恵器

壺 (第20図1・2) 2点ある。共に体部が内弯気味に外傾し、口縁部がわずかに外反する。どちらも底部は回転糸切り技法で切り離され、再調整はない。

提瓶 (第20図3) 一方が偏平で、一方がふくらむ体部をもつ提瓶で突手はない。頸部は外反気味に直立し口縁部は強く外反する。口縁端部は上下両方向に引き出され狭い口縁帯となっている。調整は全体的にロクロ調整が施されるが、体部外面の一部に平行タタキ目が、内面の頸部接合部には指痕跡が残っている。

壺 (第20図4、5) 4は長頸部で、5は体部中央から底部にかけての破片である。4の外面中央には2条の沈線が巡る。調整は内外共ロクロ調整で、自然軸が両面共、厚くかかっている。5はソロバン玉状の体部で、体部中央に稜線をもつ。調整は体部上半の内外面がロクロ調整で、体部下半は外面がタタキ後ナデ、内面はナデ調整が施されている。

鉄製品 刀子、鉄鎌などがある。

刀子 (第20図6、7) 6は鉈と茎の約半分を欠くが、平造、平棟の刀子で、闇は両関造である。闇の部分には鍔が、茎には木質部が残っている。7は身の先端部破片で、平造、平棟である。他に図示しなかったが、刀子の鉈部分の破片が1点ある。

鉄鎌 (第20図8~18) 8~11は五角形の鎌身に逆刺を有する平根式の大型鎌で、12はその逆刺部分の破片である。この鎌が茎を有する有茎式のものか、無茎式のものかは不明である。13、14は長頭式鎌の先端部で鎌身は三角形である。17、18は長頭式鎌の鎧被から茎部分の破片で、鎧被と茎の境には棘状の突起がある。15、16も長頭鎌の鎧被部分と思われる。

第11号墳 (第21図)

第5号墳と第6号墳の間で、約1m上で検出された。長さ約80cmと小型の横穴古墳で、玄室だけが残存している。

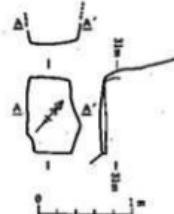
〔玄室〕 平面形は長方形であるが凸凹がみられる。立面形は天井部が崩落し不明である。奥壁、両側壁が床面から約20~40cmの高さまで残っている。玄門、前庭などの施設は検出されなかった。

〔出土遺物〕 出土遺物はない。

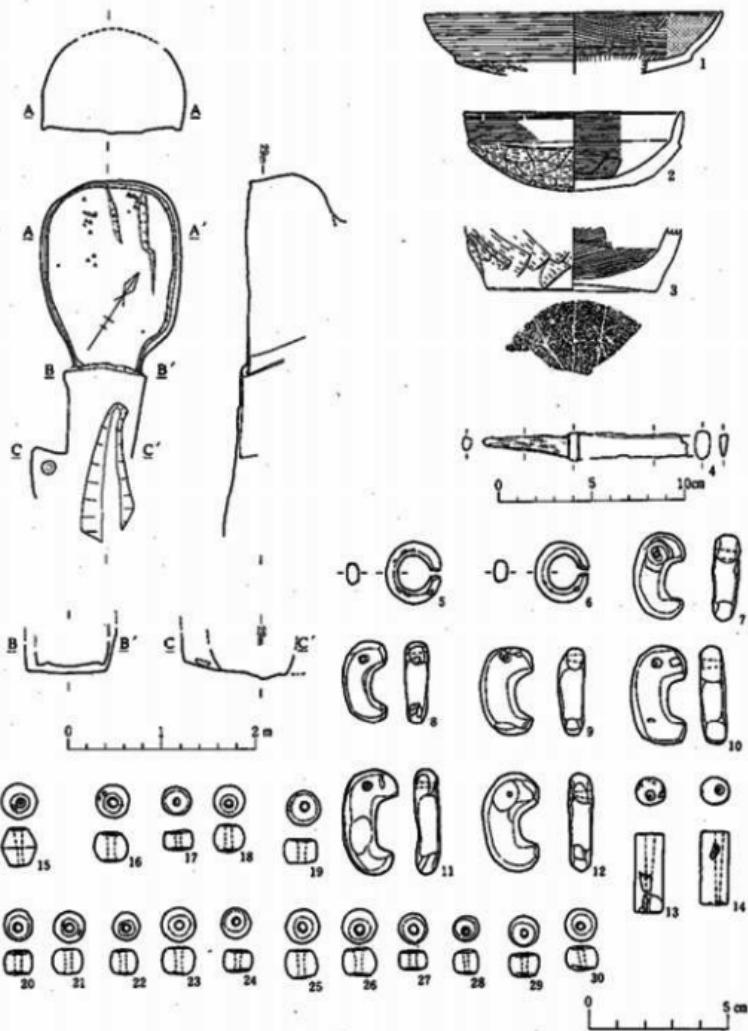
第12号墳 (第22図)

第10号墳の約4m西側のところにある。全長約3.4mと比較的小規模のものである。

〔玄室〕 平面形は右側壁が若干張るがほぼ椭円形で、立面形はドーム形である。床面はわずかに凸凹があり、壁にそって幅約10cm、深さ約5cmの周溝が巡っている周溝は玄門前端まで続いている。側壁面は風化が激しく、天井部の大半は崩落している。



第21図 第11号墳



第22図 第12号墳と出土遺物

〔玄門〕 右側壁では玄室から玄門にかけて変換線をもたずして移行するが、左側壁ではわずかに屈曲しており、それによると玄門は約20cmと短い。玄門前端には約8cmの段がある。

〔羨道〕 長さ約0.9mで前方に向ってわずかに壁が狭まっている。床面の玄門前端から約40cm離れた右寄りのところから、幅10~55cm、深さ約4cmの排水溝が前庭に向ってのびている。

〔羨門〕 右側は削平により不明であるが羨道前端から左壁が約40cm屈折して開く。床面には段などの閉塞用の施設はない。

〔前庭〕 左側壁が中心軸に沿って約50cm前方にのびるが詳細は不明である。床面には排水溝があり、約1mほどで消滅する。

〔出土遺物〕

土師器・装飾品などが出土している。玄室床面から各種の玉類と金環、銀環、鉄製品（刀子）と堆積土から土師器（壺・甕）が、羨道左隅の床面から土師器（壺）が出土している。

土師器

壺（第22図1、2） 1は玄室堆積土から出土したものである。体部外面に段をもち、段から上は、内窓気味に外傾し、底部は丸底となる。内面にもかるい段が認められる。調整は外面段から上が横ナデ、段から下はヘラケズリが施され、内面にはヘラミガキ、黒色処理が施されている。2は羨道左隅の床面から出土したものである。口径11.8cmと小型の壺で外面の口縁部と体部の境に段をもつ。口縁部は直立気味に外傾し、口縁部上端に浅い沈線が1条巡る。底部は丸底である。内面には段に対応して屈曲線をもつ。調整は外面の口縁部が横ナデ、体部から底部がヘラケズリが施される。内面は口縁部が横ナデ、体部から底部はヘラナデが施される。色調はにぶい橙色である。

甕（第22図3） 底部破片である。体部外面は斜方向のヘラケズリ、体部から底部にかけて内面はヘラナデが施されている。底部外面には木葉痕がみられる。

鉄製品

刀子（第22図4） 平造、平棟で鉈を欠いている。関は両闇造りで、関の部分には鋸が残っている。茎には木質部がみられる。

金環（第22図5） 銅環に金鍍金したものである。ほぼ円形で、最大外径が約2.1cmある。断面形はやや角張る楕円形で、長径7.5mm、短径5mmである。部分的に鍍金が剥落して地金が銹化している。

銀環（第22図6） 金環とはほぼ同じ形態と大きさである。やはり銅地金に鍍銀したものである。金環に比して銹化が著しい。

玉類

勾玉（第22図7~12） 6点出土した。メノウ製が5点、ヒスイ製が1点ある。いずれも

「コ」の字形のもので、大きさは2.9cmから3.75cmまである。穿孔は一方向からなされている。

管玉 (第22図13・14) 2点出土した。碧玉製で、直径1cm、長さは7が2.8cm、8が2.6cmである。穿孔は一方向からなされている。両者共、破損部などに磨耗痕がみられる。

切子玉 (第22図15) 1点出土している。水晶製で、長さ1.4cm、磨耗が著しい。穿孔は一方向からなされている。

丸玉 (第22図16~30) 16点出土した。安山岩や珪化した凝灰岩、石英安山岩質の凝灰岩製で大きさは直径9mm~12mm、長さ7mm~10.5mmとやや、ばらつきがある。

第13号墳 (第23図)

第4号墳と第5号墳の中間に位置し、それぞれと約6m離れている。この横穴古墳は玄門部から前方が路線敷外にのびているため、約5m調査しただけである。

〔玄室〕 玄室の平面形はほぼ方形であり、立面形はアーチ形である。床面には直径約2~15cmの円礫がびっしりと、ほぼ平坦に敷きつめられていた。円礫の敷かれるのは玄室前端までの範囲である。奥壁や両側壁から天井部には幅約10cmのノミ痕が整然と残っており、ていねいなつくりを感じさせる。

〔玄門〕 玄門は玄室のほぼ中心に位置し、立面形は残存部からすると変形アーチ形と考えられる。床面は玄門前端に向ってわずかに狭まる。天井部は前半が崩落している。玄門前端には約14cmの段が認められる。

〔羨道〕 羨道の長さは約60cmで、平面形は羨門に向って狭くなり、逆台形を呈する。立面形は崩落のため不明である。

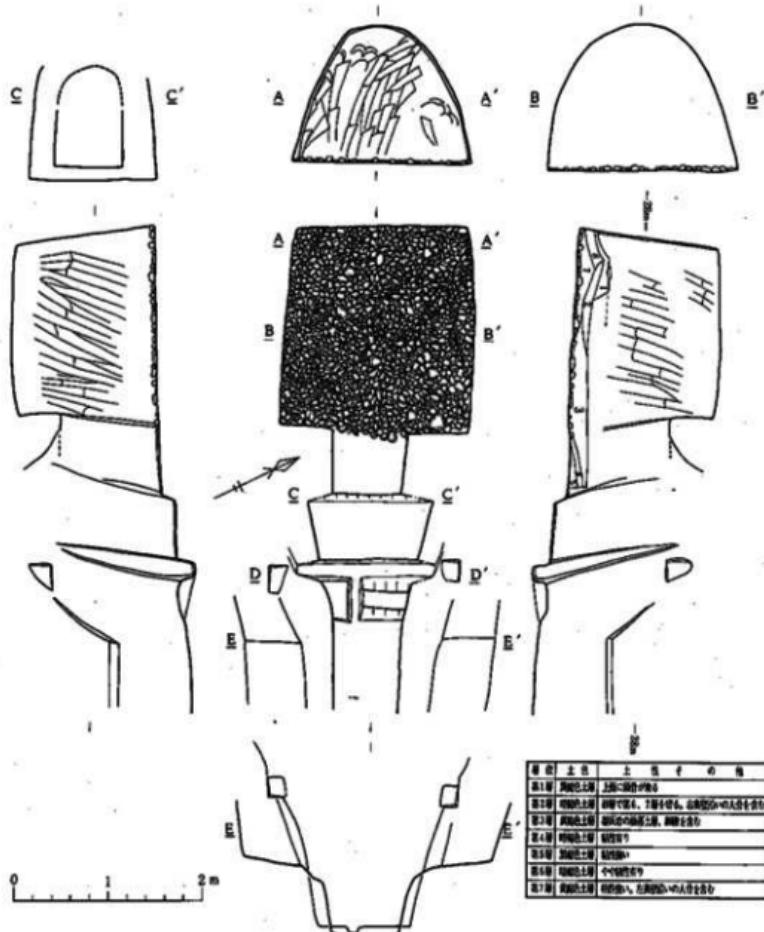
〔羨門〕 羨門前端の床面から左右側壁にかけて幅約20cm、深さ約20cmの閉塞用の溝がありこめ溝は両側壁では上にいくにしたがって幅を減じながら高さ約1.5mまで残っている。

〔前庭〕 羨門から約1.5m調査したが、さらに路線外にのびている。平面形は前方に向ってやや狭くなる。羨門に続く床面奥ぎわには上幅約20cm、高さ10cmほどの凸壠状の高まりが横たわり、その左壁寄りの所を切って羨門閉塞溝から中心軸に沿ってのびる幅約15cm、深さ約15cmで、長さ約50cmの排水溝が認められる。また、前庭奥ぎわの両側壁には床面から約1.3mの高さの所に20~30cm四方の平坦部が造り出されている。両側壁は上方に向ってやや開き気味となっているが、前庭奥から約70cmの所から、床からの高さ約70cmの所に幅約60cmの平坦面をもつようになる。平坦面の左右両端から、両側壁はさらに上方に向ってやや開き気味に続いている。この平坦面の奥端からは前述した小平坦部の前端に向って急激に立ち上がる壁が続いている。この両壁に認められる小平坦部は板材(木か岩)を架し、天井部を形成するための施設で、それに続く壁や平坦面はそれを強調するための施設と思われる。

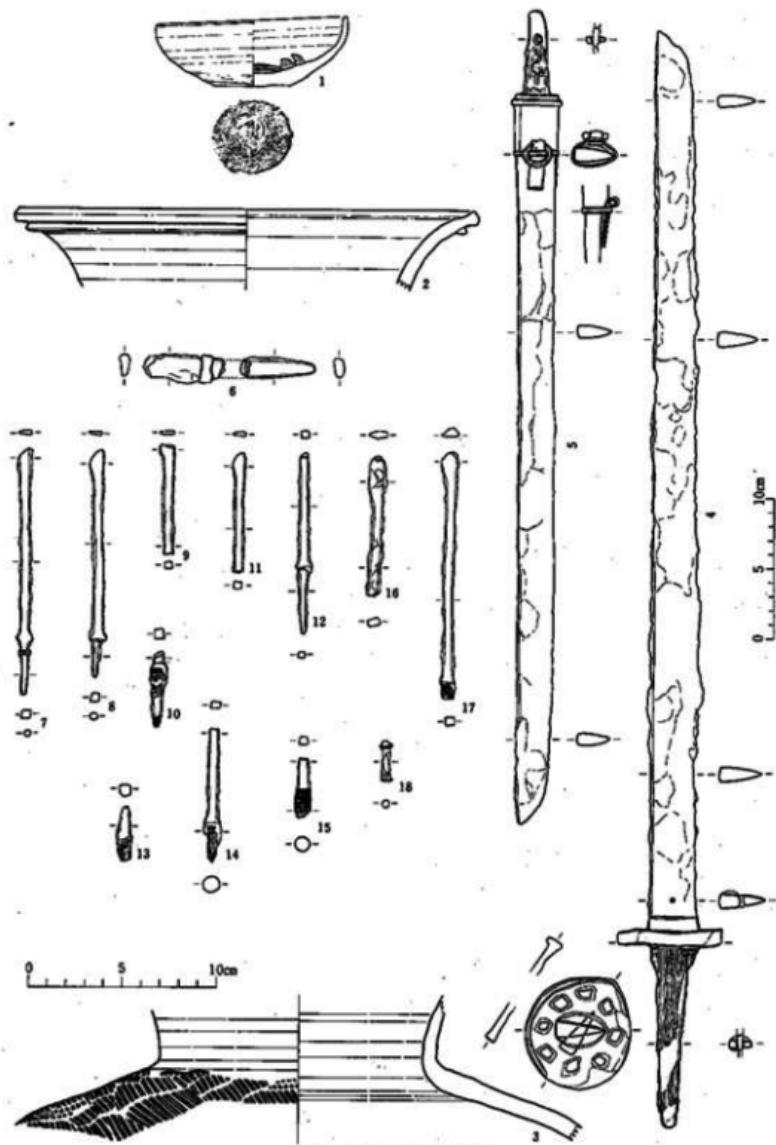
〔出土遺物〕

須恵器（壺・甕） 鉄製品（直刀、刀子、鉄鏃、両頭金具）、人骨が出土している。

須恵器壺は前庭部右平坦部分の堆積土中から出土した。須恵器甕は前庭部から玄室にかけての堆積土中から出土したものである。鉄製品では前庭部堆積土中や羨門閉塞溝中、羨道床面から鉄鏃が少量出土しているが、大部分は玄室床面から出土したものである。玄室中央の左右両側壁ぎわに直刀が各1点あり、右側壁ぎわの直刀付近と右奥壁ぎわに鉄鏃・刀子が数点かたまつ



第23図 第13号墳



第24図 第13号墳出土遺物

て出土した。人骨は玄室の左奥壁付近に集中して重なり合った状態で出土している。

須恵器

壺 (第24図11) 小さな底部をもつ小型の壺で、体部はやや内弯気味に外傾し、体部上半で強く内弯して口縁部は直立する。体部下端と底部には回転ヘラケズリの再調整が施され、底部の切り離し技法は不明である。内面底部付近にはナデ調整が施されている。

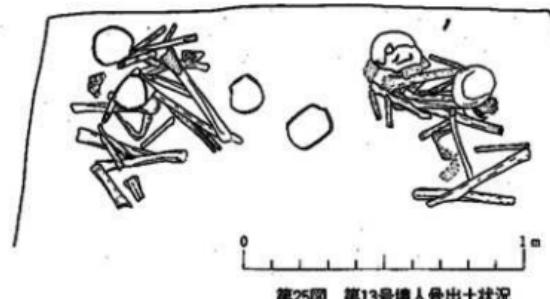
甕 (第24図2、3)

2は口縁部の、3は頸部から体部上半にかけての破片である。2は外反する口縁部の端部に狭い口縁帯をもち、その下に鋭く突出する突帯が1条巡っている。3は肩部が強く張り出し、頸部は外傾気味に立ち上がっており、口縁部を欠いている。調整は頸部外面がロクロ調整、体部上半は外面が平行タタキ、内面はナデ調整が施されている。

鉄製品

直刀 (第24図4、5)

2点ある。4は玄室石壁ぎわの床面上から、5は左壁ぎわの床面上から出土したものである。4は平造、平棟で、鍔はややふくらむ。関の部分には鍔、鍔が残るが、両関造と思われる。茎のほぼ中央に目釘孔が1つあり、目釘が残っている。鍔の1.2cm前方の刀身中央に刃関孔が1つある。鍔と刀身の間や茎には木質部が残存している。鍔は本来の位置から、左に約55°、回転した状態で付着している。鉄製で倒卵形を呈し、縁部分が肥厚している。窓は明瞭な扇状で、8窓をもつ。5は4に対して短いもので、やはり平造、平棟で鍔はふくらみをもつ。関は鞘口金具が残るために不明である。茎には茎先孔が1つあり、目釘が残っている。把には金銅製の把縁金具と鍔が付いている。鍔は鞘より大きいだけの喰出鍔である。鞘口金具は鉄製と思われ、その後端に金銅製の責金具が嵌められている。責金具にはやはり金銅製の小環が鞘の内側の位置に挟み込まれている。



第25図 第13号墳人骨出土状況

第2表 出土人骨数量表

| 部位名 | 左骨 | 右骨 | 否年 | 不明 | 計 |
|-----|--------|----|----|----|----|
| 頭蓋骨 | 6(1+1) | | | | 7 |
| 下顎骨 | 2 | | | | 2 |
| 上腕骨 | 2 | 2 | 4 | | 8 |
| 尺 肱 | 1 | | | 1 | 2 |
| 桡 肱 | 1 | | | 1 | 2 |
| 大腸骨 | 2 | 3 | 2 | 3 | 10 |
| 脛 骨 | 1 | 2 | 2 | 5 | |
| 腓 骨 | | | 3 | 3 | |

刀子（第24図6） 玄室石壁の直刃付近の床面から出土した。刃子身の大部分を欠き、銹化が著しく形態など不明な点が多いが、平造りと思われる。関は鍔が残っているため明らかではないが刃関と思われる。茎には木質部が残っている。

鉄鎌（第24図7～17） 7～13は玄室右壁ぎわの直刃付近に集中して、14・15は玄室奥壁ぎわで、16は羨門右側のいずれも床面から出土し、17は羨門閉塞構内から出土した。いずれも長頭式鉄鎌で、鎧被と茎の境には棘状突起がみられる。鎌身刃部の形態がわかるものは、いずれも片刃状で、9には刃関もみられる。10、13～15には断面が丸い鎧の先端が残在しており、糸もしくは樹皮状のものが巻かれている。

両頭金具（第24図18） 一端がわずかに欠けるが、一端には明瞭な頭部をもち、両頭金具と思われる。

人骨（第25図）

玄室奥壁ぎわ約1mの所と右前壁ぎわで人骨が出土している。右前壁ぎわで出土した人骨は部位不明の長管骨の骨幹部2点である。奥壁ぎわで出土した人骨には、頭骨をはじめとして各部位骨が認められ、積み重ねられたような状態で検出された。この奥壁ぎわから出土した人骨を実測図で示したのが第25図で、その際の部位骨の人骨所見を一覧表としたのが第2表である。頭骨は、完全な形で残存するものではなく、その数が直接個体数を示すものではないと思われるが、他の長管骨、特に大腿骨の数とも合わせて考えると最低でも2個体以上の複数の人骨が、この奥壁ぎわにある事が知られる。また、玄室の堆積土の状況は第23図の縦断図に示してあるがこの堆積土と出土人骨の関係を見ると、第1層上面には頭蓋骨が1つ乗っている。玄室右側の人骨は主に第2層を中心出土しており、玄室左側の人骨は第7層を中心出土している。このような出土状態は人骨が時間的な幅をもって玄室奥壁ぎわに集積した事を示すものと思われる。

第3章

| | | 土 部 部 | | | | | | 金 恩 部 | | | | | | 全 部 | 玉 部 | 人 骨 | | |
|------|-----|-------|-----|-----|--------|-----|-----|-------|----|--------|--------|---|---|--------|--------|--------|----|----|
| | | 环 | | | 高 费 | 环 | | | 面 | 平 版 | 堤 紙 | 金 | 费 | 底 刀 | 刀 子 | 鉄 頭 | | |
| | | b-a | b-b | b-c | | b-a | b-b | b-c | | | | | | | | 1 | | |
| 第1号 | 前 齿 | | | | | | | | 1 | | | | | | | | | |
| 第2号 | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 第3号 | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 第4号 | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 第5号 | 前 齿 | | | | | | | | 1 | | | | | | | | | |
| | 歯 道 | | | | | | | | | | | | | | | | 1 | 2 |
| | 閉塞溝 | | | | | | | | | | | | | | | | 1 | |
| 第6号 | 玄 室 | | | | | | | | | | | | | | | | | ○ |
| 第7号 | 前 齿 | 1 | 1 | 1 | 1 | 2 | | | 1 | 1 | 1 | 4 | 4 | | | | 2 | |
| | 歯 道 | | | | | | 1 | | | | 1 | | | | | | | |
| | 前 室 | | | | | | 1 | | | | | | | | | | | |
| 第8号 | 歯 道 | 1 | | 1 | 1 | 1 | | | | | | | | 1 | | | | |
| | 清 室 | | 1 | | | | | | 3 | | | | | 2 | 3 | 17 | | |
| | 後 室 | | | | | | | | | | | | | | | | | ○ |
| 第9号 | 前 齿 | | | | | | 1 | | 1 | | 1 | | | | | | | |
| | 前 室 | | | | | | | | | | | | | | | 1 | | |
| 第10号 | 前 齿 | | | | | | | | | 2 | | 1 | 2 | | | | | |
| | 玄 室 | | | | | | | | | | | | | | 2 | 6 | | |
| 第11号 | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 第12号 | 歯 門 | | | | 1 | | | | | | | | | | 1 | 2 | 25 | |
| | 玄 室 | 1 | | | | | | 1 | | | | | | | | | | |
| 第13号 | 前 齿 | | | | | | | | 1 | | | | | 2 | 2 | | 2 | |
| | 歯 道 | | | | | | | | | | | | | | | 2 | | |
| | 玄 室 | | | | | | | | | | | | | | 2 | 1 | 10 | 6 |
| | | 2 | 1 | 1 | 2 | 1 | 2 | 1 | 1 | 3 | 3 | 1 | 1 | 3 | 1 | 1 | 2 | 8 |
| | | | | | | | | | | | | | | | 6 | 6 | 9 | 41 |
| | | | | | | | | | | | | | | | 2 | | 25 | |
| | | | | | | | | | 12 | | | | | 9 | | | | |

第4表

| 地 點 名 稱 | 東 | | | | 西 | | | | 南 | | | | 北 | | | |
|------------------|--------|--------|--------|---------|---------|--------|----------|--------|--------|--------|---------|---------|--------|--------|--------------|--------------------|
| | 經 度 | 緯 度 | 高 程 | 方 向 | 經 度 | 緯 度 | 高 程 | 方 向 | 經 度 | 緯 度 | 高 程 | 方 向 | 經 度 | 緯 度 | 高 程 | 方 向 |
| 1 N-3-E | 150 | 165 | 154 | 100 | 7-+58 | 39 | 64-54 | — | — | — | 125 | 60-65 | — | — | — | 150-152 |
| 2 N-37-W | 160 | 95 | 118 | 83 | * | 45 | 62 | — | — | * | — | 67 | — | — | — | — |
| 3 N-37-W | (160) | (90) | 80 | — | 7-+58? | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — |
| 4 S-72.5-W | 260 | 195 | 205 | — | — | — | 67 | — | — | — | — | — | — | — | — | — |
| 5 N-37-W | 212 | 126 | 152 | 107 | 7-+58 | 45 | 94-75 | — | — | 深·帶石 | 75? | 65-7 | — | — | — | — |
| 6 N-37-W | 215 | 75 | 150 | 86-(56) | 7-+58 | 26? | — | — | — | 段·帶石 | — | — | — | — | — | — |
| 7 N-65-W | 260 | 202 | 174 | 160 | 267-+78 | 20 | 90 | 100 | 因內部 | 段 | 165-90 | — | — | — | — | 150-110 220-~ |
| 8 N-36-W | 157 | 138 | 154 | 150 | 7-+58 | 47 | 80 (120) | 7-+58 | 段·帶石 | — | — | — | — | — | — | — |
| 9 S-36-W | 107 | 180 | 115 | 115 | 7-+58 | 40 | 70 | 65 | 7-+58 | 段 | 210- | 110-120 | — | — | — | — |
| 10 N-41.55-W | 175 | 160 | 160 | 120 | 7-+58 | 25 | 50 | — | — | 段 | 90 | 80 | — | — | — | 200-160 (120)-~ |
| 11 N-45-W | 220 | 190 | 165 | 165 | — | 60 | 52 | — | — | 段 | 70 | 90 | — | — | — | 170-150 220-~ |
| 12 N-46-W | 160 | 115 | 110 | 90 | 7-+58 | 20 | 65-73 | — | — | 段 | 93 | 85-70 | — | — | — | 140 60-~ |
| 13 N-37-W | 220 | 180 | 150 | 7-+58 | 65 | 85-70 | 105 | 7-+58 | 段 | 60 | 130-105 | — | — | — | 100-70 140-~ | 1350. 600. 帶水行、帶油 |

V. 考察

1. 出土遺物の年代

今回の調査によって各横穴古墳から土師器（壺・高壺・甕）、須恵器（壺・蓋・平瓶・提瓶・各種の壺・甕）、鉄製品（直刀・刀子・鉄鎌・両頭鎌）、装飾品（金・銀環・玉類）などの多様な遺物が出土した。ここでは出土遺物のなかの土師器・須恵器について、数量的にややまとまりのある壺を中心としてその編年的な位置と年代について検討する。

土師器

壺 第7号墳から5点、第8号墳から5点、第12号墳から2点の計12点が出土している。それぞれの形態や調整技法などに違いが認められ、それは次の1～4にまとめられる。

1～3は内面調整にヘラミガキ・黒色処理が、4はナデヤヘラナデが施されるものである。

1. 器外面に段・内面に段や稜をもち、段から上が内弯気味に外傾する器形で、底部が丸底となるものである。外面の段から下にはヘラケズリが施されるが、段から上に横ナデが施されるもの（a）とヘラミガキが施されるもの（b）とがある。

2. 器外面の底部との境に段や沈線が巡り、体部から口縁部が内弯気味に外傾し、底部が平底もしくは平底風になるものである。外面調整が、口縁部に横ナデ・体部と底部にヘラケズリが施された後、体部に一部ヘラミガキが施されるもの（a）と全体にヘラミガキが施されるもの（b）とがある。

3. 器外面に段や沈線をもたず、体部から口縁部が内弯気味に外傾し、底部が平底となるものである。外面調整が体部・底部ともヘラケズリのもの（a）とヘラミガキが施されるもの（b）とがある。

4. 器外面と内面に段や稜をもつ小形の丸底のものである。直立気味に外傾する比較的長い口縁部をもつもの（a）と短い口縁部が外反するもの（b）、同じく短い口縁部が外反し、内面に丹塗りが認められるもの（c）とがある。

高壺 第7号墳から3点出土したが、完形品はない（第11図2・8・9）。壺部の形態のわかるものは、体部外面に段をもち低平ではあるが壺1と同じ器形である。脚部は2点ある。どちらも上半が中実となる柱状部と急激に開く裾部からなり、柱状部には一对の孔を有している。

第5表 土師器壺の分類と出土地点

| 分類類 | 出土 古 墓 と 回 類 番 号 |
|-----|----------------------------|
| 1-a | 8号墳前庭（第15回2）、12号墳玄室（第22回1） |
| 1-b | 7号墳前庭（第11回4） |
| 2-a | 8号墳前庭（第15回1） |
| 2-b | 7号墳前庭（第11回5）、8号墳前庭（第15回3） |
| 3-a | 8号墳前庭（第15回4） |
| 3-b | 7号墳前庭（第11回6）、8号墳前庭（第15回5） |
| 4-a | 12号墳玄門（第22回2） |
| 4-b | 7号墳前庭（第11回7） |
| 4-c | 7号墳前庭（第11回1） |

観 第1号墳から小形で完形のものが(第4図1)、第9号墳から体中央部を欠くものが(第18図2)、第12号墳から底部破片が(第22図3)、各1点ずつ出土している。前2者は器面調整として、口縁部の内外両面に横ナデが、体部から底部にかけての外面にヘラケズリが、内面にヘラナデが施されるもので、第12号墳の底部破片にも同様の調整がみられる。

土師器の坏について1~4にまとめ、高坏・甕についてはその特徴を述べた。これらの坏・高坏・甕について類例を求める。

1-aの坏、高坏は、高坏に僅かな器形的相違が認められるが田尻町日向前横穴古墳(早坂:1981)の羨道・前庭部流入土出土土器のなかに類似するものがある。1-a・bの坏はまた高清水町觀音沢遺跡で坏II類とされたもの(加藤・阿部:1980)に類似しており、このなかには1-bの坏と同様の調整が施されるものが1点含まれている。

2-a・b、3-a・bの坏は田尻町天狗堂遺跡のロクロ不使用の坏(佐藤・手塚:1978)や志波姫町糠塚遺跡で第1群土器とされたもの(小井川・手塚:1978)に類似している。觀音沢遺跡・天狗堂遺跡・糠塚遺跡の土器は国分寺下層式に比定されている。

4-a・b・cの坏・甕は近年、名取市清水遺跡(丹羽・小野寺・阿部:1981)、仙台市郡山遺跡(木村他:1981)、古川市名生館遺跡(宮城県多賀城研究所:1981)、田尻町日向前横穴古墳、志波姫町御駒堂遺跡(小井川・小川:1982)などから出土し、関東地方の鬼高式や真間式と強く関連する土器とされているものに類似点が多い。4-aの坏はそれらと器形的には若干異なっているが、埼玉県北西部の大里郡岡部町六反田遺跡第117号住居跡などから出土している鬼高式後葉の坏に(岡部町六反田遺跡調査会:1981)、4-b・cは前述の県内遺跡から出土し、鬼高式の終末期のものとされたものに類似している。甕については不明の点が多いが、器面調整の特徴は御駒堂遺跡第2群土器の真間式系とされた甕にみられるものに類似している。

次に土師器の年代について考える。4類の坏は御駒堂遺跡において鬼高式終末期から真間式初期の土器を含む第1群土器が7世紀末~8世紀初頭に位置付けられていることから、4-aは7世紀後葉、4-b・cは7世紀末~8世紀初頭のものと考えられる。日向前横穴古墳では羨道・前庭部流入土器の年代は伴出した須恵器坏などの検討により多賀城以前のものとされており、また、御駒堂遺跡第2群土器は8世紀前半のものとされていることから坏I類・高坏・甕などは8世紀前半のものと考えられる。

国分寺下層式に比定された坏のうち觀音沢遺跡のものは天狗堂遺跡・糠塚遺跡のものより先行するものとされ、奈良時代前半の年代が考えられており、日向前横穴古墳の見解とほぼ一致

第6表 須恵器坏分類表

| 分類 | 回収場所 | 口径 | 底径 | 底深 | 底深/口径 | 底深可視化・開窓 |
|----|--------|------|-----|-----|-------|-----------|
| I | 第24回1 | 10.1 | 4.0 | 3.5 | 0.4 | 不規・開窓ヘラナデ |
| a | 第8回1 | 12.5 | 7.0 | 3.1 | 0.56 | 開窓ヘラナデ |
| b | 第15回6 | 13.5 | 7.6 | 3.8 | 0.56 | + |
| 2+ | 第15回8 | 14.1 | 7.9 | 4.5 | 0.54 | + |
| - | 第15回7 | 13.7 | 7.9 | 4.0 | 0.58 | + |
| c | 第16回2 | 13.0 | 8.1 | 3.7 | 0.53 | — |
| d | 第15回10 | 12.6 | 6.0 | 4.5 | 0.48 | + |
| 3b | 第26回1 | 14.4 | 7.2 | 4.2 | 0.5 | 開窓無 |
| - | 第26回2 | 14.2 | 7.2 | 4.2 | 0.51 | + |

している。天狗堂遺跡、糠塚遺跡の土器は御駒堂遺跡第4群土器の検討のなかで8世紀後半の年代が考えられている。しかし、その上限年代など現時点では明確でない点もあり、坪2・3類については8世紀後半を中心とする年代と考えておく。

須恵器

坏 第5号墳から1点、第7号墳から3点、第9号墳から1点、第10号墳から2点、第13号墳から1点の計9点が出土している。器形や底部切り離し技法、再調整などに違いが認められそれらをまとめると次のようになる。

1. 小さな平底の底部から体部が内湾気味に外傾しながら立ち上がり、体部上半で強く内湾して口縁部は直立する器形のものである。外面の体部下半と底部には回転ヘラケズリが施され、底部切り離し技法は不明である。

2. 口径に対する底径の割合が0.56～0.65と比較的大きなもので、器形は平底の底部から体部が丸味をもって立ち上がり、a一口縁部まで内湾気味に外傾するもの、B一口縁部まで直線的に外傾するもの、c一口縁部が外反するものがある。底部切り離し技法はa、cが回転ヘラ切り、bは回転ヘラ切り後ナデ調整が施されるものと手持ちヘラケズリの再調整によって切り離し不明のものがある。

3. 口径に対する底径の割合が0.5前後のもので、体部から口縁部まで直線的に外傾する器高の高いもの（a）と口縁部が外反するもの（b）がある。底部切り離し技法はaが回転ヘラ切り、bが回転糸切りである。

1は特殊な器形の小型品で、今のところ県内では類例を見い出すことはできない。しかし、体部下半から底部にかけて回転ヘラケズリの再調整が施される坏は、觀音沢遺跡や富谷町原前南遺跡（千葉：1982）、御駒堂遺跡第2群土器などにある。原前南遺跡や御駒堂遺跡では真間式類似の土師器と伴って出土しており、8世紀前半の年代が与えられている。

2のような器形的・技法的な特徴をもつ坏は田尻町天狗堂遺跡、糠塚遺跡第1群土器のなかにみられ、国分寺下層式の土師器と共に伴っている。

3-aは器高の高い坏で、類似する坏は宮崎町早風遺跡第9号住居跡で、ロクロ使用で回転ヘラケズリの再調整をもつ土師器坏に伴って出土している。3-bは天狗堂遺跡第12号住居跡で手持ちヘラケズリの再調整をもつ土師器坏に伴って出土している。ロクロ使用で再調整をもつ土師器坏は表筋ノ入式のなかでも古い段階のものと考えられることから、3-a、3-bの坏は年代的には9世紀のものと考えられる。一方、3-bの底部を回転糸切り技法で切り離す坏は、糠塚遺跡第1群土器の須恵器坏の組成のなかにも認められ、2類あるいは3-aにみられる回転ヘラ切り技法で底部を切り離す坏と共に伴しており、これら3類の坏が2類と同年代の可能性もある。

2. 横穴古墳の構造と編年

今回調査された13基の横穴古墳はそれぞれの規模や構造などに違いが認められる。また、重複関係をもつ横穴古墳もあり、13基が同時期に造成され、使用されたとは考えにくい。このため、調査が部分的であったり、崩落のために全体の構造が明らかでないものも含まれるが、その構造上の特徴などを重複関係を含めて検討し、その変遷を考えてみる。

13基の横穴古墳は基本的には玄室部、羨道部、前庭部をもつと思われるが、前庭部、羨道部などの形態や構造などが明確でないものもある。そこで主に玄室部の構造をもとに各横穴古墳を分類すると第Ⅰ類—玄室が複室となるもの、第Ⅱ類—玄室が単室で、平面形が両袖形のもの第Ⅲ類—玄室が単室で、玄室平面形が無袖形のものの3類に大別することができ、各類はさらに細かな玄室平面形の違いや玄室内施設の有無などによって細分される。

第Ⅰ類 玄室が複室となるもの

a. 玄室平面形が前・後室ともに方形のもの

イ玄室内に石敷を有するもの (9号墳)

ロ玄室内に石敷をもたないもの (7号墳)

b. 玄室平面形が前室が方形、後室が逆台形のもの (8号墳)

第Ⅱ類 玄室が単室で、平面形が両袖形のもの

a. 玄室平面形が方形のもの

イ玄室内に石敷を有するもの (4、10、13号墳)

ロ玄室内に石敷をもたないもの (1号墳)

b. 玄室平面形が長方形のもの (2、5号墳)

c. 玄室平面形が椭円形のもの (12号墳)

第Ⅲ類 玄室が単室で、平面形が無袖形のもの

a. 玄室平面形が細長い逆台形のもの

イ玄室閉塞が段によるもの (6号墳)

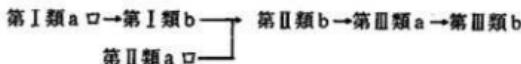
ロ玄室閉塞が不明のもの (3号墳)

b. 規模の小さい小穴 (11号墳)

各構穴古墳間の重複関係についてみてみると、1号墳と2号墳の間、および5～8、11号墳の間に重複関係が認められる。1、2号墳では1号墳前庭が2号墳に伴うと思われる溝(前庭?)によって切られており、1号墳→2号墳の関係が成立。5～8・11号墳の間では、7号墳前庭部と8号墳羨道部に直接的な重複がみられ、7号墳の前庭がある程度埋まった段階で8号墳が造成されている。5、6、11号墳は7号墳前庭や羨道の右側壁の上に位置しており、7号墳床面とそれぞれの床面には1.3～2.3mの段差があることから、7号墳が埋まった状態で

ないと造成は不可能と思われる。そして、5、6、11号墳の順に検出位置が高くなり、その規模が小さくなることから7号墳→8号墳→5号墳→6号墳→11号墳の関係が成立つものと思われる。

以上のような重複関係を整理し、分類に当てはめると次のようになる。



大筋で第Ⅰ類→第Ⅱ類→第Ⅲ類と変遷することが知られた。

次に上記の変遷に当てはまらない第Ⅰ類aイ（9号墳）、第Ⅱ類aイ（4、10、13号墳）、第Ⅱ類c（12号墳）について検討する。

第Ⅰ類aイ（9号墳）は第Ⅰ類a口（7号墳）と同様に玄室平面形が前・後室ともに方形気味となるものである。7号墳では後室に比較して前室の規模が小さくなり、構造的にも前室が副室のような形態をとるのに対して9号墳では後室より前室の規模の方が大きくなっている。また、9号墳では前室の壁沿いにだけ周溝が巡り、後室には周溝はないことや後室が前室の中軸線に対して左寄りに位置していることから前・後室が一体となって造成されたのではない可能性も考えられる。しかし、前・後室ともに石敷がみられることから前・後室が複室として使用されたことは確実と思われる。周溝や石敷をもつ点にも他のI類（7、8号墳）との相違がみられるが複室構造をもつことや長い中軸線に沿う排水路をもつものが7、9号墳だけに限られる点などから、7号墳とあまり時期差をもたない横穴古墳と考えられる。

第Ⅱ類aイ（4、10、13号墳）は方形の玄室平面形をもち、第Ⅱ類a口（1号墳）とは玄室内に石敷があることで細分された。この第Ⅱ類a（4、10、13、1号墳）の玄室は第Ⅰ類aイ（9号墳）の前室、第Ⅰ類a口（7号墳）と第Ⅰ類b（8号墳）の後室とほぼ同じ形態と規模を有している。また石敷をもつ点では9号墳と共通しており、I類との関連性は強いと思われる。

第Ⅱ類c（12号墳）は玄室平面形が両袖形ではあるが、ほぼ楕円形を呈し、立面形がドーム形と他の横穴古墳とは異なる形態をもっている。この12号墳は立室と玄門の壁沿いに周溝を有しており、近接して横一線に並ぶ形で検出され、同じく周溝をもつ第Ⅰ類の9号墳、第Ⅱ類bの10号墳と同一のグループを形成するものと思われる。しかし、その造成時期に前後関係があるかどうかは重複関係にないため不明である。

以上のようにI類aイはI類a口とは同時期と考えられた。I類aイは玄室内に敷石をもつ点でII類aイと共に共通し、II類a全体は玄室平面形や規模の点でI類全体と共に共通している。また、I類aイとII類aイの一部、II類cは周溝をもつ点で共通している。つまり、第Ⅰ類と第Ⅱ類aおよびcは相互に共通関係をもつ。その新旧関係は重複しているものがないために知る

ことはできないが、第II類b、第III類より古い事は前述した重複関係から明らかであるので、これらを第1群として包括し、第II類b、第III類を第2群とする。

第1群 第I類-7・8・9号墳、第II類-1・4・10・12・13号墳

第2群 第II類-2・5号墳、第III類-3・6・11号墳

3. 横穴古墳の年代について

各横穴古墳の造成、使用年代を考える資料としては出土遺物がある。出土遺物のうち土師器・須恵器の主に壙について、その年代を検討したが、ここではそれをもとに各横穴の年代について考える。

各横穴古墳の出土遺物のなかで、その出土状態が埋葬時の状況を示していると思われるものには5号墳羨道、8号墳前室、9号墳前室、12号墳羨道、13号墳玄室の出土遺物などがある。しかし、その大部分は直刀・刀子・鉄鎌をどの鉄製品や金・銀環・玉類の装飾品で、土師器・須恵器が出土しているのは8号墳と12号墳だけである。8号墳前室床面から重なった状態の須恵器壙3点および土師器壙1点が出土し、いずれも8世紀後半を中心とする年代に位置付けられた。12号墳では羨道床面から土師器壙が1点出土し、この壙は7世紀後葉のものと考えられた。

次に各横穴の堆積土出土土器についてみると7号墳からは7世紀末～9世紀の、1・12・13号墳からは8世紀前半の、8・9号墳からは8世紀全般の、5号墳からは9世紀後半の、10号墳からは8世紀後半以降の土器が出土している。

各横穴古墳出土土器の年代について述べたが、7・8・9号墳では長期間にわたる遺物の出土が知られ、8・12号墳では埋葬時の状況を留めているとされた遺物と堆積土出土遺物との間に時間的な差が認められた。これは7号墳玄門閉塞溝が2重になっていることや8号墳玄門が奥に移動していることなどに閉塞施設の改築が認められ、また、1・7号墳羨道部に閉塞に使用された円礎がならされた状態で検出されていることや13号墳玄室の人骨の出土状態に追葬の可能性が認められるなど、本横穴古墳群では横穴古墳造成後に度々追葬が行われ、その使用期間が長く続いていたことを示しているものと思われる。

上記のような理由から、出土遺物の年代は横穴古墳の直接的な造成年代を示すものではなく使用年代の上限を現わすものと考えられる。前節で検討した第1群と第2群の横穴古墳に当てはめてみると、第1群の第I類では7号墳の7世紀末を、第II類では12号墳の7世紀後葉を上限とする遺物が出土し、第2群では5号墳にしか出土遺物は発見されていないが、8世紀後半を上限とする遺物が出土している。これにより横穴古墳の造成年代は第1群が7世紀後葉以前に、第2群は8世紀後半以前に求められることが判明した。そして、第1群の横穴古墳は8世

紀代に盛んに使用され、7・10号墳などはその使用期間が平安時代（9世紀）まで及んでいた可能性があることが知られた。さらに、第2群の第III類b（11号墳）は出土遺物はないが、同様の規模・形態をもつ田尻町日向横穴古墳の第1小穴では赤焼土器坏が副葬されており、その所属時期は平安時代後半と考えられていることから、11号墳も同時期のものと思われる。朽木橋横穴古墳群は7世紀末もしくは後半以前に造成が始まり、多様な構造の横穴古墳が造成されながら、その使用期間は平安時代後半まで及んでいたと思われる。

4. 朽木橋横穴古墳群の特徴と問題点

今回調査した13基の横穴古墳について重複関係や構造などから2群に分け、主として出土遺物からその造営年代について前節で検討した。朽木橋横穴古墳群はこの13基の横穴古墳以外にも南西斜面や北斜面にのびて分布しており、この13基が群全体の傾向を示すものではないと思われるが、以下に述べるような特徴を有している。それらを検討し、問題点について述べる。

1. 構造上の特徴として13基の横穴古墳のなかに玄室立面形が家形のものや台床施設および台床を意図した排水溝などが全く認められない。

大崎平野を取り囲む形で多くの横穴古墳群が分布していることについてはすでに述べたが、これらのうち発掘調査されたものについて玄室立面形や台床の有無についてみてみると南縁の鹿島台町大迫横穴古墳群、松山町亀井田横穴古墳群、三木町山田横穴古墳群や東端の涌谷町追戸・中野横穴古墳群には家形の玄室や有縁台床をもつ横穴古墳が、山田横穴古墳群に近接する三木町青山・混内山横穴古墳群には台床を意図した溝をもつ横穴古墳が特徴的に認められる。北縁の横穴古墳群をみると発掘例が少ないこともあるが、玄室が家形を表わす例は整正系と呼ぶれる軒回りを表現したものが岩出山町川北横穴古墳群6号墳に1例あるだけで、この6号墳は無縁の低い台床をもっている。有縁台床は本横穴古墳群の東方約2kmの所にある田尻町日向横穴古墳に1例あるだけである。本横穴古墳群を含めて考えれば、北縁では玄室立面形が家形になるものや、台床施設をもつものは南、東縁ほどは顕著に認められない。このことは両者の間に年代的な差があるためとも考えられるが、現段階ではこれらが大崎平野北縁の横穴古墳群の一つの特徴で、その地域性を示しているものと考えておく。

2. 第1群とした8基の横穴古墳は、そのなかに3基の玄室が複室となる横穴古墳が含まれ、玄室床面に石敷が施されるものが4基認められるなど多様性をもっている。

玄室が複室となる横穴古墳の類例は県内では仙台市善志寺横穴古墳群17号墳（伊東・氏家：1968）と鹿島台町高岩横穴古墳10号墳（志間：1979）とがあるが、前者は前室天井部崩落後に後室が造成された可能性があるとされている。後者は前・後室とも立面形が家形となり、合わせて3つの高い有縁台床をもち、後室は奥台床が発達して独立したような形態を示していく。

明らかに本横穴古墳群のものとは異なる。福島県では県南部のいわき市中田装飾横穴（渡辺他：1971）や東白河郡東村笠内古墳群18号横穴古墳（佐藤・玉川：1979）などに類例がある。両者とも前・後室の平面形がほぼ方形である点などでは本横穴古墳群の7・9号墳と共通しているが、後室立面形がドーム形であることと後室閉塞用の溝をもつ点などでは異なっている。また、中田装飾横穴の報告書では全国10遺跡12例の複室横穴を集成しているが、それによる限りでは前・後室とも立面形がアーチ形となる本横穴古墳群のものと類似する例はない。このように本横穴古墳群の玄室が複室となる3基の横穴古墳については現段階では他の横穴古墳にその類例を求ることはできないようであるが、福島県南にみられるものが変容して伝播した可能性もある。しかし、宮城県北の大崎平野の北縁にある本横穴古墳群に複室構造の横穴古墳が出現するのには全く別の理由がある可能性もあり、今後の類例の増加をまちたい。

玄室内床面に石敷が施される例も少ない。大崎平野周辺では西縁の宮崎町米泉館山横穴古墳群2・3号墳、南縁の三木本町坂本館山横穴古墳群6号墳、鹿島台町高岩横穴古墳群20号墳などがあるが、複数の横穴古墳にしかも密に石敷が施されるのは米泉館山横穴古墳群と本横穴古墳群だけである。米泉館山古墳群では石敷と共に玄門部や羨道部に欄石、あるいは間仕切り石と思われる列石が認められ構造的には当地域に多くみられる古墳時代後期の高塚群集墳の河原石使用の横穴式石室との共通性が指摘されている。本横穴古墳群の位置する部分は大崎平野北縁の高塚群集墳の分布範囲の東端部に当っており、本横穴古墳群の立地する丘陵頂部には高塚古墳が1基存在することから、本横穴古墳群の石敷も高塚古墳と関連する可能性は高い。

第1群8基のなかに玄室が複室になるものや玄室内床面に石敷をもつなど多様な横穴古墳が含まれることは、複室をもつ7号墳と第8号墳に認められる重複関係にみられるように第1群がある時間差をもって造成された可能性が考えられる。一方、このような多様性は横穴古墳を造営した集団内における被葬者の問題とも関連するものと思われる。これらはまた、同一丘陵に高塚古墳と横穴古墳が営まれていることをも含めて今後の検討課題である。

3. 出土遺物に認められる特徴として遺物は第1群の横穴古墳を中心に出土し、第2群の横穴古墳では5基のうち遺物が出土したのは第5号墳だけである点や、出土遺物のなかに在地の土器に交じって関東地方の鬼高式後葉や真間式の土器に類似するものが少量含まれていること装飾品や鉄製品の出土状態に片寄りが認められることがある。

横穴古墳に副葬される遺物が一般に簡略化され退化した形態をもつ横穴古墳では少なくなることはすでに指摘されており（氏家：1974他）、本横穴古墳群第2群に遺物の出土が少ないのでこの傾向と一致するものと思われる。

関東系の土器は近年県内の官衙、集落跡等から発見される例が増えているが、横穴古墳でも田尻町日向南横穴古墳羨道部床面から一括状態で出土した土師器壺4個体が、検討の結果、鬼

高式終末期から真間式初期に位置付けられると報告され、そして、三本木町山畠横穴古墳群、青山横穴古墳群、岩出山町川北横穴古墳群などから出土し、従来、引田・住社系の土師器として報告されてきた土器が同じく関東系の土器である可能性が指摘されている（早坂：1981）。この見解に従がえば、関東系の土器を出土する横穴古墳群はいずれも大崎平野周辺の横穴古墳群であり、その位置は本横穴古墳群を含めて考えると大崎平野を囲繞するように分布している。一方、関東系の土器の出土する横穴古墳は本横穴古墳群では13基のうち1、7、9、12号墳の4基だけである。これは他の横穴古墳群でも同様で、一つの群のなかでも関東系の土器の出土するものは一部に限られ、出土数量も日向・前横穴古墳を除けば1、2個体と少ない傾向も認められる。また、今回の調査で金・銀環や玉類などの装飾品が出土したのは13基のうち、第12号墳1基だけである。そして、鉄製品では第8、13号墳のように直刀・刀子・鉄鎌が出土したもの、第5・10号墳のように刀子・鉄鎌が出土したもの、第9・12号墳のように刀子だけが出土したものがある。以上のような遺物の出土傾向は本横穴古墳群においても追葬の痕跡が多く横穴古墳に認められ、出土遺物が一次的に被葬者に副葬された遺物であるかどうかは不明ではあるが、横穴古墳を造営した集団や被葬者の性格などを反影しているものと思われる。しかし、今回はそれについて十分に検討することはできなかった。また、横穴古墳造営の背景となった社会的環境は集落跡などの発掘例が少なく明らかではないが、近年、古川市名生館遺跡の調査によってその一端が知られるようになってきた。名生館遺跡は玉造柵の有力な擬定地と考えられる古代官衙跡で、その遺構には1～5期の変遷があり、7世紀末から9世紀末まで存続していたとされている（高野・仲田：1983）。本横穴古墳が立地する古川市小野が古代の何郡に含まれるのかは不明であるが、このような性格をもつ名生館遺跡の存在から7世紀末の大崎地方には官衙が成立する社会的基盤が確立していたと考えられる。この名生館遺跡からは前述したように鬼高式後葉や真間式に位置付けられる土器が在地の土器と共に出土しており、大崎平野周辺の横穴古墳からも関東系の土器の出土することは、当時の大崎地方に関東地方と強い関連をもつ人々が存在し、社会的基盤の一翼を担っていたことが知られる。そしてこれらの人々がどのような性格を有し、またどのような位置を占めていたかは不明ではあるが、関東系の土器が横穴古墳に副葬されることはこれらの人々が横穴古墳を造営した集団やその被葬者と直接、間接的に係っていたことを意味すると思われる。しかし、その関連の度合いなどの検討については今後の問題点とい。

引用・参考文献

- 伊東・氏家 (1968. 3) : 『善心寺横穴古墳調査報告書』仙台市教育委員会
氏家和典 (1957. 3) : 「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』第8輯
〃 他 (1970. 6) : 「宮城県玉造郡岩出山町川北横穴群発掘調査報告書(第一次)」『岩出山町史・下巻』
〃 (1973. 3) : 「山形装飾横穴古墳群発掘調査報告書」『宮城県文化財調査報告書』第32集 宮城県教育委員会
〃 (1974) : 「東北横穴の問題」日本考古学・古代史論集
〃 (1980. 7) : 「亀井囲横穴古墳群」『松山町史』
加藤・阿部 (1980. 9) : 「観音沢遺跡—東北新幹線関係遺跡調査報告書」『宮城県文化財調査報告書』第72集、宮城県教育委員会
木村・青沼・長島 (1981. 3) : 「宮城県仙台市郡山遺跡I—昭和55年度発掘調査概報一」『仙台市文化財調査報告書』第29集、仙台市教育委員会
小井川和夫 (1978. 3) : 「白地横穴古墳群」『中田町文化財調査報告書』第1集
小井川・手塚 (1978. 3) : 「糠塚遺跡—宮城県文化財調査略報」『宮城県文化財調査報告書』第53集
小井川・小川 (1982. 3) : 「御駒堂遺跡—東北自動車道遺跡調査報告書VI」『宮城県文化財調査報告書』第83集、宮城県教育委員会
埼玉県立歴史資料館考古資料室
岡部阿六反田遺跡調査会 (1981. 3) : 『六反田遺跡』岡部町教育委員会
佐々木茂植 (1971. 7) : 「三本木町坂本館山横穴古墳群調査報告書」『宮城県三本木町文化財調査報告』第1集 三本木町教育委員会
〃 (1972. 3) : 「米泉館山横穴群」『宮城県加美郡宮崎町文化財調査報告』第1集 宮崎町教育委員会
〃 (1972. 4) : 「坂本館山横穴群第二次調査報告書」『宮城県三本木町文化財調査報告』第2集 三本木町教育委員会
佐々木安彦 (1975. 3) : 「青山横穴古墳群」『宮城県三本木町文化財調査報告書』第3集 三本木町教育委員会
佐藤・手塚 (1978. 3) : 「天狗堂遺跡」『田尻町文化財調査報告書』第1集 田尻町教育委員会
佐藤・玉川 (1979. 3) : 「笊内古墳群—母畑地区遺跡発掘調査報告III」『福島県文化財調査報告書』第74集 福島県教育委員会
佐々木・氏家 (1973. 3) : 「追戸・中野横穴群」『宮城県遠田郡涌谷町文化財調査報告書』涌谷町教育委員会
志間泰治 (1977. 3) : 「大迫横穴群」『鹿島台町文化財報告書』第1集
仙台市教育委員会 (1983. 2) : 「郡山遺跡」第9回古代城柵官衙遺跡検討会資料
高野・仲田 (1983. 2) : 「宮城県名生館遺跡の調査」第9回古代城柵官衙遺跡検討会資料
千葉宗久 (1982. 3) : 「原前南遺跡—東北自動車道遺跡調査報告書VI」『宮城県文化財調査報告書』第83集 宮城県教育委員会
手塚 均 (1980. 3) : 「留沼遺跡—東北新幹線遺跡調査報告書III」『宮城県文化財調査報告書』第65集 宮城県教育委員会

- 丹羽 茂（1981. 3）：「青山横穴古墳群第二次調査報告書」『宮城県三本木町文化財報告書』第5集
三本木町教育委員会
- 丹羽・小野寺・阿部（1991. 3）：「清水遺跡－東北新幹線関係遺跡調査報告書V」『宮城県文化財調
査報告書』第77集 宮城県教育委員会
- 平沢・太田（1981. 3）：「青塚古墳」『宮城県古川市文化財調査報告書』第5集 古川市教育委員会
- 三宅宗議他（1975. 3）：「混内山横穴古墳群」『宮城県三本木町文化財調査報告書』第3集 三本木
町教育委員会
- 宮城県多賀城研究所（1981. 3）：「名生館遺跡I」『多賀城関連遺跡発掘調査報告書』第6冊
- 森 貢喜（1980. 3）：「早風遺跡発掘調査報告書」『宮城県加美郡宮崎町文化財調査報告書』第3集
宮崎町教育委員会
- 渡辺一雄他（1971. 3）：「中田装飾横穴」『いわき市史・別巻』いわき市

写 真 図 版

図版1

遺跡遠景（東上空より）



遺跡全景（南東方向より）



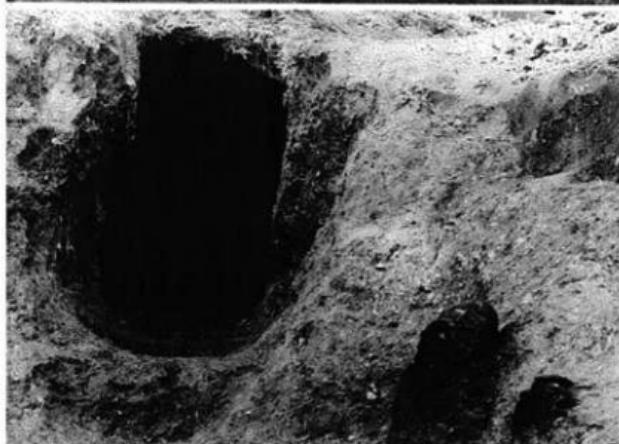
頂上部円墳



3・2・1号墳



1号墳玄門と遺物出土状況



1号墳玄室奥壁



图版3

2号填玄门



2号填玄室



3号填



图版4

4号填



8·7·6·11·5号填



5号填

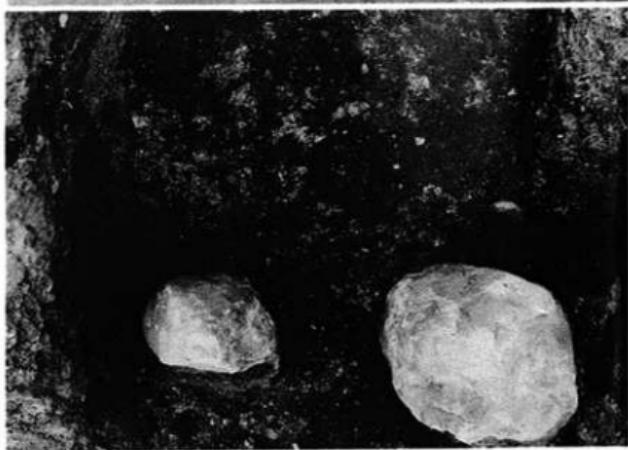


図版5

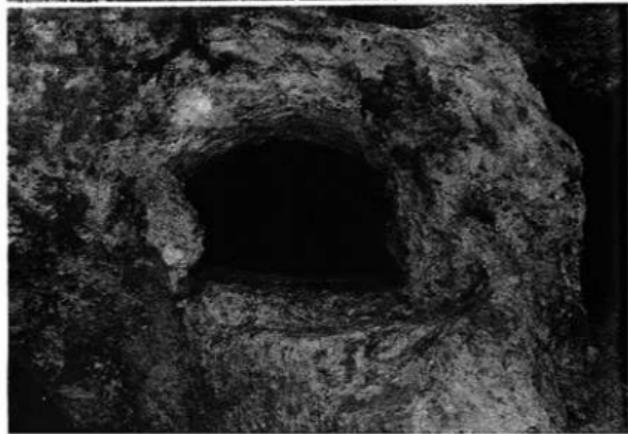
5号墳玄室とノミ痕



5号墳玄門閉塞と
出土遺物



6号墳



7号填筑部壁



7号填玄门



7号填筑道



図版 7

7号墳後室玄門



後室奥壁



後室奥壁ノミ痕



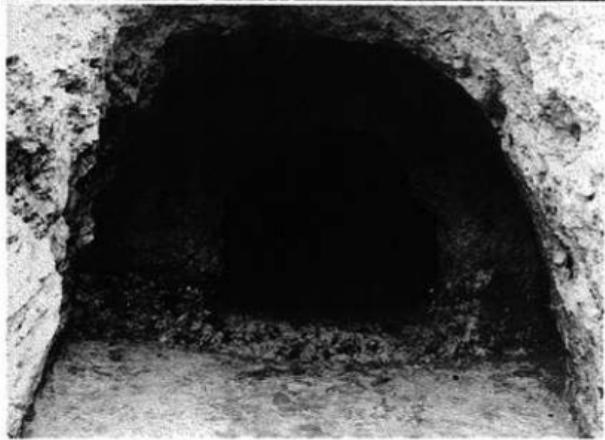
8号墳前室玄門



前室玄門塗溝



後室玄門



图版 9

8号填后室奥壁



前室左奥直刀出土状况



前室左奥铁制品
出土状况





図版10

右より9・10・12号埴



9号埴



9号埴前室

图版11

9号填后室

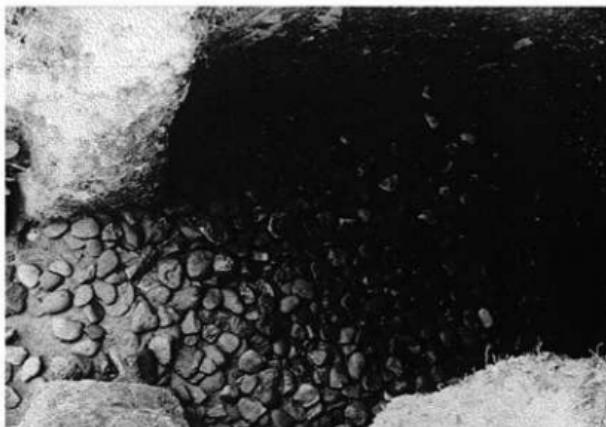


9号填后室南壁



10号填





10号填玄室



玄室と閉塞石



11号填

图版13

12号填



玄室



玉類出土狀況



13号填



玄室



玄室奥壁



図版15

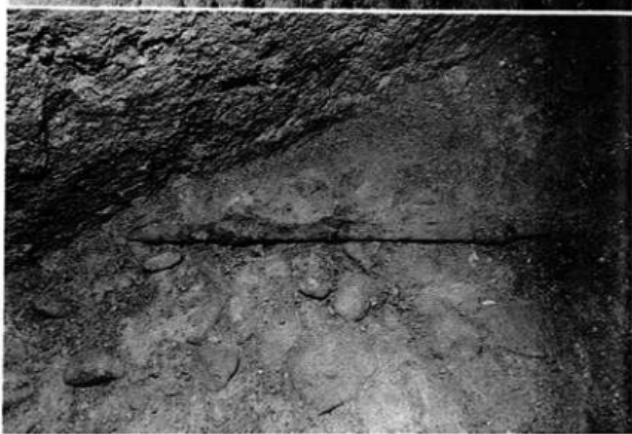
13号墳玄室右奥部人骨
出土状況

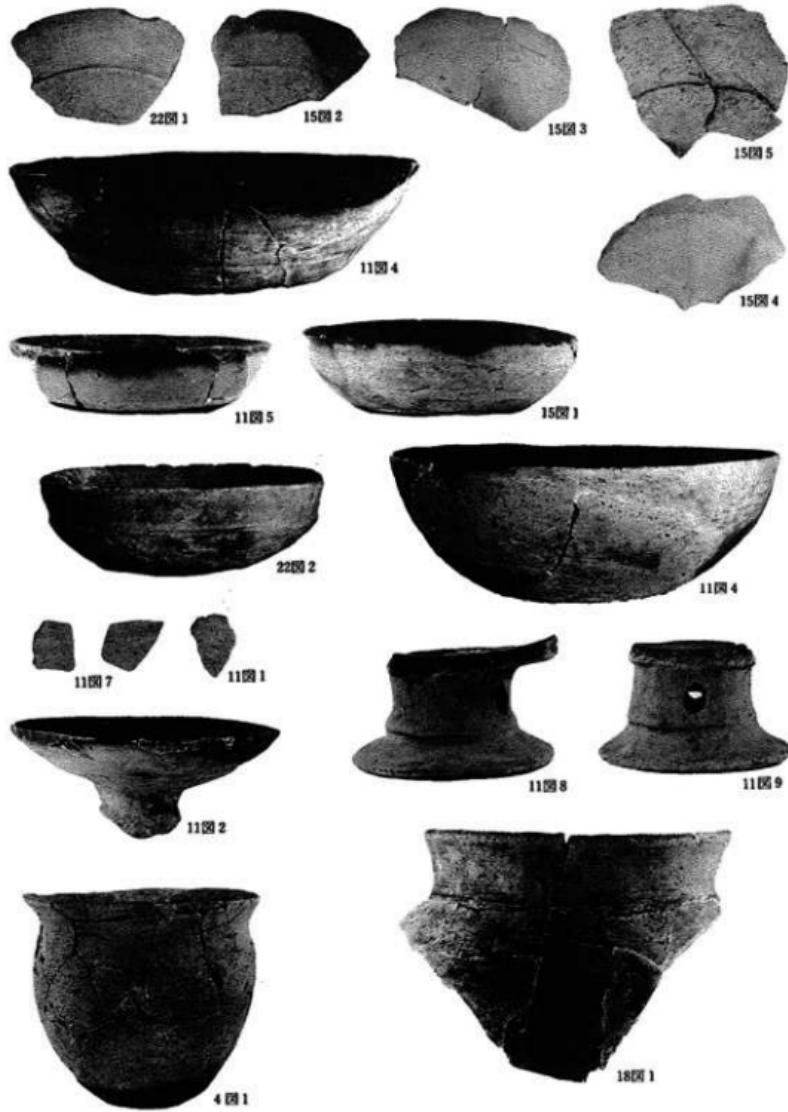


玄室左側壁ぎわ出土
直刀・鉄製品



玄室右側壁ぎわ直刀
出土状況





圖版16 土 節 器



24图1



11图11



6图1



11图3



15图6



8图2



15图9



15图8



11图13



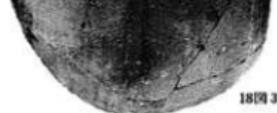
18图2



11图12



20图2 国版17 纪 惠 器



图版18 須惠器



5号墳



8号墳



10号墳



左 9号墳
右 10号墳



13号墳

圖版19 鐵製品



8号填前室左床面



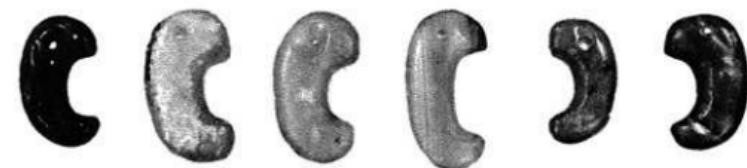
8号填前室左



13号填玄室右側壁



13号填玄室左側壁



12号填出土玉類・金銀環

圖版20 鐵製品・裝飾品

宮 前 遺 跡

目 次

| | |
|-------------------|-----|
| I 遺跡の位置と環境..... | 71 |
| II 遺構とその出土土器..... | 73 |
| III 遺物の検討..... | 172 |
| IV 遺跡の構成..... | 209 |

調査要項

1. 遺跡名：宮前遺跡（宮城県遺跡地名表登載番号：13043 遺跡略号：D I）

2. 調査期日：昭和49年7月8日～昭和49年12月27日

3. 調査対象面積：約15,000m² 実発掘面積：約6,600m²

4. 調査主体者：宮城県教育委員会

5. 調査担当者：宮城県教育庁文化財保護課

調査員：平沢英二郎、白鳥良一、恵美昌之、小井川和夫、宮崎敬典、丹羽 茂、高橋守克、真山 惺、柳田俊雄、田中則和、熊谷幹男、中島 直、阿部博志、佐藤好一、森 貢喜、手塚 均、青沼一民、清野俊太朗、後藤幸雄、林 和男

調査協力機関：亘理町教育委員会 亘理町立吉田小学校 宮城県亘理高等学校

なお、遺跡・遺構等の写真とグリッド配置図・水系配図は宮前遺跡調査概報（宮城県文化財調査報告書第38集）に収録してあるので、そちらを参照していただきたい。

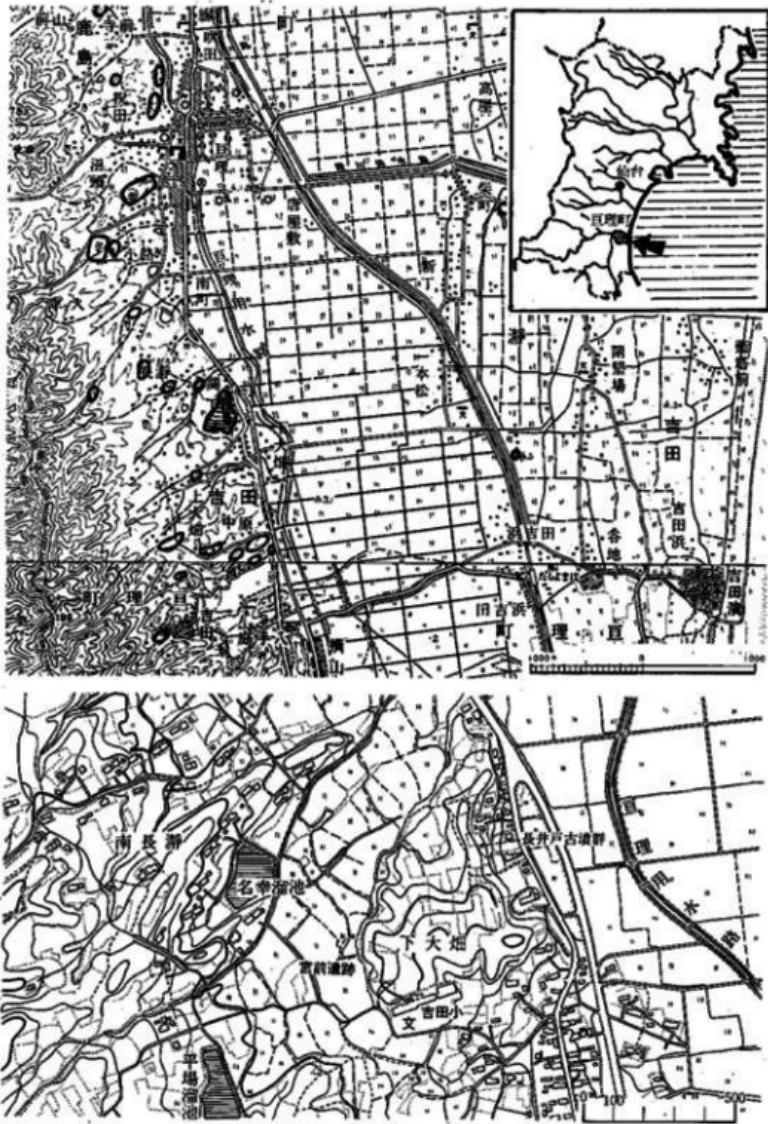
I 遺跡の位置と環境

宮前遺跡は亘理郡亘理町吉田字宮前に位置している。常磐線亘理駅の南方約2.8kmの地点である。福島県から続く阿武隈山地は宮城県に入ると二つに枝分れする。東側の支脈は海岸線に沿って北上し、北端が阿武隈川と接する。この支脈は標高200~300mの丘陵で、その縁辺には小河川によって開析された小丘陵（段丘）が分布している。小丘陵の東側には浜堤の発達が著しく海岸線に平行して約7列認められる（田崎：1971）。海岸線と小丘陵の間には沖積地が広がっている。この沖積地を流れる阿武隈川は岩沼付近で大きく弯曲しながら太平洋に注ぐ。阿武隈川の両岸には自然堤防が形成され、周辺には蛇行痕（旧河床の痕跡）がみられる。

宮前遺跡は阿武隈山地の縁辺に発達した小丘陵に立地している。この小丘陵は河川の浸蝕によって他の小丘陵群から切り離され独立した形になっている。その間には現在水田化されている谷底低地がある。遺跡が立地する独立丘陵の東側には沖積平野が広がり、遠く太平洋を望むことができる。この独立丘陵は南側に深い谷があり、尾根状の丘陵平坦面にはゆるやかな起伏がある。この平坦面は標高約30mで、沖積面との比高は約27mである。



第1図 亘理町周辺の地形学図 (田崎：1971)



第2図 遺跡の位置と周辺の遺跡

II 遺構とその出土土器

第1号住居跡

〔平面形・重複〕第1号住居跡は第2・3号住居跡と重複し、両者によって切られている。また、住居南西部分は、南北に走る小規模な沢（状の地形）によって削平を受けている。残存部分から住居平面形は隅丸方形と推定され、規模は南北軸5.4m・東西軸5.3mである。

〔壁〕検出された壁はすべて地山で、床面から周溝を経てほぼ垂直に立ちあがる。

〔床面〕住居床面はほぼ平坦である。床面下には部分的に地山ブロックを含む掘り方埋土が確認され、一部に貼り床がなされていたと考えられる。

〔柱穴〕柱穴は4個（P_A・P_B・P_C・P_D）検出された。これらの柱穴は掘り方と柱痕跡の識別ができる。また、いずれも住居平面形の対角線上に位置しており、それぞれを結んだ線は住居平面形と相似形となる。なお、柱間は住居南北軸が2.7m・住居東西軸が2.9mである。

〔周溝〕北壁と南西隅の壁直下で周溝が確認されたが、第2号住居跡によって切られている西壁の大部分、沢によって削られている南壁の大部分については不明である。検出された周溝は断面「J」状で、幅10~25cm・深さ2~7cmである。

〔貯蔵穴状ピット〕住居東辺と南辺の隅で確認された（P_①）。平面形は隅丸長方形で、規模は南北軸57cm・東西軸65cm・深さ10cmである。底は丸底状で、壁は緩やかに立ちあがる。ピット底面には厚さ1~2cmの木炭層（第3層）があり、その上に土師器甕2個体（第3図1・2）と甕の口縁部破片1点がのっていた。1の破片は付近の床面上にも散乱していた。ピット内には、焼土や木炭を含む暗褐色土が堆積していた。

〔その他の施設〕住居残存部分では、炉等の施設は検出されなかった。

〔堆積土・遺物の出土状況〕住居内堆積土は他の遺構と重複しているため、壁周辺に残っていたに過ぎない。壁周辺の堆積土を検討すると、第1層（暗褐色土層）と第2層（褐色土層）にわかれれる。第2層は壁に接して分布し、地山崩壊土をブロック状に含んでいる。第1層はその上位にある黒味の強い層である。両者の堆積状況は将棋倒し状をしている。

遺物は、前述の貯蔵穴状ピットとその周辺に集中しており、その他の部分・層ではほとんど出土していない。

第2号住居跡

〔平面形・重複〕第2号住居跡は第1・3号住居跡と重複し、第1号住居跡を切っているが、第3号住居跡によって上部が削平されている。また、住居南西部分は南北に走る沢（状の地形）による削平を受けている。住居平面形は隅丸方形で、規模は南北軸4.50m・東西軸4.65mである。

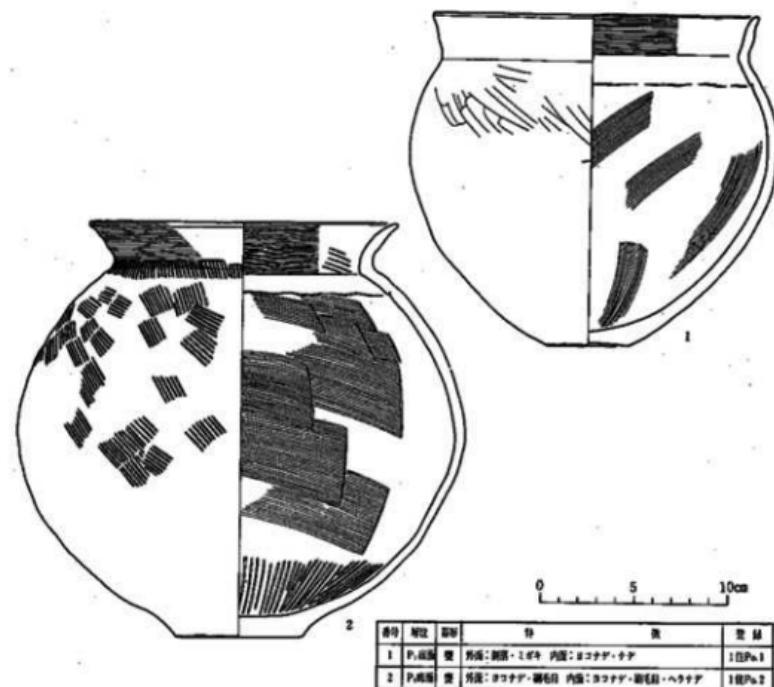
る。

[壁] 検出された壁は、第1号住居跡と重複している部分ではその堆積土、その他の部分では地山となっている。壁は床面から周溝を経てほぼ垂直に立ちあがる。

[床面] 住居床面はほぼ平坦である。床面下には部分的に地山ブロックを含む掘り方埋土が確認され、一部に貼り床がなされていたものと考えられる。

[柱穴] 柱穴は4個（P₇・P₈・P₉・P₁₀）検出された。これらの柱穴は、掘り方と柱痕跡の識別ができる。また、いずれも住居平面形の対角線上に位置しており、それぞれを結んだ線は住居平面形と相似形となる。なお、柱間は南北軸2.25m・東西軸2.30mである。

[周溝] 西壁を除く北・東・南壁直下にめぐっている。周溝の断面は「J」状で、幅10~30cm・深さ2~9cmである。この他、南壁と西壁の内側1.2~1.3mに、それぞれの壁と平行な溝が走っている。この溝（内側周溝）は断面が「J」状で、幅10~15cm・深さ3~4cmと周溝より僅かに小規模である。また、内側周溝は壁直下の周溝と接続し、その囲む形は住居平



第3図 第1号住居跡出土土器

面形と東・北の二辺を共有する相似形となる。そして、この内側周溝は南西隅の部分から外側に90cm程さらに延びている。

このように、二重にみられる周溝は、二辺を共有することから住居の間仕切りなのか、それとも拡張に伴うものか二つの可能性が考えられる。しかし、調査の時点で、そのいずれか判断し得る痕跡を発見することはできなかった。

〔焼〕 住居中央から僅かに北西に偏った部分の床が焼けており（焼面）、炉と考えられる。この焼面は不整椭円形をしており、その範囲は55×50cmである。

〔貯蔵穴状ピット〕 住居南辺と西辺の隅にあたる部分で確認された（P₁₁）。平面形は円形で、底面は平坦である。規模は直径約55cm・深さ約60cmである。底面直上から甕の土製模造品（第6図4）が1点出土している。

〔堆積土〕 住居内堆積土は3層に大別され、将棋倒し状の堆積状況を示している。第1層は暗褐色シルト層で、住居中央部を中心として広い範囲に堆積している。第2層は焼土・木炭を多量に含む暗褐色粘土質シルトで、住居東側の狭い範囲に堆積している。第3層は褐色の砂質粘土で、壁の崩壊土を含み壁際に堆積している。

〔遺物の出土状況〕 遺物がまとまって出土しているのは床面と細部（周溝・貯蔵穴状ピット）である。すなわち、床面からは高坏2点・高坏脚部破片1点・壺1点・甕口縁部破片8点・甕底部破片1点・瓶1点が出土している。周溝からは高坏脚部破片1点・甕1点・貯蔵穴状ピットから土製模造品（甕）1点が出土している。

堆積土からの出土は次の通りで、あまりまとまりはみられない。第1層：坏1点・甕口縁部破片1点、第2層：高坏脚部破片2点・壺1点・甕1点・甕口縁部破片1点、第3層：壺1点・甕底部破片1点、層不明：高坏脚部破片1点・甕4点・甕口縁部破片4点・甕底部破片1点

第3号住居跡

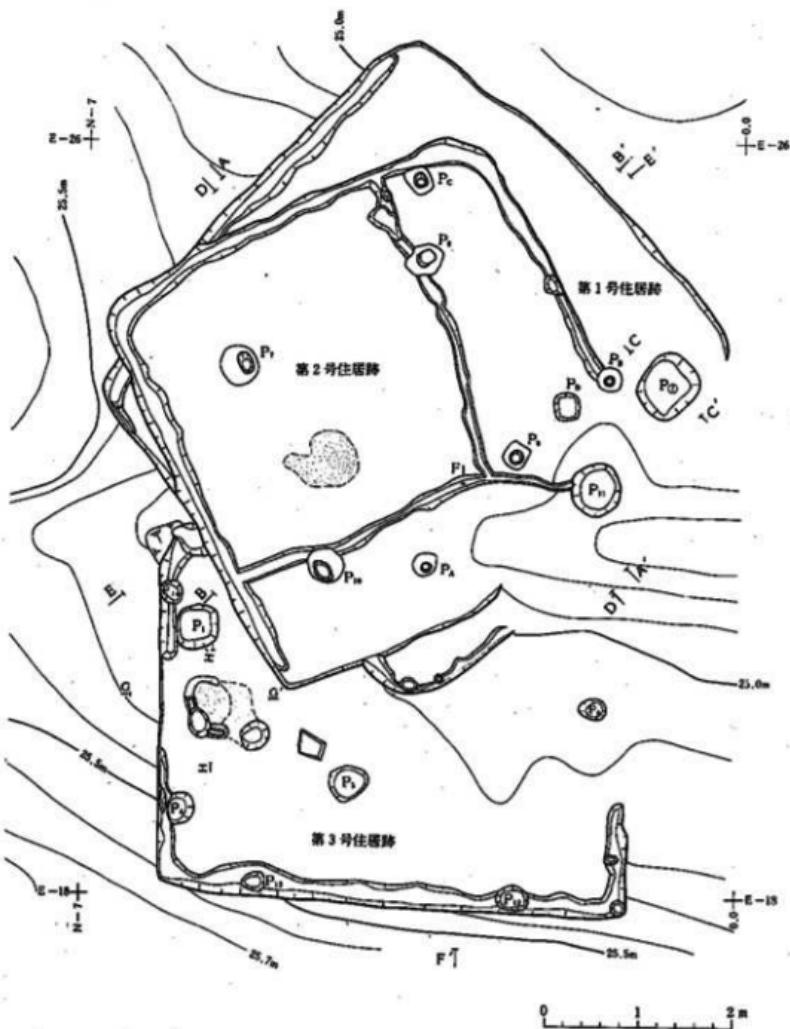
〔平面形・重複〕 第3号住居跡は第1・2号住居跡と重複し、その両者を切っている。しかし南北に走る沢（状の地形）によって、住居の南東部分が削平されている。

住居平面形は長方形で、規模は南北軸4.90m・東西軸3.95mである。

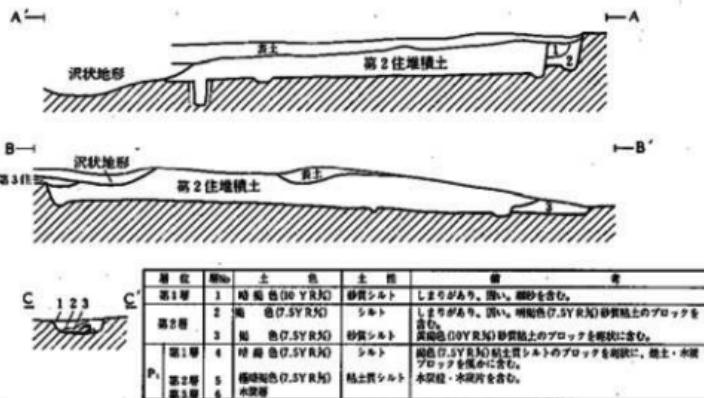
〔壁〕 検出された壁は、第1・2号住居跡と重複している部分ではその堆積土、その他の部分では地山となっている。壁は床面から周溝を経てほぼ垂直に立ちあがる。

〔床面〕 住居床面はほぼ平坦である。床面の大部分は地山であるが、第1・2号住居跡と重複している部分ではその堆積土となっている。

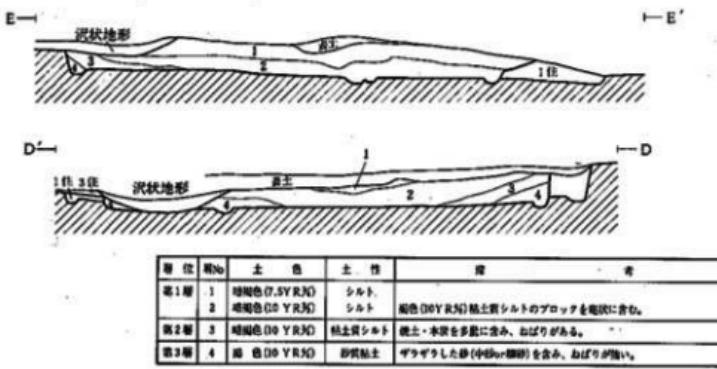
〔柱穴〕 主柱穴は不明である。P₁₂・P₁₃・P₄・P₁₄は周溝中であるが、住居南北軸・東西軸に対して対称な位置にあることから、支柱穴の可能性が認められる。



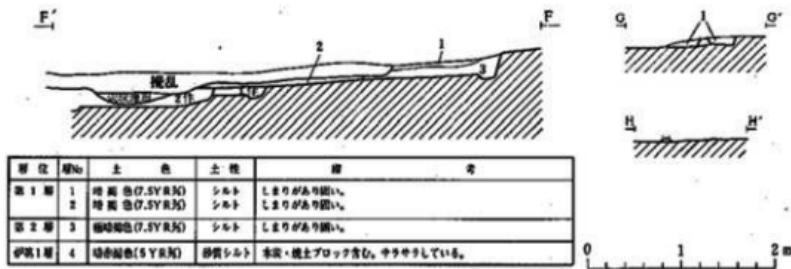
第4圖 第1・2・3号住居跡平面図



第1号住居跡

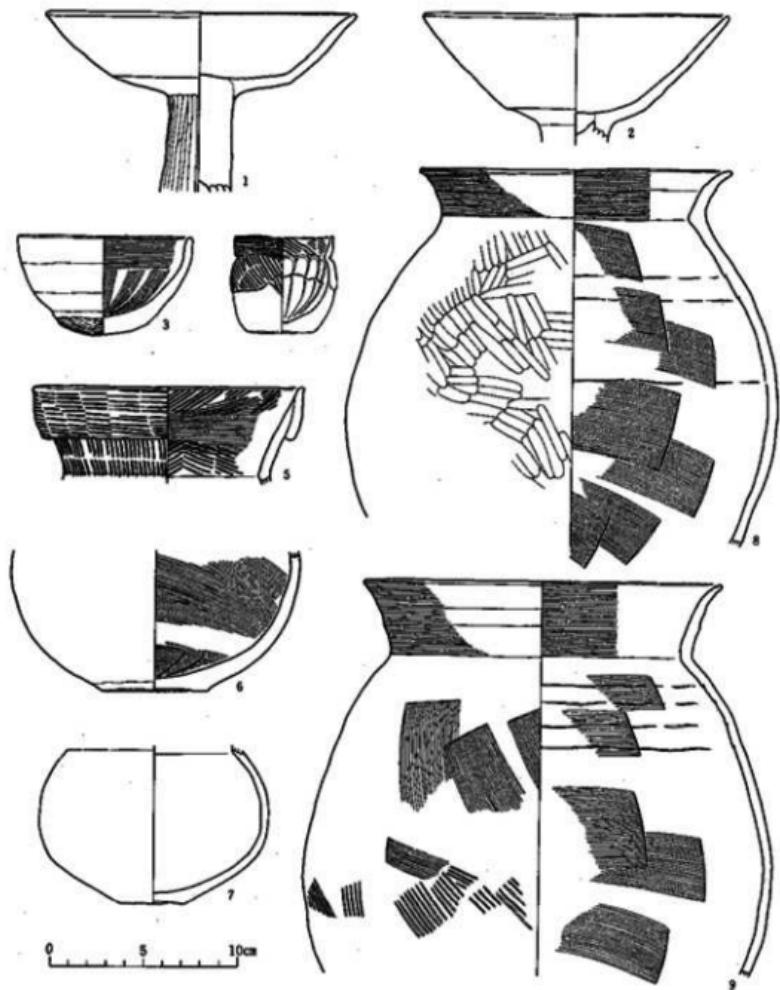


第2号住居跡



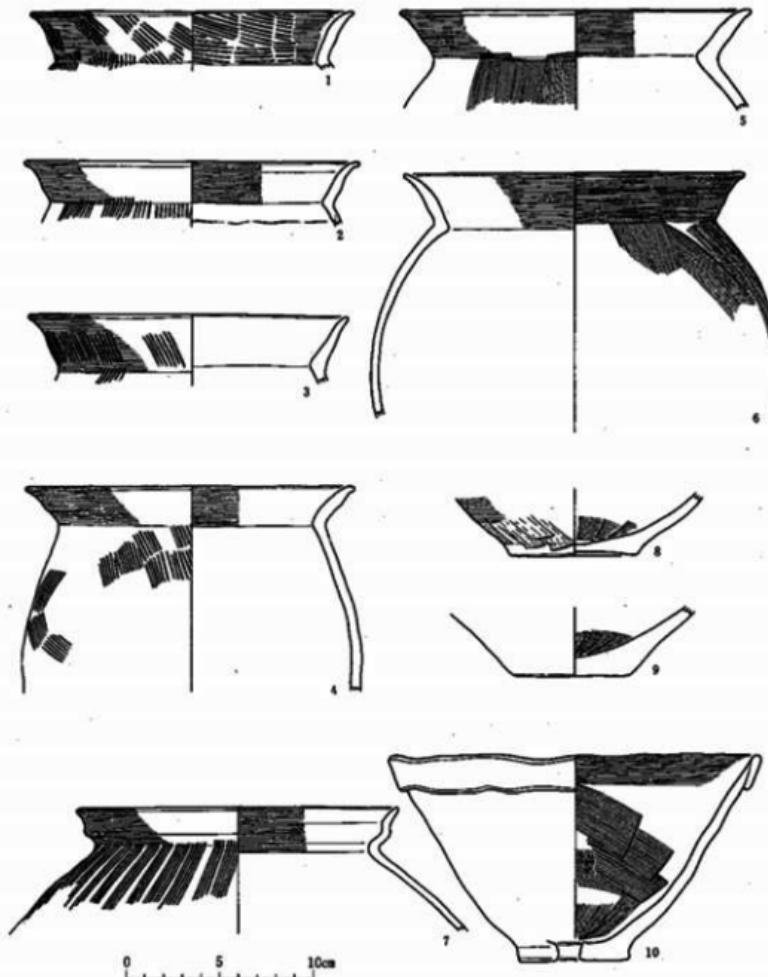
第3号住居跡

第5図 第1・2・3号住居跡断面図



第6図 第2号住居跡出土土器 (1)

| 器種 | 記号 | 分類 | 性質 | 量 | 器種 | 記号 | 分類 | 性質 | 量 | |
|----|-------|----|-------------------------------|-------------------------|------|----|----|--------------------------------|----------------------------|------|
| 1 | 直 | 深鉢 | 内面: 1. 純白 外側: 銀鏡 | 200g | 2 | 直 | 深鉢 | 内面: 1. 純白 外側: ラメ・ヘタナデ | 100g | |
| 2 | 直 | 深鉢 | 内・外側: 2. 純白・銀鏡 | 200g | 4 | 直 | 深鉢 | 内側: 銀鏡 | 200g | |
| 3 | 18 | 平 | 外側: 不規則・トゲナシ 内側: ニコナタ・ヘタナデ | 100g | 5 | 直 | 深鉢 | 外側: ニコナタ・ヘタナデ 内側: ニコナタ・ヘタナデ | 100g | |
| 4 | 7w | 直 | 内側: 銀鏡 | ニコナタ・ヘタナデ 内側: 銀鏡・ナフカ | 200g | 6 | 直 | 深鉢 | ニコナタ・ヘタナデ 内側: ニコナタ・ヘタナデ | 200g |
| 5 | 38125 | 直 | 内側: 銀鏡 | 内側: 銀鏡・ナフカ | 200g | 7 | 直 | 深鉢 | ニコナタ・ヘタナデ | 200g |

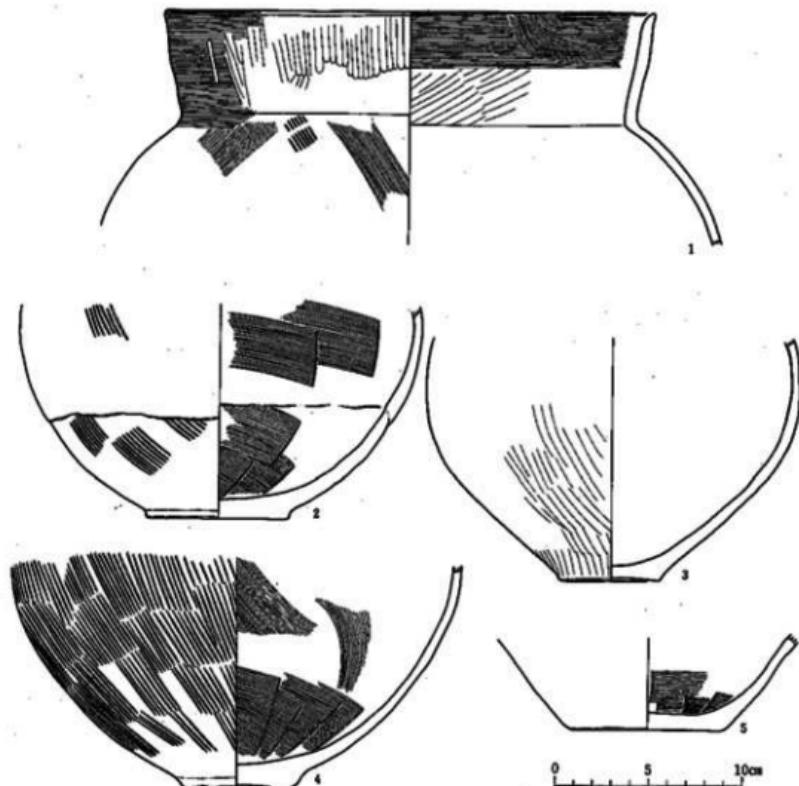


| 品目 | 番号 | 材質 | 寸法 | 説明 | 寸法 | 説明 | 寸法 |
|----|----------|----------------------------|---------|----|--------|-------------------------------------|---------|
| 1 | 住居内 骨 | 外縁:ココナツ・剥毛 内縁:骨臼 | 25Pn.14 | 6 | 直 骨 | 外縁:ココナツ・ヘラナデ 内縁:ココナツ・M4剥離 | 25Pn.9 |
| 2 | 住居内 骨 | 外縁:ココナツ・剥毛 内縁:ココナツ | 25Pn.17 | 7 | 直 骨 | 「S」字形剥離 外縁:ココナツ・剥毛 内縁:ココナツ・M4 | 25Pn.12 |
| 3 | 骨 | 外縁:ココナツ・剥毛 内縁:ココナツ | 25Pn.12 | 8 | 直 骨 | 外縁:ココナツ 内縁:ヘラナデ | 25Pn.20 |
| 4 | 骨 | 外縁:ココナツ・剥毛 内縁:ココナツ・ナメ | 25Pn.15 | 9 | 直 骨 | 外縁:ココナツ 内縁:ヘラナデ | 25Pn.19 |
| 5 | 骨 | 外縁:ココナツ・ヘラナデ 内縁:ココナツ・ナメ | 25Pn.16 | 10 | 直 骨 | 外縁:ココナツ 内縁:ココナツ・ヘラナデ・ナメ | 25Pn.18 |

第7図 第2号住居跡出土土器(2)

〔周溝〕壁直下に断面「J」状の周溝がめぐっているが、カマドの部分では途切れている。周溝は幅30~40cm・深さ2~4cmである。

〔カマド〕住居北辺中央部の壁から約30cm内側に位置している。底面は僅かながら凹んでおりそれをとり囲むように側壁（黄色粘土の積み上げによる）が「コ」字状にめぐっている。規模は主軸50cm・幅66cmである。焚き口部左手前には円形のピットがある。炉の底面・側壁内面は強く焼けて赤褐色をしている。また、カマドの周囲および焚き口手前のピットも焼けて淡い赤褐色をしている。カマドの内部・周囲には木炭・焼土ブロックを含む暗赤褐色土が堆積しており、



| 番号 | 層 | 形 | 特 | 基 | 壁 | 底 | 番号 | 層 | 形 | 特 | 基 | 壁 | 底 |
|----|-----|---|----------------------------|---------|---|-----|----|----------------------------|---------|---|---|---|---|
| 1 | 住居内 | 壺 | 外底: 1段のミオナテ・ナゲ 内底: 1段のミオナテ | 2段Pn.11 | 4 | 住居内 | 壺 | 外底: 1段のミオナテ・ナゲ 内底: ヘラナガ・ナゲ | 2段Pn.24 | | | | |
| 2 | 底 | 壺 | 外底: 鶴毛目 内底: ヘラナガ | 2段Pn.11 | 5 | 第2号 | 壺 | 外底: 不規則目 内底: ヘラナガ | 2段Pn.19 | | | | |
| 3 | 底 | 壺 | 外底: 1段のミオナテ 内底: 1段の | 2段Pn.10 | | | | | | | | | |

第8図 第2号住居跡出土土器 (3)

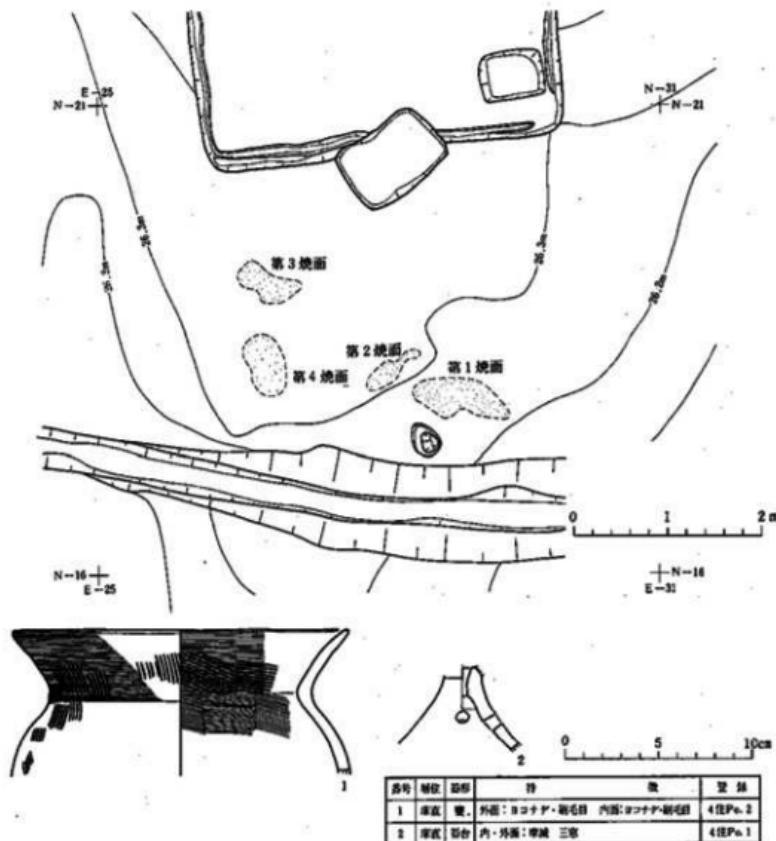
燃料残滓および側壁の崩壊したものと考えられる。

[堆積土・遺物の出土状況] 住居内堆積土は2層に大別され、将棋倒し状の堆積状況を示している。第1層は暗褐色のシルトで、住居全体に分布しており2層に細別される。第2層は極暗褐色のシルトで、住居の壁付近に堆積している。

住居内からはほとんど遺物が出土していない。

第4号住居跡

(概要) 焼面が確認され、その周囲から土器は出土したが、住居の壁・周溝・柱穴等の施設は



第9図 第4号住居跡

検出できなかった。したがって、住居跡として扱ったが、疑問の余地を残している。

焼面は合計4ヶ所あり、いずれも楕円形ないしは不整楕円形をしている。それらの規模は次の通りである。第1焼面：45×100cm 第2焼面：20×70cm 第3焼面：30×60cm 第4焼面：40×70cm。遺物としては、器台と甕が1点ずつ床面から出土している。

第5号住居跡

〔平面形・重複〕第5号住居跡は第38号住居跡と重複しているが、重複部分の堆積土が薄く、切り合ひ関係を確認することができなかった。また、住居南側は南北に走る沢（状の地形）によって削平されている。

住居平面形は隅丸方形で、規模は南北軸6.1m・東西軸5.65mである。

〔壁〕検出された壁はすべて地山で、床面から周溝を経てほぼ垂直に立ちあがる。

〔床面〕床面はほぼ平坦で、住居掘り方底面（地山）と一致している。

〔柱穴〕柱穴は4個（P₁・P₂・P₃・P₄）検出され、P₂を除く3個のピットでは掘り方と柱痕跡の識別もできた。また、これらの柱穴は住居平面形の対角線上に位置しており、それぞれを結んだ線は住居平面形と相似形となる。なお、柱間は住居南北軸が3～3.1m、住居東西軸が2.8～2.9mである。

〔周溝〕北壁とそれに接続する部分の東壁・西壁直下に周溝がめぐっている。周溝は断面「J」状で、幅10～20cm・深さ4～7cmである。

〔炉〕住居中央から僅かに北西に偏った部分の床が焼けており（焼面）、炉と考えられる。この焼面は不整長椿円形をしており、その範囲は35×85cmである。

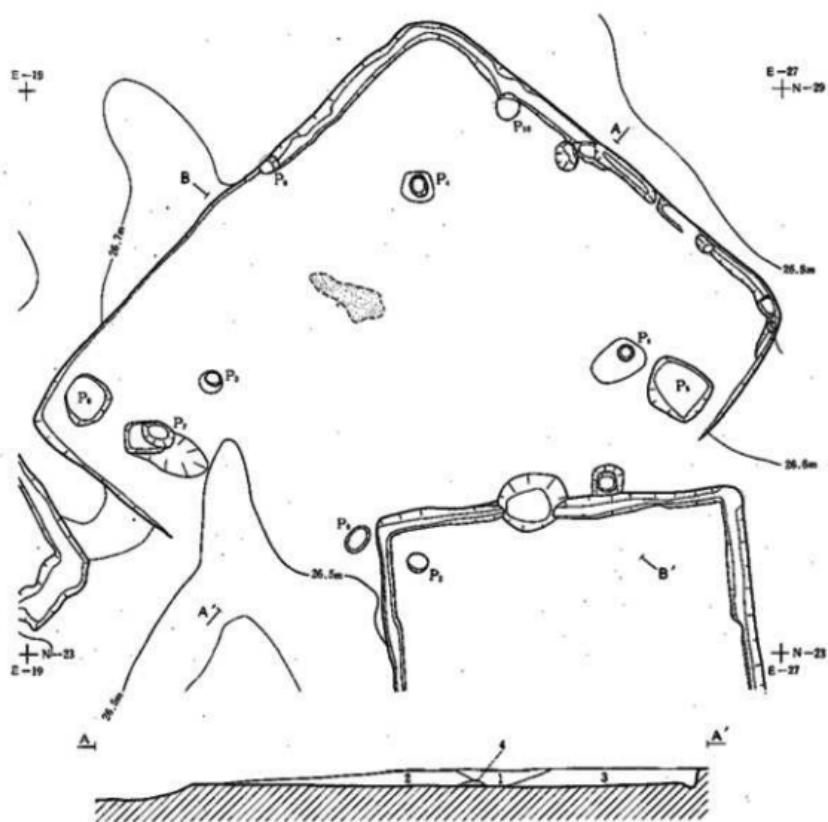
〔貯蔵穴状ピット〕住居東辺の北側で確認された（P₅）。平面形は不整方形で、底面は平坦である。壁の立ちあがりは緩やかであるが、その上方はほぼ垂直となる。規模は東西軸65cm・南北軸55cm・深さ35cmである。

〔堆積土〕住居内堆積土は、いずれも褐色のシルトないしは砂質シルトであるが、細かな色調・混入物などから3層に細別され、その堆積状況は特異倒し状である。

〔遺物の出土状況〕遺物は第1・2層から出土しているが、出土状況に特にまとまりはみられない。各層における出土は次の通りである。第1層：器台1点・壺1点・甕3点・甕口縁部破片1点 第2層：甕1点 層不明：甕1点・甕口縁部破片1点

第6号住居跡

〔平面形・重複〕第6号住居跡は、第7号住居跡と南端部分で重複していたが、切り合ひ関係



貯蔵穴状ピット(P_1)堆積土

住居内堆積土

| 層位 | No. | 土色 | 土性 | 層名 |
|-----|-----|-----------|-------|-----------|
| 第1層 | 1 | 褐色(DYR50) | 砂質シルト | 本層面を少許含む。 |
| 2 | 2 | 褐色(DYR50) | 砂質シルト | 本層面を含む。 |
| 第2層 | 3 | 褐色(DYR50) | 砂質シルト | 本層面を含む。 |
| 4 | 4 | 褐色(DYR50) | シルト質砂 | |
| | 5 | 褐色(DYR50) | シルト質砂 | |

| 層位 | No. | 土色 | 土性 | 層名 |
|-----|-----|-----------|-------|---------------|
| 第1層 | 1 | 褐色(DYR50) | シルト | 本層面を含む。表面に硬い。 |
| 2 | 2 | 褐色(DYR50) | 砂質シルト | 地盤ブロックを含む。 |
| 第2層 | 3 | 褐色(DYR50) | 砂質シルト | 本層面を少許含む。 |
| 4 | 4 | 褐色(DYR50) | 砂質シルト | 本層面を含む。 |

1 1 2 m

第10図 第5号住居跡

については確認することができなかった。また、住居東壁と北壁の大部分は、調査区外にのびているため、正確な平面形・規模は不明である。残存部分と柱穴配置から住居平面形を推定すると、隅丸正方形と考えられる。

〔壁〕検出された壁は地山で、床面ないしは周溝から僅かに外傾しながら立ちあがる。

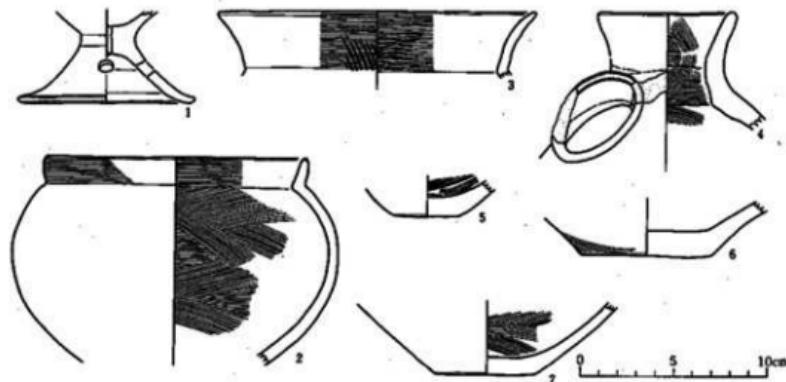
〔床面〕住居床面はほぼ平坦であるが、南側床面には段状になっている部分がある。また、床面は住居掘り方底面（地山）とほぼ一致している。

〔柱穴〕調査区内で柱穴は3個確認され（P₂・P₃・P₄）いずれも掘り方と柱痕跡の識別ができた。また、これらの柱穴を結んだ線は住居南辺・西辺と平行になる。これらと組みあうもう1個の柱穴は調査区外に存在するものと推定される。柱間は南北軸3.3m・東西軸3.5mである。

〔周溝〕南壁および西壁中央部の直下で周溝が確認された。周溝は断面「J」状で、幅20～35cm・深さ3～9cmである。

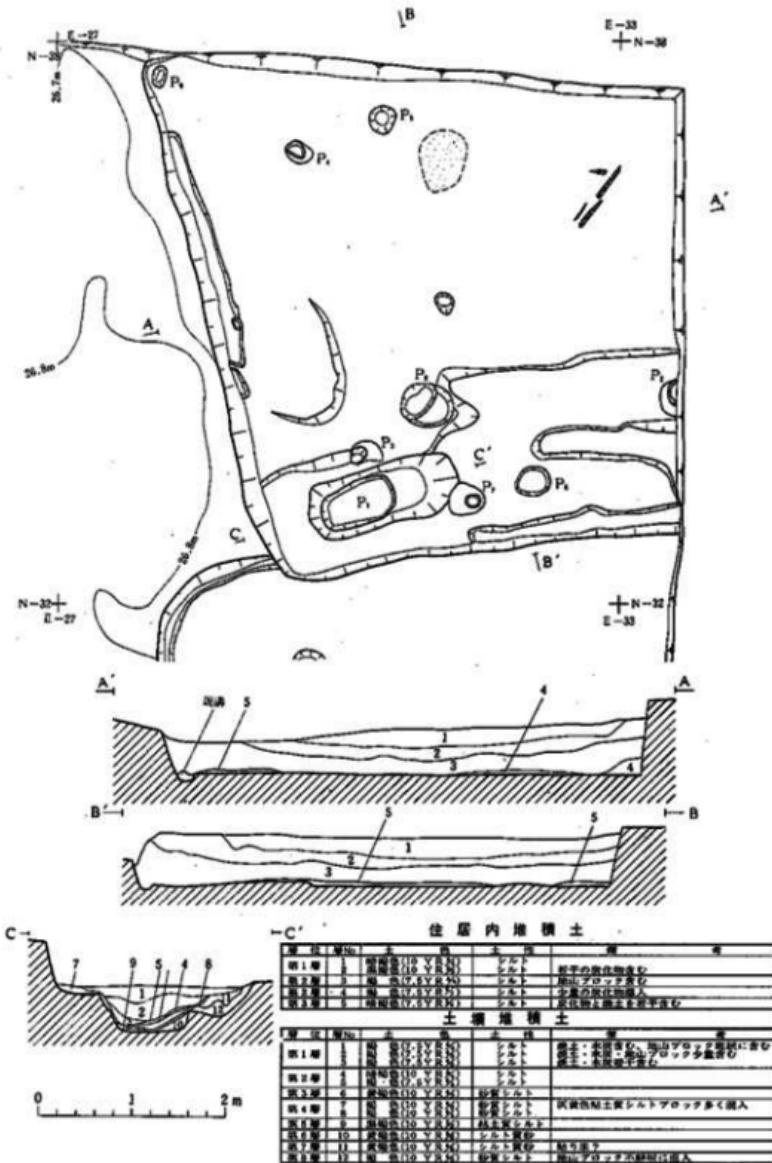
〔炉〕住居中央から僅かに北に偏った部分の床面が焼けており（焼面）、炉と考えられる。この焼面は楕円形で、その範囲は50×65cmである。

〔貯蔵穴状ピット〕住居南西隅で確認された（P₁）。P₁の平面形は隅丸長方形であるが、底面は、南側で一段深くなっている。この段は、ピットの形状そのままのものなのか、それとも二つのピットが重複しているためなのか、検討を加えたが明確にし得なかった。ピットの規模は上段が東西軸165cm・南北軸70cmで、下段が東西軸80cm・南北軸45cm、床面からの深さは上段が37cm・下段が50cmである。底面は、上・下段ともほぼ平坦である。



| 番号 | 種 | 形 | 特 | 寸 | 縦 | 横 | 厚 | 底 | 壁 | 特 | 寸 | 縦 | 横 | 厚 | 底 | 壁 |
|----|------|---|-------------------------|------------------|---|-------|---|------------------|----------|------------------|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 5E1号 | 鉢 | 三足 内面：刷毛 | S鉢P ₁ | 5 | 高さ5cm | 側 | 内面：内側：ナメ | 外側：内側：ナメ | 5鉢P ₅ | | | | | | |
| 2 | 5E1号 | 鉢 | 内面：ヨコナメ・1段目 内底：ヨコナメ・ナメ | S鉢P ₂ | 6 | 高さ5cm | 側 | 内面：ナメ・ナメ | 外側：ナメ・ナメ | 5鉢P ₄ | | | | | | |
| 3 | 5E2号 | 鉢 | 外底：ヨコナメ・刷毛目 内底：ヨコナメ・刷毛目 | S鉢P ₃ | 2 | 底粗面 | 側 | 外底：ヨコナメ刷毛目 内底：ナメ | ナメ | 5鉢P ₅ | | | | | | |
| 4 | 5E1号 | 鉢 | 外底：ヨコナメ 内底：ナメ | S鉢P ₄ | | | | | | | | | | | | |

第11図 第5号住居跡出土土器



第12図 第6号住居跡

〔堆積土〕住居内堆積土は3層に大別され、第1・2層は特異倒し状、第3層は床面を覆う堆積状況を示している。第1層は暗褐色ないしは黒褐色のシルト層、第2層は褐色のシルト層で、住居内全体に分布している。第3層は炭化材・炭化物・焼土を含む暗褐色土で、床面を直接覆っている。第3層に炭化材は少ないが、堆積状況などから、火災層の可能性もある。

〔遺物の出土状況〕遺物は各層から出土しており、出土状況に特にまとまりはみられない。遺物の出土は次の通りである。第1層：壺1点・甕1点・甕口縁部破片1点・瓶2点・土製模造品（壺など）3点 第3層：壺2点 床面：器台1点・甕1点・土製模造品（壺など）2点 層不明：壺1点・甕口縁部破片1点

第7号住居跡

〔平面形・重複〕第7号住居跡は、第6号住居跡と北端部で重複しているが、切り合い関係については確認することができなかった。また、住居東側は、調査区外にのびているため、正確な規模・平面形は不明である。調査区内で検出された南・西・北壁から住居平面形を推定すると、隅丸方形と考えられる。

〔壁〕検出された壁は地山で、床面ないしは周溝から僅かに外傾しながら立ちあがる。

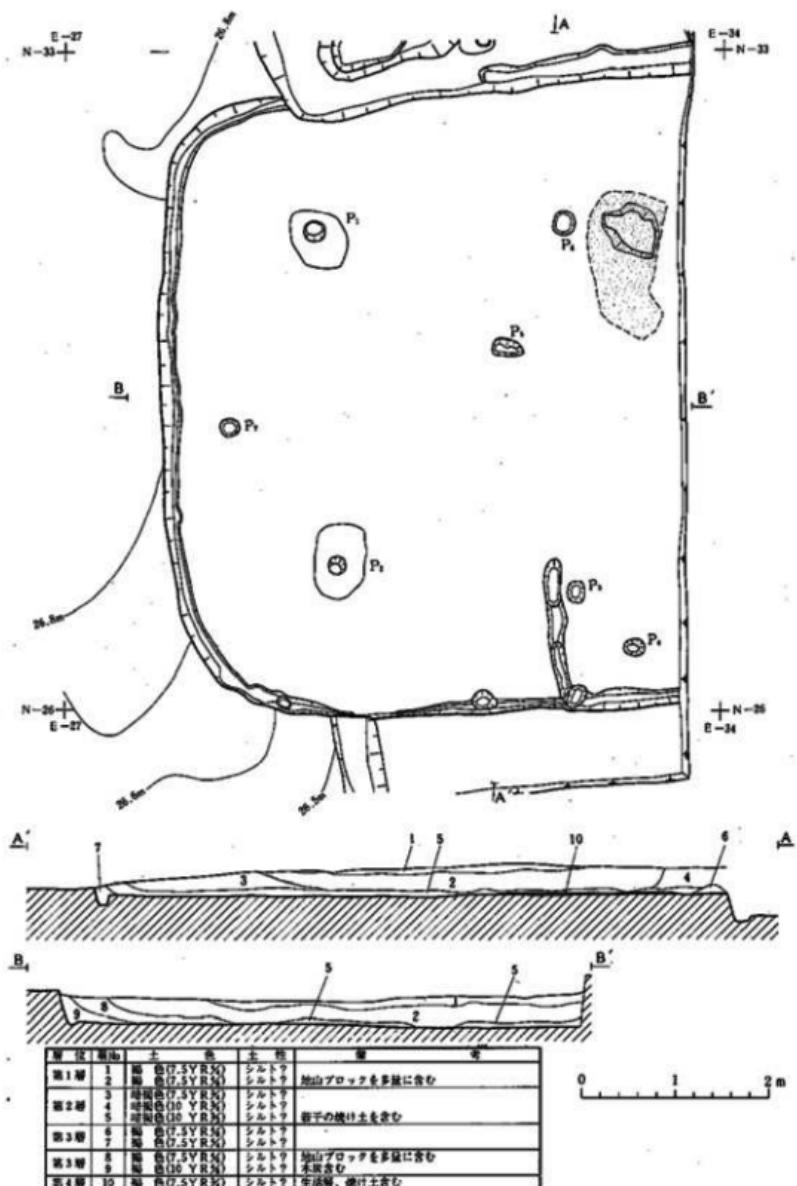
〔床面〕住居床面は掘り方底面（地山）と一致し、ほぼ平坦である。

〔柱穴〕床面から掘り方と柱痕跡の識別できる2個の柱穴（P₁・P₂）が検出された。二つのピットを結んだ線は西壁と平行である。これらと組み合うもう2個の柱穴は、調査区内では明確に検出することができなかった。P₃・P₆は掘り方と柱痕跡の識別はできなかったが、P₁・P₂と組みあわせる配置の上で一見規則性がみられる。すなわち、P₁・P₂・P₃・P₄を結んだ線は南・西・北壁と平行な長方形となる。ただ、この柱穴配置が正しいとすると、住居平面形は南北に長い隅丸長方形となり、炉が東側柱穴と東壁の間に位置してしまうため、宮前遺跡における他の住居跡の諸例に較べ不自然である。P₃・P₆が柱穴ではないとすると、正しい東側柱穴は調査外に存在するものと考えられる。柱間は南北軸3.6mであるが、東西軸は不明である。

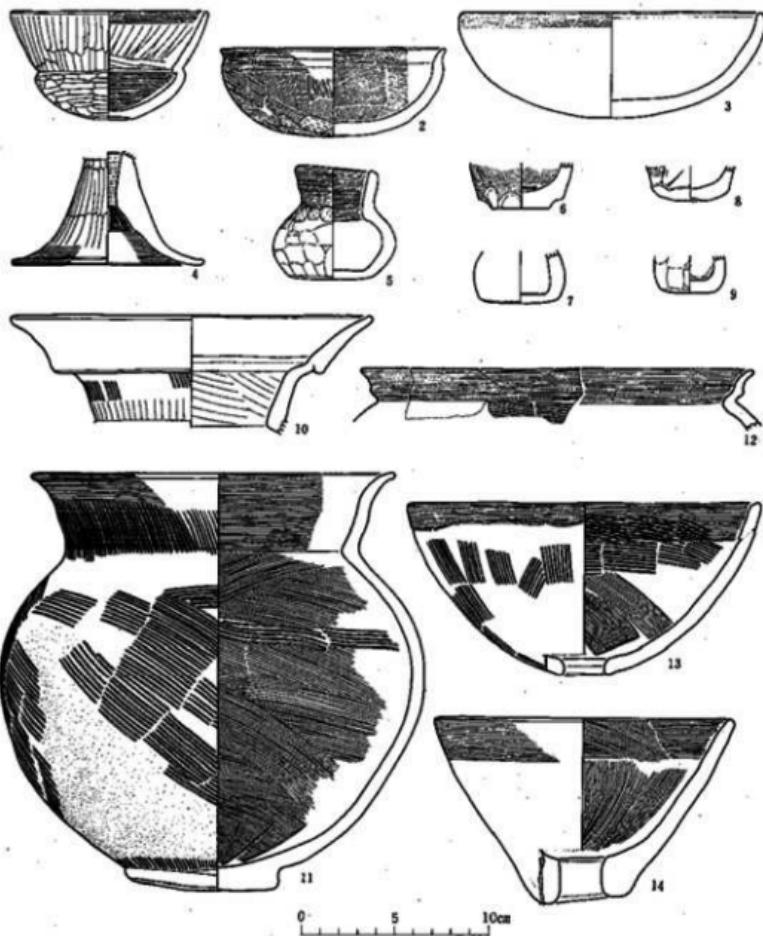
〔周溝〕南壁の一部で途切れている他、検出された壁直下の大部分に周溝がめぐっている。周溝の断面形は「J」状で、幅5～20cm・深さ3～6cmである。またP₃の西側約10cmの所に南北に走る溝があり、南壁直下の周溝と直交する形で接続している。この溝は長さ約1.5mで、断面形・幅・深さとも壁直下の周溝と共通している。

〔炉〕P₆の東側床面が焼けており（焼面）、炉と考えられる。この焼面は不整形で、北側の部分が僅かに高い（約5cm）段状になっている。焼面の範囲は70×160cmである。

〔その他の施設〕調査区内では、貯蔵穴状ピットなどの施設は検出されなかった。



第13図 第7号住居跡

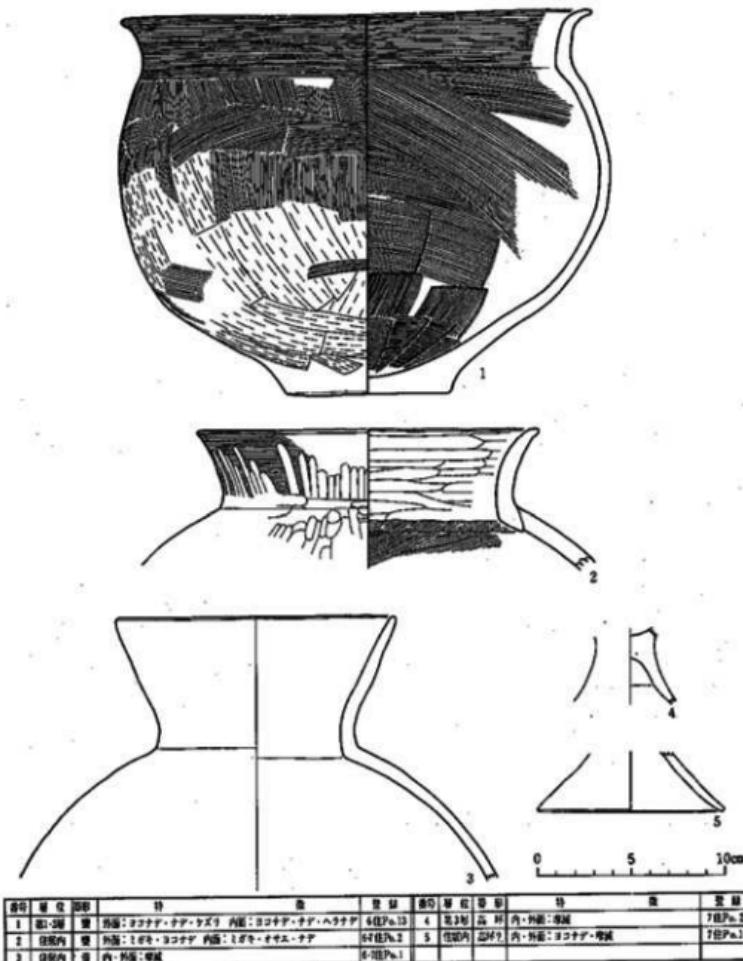


| 番号 | 形 | 器 | 外壁 | 内面 | 基部 | 番号 | 形 | 器 | 外壁 | |
|-------|----|-------------------------------|--------------------------|---------|-----|-------|----------------------------|----------------------|---------|--|
| 1 第3号 | 杯 | 外壁: ヒガキ 内面: ヒガキ・ナゲ | 6BPa.1 | 6 | 底 | 上野製品 | 外壁: モキス・ナゲ・ケズリ 内面: モキス | 6BPa.10 | | |
| 2 第3号 | 杯 | 外壁: モコナゲ・ナゲ・ケズリ 内面: モコナゲ・ナゲ | 6BPa.2 | 9 | 底 | 大曾根製品 | 内・外壁: モキス | 6BPa.12 | | |
| 3 第1号 | 杯 | 外壁: モコナゲ・ヒガキ・ナゲ 内面: ヒガキ | 6BPa.14 | 10 | 底の内 | 足 | 外壁: ヒガキ・新石器 内面: ヒガキ | 6BPa.3 | | |
| 4 第1号 | 盆 | 外壁: ヒガキ・モコナゲ 内面: ハツリハラナギ・モコナゲ | 6BPa.7 | 11 | 底 | 足 | モコナゲ・新石器 内面: モコナゲ・新石器・ハラナギ | 6BPa.4 | | |
| 5 第1号 | 盆 | 上野製品 | 外壁: モコナゲ・ナゲ 内面: モコナゲ・不規則 | 6BPa.8 | 12 | 底 | 足 | モコナゲ・新石器 内面: モコナゲ・ナゲ | 6BPa.15 | |
| 6 第1号 | 土器 | 上野製品 | 外壁: ナゲ・モキス 内面: ナゲ | 6BPa.9 | 13 | 底 | 足 | モコナゲ・新石器 内面: モコナゲ・ナゲ | 6BPa.6 | |
| 7 第1号 | 土器 | 上野製品 | 内・外壁: 布底 | 6BPa.11 | 14 | 底 | 足 | モコナゲ 内面: モコナゲ・ナゲ | 6BPa.5 | |

第14図 第6号住居跡出土土器

〔堆積土〕住居内堆積土は4層に大別され、第1～3層は将棋倒し状、第4層は床面に薄く張り付いた堆積状況を示している。第1層は褐色シルト層で住居中央部を中心として、第2層は暗褐色シルト層で壁に近い部分に、第3層は褐色シルト層で壁沿いに分布している。第4層は焼土を含む褐色シルト層で、床面に薄く張り付いていることから生活層と考えられる。

〔遺物の出土状況〕遺物は各層から出土しており、出土状況にまとまりはみられない。遺物の



第15図 第6・7号住居跡出土土器

出土は次の通りである。第1層：甕口縁部破片2点・甕底部破片9点 第3層：高坏1点・甕口縁部破片2点 第4層：甕底部破片1点 床面：甕口縁部破片1点・甕底部破片1点 層不明：高坏？1点

第8号住居跡

〔平面形〕 住居平面形は四隅の角張る正方形で、規模は南北軸3.64m・東西軸3.4mである。

〔壁〕 検出された壁は地山で、床面から周溝を経てほぼ垂直に立ちあがる。

〔床面〕 住居床面は掘り方底面（地山）と一致し、ほぼ平坦である。

〔柱穴〕 柱穴は2個（P₂・P₅）検出され、両者とも掘り方と柱痕跡が識別できた。また、P₂・P₅は住居南北軸線上のほぼ対称な位置にある。柱間は1.8mである。

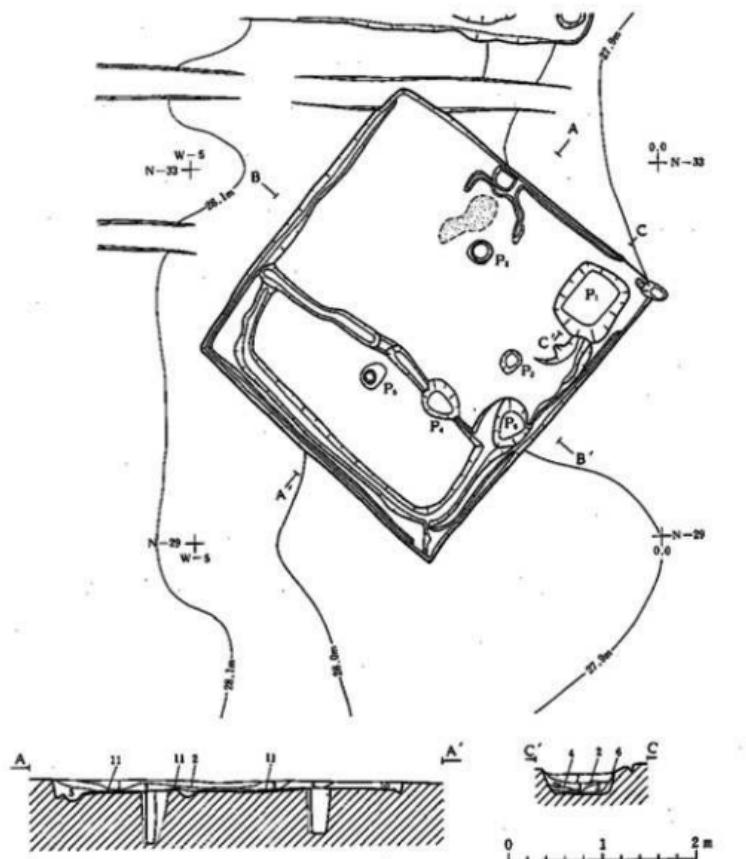
〔周溝〕 周溝は北辺西側と東隅を除いて、壁直下の大部分にめぐっている。周溝の断面は「J」状で、幅5~15cm・深さ1~3cmである。この他、南壁から内側1.4mの所に南壁と平行な溝があり、東・西壁直下の周溝と直交する形で接続する。この東西溝の南側には、東・南・西壁の内側約20cmの所に各壁と平行に走る周溝がある。東西溝および内側周溝は断面「U」状で、幅10~20cm・深さ5~10cmで、壁直下の周溝と断面の形状が異なる。

〔カマド〕 住居北辺中央部の壁から約20cm内側に位置している。不整橢円形をした焼面をとり囲むように「匁」状の溝がめぐっている。焼面・「匁」状溝とその周囲には黄褐色シルトブロック・焼土ブロック・焼土・木炭が多量にみられ、小規模ながら上部構造（黄褐色シルトを積みあげたもの）が存在したものと推定される。このカマドの規模は主軸90cm・幅80cmで、焼面を囲む溝は断面「U」状・幅5~8cm・深さ4~5cmである。

〔貯蔵穴状ピット〕 住居東隅の部分にP₁がある。P₁は平面形が隅丸長方形で、床面はほぼ平坦である。壁は内湾気味に僅かに外傾しながら立ちあがる。規模は南北軸80cm・東西軸65cm・深さ28cmである。ピット内の堆積土は2層に大別される。第1層は暗褐色シルト、第2層は黄褐色を中心としたシルト・粘土・粘土質砂・砂質粘土で、下層程砂質や粘土質が強くなる。第2層中の細分された層の層理面（No.4層）上に完形の土師器・坏が1点のっていた。（第17図1）

この他、やや形は整っていないが東辺中央部にP₆がある。平面形は橢円形で、丸底状をしている。規模は南北軸55cm・東西軸35cm・深さ30cmである。ピットの壁に接しながら正位の状態で、土師器甕1個体が発見された（第17図4）。

〔堆積土〕 住居内堆積土は4層に大別され、第1~3層は将棋倒し状、第4層は床面に薄く張り付いた堆積状況を示している。第1層は褐色の砂質シルト層で住居中央部に、第2層は褐色ないし暗褐色のシルト層で、壁沿いと第4層上に分布している。第3層はカマドとその周囲に分布する堆積土で、その特徴は既に記した。第4層は木炭を含み粘性のある極暗褐色粘土質シ



住居内堆積土

| 層位 | 土名 | 土性 | 層号 |
|------|------------------|----|----|
| 底層 | 1 棕褐色 0.00 YR20 | 砂土 | |
| 1.1m | 2 棕褐色 0.00 YR20 | 砂土 | |
| | 3 棕褐色 0.00 YR20 | 砂土 | 1 |
| | 4 棕褐色 0.00 YR20 | 砂土 | 1 |
| | 5 棕褐色 0.00 YR20 | 砂土 | 1 |
| | 6 棕褐色 0.00 YR20 | 砂土 | 1 |
| | 7 棕褐色 0.00 YR20 | 砂土 | 1 |
| | 8 棕褐色 0.00 YR20 | 砂土 | 1 |
| | 9 棕褐色 0.00 YR20 | 砂土 | 1 |
| 1.2m | 10 棕褐色 0.00 YR20 | 砂土 | 2 |
| | 11 棕褐色 0.00 YR20 | 砂土 | 2 |

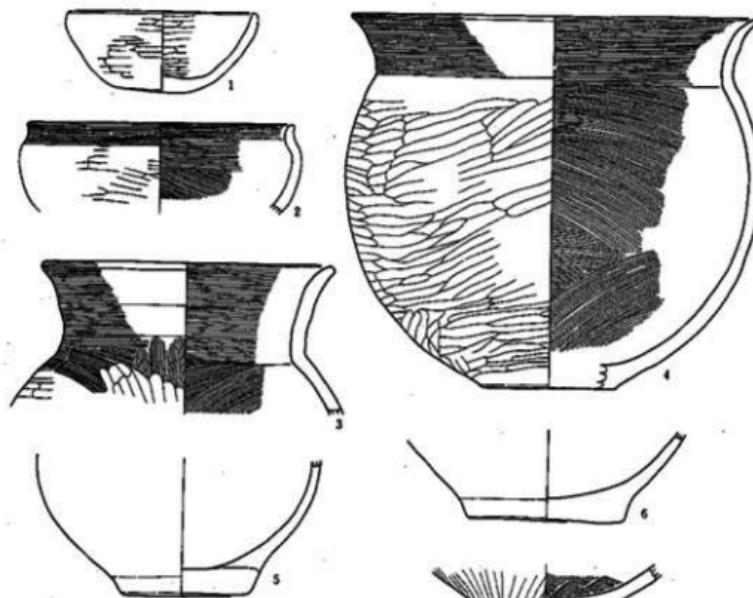
野廻穴状ピット(P_1)堆積土

| 層位 | 土名 | 土性 | 層号 |
|------|------------------|----|----|
| 底層 | 1 棕褐色 0.00 YR20 | 砂土 | |
| 1.1m | 2 棕褐色 0.00 YR20 | 砂土 | |
| | 3 棕褐色 0.00 YR20 | 砂土 | 1 |
| | 4 黄褐色 0.00 YR20 | 砂土 | 1 |
| | 5 黄褐色 0.00 YR20 | 砂土 | 1 |
| | 6 黄褐色 0.00 YR20 | 砂土 | 1 |
| | 7 黄褐色 0.00 YR20 | 砂土 | 1 |
| | 8 黄褐色 0.00 YR20 | 砂土 | 1 |
| | 9 黄褐色 0.00 YR20 | 砂土 | 1 |
| 1.2m | 10 黄褐色 0.00 YR20 | 砂土 | 2 |
| | 11 黄褐色 0.00 YR20 | 砂土 | 2 |

第16図 第8号住居跡

ルトで、床面に薄く張り付いていることから生活層と考えられる。

【遺物の出土状況】 遺物はP₁を中心としてP₂やP₆・カマドなどからまとまって出土している。すなわち、P₁からは壺1点・壺？2点・甕1点、P₂からは壺1点、P₆からは甕1点、カマドからは壺口縁部破片1点・甕口縁部破片2点が出土している。この他、第1層から甕底部破片1点、層は不明であるが甕1点が出土している。



| 番号 | 層位 | 器形 | 特　　徴 | | 量　目 |
|----|----------------|----|------------------|------------|------------------|
| | | | 外観 | 内観 | |
| 1 | P ₁ | 壺 | 内・外觀：ヒガキ | | 8回P ₁ |
| 2 | P ₁ | 壺 | 外觀：ミコナゲ・ヒガキ | 内観：ミコナゲ・ナゲ | 8回P ₁ |
| 3 | P ₁ | 甕？ | 外觀：ミコナゲ・ヒラナガ・ヒガキ | 内観：ミコナゲ・ナゲ | 8回P ₁ |
| 4 | P ₂ | 壺？ | 外觀：ミコナゲ・ヒガキ | 内観：ミコナゲ・ナゲ | 8回P ₂ |
| 5 | P ₁ | 甕？ | 内・外觀：ヒガキ | | 8回P ₁ |
| 6 | 住居内 | 甕 | 外觀：ヒガキ | 内観：ヒガキ | 8回P ₁ |
| 7 | P ₁ | 甕 | 外觀：ヒガキ・ナズリ | 内観：ヒラナゲ | 4回P ₁ |

第17図 第8号住居跡出土土器

第10号住居跡

〔平面形〕住居平面形は隅丸正方形で、規模は南北軸5.5m・長軸5.67mである。

〔壁〕検出された壁は地山で、床面から周溝を経てほぼ垂直に立ちあがる。

〔床面〕住居床面は掘り方底面（地山）と一致し、ほぼ平坦である。

〔柱穴〕柱穴は4個（P2・P3・P4・P5）検出され、P2・P5では掘り方と柱痕跡を識別することができた。また、4個の柱穴は住居平面形の対角線上に位置し、それぞれを結んだ線は住居平面形と相似形となる。柱間は南北軸3.1～3.3m・東西軸3.1～3.2mである。

〔周溝〕周溝は壁直下にめぐっている。この周溝は壁の外側に幾分喰い込んだ状態をしておりその断面は「S」状で、幅15～30cm・深さ3～10cmである。また、住居東側中央部には東壁直下の周溝と直交する溝が走っている。この溝は断面「V」状で幅20cm・深さ10cm・長さは135cm程度である。

〔炉〕住居中央から僅か西に偏った部分の床が焼けており（焼面）、炉と考えられる。この焼面は梢円形をしており、その範囲は35×30cmである。

〔貯蔵穴状ピット〕住居東南隅の部分にP₁がある。P₁は上部が崩れているが、平面形は長方形で、底面は平坦である。規模は南北軸50cm・東西軸40cm・深さ43cmである。壁は外傾しているが、垂直に近い角度で立ちあがる。ピット内の堆積土は3層に大別され将棋倒し状の堆積状況を示している。第1層は褐色粘土質シルト、第2層は黄褐色粘土質シルト、第3層は黒褐色シルト質粘土で、第3層を除き全体に地山土を含んでいる。

〔堆積土〕住居内堆積土は削平を受け、壁周辺を除いて保存はあまり良くない。住居内の壁に近い部分には暗褐色粘土質シルト（第2層）、壁沿いには褐色粘土質シルト（第2層）が将棋倒し状の堆積をしている。

〔遺物の出土状況〕遺物の出土は少なく、その出土状況にまとまりもみられない。第1層：器台1点 周溝：甕口縁部破片1点 層不明：甕口縁部破片1点

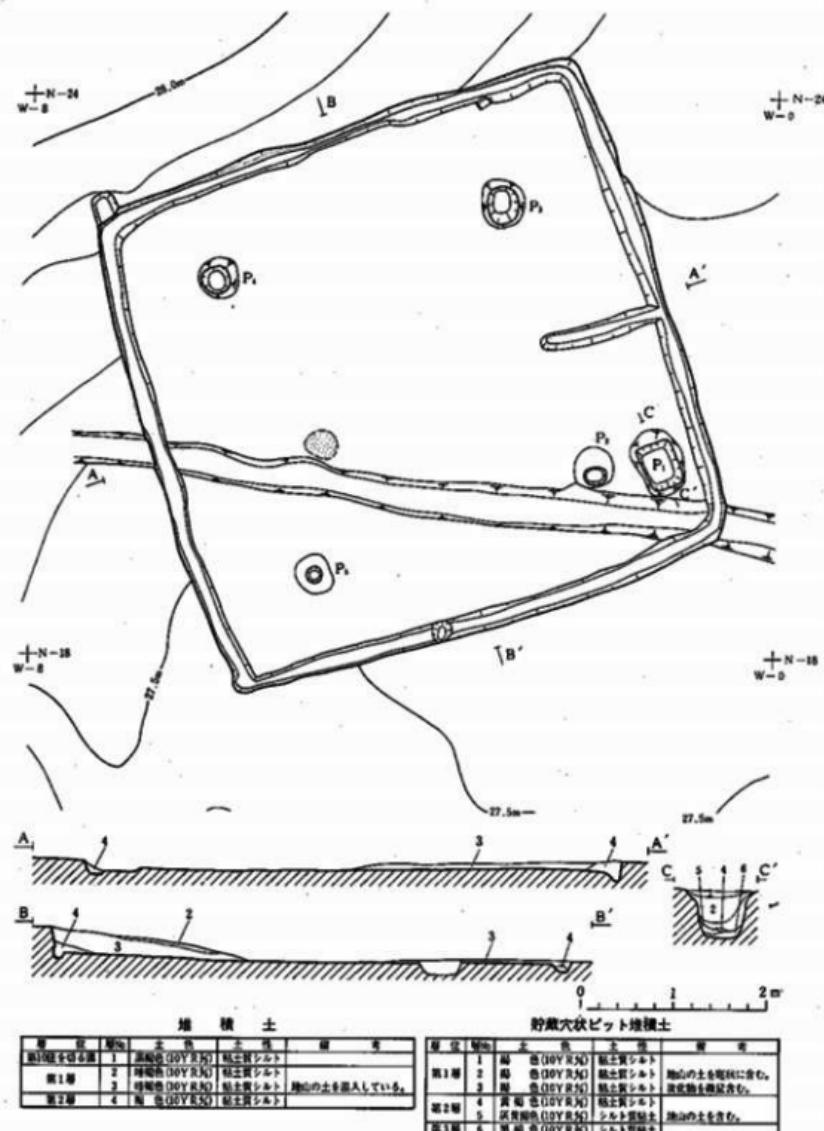


第10号住居跡出土土器

| 番号 | 種 | 位 | 古 | 特 | 用 | 量 | 目 |
|----|-----|----|---------|---|---|-----|------|
| 1 | 第1号 | 器台 | 内・外面：擦痕 | | | 30件 | Po.1 |

第11号住居跡

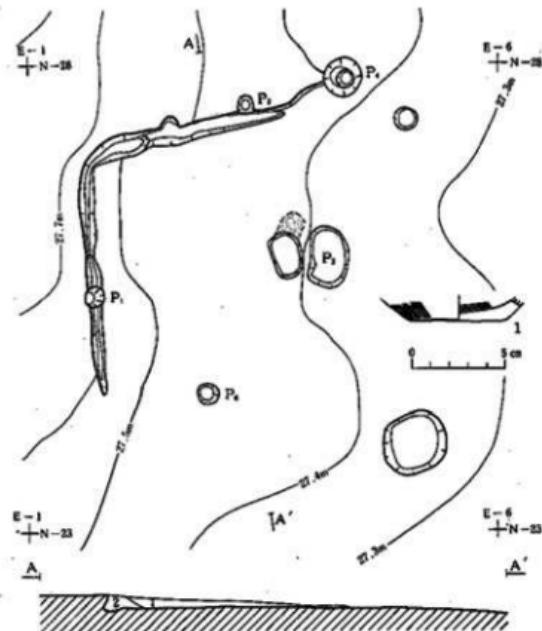
〔概要〕第11号住居跡は北西隅から中央部付近にかけて残存しているが、それ以外の部分は削平を受け失なわれている。残存部分から住居平面形は隅丸方形と推定されるが、規模等は不明である。壁は地山で大部分削平されているが、保存の良い所では床面から周溝を経てほぼ垂直に立ちあがる。壁直下には周溝がある。周溝は壁の外に幾分喰い込み、断面「S」状をしている。幅10～25cm・深さ2～9cmである。住居残存部分東端の床面が焼けており（焼面）、炉と考えられる。この焼面は梢円形状をしているが南側が新しいピットによって壊されている。残存焼



第19図 第10号住居 路

面の範囲は30×25cmである。この他、柱穴・貯蔵穴状ピットなどの施設は検出されなかつた。

〔堆積土・遺物の出土状況〕住居内堆積土は2層に細分されるが、両者とも褐色のシルトである。第1層が木炭等を含むのに対し、下層は地山土粒子を含むなど若干の相違がみられ、両者は特異倒立状の堆積状況を示している。遺物としては第1層から甕底部が1点出土しているだけである。



第13号住居跡

〔平面形・重複〕第13号住居跡はP₆～P₁₅からなる掘立柱建物跡と重複し、切られていく。また、住居南西部分は削平によって失なわれている。

住居平面形は正方形で、規模は南北軸6.2m・東西軸5.9mである。

〔壁〕検出された壁は地山で床面から僅かに外傾しながら立ちあがる。

〔柱穴〕柱穴は4個（P₁～P₄）検出され、P₂を除き掘り方と柱痕跡の識別ができる。これらの柱穴は住居平面形のほぼ対角線上に位置し、それぞれを結んだ線は住居平面形とほぼ相似形となる。柱間は南北軸3.8m・東西軸3.4mである。

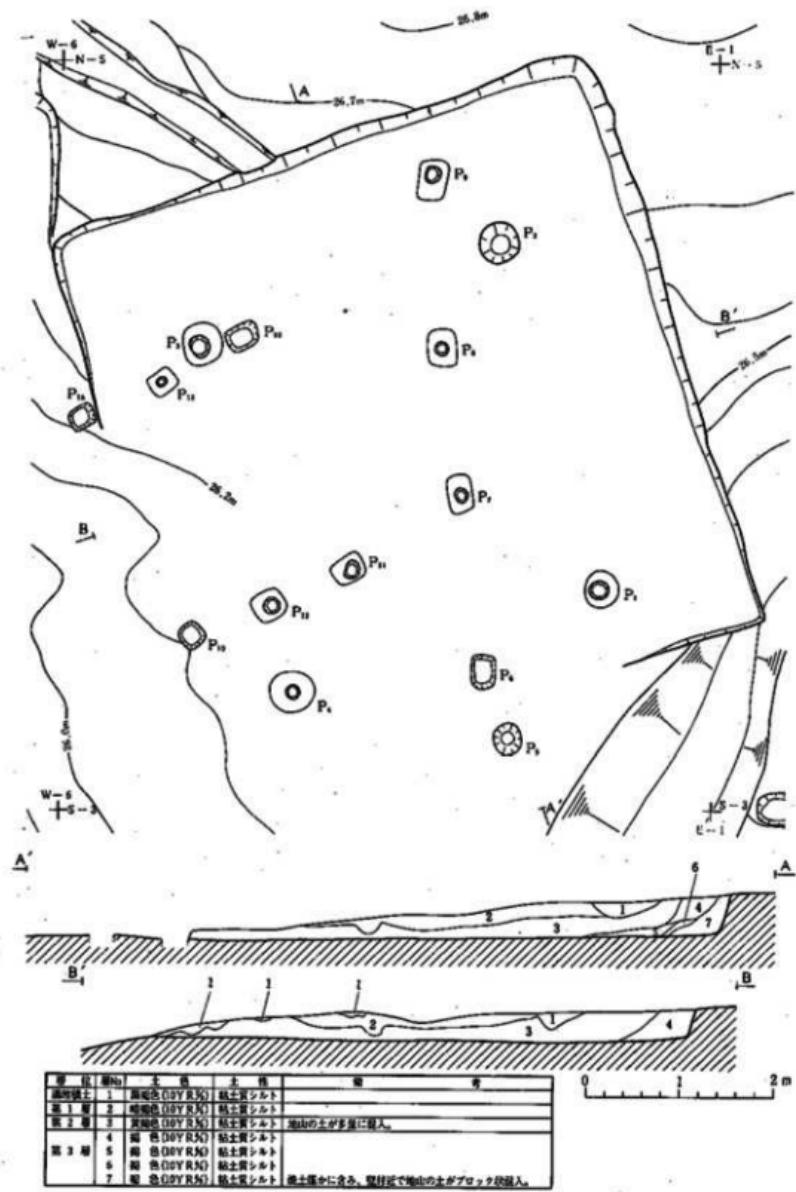
〔その他の施設〕周溝・炉・貯蔵穴状ピットなどの施設は検出されなかつた。

〔堆積土・遺物の出土状況〕住居内堆積土は3層に大別され、一見特異倒立状の堆積状況に似るが、混入物や第2・3層のあり方に検討の余地を残している。第1層は暗褐色粘土質シルトで最上部に、第2層は地山土を多量に含む黄褐色粘土質シルトで、住居内全体に厚く堆積している。第3層は褐色の粘土質シルトで数層に細分されつつ、壁際にだけ堆積している。第2

| 層 | 土 基 | 土 性 | 備 考 |
|-----|---------------|-----|------------------|
| 第1層 | 褐色(7.5YR 4/4) | シルト | 木炭含む。粘性あり、硬い。 |
| 第2層 | 褐色(7.5YR 4/4) | シルト | 地山土柱子混じる。粘性あり硬い。 |

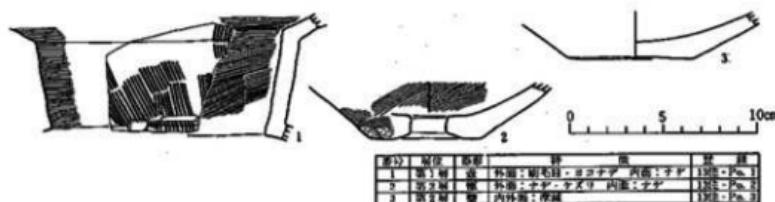
第20回 第11号住居跡 0 1 2m

| 底 | 壁 | 頂 | 特 | 底 | 壁 |
|---|-----|---|-------------------|-----------|---|
| 1 | 61層 | 底 | 外壁：ヘラナグ・カズリ 内壁：ナフ | 110(Pn.1) | |



第21回 第13号住居跡

- ・3層の層相からみると、これらの層は短期間に地山の土が崩れて埋ったのか、それとも人為的に埋められた可能性がある。遺物は量も少なく、出土状況にまとまりがみられない。第1層：壺1点・甕口縁部破片1点 第2層：高杯脚部破片1点・甕1点・甕口縁部破片1点・瓶1点 層不明：甕底部破片2点



第22図 第13号住居跡出土土器

第14号住居跡

〔平面形・複数〕第14号住居跡はカマドの煙道部が3列、壁直下と床面下から合計3列の周溝が検出された。これら複数のカマド煙道部・周溝は、相互の関係を復元できる程適切な調査を実施し得なかったが、少なくとも二度住居の改築が行なわれ、拡張とカマドのつくりかえがなされたことは明らかにし得た。そのため、ここでは最終段階の住居跡の特徴を述べ、それに補足する形で改築前の状況を説明することにする。なお、第14号住居跡は東壁が削平されている。

住居平面形は正方形で、規模は南北軸・東西軸とも5.2mである。改築前の住居平面形も、周溝から方形を基調とするものと推定される。

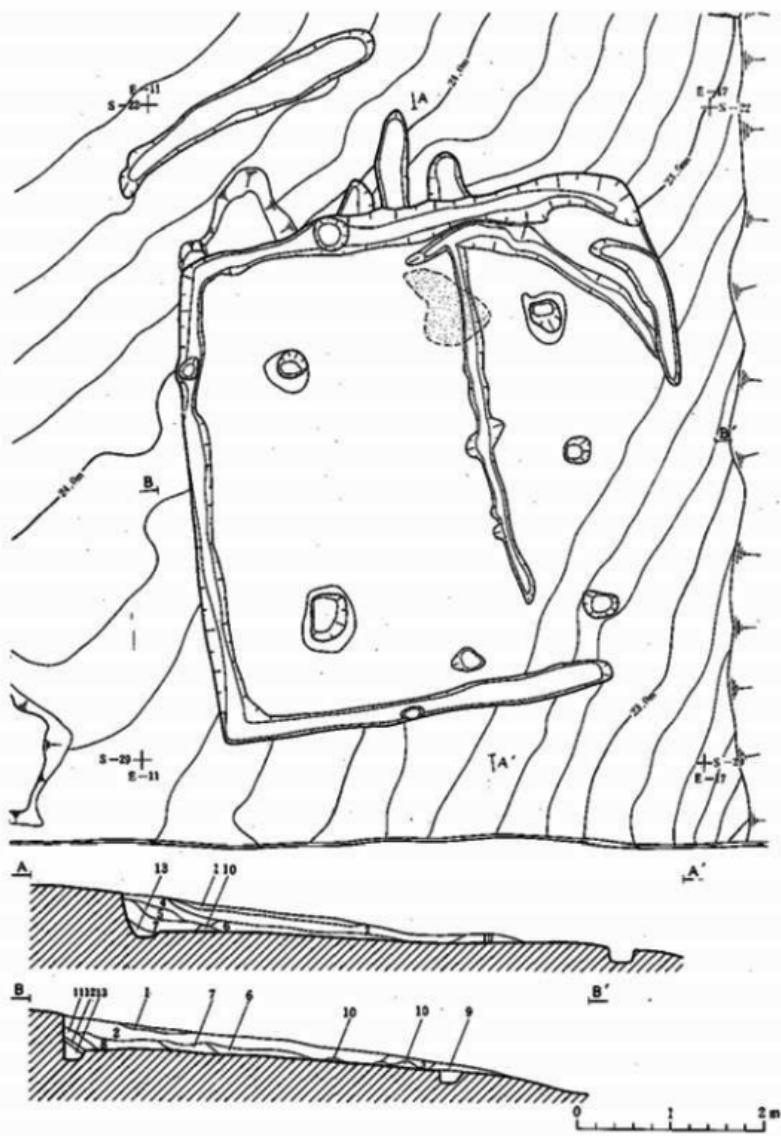
〔壁〕住居壁は地山で、床面から周溝を経てほぼ垂直に立ちあがる。

〔床面〕住居床面は平坦である。最終床面下から改築前の周溝・ピット・住居掘り方などが検出された。しかし、改築前の床面は明確にし得なかつた。

〔周溝〕住居壁直下に周溝がめぐっている。断面「J」状で、幅20~30cm・深さ5~10cmである。床面下の周溝は2列あり、断面の形状は共通している。幅は約20cmで、最終段階のものよりせまい。深さは5~10cmである。

〔柱穴〕柱穴は4個($P_1 \sim P_4$)検出された。これらの柱穴は住居対角線上に位置し、結んだ線は住居平面形と相似形である。床面下からもピットは検出されたが、改築前の柱穴配置を知るには至らなかつた。

〔カマド〕カマドは住居壁の外側に掘り込まれた煙道が3列検出されたが、燃焼部はすべて崩壊して残っていなかつた。中央と東側の煙道部手前の床面が焼けており、これが燃焼部底面ではないかと推定される。残存煙道部の規模は東側が幅40cm・長さ50cm、中央が幅30cm・長さ110cm、西側が幅35cm・長さ40cmである。



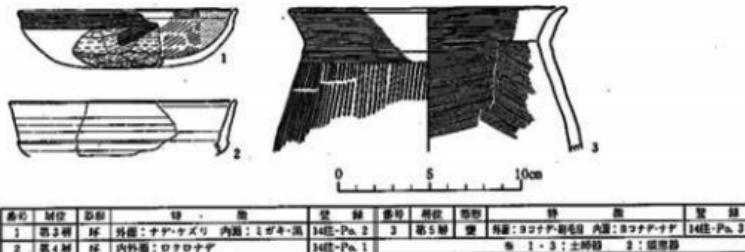
第23回 第14号住居跡

この他、貯蔵穴状ピットなどの施設は検出されなかった。

〔堆積土〕住居内堆積土は5層に大別され、特異倒し状の堆積状況を示している。第1～5層とも暗褐色ないしは褐色の砂質シルトであるが、第1～3層は上層にあって住居中央部からその周囲のさらに広い範囲に分布している。第4層は床面、第5層は壁際を中心に分布している。

| 層位 | 剖面 | 土色 | 土性 | 備考 |
|----------|----|------------------|--------|-------------------|
| 第1層(第1層) | 1 | 暗褐色(7.5YR 5/6) | シルト | 微粒状の炭・焼土の混入。 |
| | 2 | 褐色(7.5YR 5/6) | 砂質シルト | 微粒状の炭・焼土の混入。 |
| (第2層) | 3 | 褐色(10YR 5/6) | 砂質シルト | 粒状土・炭・黄褐色土の混入。 |
| | 4 | 暗褐色(10YR 5/6) | 砂質シルト | 粒状土の焼土・炭の混入。 |
| 第3層(第4層) | 5 | 褐色(7.5YR 5/6) | 砂質シルト | 微粒状の焼土・炭の混入。 |
| | 6 | 褐色(10YR 5/6) | 粘土質シルト | 粒状の焼土・炭の混入。 |
| 第4層 | 7 | に赤い黄褐色(10YR 5/6) | 粘土質シルト | 粒状の焼土・炭・黄褐色土の混入。 |
| | 8 | 褐色(7.5YR 5/6) | 砂質シルト | 微粒状の炭・焼土・黄褐色土の混入。 |
| (第3層) | 9 | 暗褐色(10YR 5/6) | 砂質シルト | 粒状土の炭・焼土・黄褐色土の混入。 |
| | 10 | 褐色(10YR 5/6) | 粘土質シルト | 粒状の焼土・炭・黄褐色土の混入。 |
| (第4層) | 11 | 褐色(7.5YR 5/6) | 砂質シルト | 微粒状の炭・焼土の混入。 |
| | 12 | 褐色(10YR 5/6) | 砂質シルト | 微粒状の焼土・炭の混入。 |
| 第5層(第3層) | 13 | 褐色(10YR 5/6) | 砂質シルト | 粒状の焼土・炭の混入。 |

〔遺物の出土状況〕遺物の出土状況は次の通りで、特にまとまりはみられない。第1層：土師器壺口縁部破片3点・須恵器壺底部破片(回転ヘラ削り)1点 第2層：土師器壺口縁部破片2点 第3層：土師器壺1点 第4層：須恵器壺1点 第5層：土師器甕1点 P₉：土師器甕底部破片1点 周溝：土師器壺・甕底部破片各1点 層不明：土師器壺口縁部破片1点



第24図 第14号住居跡出土土器

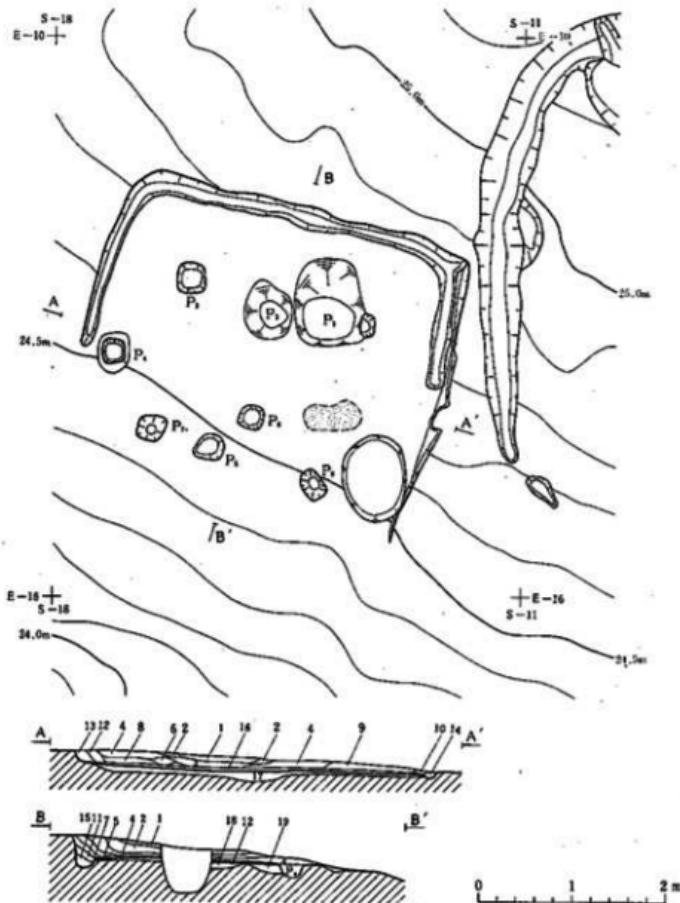
第15号住居跡

〔平面形〕第15号住居跡は東側が削平されているが、残存部分から住居平面形は隅丸正方形と推定される。規模は南北軸3.8mである。

〔壁〕検出された壁は地山で床面から、周溝を経て垂直に立ちあがる部分が多い。ただ北壁では周溝上端と壁との間が幅4～5cmの段となっている。

〔床面〕床面はほぼ平坦であるが、床面下には凹凸のある住居掘り方が検出された。

〔柱穴〕柱穴は4個(P₁・P₃・P₇・P₈)検出された。これらの柱穴は推定住居対角線上に



| 層位 | 地号 | 土色 | 土性 | 層名 | 層位 | 地号 | 土色 | 土性 | 層名 |
|------|----|-----|-----|-------------|------|----|-----|-----|-------------|
| 第1層 | 1 | 暗褐色 | 砂質土 | WHT-L19±1.0 | 第3層 | 11 | 暗褐色 | 砂質土 | WHT-L20±1.0 |
| 第2層 | 2 | 暗褐色 | 砂質土 | WHT-L21±1.0 | 第3層 | 12 | 暗褐色 | 砂質土 | WHT-L22±1.0 |
| 第3層 | 3 | 暗褐色 | 砂質土 | WHT-L23±1.0 | 第3層 | 13 | 暗褐色 | 砂質土 | WHT-L24±1.0 |
| 第4層 | 4 | 暗褐色 | 砂質土 | WHT-L25±1.0 | 第4層 | 14 | 暗褐色 | 砂質土 | WHT-L26±1.0 |
| 第5層 | 5 | 暗褐色 | 砂質土 | WHT-L27±1.0 | 第5層 | 15 | 暗褐色 | 砂質土 | WHT-L28±1.0 |
| 第6層 | 6 | 暗褐色 | 砂質土 | WHT-L29±1.0 | 第6層 | 16 | 暗褐色 | 砂質土 | WHT-L30±1.0 |
| 第7層 | 7 | 暗褐色 | 砂質土 | WHT-L31±1.0 | 第7層 | 17 | 暗褐色 | 砂質土 | WHT-L32±1.0 |
| 第8層 | 8 | 暗褐色 | 砂質土 | WHT-L33±1.0 | 第8層 | 18 | 暗褐色 | 砂質土 | WHT-L34±1.0 |
| 第9層 | 9 | 暗褐色 | 砂質土 | WHT-L35±1.0 | 第9層 | 19 | 暗褐色 | 砂質土 | WHT-L36±1.0 |
| 第10層 | 10 | 暗褐色 | 砂質土 | WHT-L37±1.0 | 第10層 | 20 | 暗褐色 | 砂質土 | WHT-L38±1.0 |

第25図 第15号住居跡

あり、結んだ線は住居北・西・南壁と平行になる。柱間は東西軸・南北軸1.8mである。

〔周溝〕 北・西・南壁直下に周溝がめぐっている。この周溝は断面「U」状で、幅約20cm・深さ約5cmである。

〔床〕 住居中央の北側に焼面があり、炉と考えられる。この焼面は不整梢円形で、その範囲は60×30cmである。

〔堆積土・遺物の出土状況〕 住居内堆積土は7層に大別され、第1～6層は将棋倒し状、第7層は水平状の堆積状況を示している。第1・2層は暗褐色砂質シルトで住居中央部に分布している。第3・4層は褐色ないしは暗褐色砂質シルトで住居全体に分布している。第5層は褐色砂質シルトで壁際に分布している。第6層は褐色ないしはにぶい黄褐色砂質シルトで周溝内に分布している。第7層は炭・焼土を多く含み粘性のある暗褐色砂質シルトで、床面に薄く張りついた状態で分布し、生活層と考えられる。この他、床面下の住居掘り方埋土は褐色砂質シルトである。遺物はほとんど出土していない。

第16号住居跡

〔平面形・重複〕 第16号住居跡は隅丸三角形の土壌と重複し、住居南東隅の部分が切られている。また、住居東壁も削平のため失なわれている。残存部分から住居平面形を推定すると、方形で、規模は南北軸5.3mである。

〔壁〕 検出された壁は、上部が褐色土、下部が明褐色土の地山である。壁は床面から周溝を経てほぼ垂直に立ちあがる。

〔床面〕 床面はほぼ平坦で住居掘り方底面（地山）と一致している。

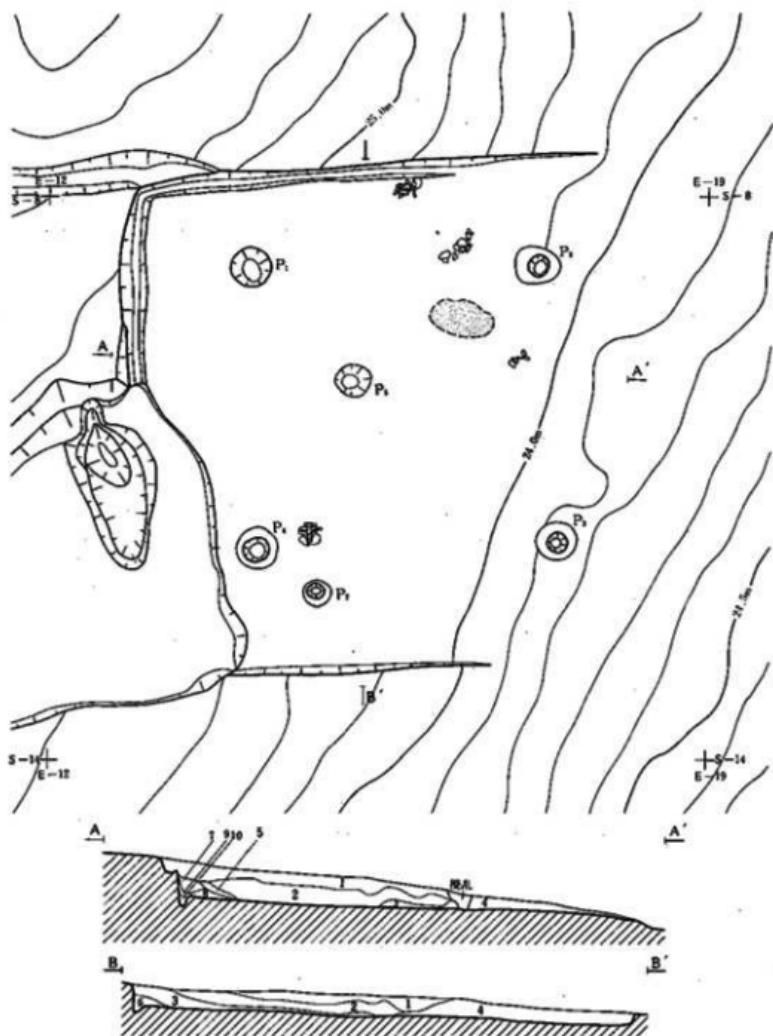
〔柱穴〕 柱穴は4個（P₁～P₄）検出された。これらの柱穴は推定住居対角線上に位置し、結んだ線は北・南・西壁と平行である。柱間は南北軸が3m、東西軸3.1mである。

〔周溝〕 周溝は北・西壁直下にめぐっている。断面「U」状で、幅約20cm・深さ約10cmである。

〔床〕 住居中央から北東に偏った部分の床面が焼けており（焼面）、炉と考えられる。この焼面は梢円形で、大きさが70×40cmである。この他、施設等は検出されなかった。

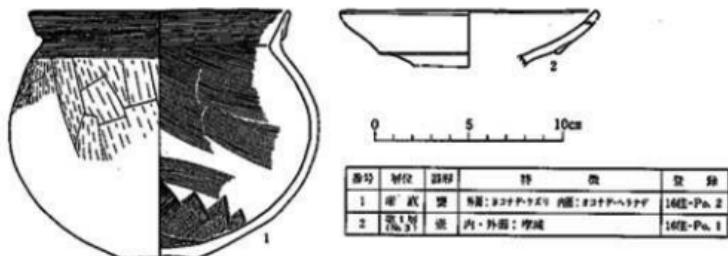
〔堆積土〕 住居内堆積土は2層に大別され、将棋倒し状の堆積状況を示している。第1層は褐色ないしは暗褐色の粘土質シルト層で、住居全体に分布している。第2層は明褐色ないしは明褐色粘土質シルトブロックを含む層で西壁周辺に分布している。

〔遺物の出土状況〕 遺物の出土状況に、特に規則性はみられない。第1層：高环脚部破片1点・壺1点・甕口縁部破片2点 第2層：壺口縁部破片1点・壺底部破片1点・甕口縁部破片2点・甕底部破片1点 周溝：甕底部破片1点 床面：高环脚部破片1点・甕1点・甕底部破片1点 層不明：甕底部破片1点



| 番号 | 層号 | 土色 | 土性 | 備考 |
|-----|------|----------------|--------|----------------------------|
| 第1層 | 1-4 | 褐色(7.5YR 3/6) | 粘土質シルト | |
| | 5 | 褐色(7.5YR 3/6) | 粘土質シルト | 木炭・鐵土丸。 |
| | 6 | 暗褐色(7.5YR 4/0) | 粘土質シルト | 骨頭。 |
| 第2層 | 7-10 | 暗褐色(7.5YR 4/0) | 粘土質シルト | 褐色土の場合、明瞭土をプロット後にさむか泥質となる。 |

第26図 第16号住居跡



第27図 第16号住居跡出土土器

第18号住居跡

〔平面形〕第18号住居跡は南東側が削平され失なわれているが、残存部から平面形は隅丸方形と推定される。規模は南北軸4.5mである。

〔壁〕検出された壁は地山である。壁は床面から周溝を経てほぼ垂直に立ちあがる。

〔床面〕住居床面はほぼ平坦で、住居掘り方底面（地山）と一致している。

〔柱穴〕柱穴は4個（P₁～P₄）検出された。柱穴は推定住居対角線上に位置し、結んだ線は北壁・西壁と平行になる。柱間は南北軸2.8m・東西軸2.4mである。

〔周溝〕北壁西側から西壁・南壁西側の壁直下において周溝が検出された。この周溝は壁を掘り込んでおり、断面「S」状で、幅10～15cm・深さ約5cmである。

〔炉〕住居中央のやや北側に偏った部分の床面が不整楕円形に焼けており（焼面）、炉と考えられる。その大きさは70×40cmである。この他の施設は検出されなかった。

〔堆積土〕住居内堆積土は、いずれも褐色ないしは暗褐色シルト層であるが、層相の細かなかがいから2層に大別され、それらはさらに細別される。これらの層は、将棋倒し状の堆積状況を示している。なお第1層は黄褐色土を斑状もしくはブロック状に含むのに対し、第2層は炭化物を含み、黒っぽく見える。

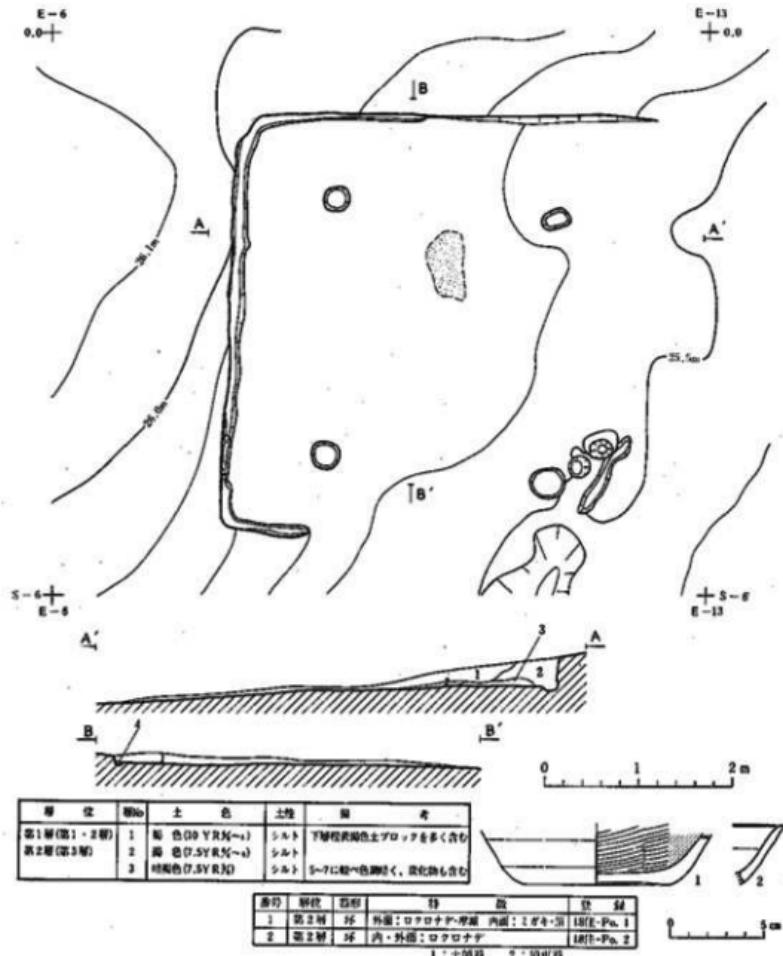
〔遺物の出土状況〕遺物の出土状況は不規則で、次のようにロクロを使用しない土師器と、ロクロを使用した土師器・須恵器が混在している。第1層：甕底部破片1点 第2層：ロクロ土師器坏1点・同口縁部破片2点・同底部破片1点・甕口縁部破片1点・赤焼土器坏口縁部破片1点・須恵器坏1点・同口縁部破片2点・須恵器蓋肩部破片1点

第20号住居跡

〔平面形・重複〕第20号住居跡は、新・旧のカマドが2基、柱穴が3組、周溝が3列ある。このことから、二度改築によって拡張を行なったものと推定される。平面形は、第3期（最終段

階)のものが長方形である。第1・2期のものも柱穴配置と周溝から推定すると、長方形と考えられる。規模は、第3期が南北軸8.7m・東西軸6.2m、第2期が南北軸7.3m・東西軸6.2m、第1期が南北軸5.8mである。

(壁) 検出された壁は地山で、床面から周溝を経てほぼ垂直に立ちあがるが、上部は崩落が顕著である。



第28図 第18号住居跡

〔床面〕住居床面はほぼ平坦である。住居東側の床面は掘り方底面（地山）と一致しているが西側は整地して床面を構築している。

〔周溝〕東壁・南壁直下にめぐっているが、西壁部分は削平を受けているため不明である。周溝は断面「S」状で、住居壁の外側に喰い込んでいる。規模は幅約20cm・深さ約10cmで、第1～3期のものにおいて共通している。

〔柱穴〕柱穴は第1期がP₂₅・P₁₉・P₂₄・P₂₂、第2期がP₂₆・P₄₁・P₄₀、第3期がP₂₅・P₁₉・P₁₂・P₁₅・P₂₄・P₂₂である。第2期は南東隅の柱穴を検出できなかつたが、検出できた柱穴は住居対角線がその推定位置にあり、結んだ線は東・南・西・北壁と平行で、各期住居平面形と相似形になる。なお、第3期の柱穴は第1期のP₂₅・P₁₉・P₂₄・P₂₂を共有していると考えられる。各期の柱間は、第1期が南北軸3.1m・東西軸2.7m、第2期が南北軸3.5m・東西軸3.6m、第3期が南北軸5.2(3.1+2.1)m・東西軸2.7mである。この他、各期の周溝および壁際に小規模なピットがある。これらは壁柱穴ではないかと推定される。

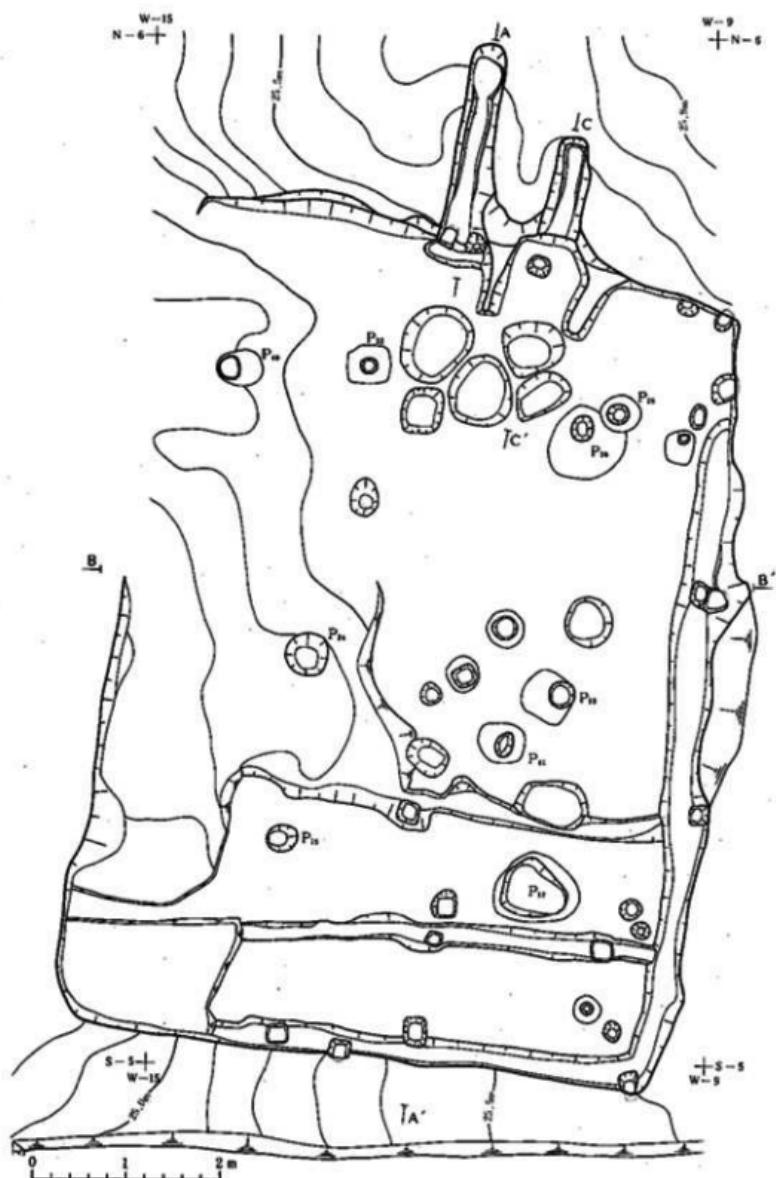
〔カマド〕カマドは新旧二時期のものが住居北壁のほぼ中央で発見され、住居の改築にともなうものと考えられる。新しいカマドは第3期に属するものである。燃焼部と煙道部からなり、全長2mである。燃焼部は底面を僅かに掘りくぼめ、側壁に粘土を積みあげて構築したもので奥壁は住居壁を約20cm掘り込んでいる。規模は奥行100cm・幅130cmである。底面中央の奥壁寄りの部分に直径20cm・深さ20cmのピットがあり、支脚の掘り方と考えられる。煙道は天井部が崩れているが、トンネル式のもので、長さ100cm・幅40cmである。

旧いカマドは新しいカマドの西側1mにある。燃焼部は取りかたずけられ、煙道部のみが残っていた。煙道は天井部が崩れているが、トンネル式のもので、先端がピット状に丸くなっている（煙り出し）。規模は長さ200cm・幅50cmである。このカマドは、第1・2期のいずれに属するか明確でないが、第2期柱穴の対称軸上にあることから、第2期のものではないかと考えられる。

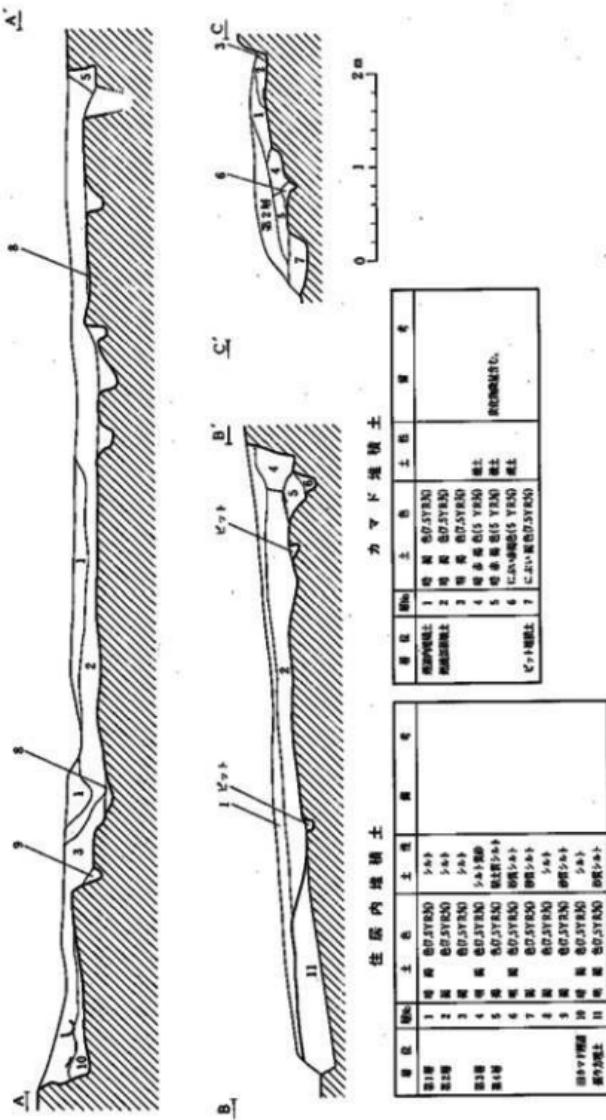
この他、カマド前面に皿状のピットが3個（直径約80cm・深さ約10cm）ある。これらのピットが、カマドに関連する施設であるとすれば、残存している2基のカマドの間に、第1期のカマドが存在した可能性もある。

〔堆積土〕住居内堆積土は4層に大別され、将棋倒し状の堆積状況を示している。第1層は暗褐色シルト層で、住居中央部とその東西に分布している。第2層は褐色シルト層で、住居内全体に分布している。第3層は明褐色シルト質砂層で、東壁の崩壊土層である。第4層は褐色ないしは明褐色の砂質シルト層で、層相に多様性がみられ、周溝・ピットなどに堆積している。

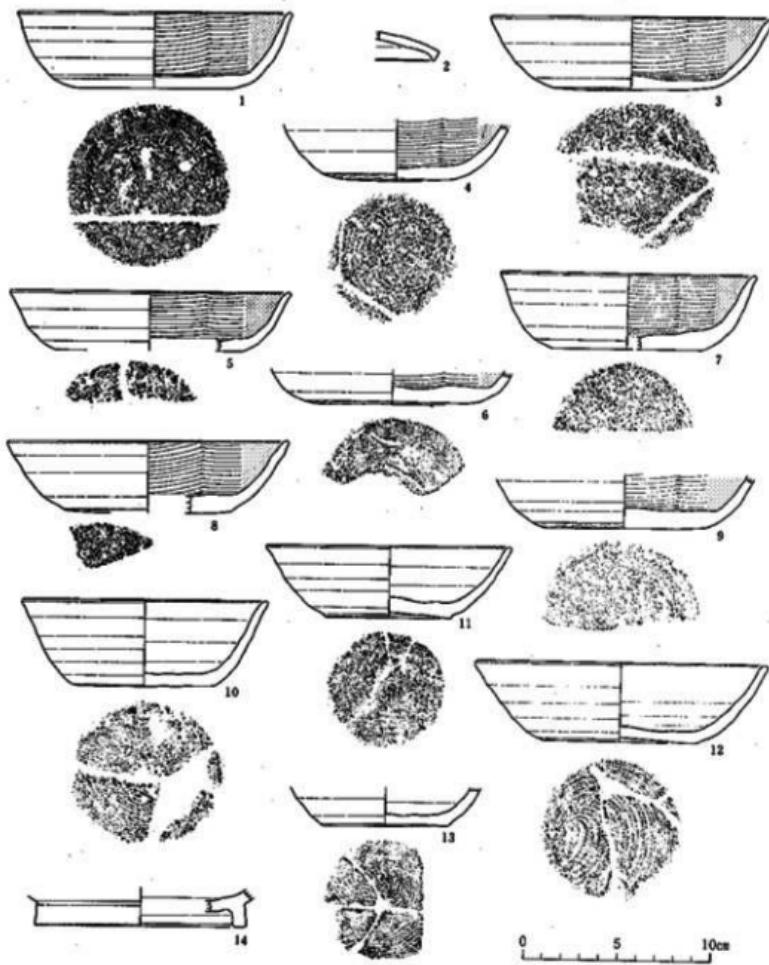
〔遺物の出土状況〕遺物は住居床面・ピット・カマドと、床面を直接覆っている第2・3層から土師器・赤焼土器・須恵器がまとまって出土している。各層出土土器で実測図を作成したも



第29圖 第20號住居跡平面圖



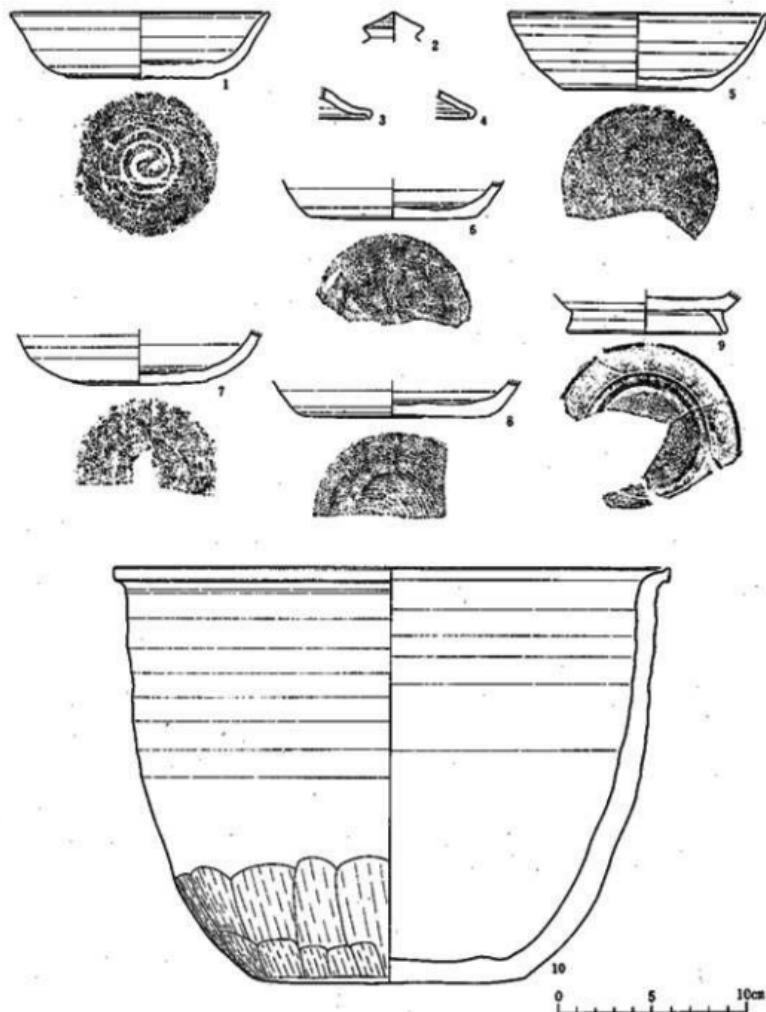
第30図 第20号住居跡断面図



| 番号 | 部位 | 形態 | 特徴 | 登録番号 | 番号 | 部位 | 形態 | 特徴 | 登録番号 |
|----|------|----|-----------------------|-----------|----|------|----|-----------------------|-----------|
| 1 | 住居内 | 坪 | 形態：ロクロナデ・網状模様 外面：網状模様 | 20E-Po.17 | 8 | 第2階 | 坪 | 形態：ロクロナデ・網状模様 内面：網状模様 | 20E-Po.19 |
| 2 | 第2階 | 壁 | 内・外側：ミガキ・削 | 20E-Po.25 | 9 | 第2階 | 坪 | 形態：ロクロナデ・小粒化 内面：網状模様 | 20E-Po.22 |
| 3 | 第3階 | 坪 | 形態：ロクロナデ・網状模様 内面：網状模様 | 20E-Po.18 | 10 | 床 | 坪 | 内・外側：ロクロナデ・埋藏 | 20E-Po.14 |
| 4 | 第3階 | 坪 | 形態：ロクロナデ・網状模様 内面：網状模様 | 20E-Po.23 | 11 | 第2階 | 坪 | 内・外側：ロクロナデ・へら切り | 20E-Po.13 |
| 5 | P.40 | 坪 | 形態：ロクロナデ・へら切り 内面：網状模様 | 20E-Po.21 | 12 | P.20 | 坪 | 内・外側：ロクロナデ・網状模様 | 20E-Po.12 |
| 6 | 底3階 | 坪 | 形態：ロクロナデ・網状模様 内面：網状模様 | 20E-Po.24 | 13 | 床 | 坪 | 内・外側：ロクロナデ・網状模様 | 20E-Po.15 |
| 7 | 床 | 坪 | 形態：ロクロナデ・網状模様 内面：網状模様 | 20E-Po.20 | 14 | 第2階 | 坪 | 内・外側：ロクロナデ | 20E-Po.16 |

* 1~9:主祭祀 10~14:赤燒土器

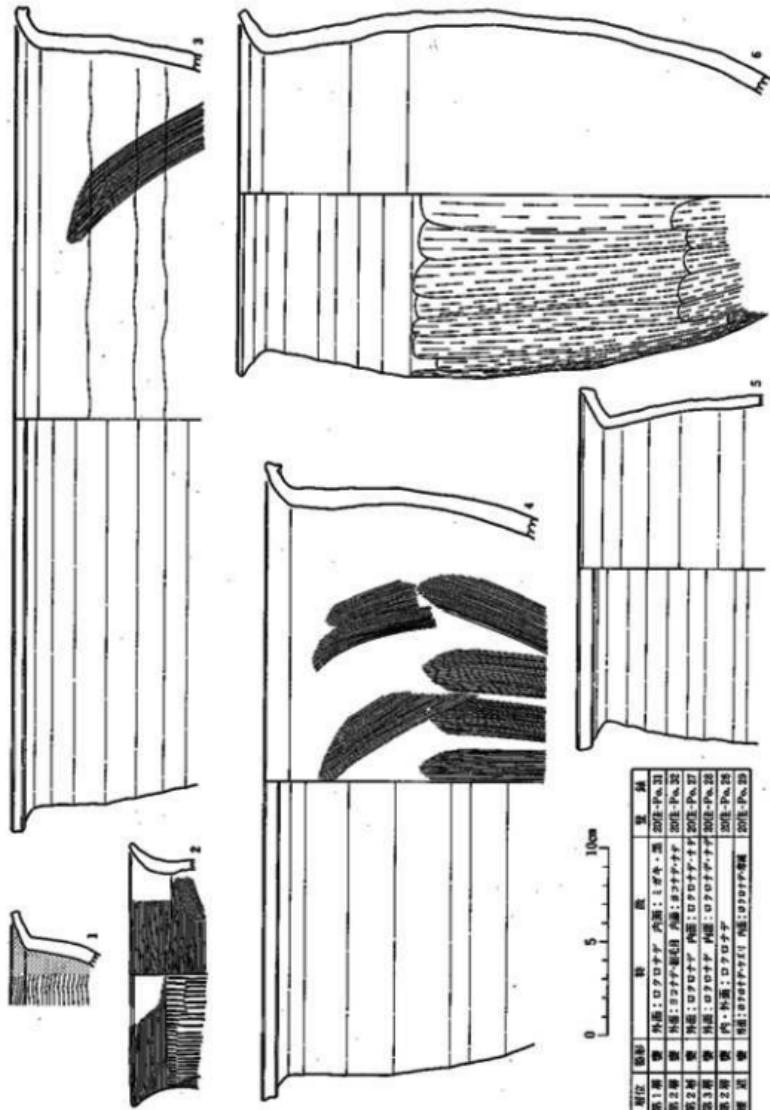
第31図 第20号住居跡出土土器 (1)



第32図 第20号住居跡出土土器 (2)

図 1~9: 滝忠基
図 10: 土井源

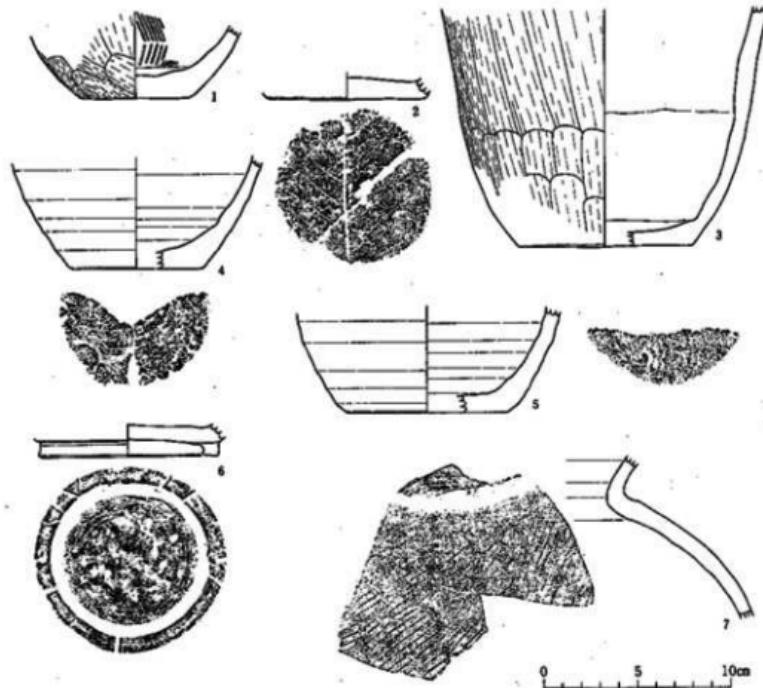
| 番号 | 材質 | 断面 | 特徴 | 径・深 | 番号 | 材質 | 断面 | 特徴 | 径・深 | 径・深 | 径・深 |
|----|-----|----|------------------------|-----------|----|-----|----|------------------------|------------|-----|-----|
| 1 | 灰 | 环 | 内・外面: ロクロナデ・ヘラ切り | 20E-Pa. 3 | 6 | 灰 | 环 | 内・外面: ロクロナデ・回転ケズリ | 20E-Pa. 3 | | |
| 2 | 第2刷 | 灰 | 内・外面: ロクロナデ | 20E-Pa. 9 | 7 | 第2刷 | 环 | 内・外面: ロクロナデ・ヘラ切り | 20E-Pa. 5 | | |
| 3 | 第2刷 | 灰 | 内・外面: ロクロナデ | 20E-Pa. 7 | 8 | 灰 | 环 | 内・外面: ロクロナデ・回転ケズリ・小輪廻切 | 20E-Pa. 4 | | |
| 4 | 灰 | 灰 | 内・外面: ロクロナデ | 20E-Pa. 8 | 9 | 灰 | 环 | 内・外面: ロクロナデ・回転ケズリ | 20E-Pa. 5 | | |
| 5 | 第2刷 | 灰 | 内・外面: ロクロナデ・回転ケズリ・小輪廻切 | 20E-Pa. 1 | 10 | 第3刷 | 管 | 内・外面: ロクロナデ・回転ケズリ | 20E-Pa. 10 | | |



第33図 第20号住居跡出土土器（3）

| 番号 | 断面 | 縦断 | 横断 |
|----|----|-----------------------|------------|
| 1 | 横切 | 外輪：ロコリナフ 内輪：セリナ・ミ | 20E-7a, 21 |
| 2 | 横切 | 内輪：ミナチモモヨリ ハス：ミナチモチナフ | 20E-7a, 22 |
| 3 | 横切 | 内輪：ロコリナフ | 20E-7a, 22 |
| 4 | 横切 | 内輪：ロコリナフ | 20E-7a, 22 |
| 5 | 横切 | 内輪：ロコリナフ | 20E-7a, 22 |
| 6 | 横切 | 内輪：ミナチモモヨリ ハス：ミナチモチナフ | 20E-7a, 22 |

第20号住居跡 破片資料



| 番号 | 種類 | 特徴 | 茎 | 葉 | 花序 | 種子 | 胚軸 | 特徴 | 莖 | 葉 |
|----|------|---------------------|------|------|----|------|----|-------------------------|--------|------|
| 1 | 第2新葉 | 外面：ケツリ 内面：剛毛目・テナツ目 | 20cm | 0.36 | 5 | 第2新葉 | 葉 | 内・外側：ロクロナダ 緩屈毛先切り | 20cm | 0.35 |
| 2 | 第2葉 | 外側：白粉斑 内側：ナマ | 20cm | 0.37 | 6 | 第2葉 | 葉 | 外側：ロクロナダ+ナマ 内側：ロクロナダ | 20cm | 0.36 |
| 3 | 第2葉 | 外側：ケツリ 内側：ナマ・寒波 | 20cm | 0.33 | 7 | 第2葉 | 葉 | 外側：ロクロナダ+ナマ 内側：ロクロナダ+ナマ | 20cm | 0.31 |
| 4 | ヨマツ | 葉 内・外側：ロクロナダ 緩屈毛先切り | 20cm | 0.34 | | | | 1～5：土壌細胞 | 6～7：根毛 | |

第34図 第20号住居跡出土土器 (4)

のは次の通りである。第1層：土師器甕1点 第2層：土師器蓋1点・同壺3点・同甕7点・赤焼土器壺2点・須恵器蓋2点・同壺2点・壺1点・甕1点 第3層：土師器壺2点・同甕2点 P₂：赤焼土器壺1点 P₃：土師器壺1点 床面：土師器壺1点・赤焼土器壺2点・須恵器蓋1点・同壺3点・カマド：土師器甕2点 住居内：土師器壺1点

この他、破片については別表にまとめてある。

第21号住居跡

〔平面形・重複〕第21号住居跡は第22・23号住居跡と重複し、その両者を切っている。平面形は隅丸正方形で、規模は南北軸4.0m・東西軸4.3mである。

〔壁〕壁は地山が大部分で（一部第22・23号住居跡堆積土）床面および周溝から緩かに立ちあがる。

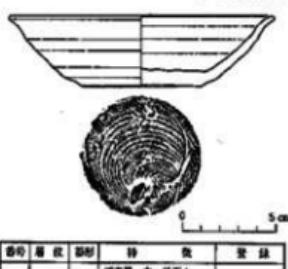
〔床面〕床面は住居掘り方底面（地山）と一致し、中央部から南西側がやや凹んでいる。

〔柱穴〕住居内で5個のピットが検出されたが、明確に柱穴と言えるものはない。ただ、P₅・P₃・P₄が住居北東・南西・北西隅の部分にある。南東隅では検出できなかったが、これらが組みあれば柱穴の可能性はある。また、P₅はカマド焚き口左脇にあり、カマドに関する柱穴の可能性もある。

〔周溝〕住居北壁西側から西壁・南壁西側の壁直下に周溝がめぐっている。周溝は断面「U」状で幅約20cm・深さ約5cmである。この他西壁周溝の内側約20cmの所に平行に走る溝がある。この溝は断面「U」状で、幅約10cm・深さ約5cmである。

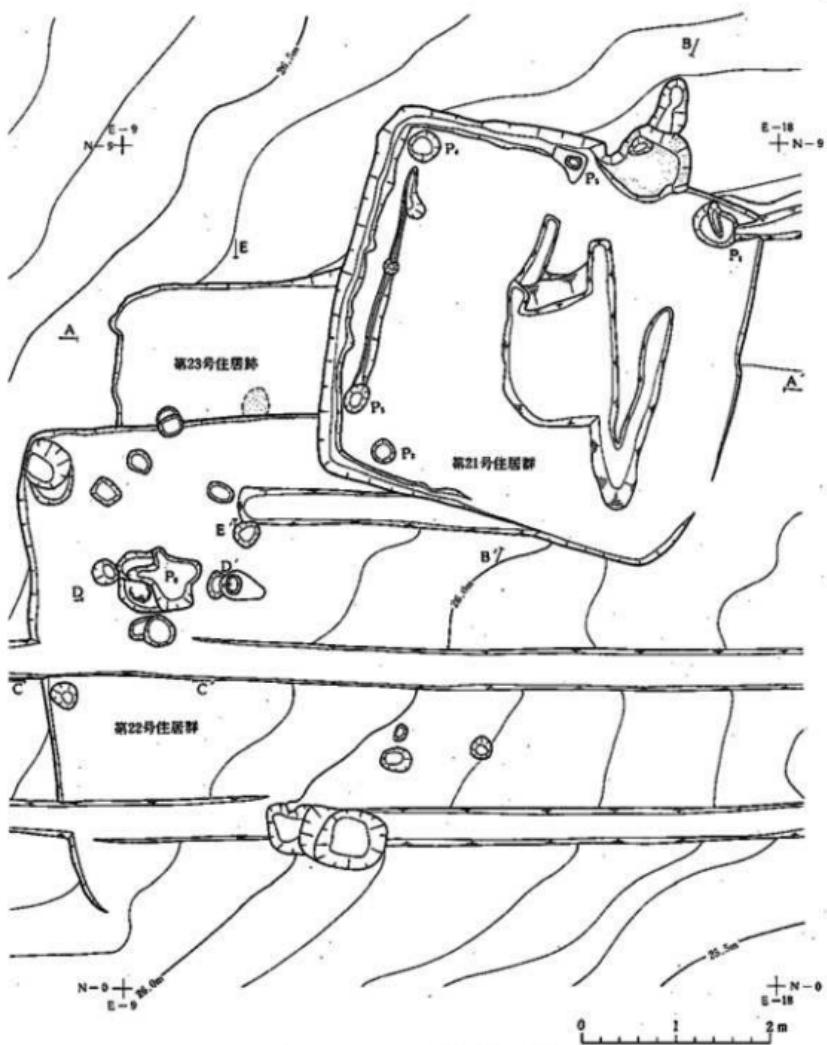
〔カマド〕住居北壁中央のやや東側にカマドがある。このカマドは北壁を掘り込んで構築している。全長140cmで、燃焼部は奥行80cm・幅90cm、煙道部は長さ60cm・幅30cmである。燃焼部と煙道部の境は約5cmの段となっている。燃焼部の底面・側壁は火熱を受けて焼けしており、底面が特に著しい。また、底面には灰状の薄い層が堆積している。また、燃焼部内には、側壁・天井部が崩落した焼土ブロックを含む層が全体に堆積している。

〔堆積土・遺物の出土状況〕住居内堆積土は褐色粘土質シルトで、堆積する場所によって部分的なちがいはあるが、基本的には一層である。遺物は量的に少なく、出土状況に規則性もみられない。住居内（第1層）：土師器内黒壺口縁部破片2点・同底部破片1点・土師器壺口縁部破片1点・土師器甕口縁部破片1点・須恵器壺1点 ピット：土師器甕底部破片1点 床面：土師器内黒壺口縁部破片1点



第35図 第21号住居跡出土土器

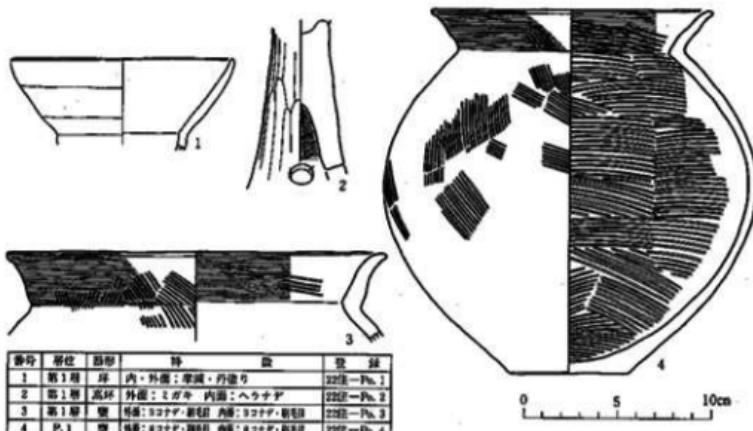
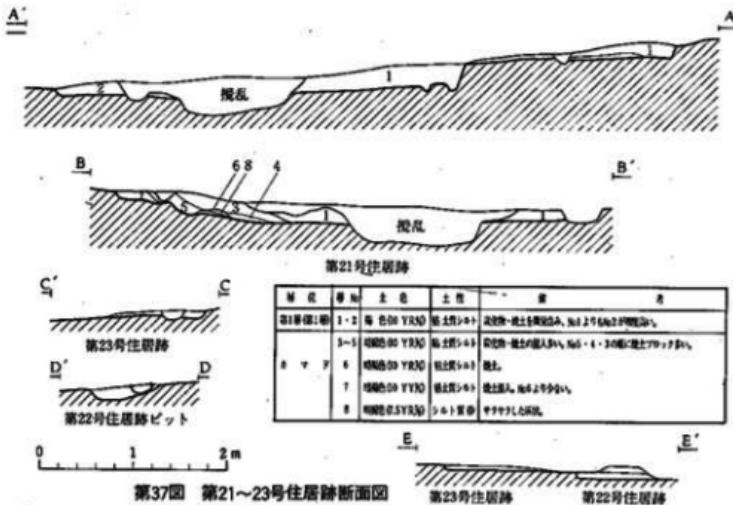
| 番号 | 層 | 形状 | 特 | 收 | 量 | 記 |
|----|-----|----|-------------------|---------|---|---|
| 1 | 第1層 | 壺 | 須恵器 内・外壁 ロテロナナ | 21住-P.1 | | |



第36図 第21・22・23号住居跡平面図

第22号住居跡

[平面形・重複] 第22号住居跡は第21・23号住居跡と重複し、第21号住居跡に切られているが第23号住居跡と新旧の切り合いは不明である。また、検出できたのは北壁西側から西壁・南西隅の部分で、その他は第21号住居跡と削平によって失なわれていた。残存部分から、平面形は隅丸方形と推定され、規模は南北軸5.1mである。



第38図 第22号住居跡出土土器

〔施設等〕検出された床面は地山である。壁は床面から垂直に立ちあがる。床面はほぼ平坦であるが南東側半分はほぼ削平されて失なわれている。住居内で、ピットは検出されたが、配置関係から柱穴と推定できるものはない。炉等は検出されなかった。 P_s は隅丸長方形のピットで底面に接した状態で土師器甕がみられた。大きさは長さ80cm・幅65cm・深さ10cmである。この他の施設は検出されなかった。

〔堆壙土〕住居内堆積土は暗褐色(10YR3/3)粘土質シルトである。

〔遺物の出土状況〕遺物は住居内堆積土、床面の残存範囲が小さいため、あまり多くないが、次のようなものがまとまりをもって出土している。住居内堆積土：壺1点・高壺1点・甕1点・甕口縁部破片1点・甕底部破片1点 P_s ：甕1点

第23号住居跡

〔平面形・重複〕第23号住居跡は第21・22号住居跡の項で記したように、第21号住居跡によって切られているが、第22号住居跡との新旧の切り合いは確認できなかった。検出・調査できたのは住居北西隅とその周辺だけで、この部分から住居平面形を推定すると隅丸方形と考えられる。残存部分が少ないため、規模等は不明である。

〔施設等〕壁・床面は地山である。壁は床面からほぼ垂直に立ちあがる。床面はほぼ平坦である。第22号住居跡に切られている部分の床面に焼面があり炉と考えられる。一部失なわれているが、ほぼ楕円形で、幅30cmある。この他に施設は検出されなかった。

〔堆積土〕住居内堆積土は2層あり、第1層は暗褐色(10YR3/4)粘土質シルトで、全体に分布している。第2層は褐色(10YR4/4)粘土質シルトで、床面上に部分的に分布している。遺物は出土していない。

第24号住居跡】

〔平面形・重複〕第29号住居跡と重複しているが、切り合い関係は明確にできなかった。また住居南側は調査を行なったが、北側は調査区外にのびている。調査を行なった部分から住居平面形を推定すると、隅丸方形である。規模は東西軸6.6mである。

〔壁〕検出した壁は地山で、床面および周溝からほぼ垂直に立ちあがる。

〔床面〕床面は掘り方底面と一致(地山)し、ほぼ平坦である。

〔柱穴〕柱穴は2個検出された($P_{1,2}$)。2個の柱穴は対角線と推定される位置にあり、結んだ線は住居南辺と平行である。柱間は3.7mである。

〔周溝〕周溝は一部途切れている部分もあるが、ほぼ全体の壁直下にめぐっている。断面「~」状で、幅約20cm・深さ約5cmである。また、同様な断面・規模をもつ溝が南壁の中央に直交し

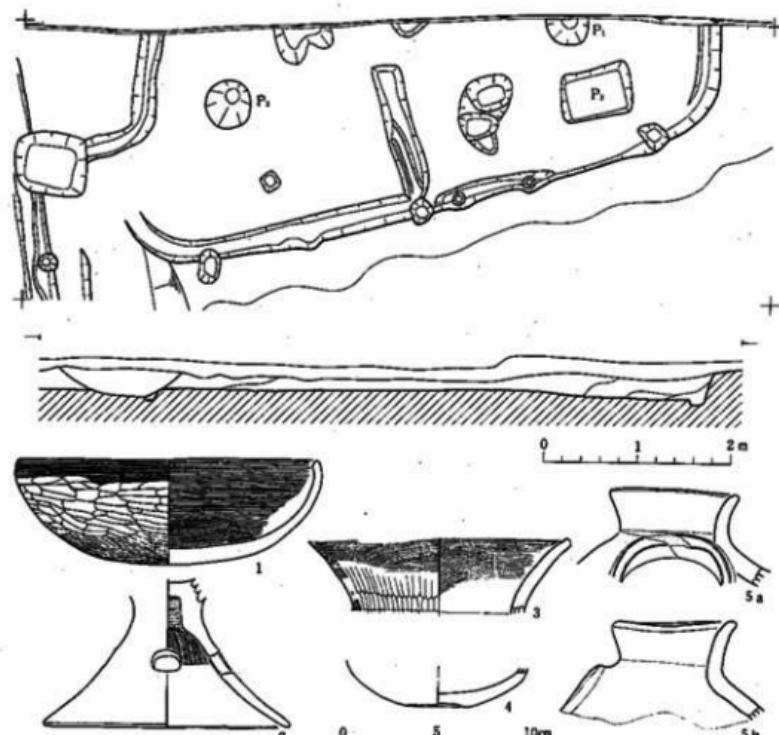
てみられ、その長さは160cmである。

〔貯蔵穴状ピット〕住居内東隅と推定される部分に貯蔵穴状のピット(P_3)がある。 P_3 は長方形で長さ80cm・幅50cm・深さ50cmである。内部には4枚の層(褐色・暗褐色・黒褐色・にぶい黄褐色土)が水平状に堆積し、最下層には地山土のブロックが多量に含まれていた。

〔その他の施設〕炉などの施設は調査区内では検出されなかった。

〔堆積土〕住居内堆積土は5層に細別され、将棋倒し状の堆積状況を示しているが、層相と層の大別については、注記を紛失したため不明である。

〔遺物の出土状況〕遺物は各層から出土しており、出土状況に特に規則性はみられない。第1



| 番号 | 部位 | 器形 | 特 徴 | 登 録 | 盛 分 | 部位 | 器形 | 特 徴 | 登 録 |
|----|------------------|----|------------------------------|-----------|--------|-----|----|----------------|-----------|
| 1 | P_1 - 4 | 杯 | 外縁: 33才ド・169・ナガ 内面: 33才ド・169 | 24E-Pn. 1 | 4 | 第3解 | 近? | 内・外縁: 単純 | 24E-Pn. 2 |
| 2 | 床 | 高杯 | 外縁: 摩滅 内面: ケズリ・ヘラナダ | 24E-Pn. 2 | 5 | 炉 | 穴 | 外縁: ミガキ 内面: ナダ | 24E-Pn. 5 |
| 3 | 第3解 | 盆 | 外縁: 33才ド・169・ナガ 内面: ナダ・169 | 24E-Pn. 4 | | | | | |

第39図 第24号住居跡

層：甕口縁部破片3点・同底部破片1点 第1～2層：甕口縁部破片2点 第3層：壺2点・甕底部破片1点 P₄：壺1点 P₃（貯藏穴）：壺1点・壺1点 床面：高壺1点

第25号住居跡

〔平面形・重複〕第25号住居跡は第26・51号住居跡と重複し、その堆積土と床面を切って構築している。平面形は四隅の角張る正方形で、規模は南北軸5.7m・東西軸6.1mである。

〔壁〕住居壁は、第26・51号住居跡と重複している東辺と南辺はその堆積土、その他の部分は地山で、床面および周溝からほぼ垂直に立ちあがる。

〔床面〕床面はほぼ平坦で、住居掘り方底面に褐色粘土質シルトを敷いて貼り床したものである。

〔柱穴〕柱穴は4個（P₄～P₇）検出された。これらの柱穴は、住居対角線上に位置し、結んだ線は住居平面形と相似形になる。柱間は、南北軸・東西軸とも2.7mである。

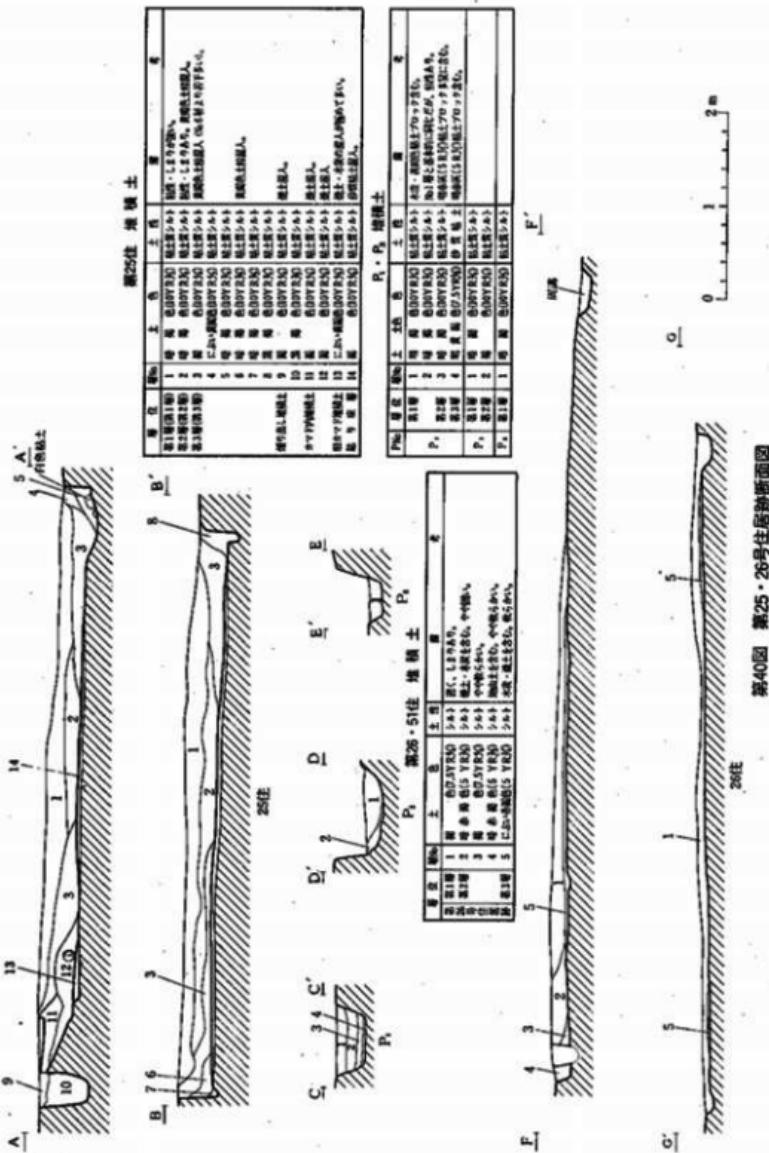
〔周溝〕周溝は住居北東部分を除き、ほぼ全体の壁直下にめぐっている。周溝の断面は「J」状で、幅約10cm・深さ5～10cmである。

〔カマド〕住居北壁のほぼ中央にカマドが構築されている。金長2.2mで、燃焼部と煙道部からなる。燃焼部は側壁に粘土を積みあげて構築したもので、主軸1.2m・幅0.9mである。底面中央には土師器壺を逆位に置いて支脚としている。支脚の前面は赤褐色に焼けて硬くなっている。側壁も焼けている。しかし、天井部は崩壊して残っていない。煙道部はトンネル式で住居外にのびている。煙道部底面は燃焼部底面より僅かに高くなっている。煙道部先端の煙り出しはピット状になっている。煙道部の主軸は0.6m・幅0.2mで、煙り出しの直径は0.4m・深さは0.5mである。

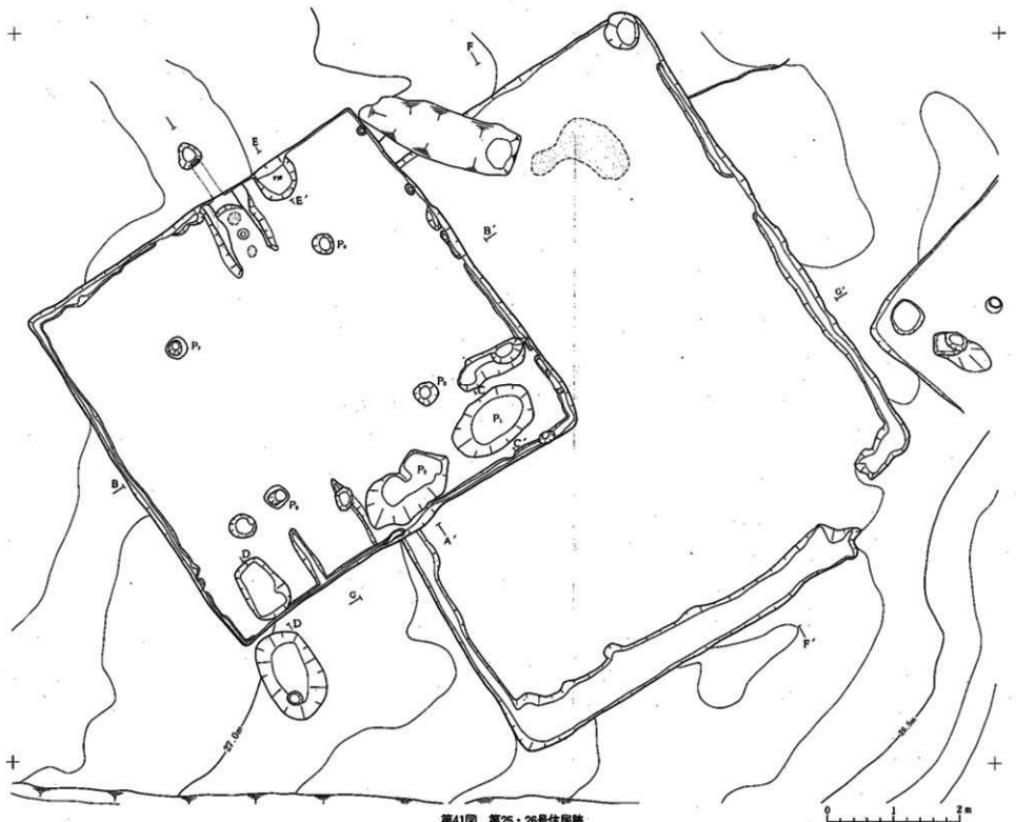
燃焼部底面をさらに掘り下げた所、焼け面と段が検出された。段は奥壁（住居壁に一致）の内側20cmの所にあり、その前面に焼け面がある。この段と焼け面は古い段階のカマド残存部で、段は燃焼部奥壁と推定される。したがって、カマドは改築を受けたものと考えられる。

〔その他の施設〕住居の壁際には、比較的大きいピットが4個（P₁・P₂・P₃・P₈）ある。P₂は南壁の中央、P₁・P₃はその両端、P₈はカマドの右脇にある。いずれも、楕円形ないしは隅丸方形をしている。P₂は楕円形をしたピットが2個横につなげられた形をしている。また、P₂とP₃の間には、住居南壁と直交する段と溝が平行に走り、P₂の底と周囲には白色粘土の塊がみられた。このように、住居南壁付近は何らかの作業場的なものであったと推定される。

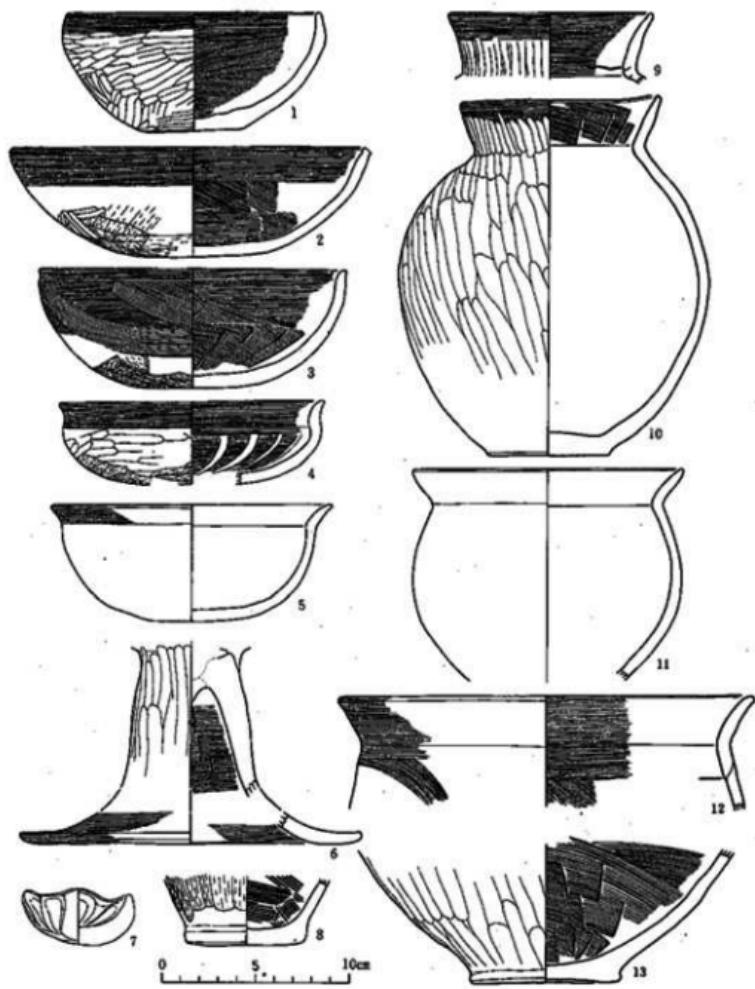
〔堆積土〕住居内堆積土は3層に大別され、それらの層は特異倒し状の堆積状況を示している。第1層は暗褐色粘土質シルトで、住居全体に分布している。第2層は赤褐色土粒の混入する暗褐色粘土質シルトで、住居中央部の床面上に分布している。第3層は、褐色ないしは暗褐色の



第40図 第25・26号住居跡断面図



第41図 第25・26号住居跡



| 番号 | 部位 | 器形 | 特徴 | 直径 | 高さ | 番号 | 部位 | 器形 | 特徴 | 直径 | 高さ |
|----|------|----|--------------------------|------|--------|----|--------|----|------------------------|------|--------|
| 1 | 床 | 坪 | 外面：ヨコナデ・ミガキ・本型底 内面：ナデ | 25.0 | Po. 2 | 8 | 床 | 坪 | 外面：ナズリ 内面：刷毛目 | 25.0 | Po. 12 |
| 2 | 床 | 坪 | 外面：ヨコナデ・ミガキ・ナダ | 25.0 | Po. 3 | 9 | 床 | 坪 | 外面：ヨコナデ・ミガキ 内面：ヨコナデ | 25.0 | Po. 6 |
| 3 | P. 4 | 坪 | 外面：ヨコナデ・ナダ・ナダ | 25.0 | Po. 8 | 10 | 坪 | 坪 | 外面：ヨコナデ・ミガキ・ナダ 内面：ヘナナデ | 25.0 | Po. 5 |
| 4 | 第2坪 | 坪 | 外面：ヨコナデ・ミガキ・ナダ | 25.0 | Po. 4 | 11 | 第2坪 | 坪 | 内・外面：ナダ | 25.0 | Po. 7 |
| 5 | 第1坪 | 坪 | 外面：ヨコナデ・厚底 | 25.0 | Po. 1 | 12 | 床 | 坪 | 内・外面：ヨコナデ・ナデ | 25.0 | Po. 11 |
| 6 | カマド | 高坪 | 外面：ミガキ・ヨコナデ 内面：ヘナナデ・ヨコナデ | 25.0 | Po. 9 | 13 | P.1406 | 坪 | 外面：ミガキ・ナデ 内面：ヘナナデ | 25.0 | Po. 13 |
| 7 | カマド | 坪 | 土質極品 内・外面：オサエ | 25.0 | Po. 10 | | | | | | |

第42図 第25号住居跡出土土器

粘土質シルトであるが、黄褐色・黒色をした部分もある。住居の壁際に分布している。

〔遺物の出土状況〕 遺物は床面・カマド・ピットを中心にまとまりをもって出土している。また、住居内堆積土からも出土している。第1層：壺1点・壺口縁部破片2点・甕口縁部破片4点・甕底部破片5点 第2層：壺1点・甕底部破片1点 第3層：高环坏部破片1点 P₄：壺1点 P₅：甕1点 カマド：高环1点・壺1点・壺（支脚）1点・甕底部破片2点 床面：壺2点・壺1点・甕2点・甕底部破片2点 層不明：甕底部破片1点

第26号住居跡

〔平面形・重複〕 第26号住居跡は、第25・51号住居跡と重複し、第51号住居跡の壁と堆積土を切って構築しているが、第25号住居跡によって住居北西部分が切られている。住居平面形は隅丸長方形で、規模は南北軸8.6m・東西軸7.2mである。

〔壁〕 検出された壁はすべて地山で、床面・周溝からほぼ垂直に立ちあがる。

〔床面〕 床面はほぼ平坦で掘り方底面と一致している。したがって、第51号住居跡と重複している部分はその堆積土、他の部分は地山である。

〔周溝〕 周溝は北壁を除き、他の部分の壁直下にめぐっている。版面「U」状で、幅約20cm・深さ約5cmの部分が多いが、南壁では幅が40~50cmとなっている。南壁の周溝は、他の部分の周溝と著しく相違する。このため、南壁の周溝は住居掘り方が南壁付近で周溝状になったものと考えられる。

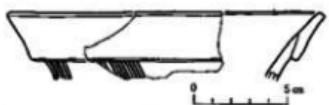
〔その他の施設〕 住居中央から北東側に偏した部分の床面が焼けしており（焼面）炉を考えられる。この焼面は不整椭円形をしており、その大きさは140×70cmである。この他、柱穴等の施設は検出されなかった。

〔堆積土〕 住居内堆積土は3層に大別され、第1・2層は将棋倒し状、第3層は水平状の堆積状況を示している。第1層は褐色シルト層で住居全体に広く分布している。第2層は褐色ないしは暗赤褐色のシルト層で、北壁周辺に分布している。第3層は木炭・粘土を含むにぶい赤褐色のシルト層で床面に薄く貼りついた状態で堆積しており、生活層の可能性がある。

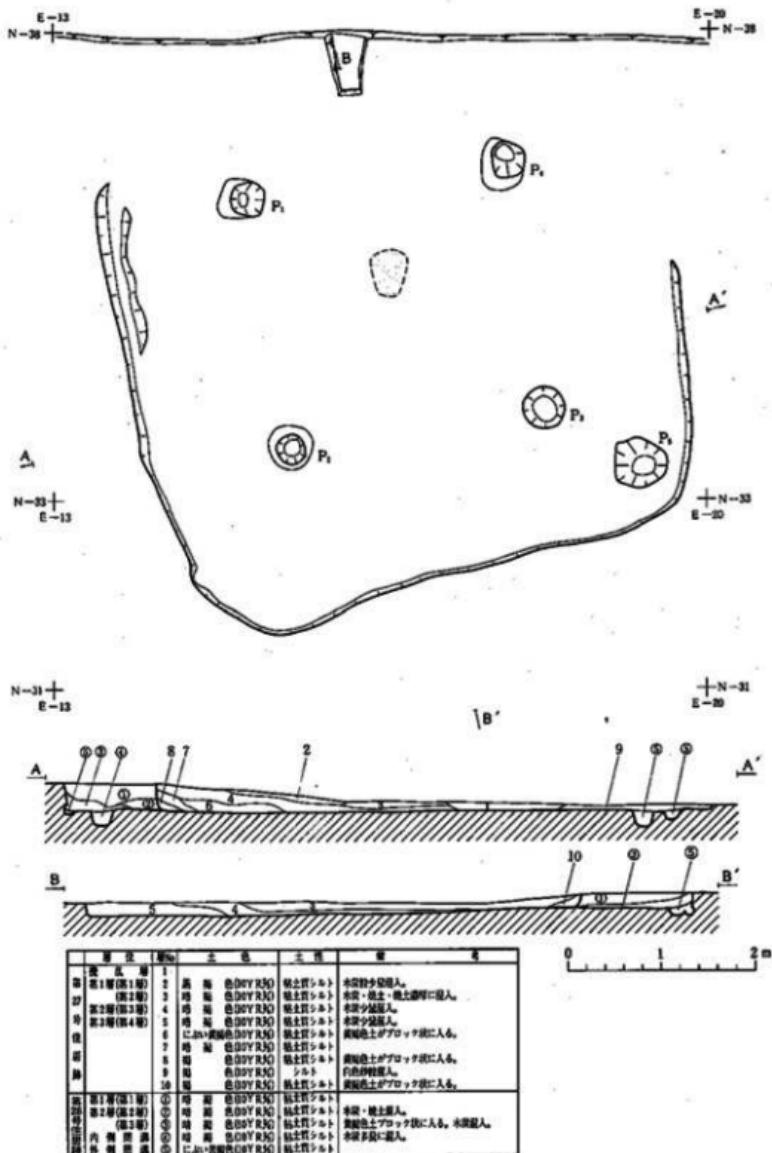
〔遺物の出土状況〕 遺物の出土は少なく、次の通りである。床面：壺1点 住居内：高环坏部破片1点・甕口縁部破片4点

第27号住居跡

〔平面形・重複〕 第27号住居跡は第28・29・52・53号住居跡と重複し、それらの堆積土を切つ

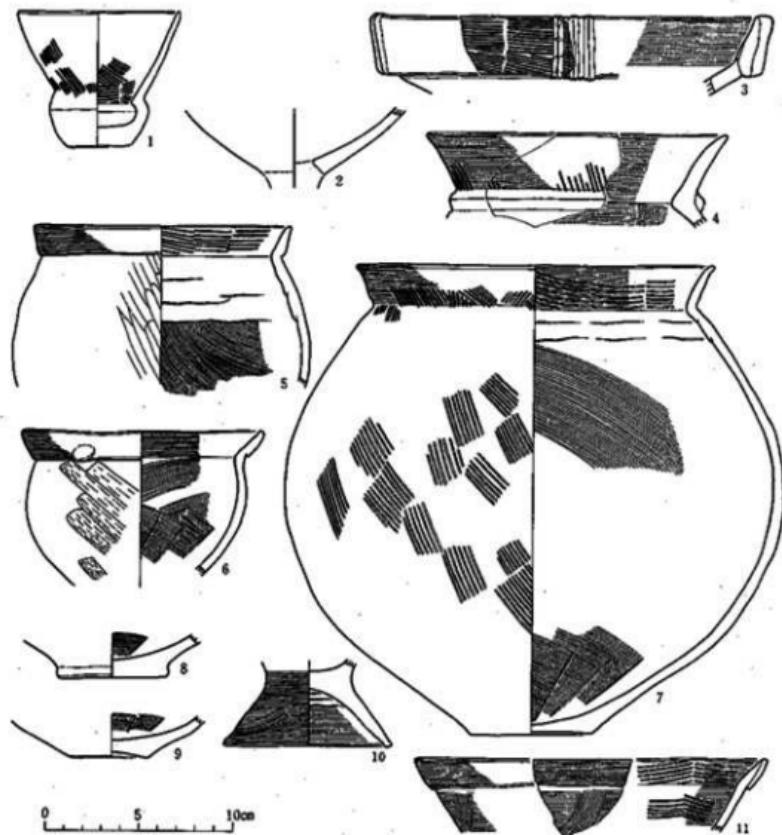


第43図 第26号住居跡出土土器



第44図 第27号住居跡

て構築している。ただ、北壁の大部分と東壁北側は削り過ぎてしまい、確認することができなかつた。
検出した東・南・西壁から、平面形は隅丸正方形と推定され、規模は南北軸5.2m・東西軸5.8mである。
〔壁〕検出された壁は第28・29・52・53号住居跡の堆積土と地山で、床面からほぼ垂直に立ち



| 番号 | 形状 | 器形 | 特徴 | 内面 | 外面 | 基盤 | 番号 | 形状 | 特徴 | 内面 | 外面 | 基盤 |
|----|-----|----|--------------------------|------------|----|------|-----|-------------|------------|-------------|----|----|
| 1 | P.9 | M. | 外表面：刷毛目・ケズリ 内面：刷毛目・ナゲ | 27II-Pn. 1 | 7 | P.9 | 壺 | 外表面：ミガキ・摩滅 | 内面：ミコナテ・ナゲ | 27II-Pn. 9 | | |
| 2 | 第2種 | 高脚 | 内・外面：ミガキ・摩滅 | 27II-Pn. 2 | 8 | 床 | 壺 | 外表面：ミガキ・摩滅 | 内面：ヘラナゲ | 27II-Pn. 11 | | |
| 3 | 周 | 縁 | 外面：刷毛目・新規 内面：ミコナテ・摩滅 | 27II-Pn. 7 | 9 | P.11 | 壺 | 外表面：ミガキ | 内面：ヘラナゲ | 27II-Pn. 10 | | |
| 4 | 第1種 | 縁 | 外表面：刷毛目・モロコシ 内面：ミコナテ・ナゲ | 27II-Pn. 3 | 10 | 第2種 | 台付壺 | 内・外面：ナゲ | | 27II-Pn. 8 | | |
| 5 | 第4種 | 縁 | 外表面：ミコナテ・ナゲ 内面：刷毛目・モロコシ | 27II-Pn. 5 | 11 | 第2種 | 底 | 外表面：ミコナテ・ナゲ | 内面：刷毛目・ナゲ | 27II-Pn. 6 | | |
| 6 | 第2種 | 壺 | 外表面：ミコナテ・モロコシ 内面：ナゲ・ヘラナゲ | 27II-Pn. 4 | | | | | | | | |

第45図 第27号住居跡出土土器

あがる。

〔床面〕 床面はほぼ平坦で掘り方底面と一致している。したがって、第29・52・53号住居跡と重複している部分はその堆積土、その他は地山である。

〔柱穴〕 柱穴は4個（P₁～P₄）検出された。これらの柱穴は、ほぼ住居対角線上に位置し、結んだ線は住居平面形と相似形となる。

〔周溝〕 住居西壁北側直下に周溝状の溝がある。この溝は断面「U」状・幅30cm・深さ2～3cmであるが、その続具合を明確にとらえることができなかつた。

〔焼面〕 住居中央のやや北側に焼面がある。焼面は楕円形で、その大きさは50×40cmである。

〔その他の施設〕 住居南東隅に不整楕円形の貯蔵穴状ピットがある。大きさは55×50cmで、深さ50cmである。

〔堆積土〕 住居内堆積土は3層に大別され、将棋倒し状の堆積状況を示している。第1層は黒褐色粘土質シルトで、住居中央部に分布している。第2層は暗褐色粘土質シルトで住居全体に広く分布している。第3層は暗褐色・褐色・にぶい黄褐色など土色に様々な種類があるが、いずれも層厚・分布など小規模なもので、住居壁を構成する土のブロックを混入する粘土質シルト層である場合が多い。そして、これらの層は住居の壁際を中心として分布している。

〔遺物の出土状況〕 遺物は各層・床面・細部（ピット・周溝）から出土しており、特に集中する部分はない。第1層：壺口縁部破片1点・甕口縁部破片1点・甕底部破片1点 第2層：高坏1点・壺底部破片1点・甕1点・台付甕1点・甕口縁部破片2点・甕底部破片1点・瓶1点 第1～3層：壺1点 第4層：甕1点 P₂：甕底部破片1点 P₈：甕口縁部破片1点 P₉：坏1点・甕1点 P₁₁：甕1点 周溝：壺1点・甕口縁部破片1点 床面：甕1点・甕口縁部破片1点・甕底部破片1点 層不明：甕口縁部破片1点

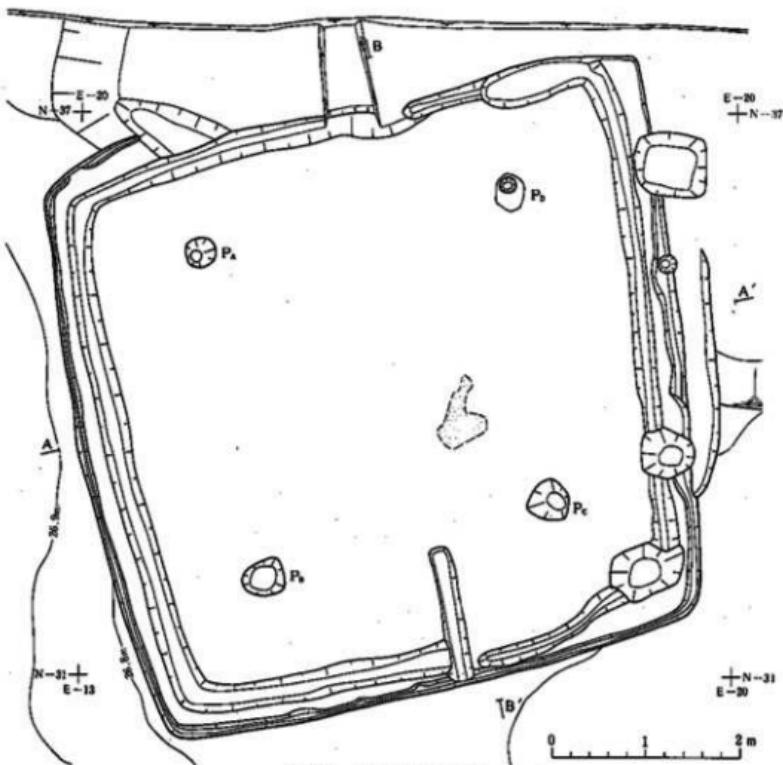
第28号住居跡

〔平面形・重複〕 第28号住居跡は第27・29・52・53号住居跡と重複し、第29・52・53号住居跡の堆積土を切って構築しているが、第27号住居跡によって切られている。平面形は隅丸正方形で規模は南北軸6.5m・東西軸6.5mである。

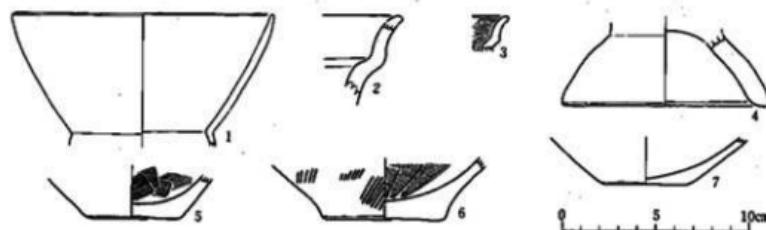
〔壁〕 検出した壁は大部分が地山で、第29・52・53号住居跡と重複している部分ではその堆積土である。周溝からほぼ垂直に立ちあがる。

〔床面〕 床面はほぼ平坦で掘り方底面と一致している。したがって、第29・52・53号住居跡と重複している部分ではその堆積土、その他は地山である。

〔柱穴〕 柱穴は4個（P_A～P_D）検出された。これらの柱穴は住居対角線上に位置し、結んだ線は住居平面形と相似形になる。



第46図 第28号住居跡



| 番号 | 場所 | 形態 | 特徴 | 文 | 器種 | 番号 | 場所 | 形態 | 特徴 | 文 | 器種 |
|----|-----|----|---------------|-----------|----|-----|----|--------------------|---------------|-----------|----|
| 1 | 床 | 床 | 内・外面：ミガキ・丹波石 | 28E-Pb. 2 | 5 | 床 | 床 | 壁 | 外面：厚経 内面：ヘラナゲ | 28E-Pb. 6 | |
| 2 | 西 壁 | 壁 | 外面：ヨコナゲ 内面：剥落 | 28E-Pb. 3 | 6 | 住居内 | 壁 | 外面：剥毛目・ケズリ 内面：ヘラナゲ | 28E-Pb. 7 | | |
| 3 | 住居内 | 壁 | 内・外面：ヨコナゲ | 28E-Pb. 4 | 7 | 床 | 床 | 内・外面：厚経 | 28E-Pb. 8 | | |
| 4 | 第1層 | 地質 | 内・外面：厚経 | 28E-Pb. 5 | | | | | | | |

第47図 第28号住居跡出土器

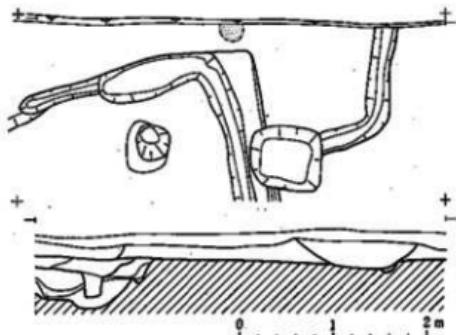
〔周溝〕周溝は壁に沿って二重にめぐっている。壁直下の周溝は全周しており断面「S」状で住居壁に幾分喰い込んでいる。内側の周溝は断面「U」状をしており、ほぼ全周しているが南東中央で約30cm程切れている。内側周溝の途切れた部分には住居壁と直交する溝が入っている。この溝の断面形は内側周溝と同じである。また、内側の周溝は南東隅の部分で貯蔵穴状ピットに接続している。壁直下の周溝は幅約10cm・深さ約5cm、内側の周溝と直交する溝は幅20~30cm・深さ10~15cmで、壁に直交する溝の長さは約80cmである。

(炉) 住居中央からやや南東に偏った部分の床面が焼けている(焼面)。この焼面は不整形で、大きさは80×50cmである。

(その他の施設) 住居南東隅の部分に貯蔵穴状ピットがある。やや歪んだ隅丸長方形で、大きさは80×50cm・深さ65cmである。このピットは前述のように内側の周溝と接続している。

(堆積土) 住居内堆積土は第27号住居跡と重複している部分ではなく、南壁と西壁付近に残っているだけである。堆積土は2層残っており、第1層は褐色シルト、第2層は焼土木炭を含む赤褐色シルトである。第2層は木炭・焼土を含み床面上に堆積していることから火災によるものとも考えられるが、残存部分が少ないためはつきりしない。

〔遺物の出土状況〕 遺物はあまり多くないが、比較的床面や周溝から出土している。第1層：台付甕1点 周溝：壺1点・甕口縁部破片1点・甕底部破片1点 床面：壺1点・甕2点 層不明：壺？1点・器台受部破片1点・甕1点



第48図 第29号住居跡

第29号住居跡

〔概要〕 第29号住居跡は第28・52号住

居跡と重複し、第52号住居跡の堆積土を切っているが、第28号住居跡によって切られている。また、住居跡の大部分は調査区外にのびているため、実際に調査を行なうことができたのは、東南隅の部分である。調査を行なった部分には断面「U」状幅約20cm・深さ5~8cmの周溝が検出され、その内側180cmの所に炉と推定される焼面(調査区外にのびる)があった。住居内堆積土は1層であったが、その特徴・層相については注記を紛失したため不明である。また遺物は出土していない。

第30号住居跡

〔平面形・重複〕 第30号住居跡は周溝が三重にめぐり、柱穴の切り合いもある。そして、炉と考えられる焼面も上・下二面ある。したがって、この第30号住居跡は改築による拡張を行なっているものと推定される。また、住居東側は削平を受け失なわれているが、残存部分から隅丸方形と推定される。規模は南北軸6.5mである。

〔壁〕 検出された壁は地山で、床面および周溝からほぼ垂直に立ちあがる。

〔床面〕 床面はほぼ平坦で、掘り方底面との間に褐色粘土質シルトを敷きつめて貼り床としている。また、この床面の上に一部貼り床を行なっている部分がある。この部分的貼り床下からも後述する焼面が検出された。

〔柱穴〕 住居内から数個のピットが検出されたが、配置関係から柱穴と推定されるのは西側に位置するP₂・P₃・P₄・P₅の4個である。これらの柱穴には切り合い(P₄→P₂)が認められ、新旧二時期の存在が知られる。しかし、これら西側の柱穴と組みあうべき東側の柱穴は検出することができなかつた。なお、西側柱穴における柱間は、P₄・P₅が2.6m、P₂・P₃が3.6mである。

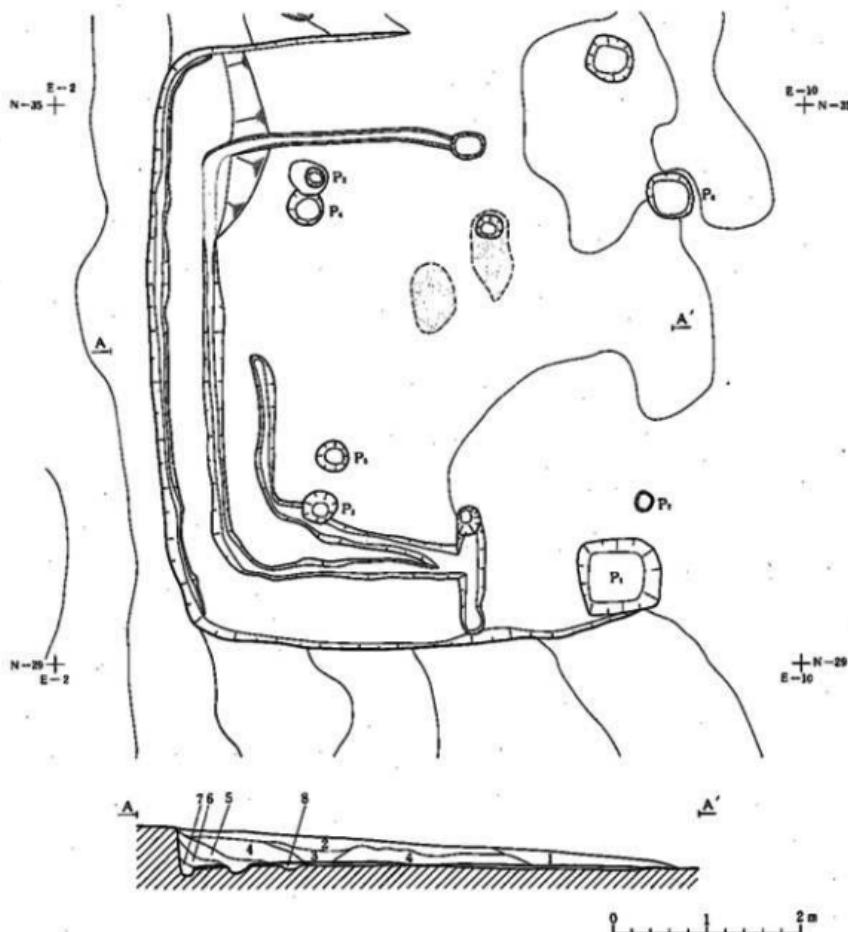
〔周溝〕 三重にめぐる周溝の中で外側のものは西辺、中央のものは北・西・南辺、内側のものは西辺南側から南辺に沿ってみられる。また、周溝および南辺に直溝する形で南北の溝が長さ140cmにわたってみられる。これらの周溝・直交溝は断面「V」状で、幅約20cm・深さ約5cmである。

〔炉〕 炉は二ヶ所にある。いずれも住居中央からやや北東に偏った部分である。西側の焼面は梢円形で大きさは70×50cm、東側に位置し、貼り床下から検出された焼面は不整梢円形で大きさは100×40cmである。

〔貯蔵穴状ピット〕 住居東南隅と推定される部分に正方形の貯蔵穴状ピット(P₁)がある。規模は南北軸80cm・東西軸85cm・深さ35cmである。P₁は外側の南壁に接する位置にあることから、拡張後の住居に伴う施設と推定される。内部には僅かに炭化物を含む褐色(7.5YR4/4)粘土質シルトが堆積していた。

〔堆積土〕 住居内堆積土は3層に大別され、将棋倒し状の堆積状況を示している。第1層は褐色粘土質シルト層で、最上層として住居全体に分布している。第2層は暗褐色粘土質シルト層で、住居中央部に分布している。第3層は褐色粘土質シルト層で、住居の壁際に分布している。

〔遺物の出土状況〕 遺物は床面・細部(貯蔵穴状ピット・柱穴)に量は多くないがまとまってみられる。
第1層：器台受部破片1点・甕1点・甕口縁部破片 第2層：壺(土製模造品)1点 第3層：甕口縁部破片1点・P₁：甕or壺1点 P₂：壺2点 P₇：壺1点 床面：高壺脚部破片1点・壺口縁部破片1点・甕(土製模造品)1点・甕1点・甕口縁部破片1点・甕底部破



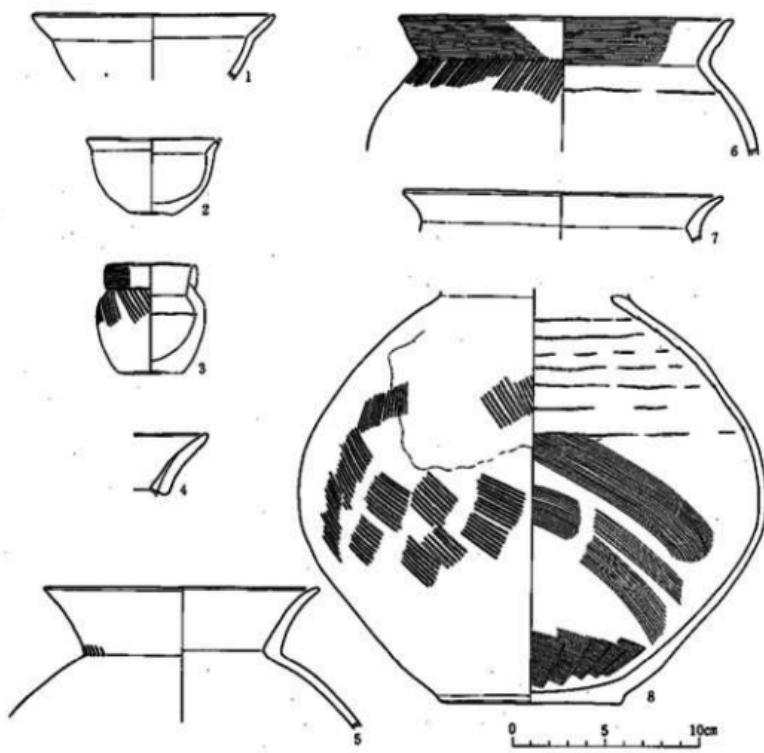
| 層位 | 番号 | 土色 | 土性 | 備考 |
|----------|----|-------------|--------|------------------------|
| 第1番(第1層) | 1 | 褐色(0YR5/0) | 粘土質シルト | |
| | 2 | 褐色(0YR5/0) | 粘土質シルト | |
| 第2番(第2層) | 3 | 暗褐色(0YR3/0) | 粘土質シルト | |
| | 4 | 暗褐色(0YR3/0) | 粘土質シルト | 地表の黄褐色(10YR3/0) 粘土を含む。 |
| 第3番(第2層) | 5 | 褐色(0YR5/0) | 粘土質シルト | |
| | 6 | 褐色(0YR5/0) | 粘土質シルト | 炭化物を埋蔵含む。 |
| 第4番(第2層) | 7 | 暗褐色(0YR3/0) | 砂質シルト | |
| | 8 | 褐色(0YR5/0) | 粘土質シルト | しまりがある。 |

第49図 第30号住居跡

片1点 住居内：甕底部破片 1点

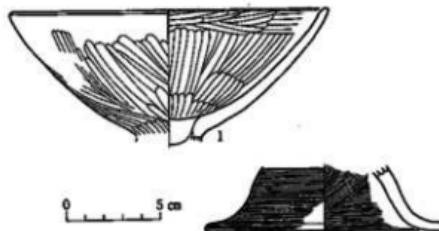
第31号住居跡

[概要] 第31号住居跡は西壁から南壁西側部分を確認したが、その他の部分は調査区外にのびるか削平によって失なわれていた。検出された部分から、平面形は方形と推定されるが、規模等は不明である。検出された壁は地山で床面および周溝からはほぼ垂直に立ちあがる。周溝は断面「U」状で、幅約15cm・深さ約3cmである。残存部分の床面はほぼ平坦である。この他の施設については確認できなかった。



| 番号 | 部位 | 断面 | 特徴 | 基盤 | 縁 | 縁 | 番号 | 部位 | 断面 | 特徴 | 基盤 |
|----|-----|----|---------------------------|-----------|---|-----|----|-------------------------|-----------|----|----|
| 1 | Pn. | 片 | 外面：ミガキ 内面：擦減 | 30E-Pn. 7 | 5 | 丸 | 縁 | 外面：刷毛目・擦減 内面：擦減 | 30E-Pn. 2 | | |
| 2 | 第2層 | 环 | 土器模造品？ 内・外面：擦減 | 30E-Pn. 6 | 6 | 深 | 底 | 外面：ミコナゲ・刷毛目 内面：ミコナゲ | 30E-Pn. 1 | | |
| 3 | 同 | 底 | 上部破片 H約：7.7mm 特徴：内面：不規則擦減 | 30E-Pn. 5 | 7 | 第1層 | 縁 | 内・外面：擦減 | 30E-Pn. 3 | | |
| 4 | 同 | 底 | 内・外面：擦減 | 30E-Pn. 9 | 8 | 丸 | 縁 | 外面：刷毛目・ミガキナズリ 内面：ナナヘラナナ | 30E-Pn. 3 | | |

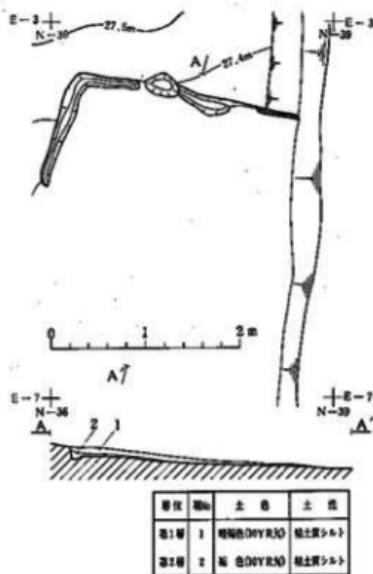
第50図 第30号住居跡出土土器



| 番号 | 部位 | 形態 | 特徴 | 性質 | 番号 | 部位 | 形態 | 特徴 | 性質 |
|----|----|------|--------------------|-----------|----|----|----|----|----|
| 1 | 壁 | 高 壁 | 外層：ミコナゲ・ミガキ 内層：ミガキ | 31壁-Po. 2 | | | | | |
| 2 | 床 | 高 壁？ | 内・外層：ミコナゲ・ナデ 丹波引 | 31床-Po. 1 | | | | | |

〔堆積土〕 住居内堆積土は2層あり、将棋倒し状の堆積状況を示している。第1層は暗褐色粘土質シルト層で、住居残存部分のほぼ全体に分布している。第2層は褐色粘土質シルト層で、壁際に分布している。

〔遺物の出土状況〕 遺物は床面から高壁2点、住居内から中型壺口縁部破片1点が出土している。

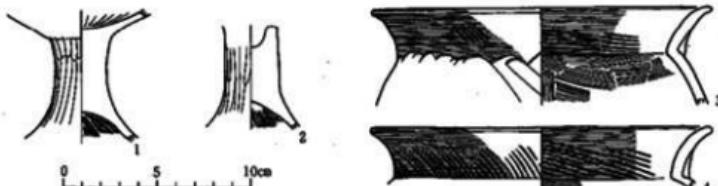


第51図 第31号住居跡

第32号住居跡

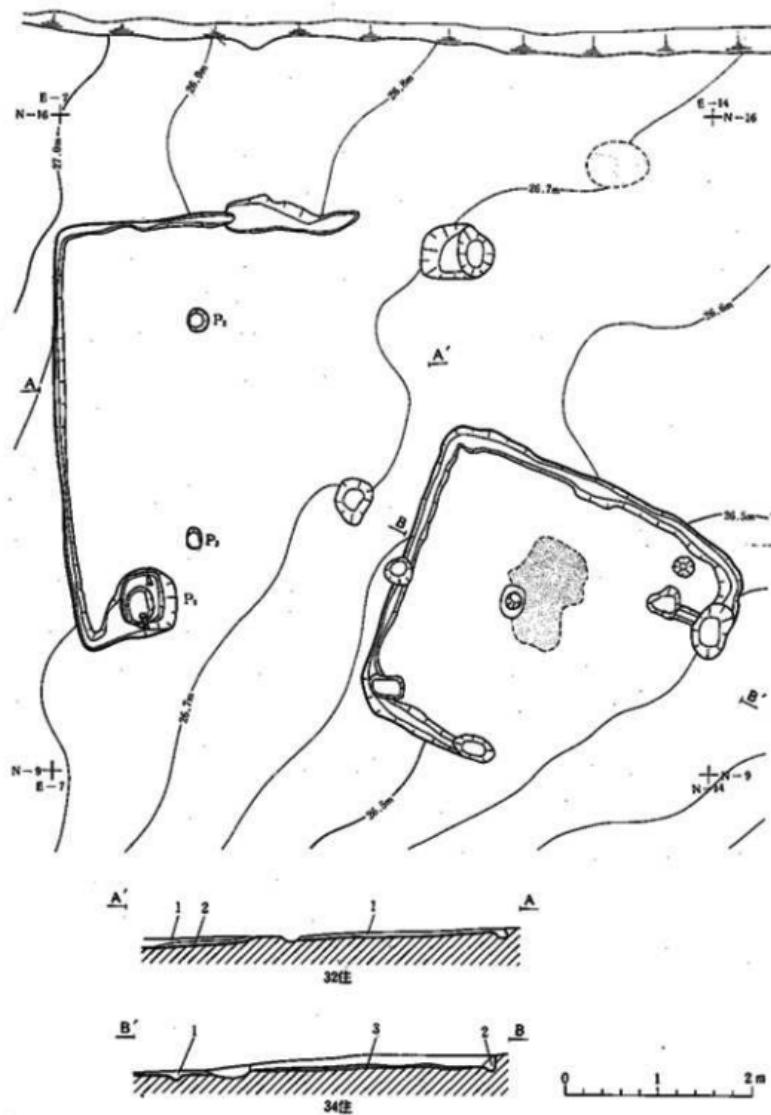
〔平面形・重複〕 第32号住居跡は第34号住居跡と重複しているが、重複部分の堆積土が薄く、切り合は不明確であった。また、住居西側は残っていたが、東側は削平されていた。残存部分から住居平面形を推定すると方形である。規模は南北軸4.4mである。

〔施設等〕 床面は掘り方底面（地山）と一致し、ほぼ平坦である。周溝は壁直下にめぐり、断面は「S」状で、幅約10cm・深さ3～5cmである。壁は地山である。住居推定範囲内から数個のピットが検出されているが、配置関係から確実に柱穴と推定できるものはない。しいてあげ



| 番号 | 部位 | 形態 | 特徴 | 性質 | 番号 | 部位 | 形態 | 特徴 | 性質 |
|----|-----|-----|--------------------|-----------|----|----|----|----------------------------|-----------|
| 1 | 壁・穴 | 高 壁 | 外層：ミガキ 内層：ミガキ・ヘラナデ | 32壁-Po. 1 | 3 | 床 | 裏 | 内・外層：ミコナゲ・糊合テフロチク 内：ミコナゲ研磨 | 32床-Po. 3 |
| 2 | 壁・穴 | 高 壁 | 外層：ミガキ 内層：ヘラナデ | 32壁-Po. 2 | 4 | 床 | 裏 | 内・外層：ミコナゲ・糊毛目 | 32床-Po. 4 |

第52図 第32号住居跡出土土器



第53図 第32・34号住居跡

ればP₂・P₃であるが、結んだ線は住居西辺にやや斜行する。住居南西隅に貯蔵穴状ピット（P₁）がある。隅丸長方形で、底面は軽い段を持つが丸底である。大きさは長さ70cm・幅60cm・深さ25cmである。内部には焼土・木炭を含む暗褐色粘土質シルトが堆積している。上段底面には土器高环が2個体のつっていた。この他、炉等の施設は検出されなかった。

〔堆積土〕住居内に残っていた堆積土は薄く、堆積状況を知るには至らなかった。堆積土は上層が暗褐色粘土質シルト、下層が黒褐色粘土質シルトである。

〔遺物の出土状況〕遺物は量的に多くないが、床面・貯蔵穴状ピットなどからまとまりをもって出土している。P₁：高环2点 P₄：甕口縁部破片1点 床面：高环脚部破片1点・甕2点・甕底部破片1点

第34号住居跡

〔平面形〕住居東側から南東隅の部分は削平されているが、その他の部分は残っている。平面形は隅丸正方形で、南北軸3.2m・東西軸3.5mである。

〔壁〕検出された壁は地山で、周溝からほぼ垂直に立ちあがる。

〔床面〕床面は掘り方底面（地山）と一致し、ほぼ平坦である。

〔周溝〕周溝は住居壁直下にめぐっている。断面は「U」状で、幅約20cm・深さ約5cmである。

〔炉・その他の施設〕住居床面のほぼ中央に焼面があり炉と考えられる。この焼面は不整梢円形をしており、大きさは長さ110cm・幅70cmである。その他・柱穴等の施設は検出されなかった。

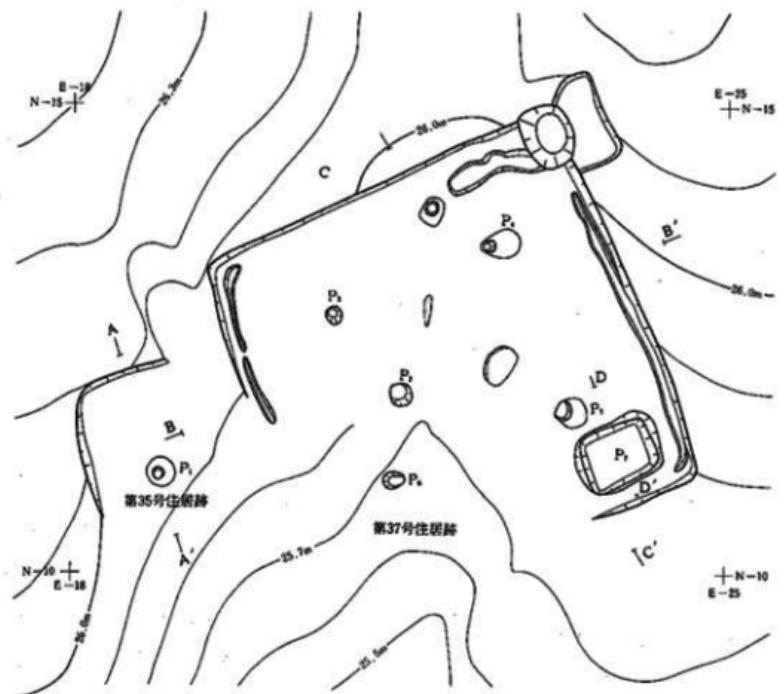
〔堆積土〕住居内堆積土は3層にわかれ、第1・2層は将棋倒し状の堆積状況を示し、第3層は床面に薄く貼りついた堆積状況を示している。第1層は暗褐色粘土質シルトで住居全体に分布している。第2層は黒褐色粘土質シルトで、壁沿に狭い分布をしている。第3層は焼土・木炭を若干混入する暗褐色粘土質シルトで、床面上に分布し、生活層の可能性がある。

〔遺物の出土状況〕遺物の出土は、量的に少なく、また出土状況に規則性もみられない。床面：甕口縁部破片1点・甕底部破片1点・層不明：壺1点・甕2点



| 番号 | 部位 | 断面 | 特徴 | 登錄 |
|----|-----|----|---------------|----------|
| 1 | 住居内 | 壁 | 外側：厚壁 内側：ヨコナギ | 34住-Po.1 |
| 2 | 住居内 | 壁 | 内・外側：厚壁 | 34住-Po.2 |
| 3 | 住居内 | 壁 | 外側：ケズリ 内側：ナゲ | 34住-Po.3 |

第54図 第34号住居跡出土土器



第37号住居跡

0 1 2 m

| 層位 | 標高 | 土色 | 土性 | 備考 |
|-----------------------|----|--------------|-------|------------------------|
| 第1層(第1帶) | 1 | 褐 色0.5YR 5/0 | 砂質シルト | 固くしまり、粘性なし。 |
| 第1層(第1帶) | 2 | 褐 色0.5YR 5/0 | 砂質シルト | 固くしまり、半硬・粘性なし。 |
| 第1層(第2帶) | 3 | 褐 色0.5YR 5/0 | 砂質シルト | 固くしまり、粘性なし。木炭・粘土を僅少含む。 |
| 第2層 P ₁ | 1 | 暗褐色0.5YR 4/0 | シルト | 半硬含む。地盤上部下部砂多く含む。 |
| 第2層 P ₁ | 2 | 暗褐色0.5YR 4/0 | シルト | 粘土・半硬含む。 |
| 第3層 | 3 | 褐 色0.5YR 5/0 | シルト | |

第55図 第35・37号住居跡

第35号住居跡

〔概要〕 第35号住居跡は第37号住居跡と重複しているが、堆積土が薄く、新旧の切り合いを確認することはできなかった。また、この住居跡で残存していたのは北東隅の部分と北側柱穴2個（P₁・P₂）で、その他は削平されて失なわれていた。残存していた北西隅部分と2個の柱穴から、住居平面形は隅丸方形と推定される。柱穴（P₁・P₂）を結んだ線は住居北辺と平行で、その柱間は2.7mである。その他、炉・周溝等の施設は検出されなかつた。

〔堆積土・遺物の出土状況〕 住居内堆積土が残っていたのは住居北西隅の一部に限られるが、2層の堆積がみられた。これらの堆積土は第1層が暗褐色（10YR3/3）粘土質シルト（No.2）、第2層が黒褐色（10YR3/2）粘土質シルト（No.3・4）で将棋倒し状の堆積状況をしている。遺物はピットから甕口縁部破片が1点出土しているだけである。

第37号住居跡

〔平面形・重複〕 第37号住居跡は、第35号住居跡の項で述べたように、重複しているが、新旧の切り合いで確認できなかつた。なお、住居南西隅は削平されて失なわれている。残存部分から住居平面形は正方形と推定され、規模は南北軸4.2m・東西軸4.1mである。

〔壁〕 検出された壁は地山で、床面および周溝からほぼ垂直に立ちあがるが、上部は崩壊している部分が多い。

〔床面〕 床面は掘り方底面（地山）と一致し、ほぼ平坦である。

〔柱穴〕 柱穴は4個（P₃～P₆）検出された。これらの柱穴はほぼ住居対角線上に位置し、結んだ線は住居平面形とほぼ相似形である。柱間は南北軸2.0m・東西軸1.8mである。

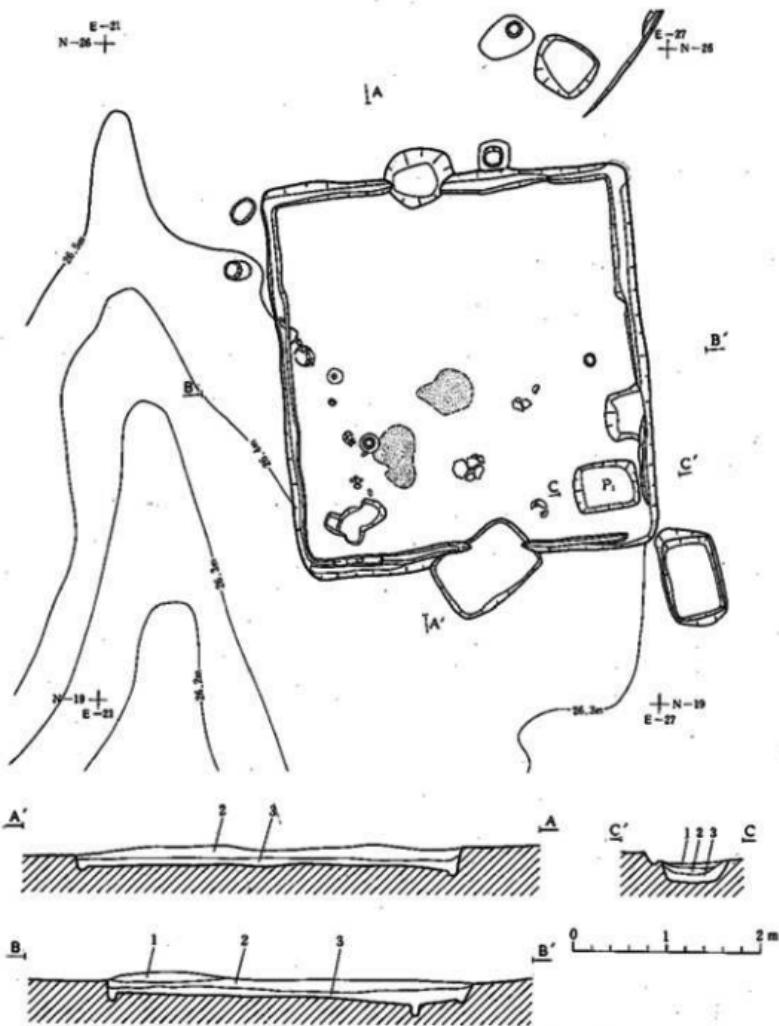
〔周溝〕 東壁直下と西壁直下付近で周溝が検出された。断面「U」状で幅15～20cm・深さ約5cmである。

〔炉〕 住居中央からやや北に偏った部分に炉と考えられる焼面が検出された。東側が谷状地形によって削平され、正確な形・大きさは不明である。

〔貯蔵穴状ピット〕 住居南東隅の部分から貯蔵穴状ピット（P₇）が検出された。P₇は上端が幾分崩れているが隅丸長方形で、大きさは、長さ80cm・幅60cm・深さ30cmである。内部の堆積土は暗褐色ないしは褐色シルトで3層に細別され、水平状に近い堆積状況をしている。住居北東隅の楕円形のピットは、住居に伴う施設か否か不明である。

〔堆積土〕 住居内堆積土はいずれも褐色シルトないしは砂質シルトで、3層に細別され、その堆積状況は将棋倒し状である。第1層は住居東側に、第2層は中央部から西側に、第3層は床面中央部から西壁際に分布している。

〔遺物の出土状況〕 遺物は少量で、第1層から高坏脚部破片1点・坏底部破片1点・甕口縁部



住居内埋積土

| 層位 | 層No | 土色 | 土性 | 備考 |
|-----|-----|----------------|---------------------|----|
| 第1層 | 1 | 暗褐色(10 YR 3/2) | 砂質 | |
| 第2層 | 2 | 褐色(7.5 YR 4/6) | 砂質 若干の燒土・木炭がまじる。 | |
| | 3 | 褐色(7.5 YR 4/6) | 燒土・木炭を含む | |

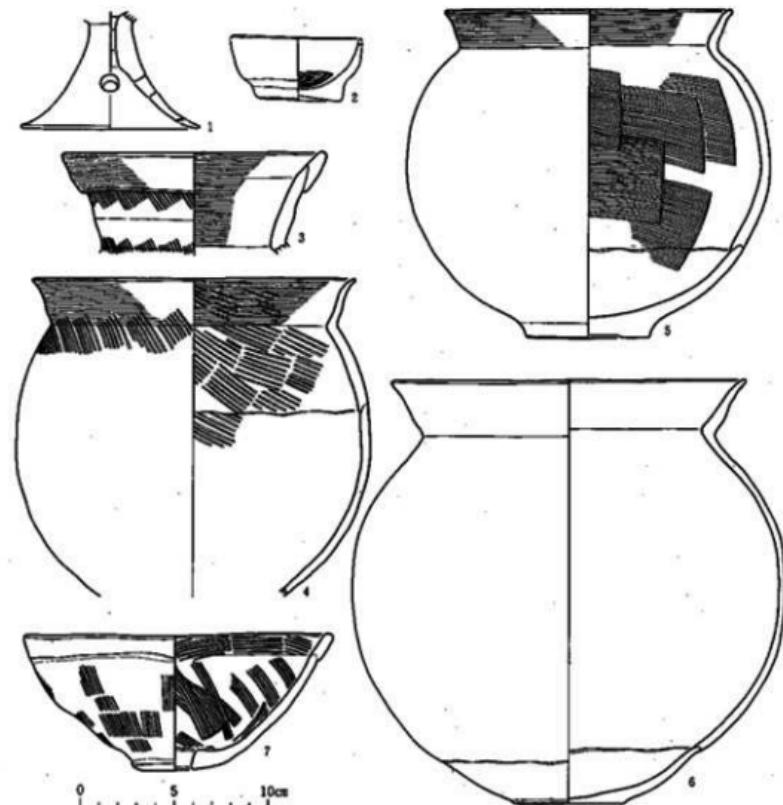
| 層位 | 層No | 土色 | 土性 | 備考 |
|-----|-----|----------------|------|----|
| 第1層 | 1 | 褐色(7.5 YR 4/6) | シルト? | |
| | 2 | 褐色(7.5 YR 4/6) | | |
| 第2層 | 3 | 暗褐色(5 YR 3/0) | シルト? | |

第56図 第38号住居跡

破片 1 点・甕底部破片 1 点が出土しているだけである。

第38号住居跡

〔平面形・重複〕第38号住居跡は第4・5号住居跡・第1焼土遺構と重複し、第1焼土遺構によって切られている。しかし、第4・5号住居跡とは重複部分の堆積土が薄く、切り合いは確認することができなかった。住居平面形は隅丸正方形で、規模は南北軸3.9m・東西軸3.8mである。



| 番号 | 部位 | 基部 | 特 徴 | 径 | 深 | 断 面 | 部位 | 基部 | 特 徴 | 径 | 深 |
|----|-----|----|-------------------------|-----------|---|--------|----|-----------------------|-----------|---|---|
| 1 | 住居内 | 裏作 | 内・外縁：摩滅 | 36E-Po. 4 | 5 | 板 | 壁 | 外縁：摩滅 内底：ヨコナリ・ヘラナリ | 36E-Po. 7 | | |
| 2 | 床 | 坪 | 外縁：オサエ 内縁：ヘタナギ | 36E-Po. 3 | 6 | 板 | 壁 | 内・外縁：摩滅 | 36E-Po. 5 | | |
| 3 | 住居内 | 造 | 外縁：ヨコナリ・ヘラナリ 内縁：ヨコナリ | 36E-Po. 2 | 7 | 板 | 壁 | 外縁：オサエ・削毛目・ケヌリ 内底：削毛目 | 36E-Po. 1 | | |
| 4 | 床 | 壁 | 外縁：ヨコナリ・削毛目 内縁：ヨコナリ・削毛目 | 36E-Po. 6 | | | | | | | |

第57図 第38号住居跡出土土器

〔壁〕検出された壁は地山で、床面および周溝からほぼ垂直に立ちあがる。

〔床面〕住居床面は掘り方底面（地山）と一致し、ほぼ平坦である。

〔柱穴〕柱穴は検出されなかった。

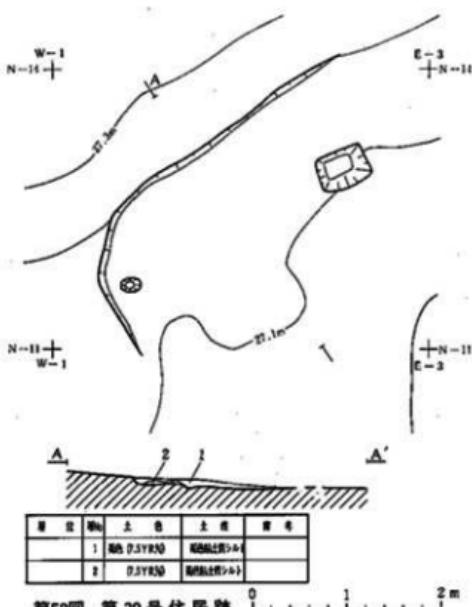
〔周溝〕住居南東隅の部分を除いて壁直下のほぼ全域に周溝がめぐっている。周溝の断面は「U」状で、幅10~25cm・深さ2~8cmである。

〔炉〕住居中央部と、南西に偏った部分の床面が2ヶ所焼けており（焼面）、炉と考えられる。焼け面は2ヶ所とも不整形で、その大きさは中央部のものが60×50cm、南西側のものが70×40cmである。

〔貯蔵穴状ピット〕住居南東隅の部分に貯蔵穴状のピット（P₁）がある。平面形は長方形で、底面は平坦、壁は緩やかに立ちあがる。規模は長軸70cm・幅52cm・深さ22cmである。

〔堆積土〕住居内堆積土は2層に大別され、その堆積状況は将棋倒し状というよりは水平状に近い。第1層は暗褐色の砂質土で、上部に部分的に分布している。第2層は褐色の砂質土で、焼土・木炭を含み、住居内全体に堆積している。床面に近い部分では、焼土・木炭の量が多い。

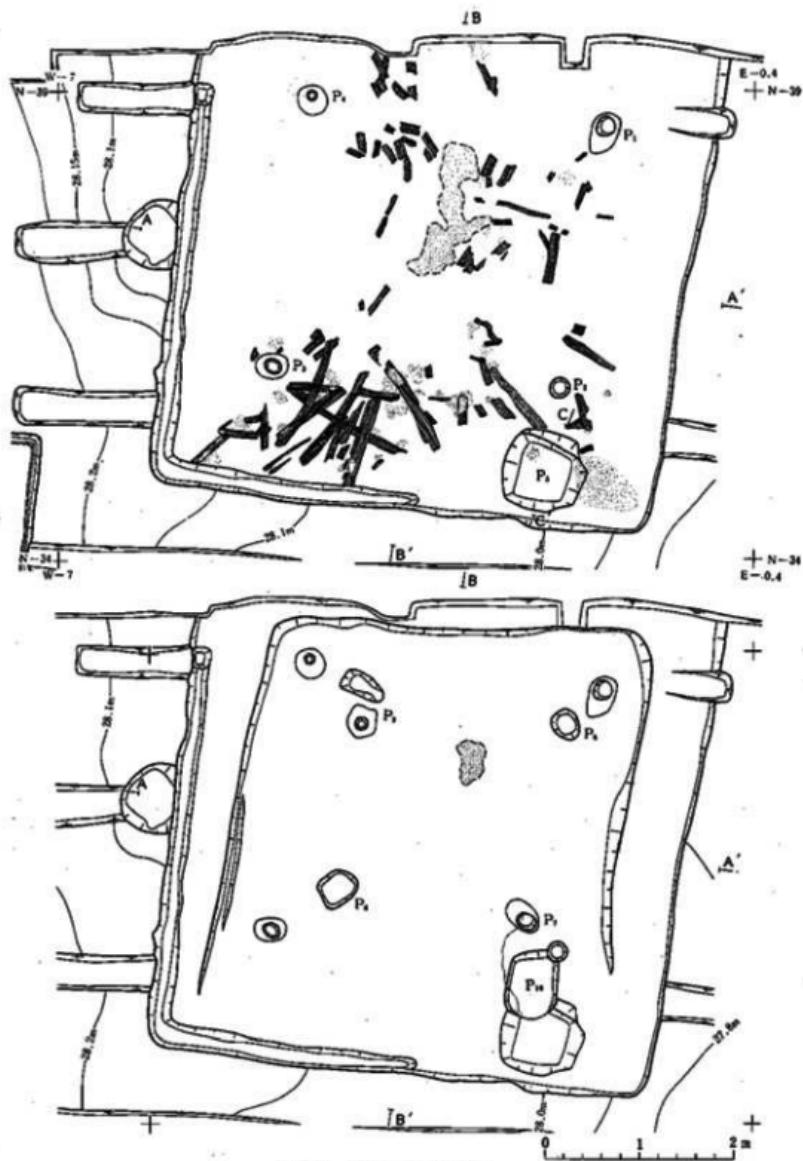
〔遺物の出土状況〕遺物は床面からまとまって出土している。第2層・層不明としたものも、床面に近い位置から出土している。第2層：高壺脚部破片1点 P₁：甕底部破片1点 床面：壺1点・甕3点・瓶1点 層不明：器台1点・壺1点・甕口縁部破片2点・甕底部破片1点



第58図 第39号住居跡

第39号住居跡

〔概要〕第39号住居跡は大部分が削平を受け、北壁と北西隅の部分だけが残っていた。残存部分から住居平面形は隅丸方形と推定されるが、規模等は不明である。検出された壁は地山で、緩やかに立ちあがる。床面は掘り方底面（地山）と一致し、ほぼ平坦である。周溝・柱穴等の施設は検出されなかった。住居東側のピットは平面形が長方形で長さ55cm・幅40cm・深さ40cm



第59図 第40・41号住居跡

で、貯蔵穴状をしているが、さだかでない。

〔堆積土・遺物の出土状況〕住居内堆積土は褐色粘土質シルトで、場所によって幾分色調が異なる。遺物は出土しなかった。

第40・41号住居跡

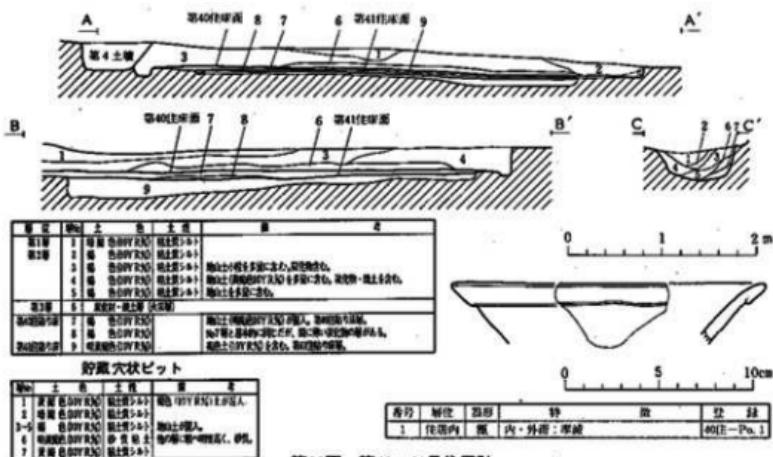
〔平面形・重複〕第40・41号住居跡は重複しているが、両者とも平面形がいま相似形で、対角線も共通していることから、改築による拡張が行なわれたもの(第41号住一第40号住)と推定される。平面形は、隅丸正方形で、規模は第40号住居跡が南北軸5.6m(北壁が調査区外のため柱穴配置などから推定)・東西軸5.4m、第41号住居跡が南北軸4.2m・東西軸3.9mである。

〔壁〕第40号住居跡の壁は地は住居掘り方に土を埋め、貼り床したものである。第41号住居跡の壁は改築の際に取り壊され、住居掘り方と床面が残っていた。

〔床面〕第41号住居跡の床面は住居掘り方に土を埋め、貼り床したものである。第40号住居跡の床面は、さらにその上に貼床をしたものである。

〔柱穴〕第40号住居跡の柱穴は4個(P₁～P₄)ある。これらの柱穴は住居平面形の対角線上に位置し、結んだ線は住居平面形と相似形である。柱間は、東西軸・南北軸とも3mである。第41号住居跡の柱穴も4個(P₆～P₉)あり、第40号住居跡の柱穴と同様住居平面形の対角線上に位置し、結んだ線は住居平面形と相似形である。柱間は、東西軸・南北軸とも2mである。

〔周溝〕第40号住居跡の西壁と南壁(西側)直下に、断面「U」状の周溝がある。周溝の幅は約20cmで、深さは約5cmである。第41号住居跡では明確な周溝は検出されなかった。



第60図 第40・41号住居跡

〔床〕 住居中央部から東側に偏った部分の床面が焼けている。焼面の形は不整形で、長さ150cm・幅60cmである。この範囲の中で2ヶ所が特に強く焼けている（北端40×30cm・南端40×20cm）。第41号住居跡の床面もほぼ同じ場所が焼けている。焼面の形は不整形で、長さ50cm・幅30cmである。

〔貯蔵穴状ピット〕 第40・41号住居跡とも貯蔵穴状ピットは住居南東隅の部分にある。第40号住居跡の貯蔵穴状ピット（P₅）は隅丸長方形で、南北軸70cm・東西軸90cm・深さ40cmである。内部には地山の土を混入した褐色ないしは黄褐色土が堆積していた。第41号住居跡の貯蔵穴状ピット（P₁₀）は、隅丸長方形で南北軸80cm・東西軸55cm・深さ12cmである。

〔堆積土〕 第40号住居跡の堆積土は3層に大別される。第1層は暗褐色粘土質シルトで、住居中央部を中心として分布している。第2層は褐色粘土質シルト層で、住居全体に広く・厚く分布している。地山土の混入の度合いによって4層に細分され、壁際程その混入量が多い傾向にある。第3層は、焼土・木炭層で、床面を覆う形で堆積している。また、炭化材も多く、住居中央に向って放斜状にならんでいる。これらは火災によって上部構造が焼け落ちたものと推定される。

〔遺物の1出土状況〕 遺物はいずれも小破片で、出土状況に規則性はみられない。第40号住居跡第1層：甌1点 床面：甌底部破片1点 層不明：甌底部破片2点 第41号住居跡：甌口縁部破片1点・甌底部破片1点

第42号住居跡

〔平面形・重複〕 住居平面形は四隅の角張る正方形で、他の遺構との重複はない。規模は、南北軸6.00m・東西軸5.90mである。

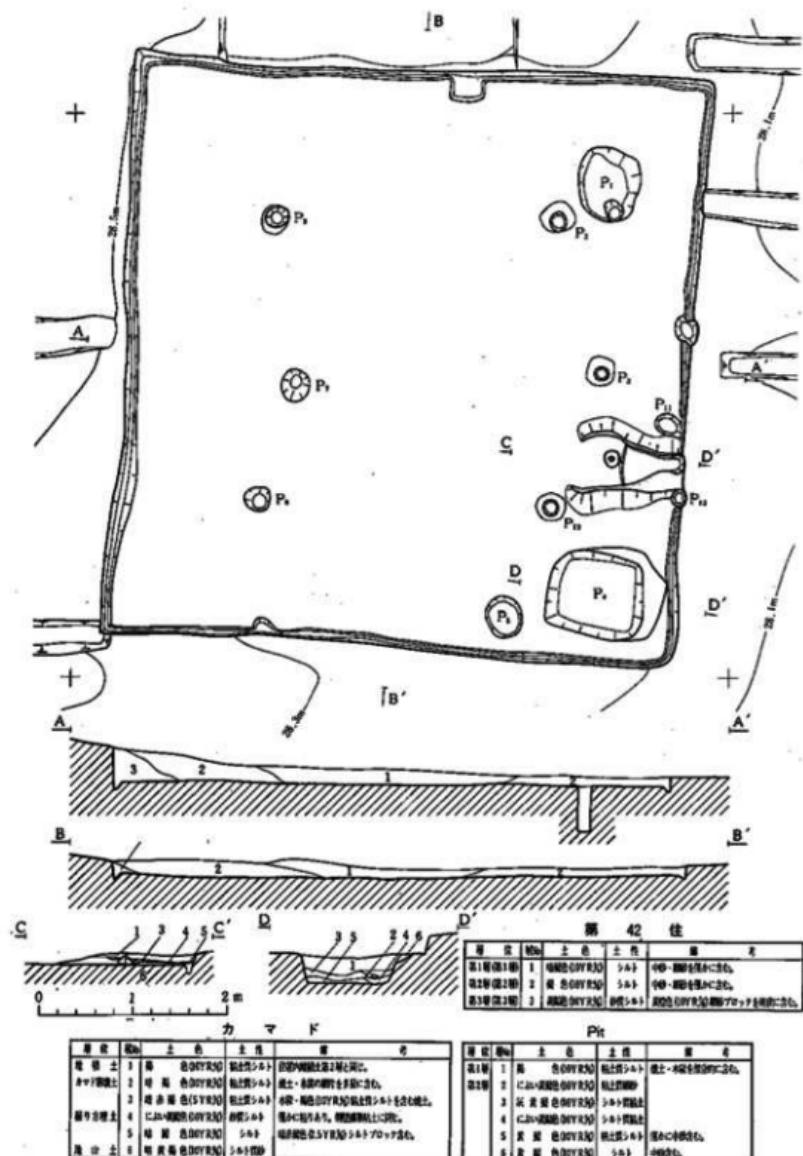
〔壁〕 検出された壁は地山で、周溝からほぼ垂直に立ちあがる。

〔床面〕 床面はほぼ平坦で、住居掘り方底面（地山）と一致している。

〔柱穴〕 柱穴は4個（P₂・P₆・P₉・P₁₃）ある。P₂・P₉・P₁₃は掘り方と柱痕跡の識別ができた。4個の柱穴は住居平面形の対角線上にあり、それぞれを結んだ線は住居平面形と相似形である。柱間は南北軸・東西軸とも3.00mである。この他柱穴状のピットが4個（P₃・P₇・P₁₁・P₁₂）ある。P₁₁・P₁₂はカマド煙道部先端の両側に対になって配置されている。P₃・P₇については配置に規則性を見い出せない。

〔周溝〕 壁の直下にはカマド部分を除いて、周溝がめぐっている。周溝は断面が「L」状で、幅約10cm・深さ約5cmである。

〔カマド〕 住居東辺の中央南側寄りの部分にカマドが構築されている。規模は長さ125cm・幅110cmである。燃焼部と煙道部の側壁は粘土を積みあげて構築している。燃焼部は幅が広く、煙道



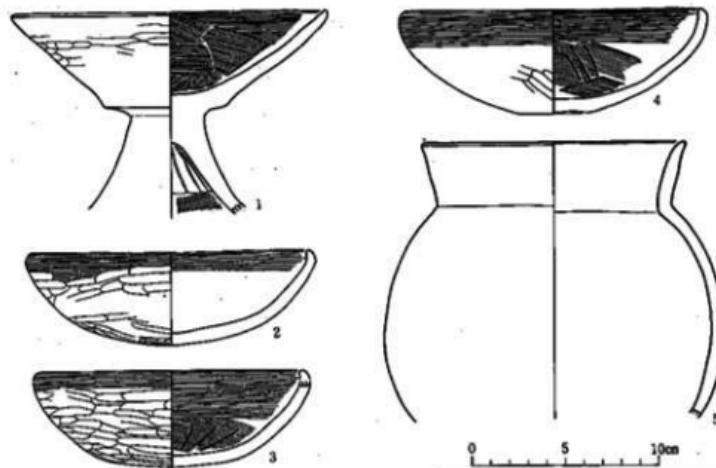
第61図 第42号住居路

部は先端に向ってせまくなる。燃焼部底面は僅かに回んでいるが、煙道部底面は段を境として高くなっている。燃焼部の奥壁（段）前面の中央には土師器高坏をふせた支脚がある。煙道部は先端に向って幅がせまくなり、先端部分が再びふくらみ円くなる。円になった先端は煙り出しと推定される。燃焼部底面は赤褐色に焼けて硬くなつており、支脚の前面が特に顯著である。段を境に煙道部は暗赤褐色に焼け焦げたような状態になっている。なお、柱穴の項でも述べたように煙り出しの両側には対になって柱穴が2個あり、煙り出しに伴う上部構造のための柱の存在が推定される。

〔貯藏穴状ピット〕住居東南隅に長方形のピット（P₄）がある。規模は南北軸90cm・東西軸100cm・深さ30cmである。ピット内の堆積土は2層に大別される。上部には褐色粘土質シルト、下層には黄褐色のシルト質粘土もしくは粘土質シルトが水平状に堆積し、下部には砂が混っている。

〔堆積土〕住居内堆積土は3層にわかれ特異倒し状の堆積状況を示している。第1層は暗褐色シルトで、住居中央部に分布する。第2層は褐色シルトで住居壁と中央部の間に広く分布している。第3層は黄褐色の砂質シルトで地山土ブロックを斑状に含み壁際に分布している。

〔遺物の出土状況〕遺物は床面・細部（カマド・貯藏穴状ピット）からまとまって出土している。第1層：甕口縁部破片1点 第2層：甕口縁部破片1点・甕底部破片1点 P₄：壺1点・甕口縁部破片1点 カマド：坏2点 カマド支脚：高坏1点 床面：坏1点 層不明：坪底部破片1点



| 番号 | 部位 | 断面 | 特徴 | 基盤 | 番号 | 部位 | 断面 | 特徴 | 基盤 |
|----|----------|--------------------------|-----------------------|----|----|----------------|------------|----|----|
| 1 | カマド 底 | 断面：180°円錐 内面：ナメヘナナナナナヘナナ | 42E-P ₄ .4 | 4 | 底 | 断面：ヨコナメヘナナナヘナナ | 内面：ヨコナメヘナナ | | |
| 2 | カマド 底 | 外面：ヨコナメ・ミガキ 内面：ヨコナメ | 42E-P ₄ .1 | 5 | 底 | 内・外面：半球 | | | |
| 3 | カマド 底 | 外面：ヨコナメ・ミガキ 内面：ヨコナメ・ヘナナ | 42E-P ₄ .3 | | | | | | |

第62図 第42号住居跡出土土器

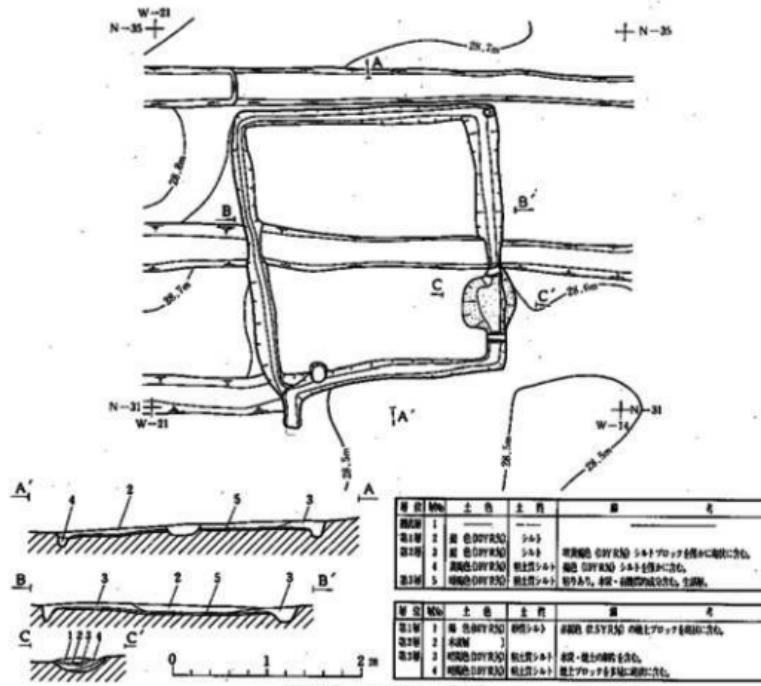
第43号住居跡

〔平面形・重複〕 住居平面形は正方形である。規模は南北軸2.80m・東西軸2.60mである。他の遺構との重複はみられない。

〔壁・床面・柱穴・周溝〕 壁および床面は地山である。壁は周溝からほぼ垂直に立ちあがる。床面はほぼ平坦である。周溝は断面「V」状で、幅20~30cm、塗さ約10cmである。この周溝は住居南西隅の部分で住居外に約40cmのび、溝の先端はトンネル状になっている。柱穴は検出されなかった。

〔カマド〕 住居東辺南側にある。住居東壁から床面を掘りくぼめ（幅63cm・奥行60cm・深さ10cm）、側壁に粘土を積みあげたものである。側壁上部は崩壊し、下部が10~20cmの高さで残っていた。カマド底面・奥壁は赤褐色に焼けており、奥壁が特に著しい。カマド内には側壁・天井部の崩壊と推定される焼土ブロックが堆積していた。

〔堆積土〕 住居内堆積土は3層に大別される。第1・2層は将棋倒し状の堆積状況を示し、第3層は床面に薄く張り付いている。第1層は褐色シルトで住居全体に、第2層は褐色ないしは



第63図 第43号住居跡

黄褐色シルトで壁沿いに分布している。第3層は木炭・有機質成分を含む褐色シルトで、堆積状況から生活層と考えられる。

遺物は、第1層から甕口縁部破片が3点出土している。

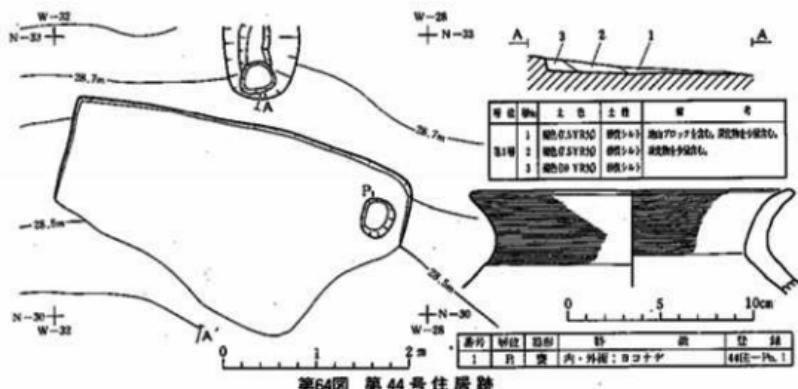
第44号住居跡

〔平面形・重複〕住居北側は残っているが、南側は削平されている。残存部分から住居平面形は方形と推定される。規模は、東西軸が3.65mであるが、南北軸は不明である。他の遺構との重複はみられない。

〔壁・床面・施設〕検出された壁は地山で、床面からほぼ垂直に立ちあがる。床面はほぼ平坦で、住居掘り方底面と一致している。床面の北東隅の部分に橢円形のピット（40×35×40cm）がある。この他の施設は検出されなかった。

〔堆積土〕住居内堆積土は、いずれも褐色砂質シルトであるが、細かな色調・混入物などによって3層に細別される。その堆積状況は将棋倒し状である。

〔遺物の出土状況〕遺物は貯蔵穴状ピット（P₁）から、甕1点・甕口縁部破片2点が出土している。



第64図 第44号住居跡

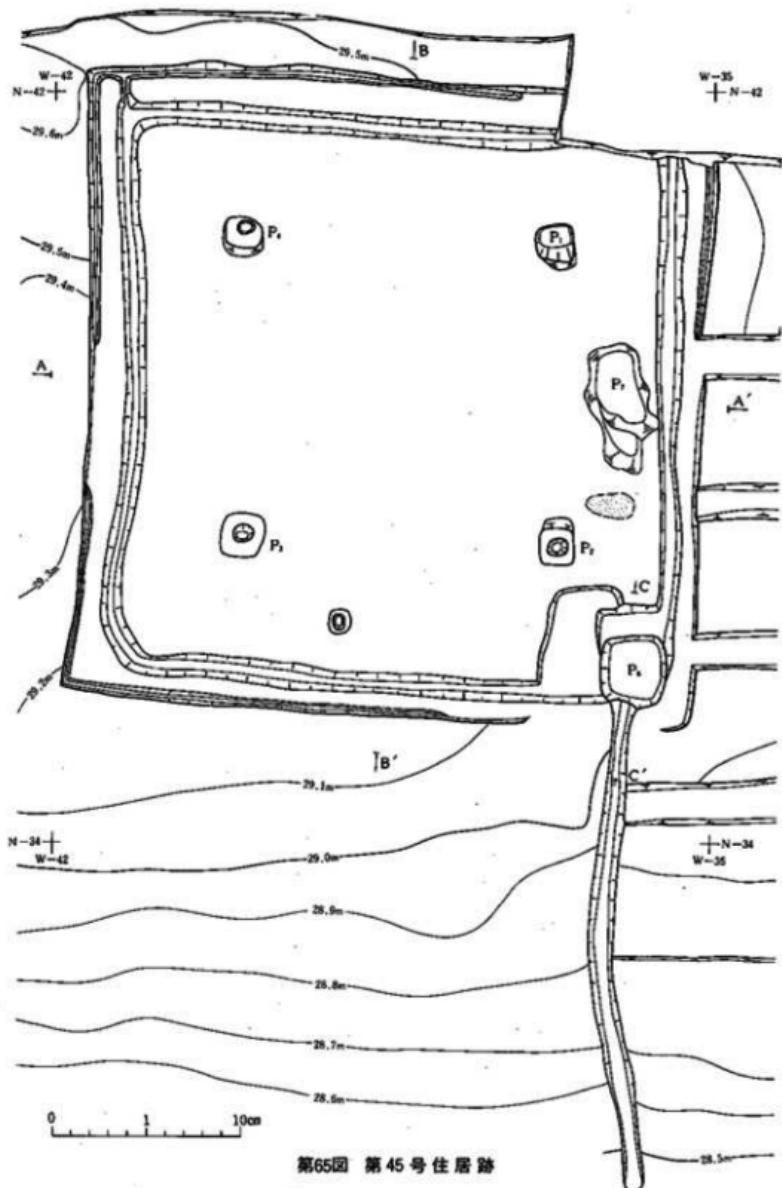
第45号住居跡

〔平面形・重複〕住居平面形は、四隅の張る正方形である。規模は、南北軸6.70m東西軸6.45mである。第2号土壙と重複しているが、切り合ひは不明である。

〔壁〕検出された壁はすべて地山で、床面および周溝底面からほぼ垂直に立ちあがる。

〔床面〕床面はほぼ平坦で、住居掘り方底面（地山）と一致している。

〔柱穴〕柱穴は4個（P₁～P₄）検出された。このうち、P₂～P₄は掘り方と柱痕跡の識別がで



第65図 第45号住居 路

きた。また、P₁～P₄は住居平面形の対角線上にあり、それぞれを結んだ線は住居平面形と相似形である。柱間はいすれも、3.30mである。

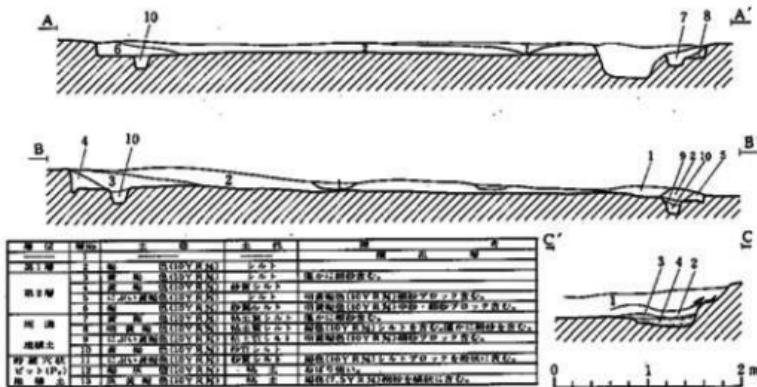
〔周溝〕 周溝は壁に沿って二重にめぐっている。壁直下の周溝は、断面「L」状で、幅が狭く（5～10cm）、浅い（約5cm）。また、この周溝は部分的に途切れ、全周しない。内側の周溝は断面「U」状で、幅が広く（20～30cm）、深い（10～15cm）。この周溝は壁に沿って全周し、住居南東隅において、貯蔵穴状ピット（P₆）に接続する。また、貯蔵穴状ピットから住居外に溝がのびている。この溝の規模・形状は内側周溝と共通するもので、住居南辺に直交し、斜面の傾斜に沿って南側に5m続いている。

〔カマド〕 住居東辺中央の南寄り部分の床面が、楕円形（25×50cm）に焼けている。焼面に伴う上部構造および、その痕跡は検出されなかった。

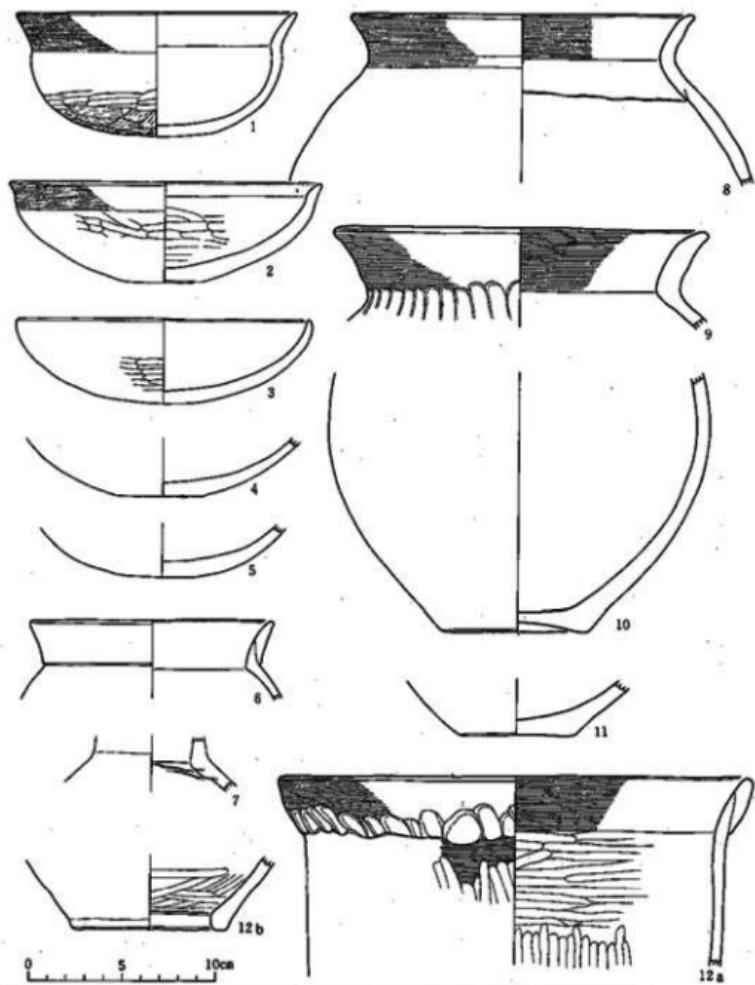
〔貯蔵穴状ピット〕 住居東南隅に隅丸正方形のピット（P₆）がある。規模は70×70cmで、深さが40cmである。ピットの北側と西側には段状の遺構（2段）がある。この段は方形状のもので比高は5～10cmである。ピットの埋り方をみると、最下層に細砂を縞状に含む灰黄褐色の粘土層があり、その上を褐灰色の薄い粘土層が覆っている。この粘土層は、住居外にのびる溝の底面にもおよんでおり、P₆と住居外にのびる溝がほぼ同じ頃に埋りはじめたことを示している。

〔堆積土〕 住居内堆積土は2層に大別される。第1層は褐色シルト層で、中央部を中心として住居内の広い範囲に堆積している。第2層は黄褐色シルト・砂質シルトもしくは黄褐色中・細砂ブロックを含む褐色砂質シルトで、住居の壁沿に堆積している。

〔遺物の出土状況〕 遺物は、床面・細部（周溝・貯蔵穴状ピット）からまとまって出土している。第1層：壙1点 周溝：壙2点 P₆第2層上面：甕5点 P₆第2層：壺1点 床面：壙1点・甕1点



第66図 第45号住居断面図



第67図 第45号住居跡出土土器

| 番号 | 部位 | 形態 | 特徴 | 番号 | 部位 | 形態 | 特徴 | 番号 | 部位 | 形態 | 特徴 |
|----|-------|----|-----------------------|-----------|----|----|----|-----------------------------|------------|----|----|
| 1 | 底 | 环 | 外面：ヨコナギ・ミガキ・ケズリ 内面：厚底 | 45E—Pn. 1 | 7 | 底 | 壁 | 外面：厚底 内面：オヤエ | 45E—Pn. 7 | | |
| 2 | 周溝 | 环 | 外面：ヨコナギ・ミガキ 内面：ミガキ | 45E—Pn. 2 | 8 | 周溝 | 壁 | 外面：ヨコナギ 内面：ヨコナギ | 45E—Pn. 9 | | |
| 3 | 底 | 环 | 外面：ミガキ 内面：厚底 | 45E—Pn. 3 | 9 | 周溝 | 壁 | 外面：ヨコナギ・ナツツケ 内面：ヨコナギ | 45E—Pn. 8 | | |
| 4 | 第1腰 | 环 | 外面：厚底 内面：ミガキ | 45E—Pn. 5 | 10 | 周溝 | 壁 | 内・外面：厚底 | 45E—Pn. 12 | | |
| 5 | 周溝 | 环 | 外面：ミガキ 内面：厚底 | 45E—Pn. 4 | 11 | 周溝 | 壁 | 内・外面：厚底 | 45E—Pn. 11 | | |
| 6 | E1腰2筋 | 壁 | 内・外面：厚底 | 45E—Pn. 6 | 12 | 底 | 板 | 外面：ヨコナギ・ミガキ・ケズリ 内面：ヨコナギ・ミガキ | 45E—Pn. 10 | | |

第46号住居跡

〔平面形・重複〕 第46号住居跡は第47号住居跡と重複しているが、重複部分の堆積土が薄く切り合いで明確にできなかった。住居平面形は隅丸正方形で、規模は南北軸5.3m・東西軸4.8mである。

〔壁〕 検出された壁は地山で、床面から周溝を経て僅かに傾斜しながら立ちあがる。

〔床面〕 住居床面は掘り方底面（地山）と一致し、ほぼ平坦である。

〔柱穴〕 柱穴は4個（P₁～P₄）検出され、P₁～P₃では掘り方と柱痕跡を識別することができた。また、4個の柱穴は住居平面形の対角線上に位置し、結んだ線は住居平面形と相似形となる。柱間は南北軸2.7m・東西軸2.4mである。

〔周溝〕 周溝は二重にめぐっている。外周溝は壁直下、内周溝は外周溝内側約20cmの所にあり両者とも断面「V」状である。外周溝は幅約20cm・深さ約10cm、内周溝は幅20～30cm・深さ約10cmである。この他、南辺中央に周溝と直交する溝が走っている。断面「V」状で長さは100cm・幅20cm・深さ10cmである。

また、住居南西隅から住居外に溝が約2mのび、右折して約1m続いている。この溝は断面「V」状で、幅約50cm・深さ約25cmで、先端にはピットがある。先端のピットは直径25cm・深さ60cmである。

〔炉〕 住居中央から僅かに北西に偏った部分の床が焼けしており（焼面）、炉と考えられる。この焼面は不整椭円形をしており、その範囲は80×50cmである。

〔堆積土〕 住居内堆積土は3層に大別され、特徴倒し状の堆積状況を示している。第1層は褐色土層で住居中央の上部に、第2層は暗褐色土層で、住居中央部の床面上に、第3層は褐色ないしは黄褐色土で、壁沿いや周溝内に堆積している。

〔遺物の出土状況〕 遺物は各層から出土しており、出土状況に特にまとまりはみられない。

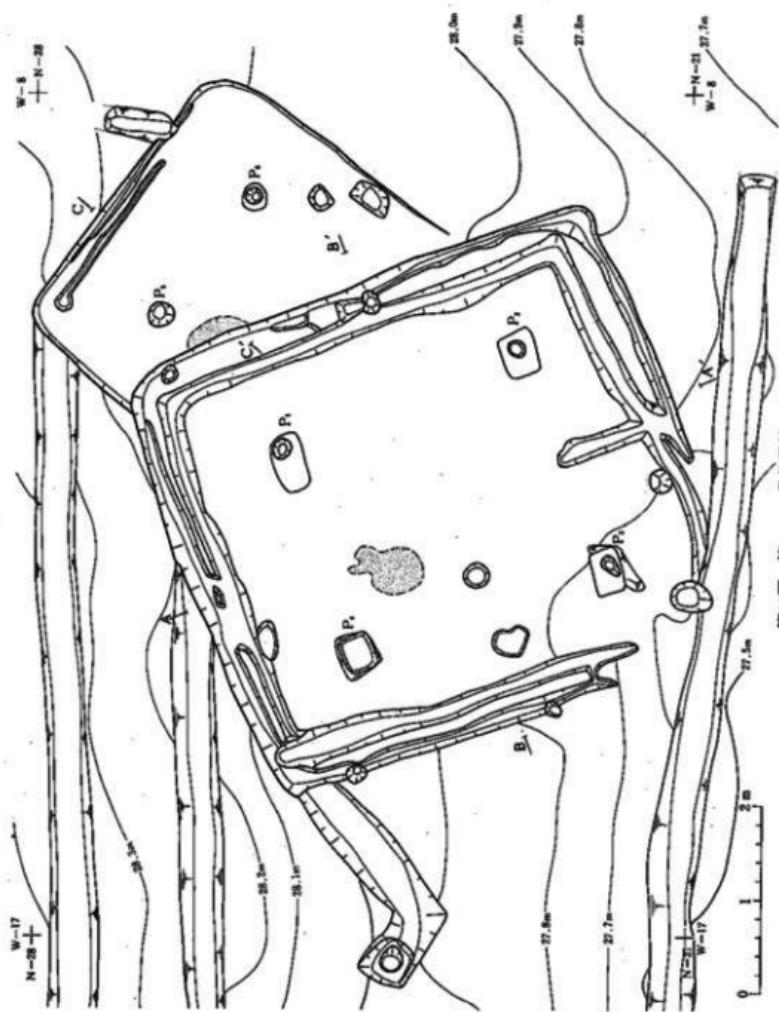
第1層：高壙脚部破片1点・器台1点・壙口縁部破片1点・壺1点・甕口縁部破片3点・甕底部破片6点 第2層：甕底部破片1点・床面：高壙脚部破片2点・甕底部破片2点・甕口縁部破片1点 層不明：壺？1点・甕底部破片2点

第47号住居跡

〔平面形・重複〕 第47号住居跡は第46号住居跡と重複しているが、重複部分の堆積土が薄く、切り合いで明確にできなかった。また、第46号住居跡と重複している住居南側は壁・床面を検出することができなかつた。検出部分から、住居平面形は隅丸方形と推定される。規模は東西軸3.4mである。

〔壁〕 検出した壁は地山で、床面および周溝からほぼ垂直に立ちあがる。

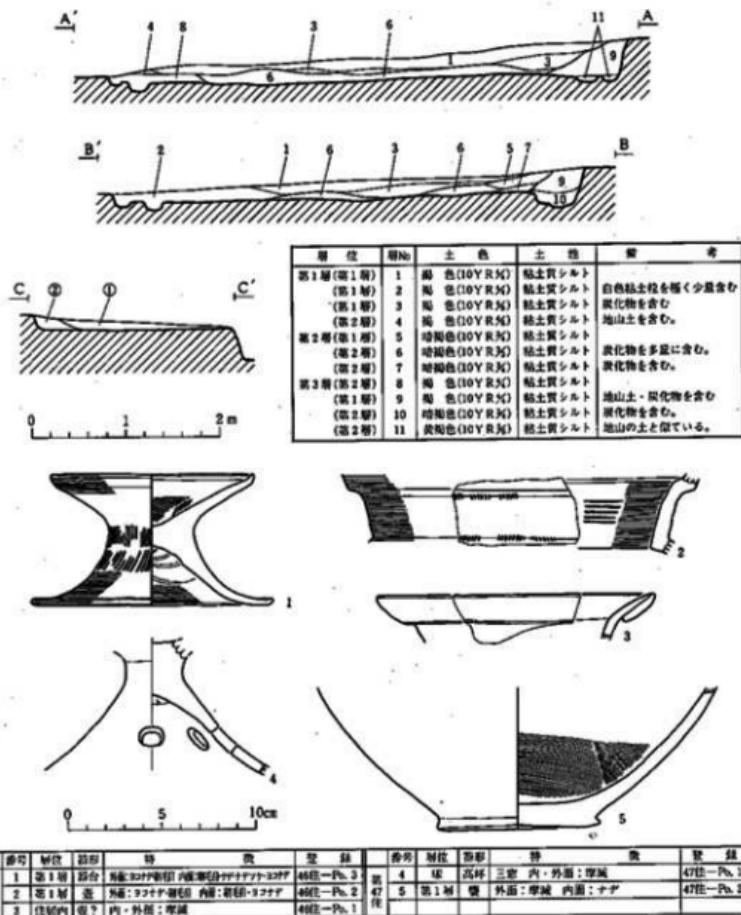
第65圖 第46・47号往届跡



〔床面〕住居床面はほぼ平坦で、第46号住居跡と重複していない部分では掘り方底面（地山）と一致している。

〔周溝〕北壁下に二本の溝が走っている。両者とも断面「V」状で幅約10cm・深さ約5cmである。

〔柱穴〕柱穴は2個（P₅・P₆）検出され、P₆は掘り方と柱痕跡の識別ができる。P₅・P₆は推定住居対角線上に位置し、結んだ線は住居北壁と平行になる。P₅・P₆と対になる2個の柱穴は第46号住居跡と重複している部分に存在するものと推定される。



第69図 第46・47号住居跡

〔床〕 P₅南側の床面が梢円形に焼けており（焼面）、炉と考えられる。その範囲は、第46号住居跡と重複している部分では確認できなかったが、南北軸70cmである。

〔堆積土〕 住居内堆積土は2層に細分されるが、両者とも褐色（10YR4/4）粘土質シルトで基本的には同じである。No.1層は明度が高く住居中央部に、No.2層は炭化物を含み住居壁際に分布するという程度のちがいである。

〔遺物の出土状況〕 遺物は少量で、出土状況にまとまりもみられない。第1層：甕1点・甕口縁部破片1点・甕底部破片1点 床面：高坏1点

第48号住居跡

〔平面形・重複〕 第48号住居跡は新旧二時期の住居が重複している。重複している住居跡は、平面形が相似形で、対角線もほぼ共通していることから、改築によって拡張が行なわれたものと推定される。両者とも住居南壁は削平されているが、残存する壁・柱穴・周溝のあり方から平面形は方形と推定される。規模は、第1期が東西軸4.6m、第2期が東西軸5.3mである。

〔壁〕 第1・2期の残存壁は、両者とも地山である。第1期の壁は北西隅から西壁北半部が高さ約10cm程残っているが、その他は第2期の周溝と削平によって失なわれている。第2期の壁は削平を受けた南壁を除き残っている。北壁は高さ50cmあり、最も保存がよい。

しかし、この北壁は、下部がほぼ垂直で保存は良いが、上部は崩落が顕著で斜めになっている。

〔床面〕 床面は第1・2期とも平坦で、厚さ10~20cmの黄褐色砂質粘土による貼り床がなされている。

〔周溝〕 第1・2期とも、壁から20~60cm内側に断面「U」状の周溝がめぐっている。周溝の幅は20~40cm・深さ10~30cmである。この他、第2期の北壁直下には断面「J」状で幅10cm・深さ4cm・長さ150cmの溝がある。

〔カマド?〕 第2期住居の東辺中央南側の床面が焼けている。この焼面は梢円形で、35×15cmの大きさをしているが、側壁などの上部構造は検出されなかつた。

〔柱穴〕 柱穴は第1期の床面で4個（P₇～P₁₀）、第2期の床面で4個（P₁～P₄）検出された。それぞれを結んだ線は長方形で、両者ともほぼ同じ対角線上に位置している。柱間は第1期が南北軸1.9m・東西軸2.2m・第2期は南北軸2.5m・東西軸2.8mである。

〔貯蔵穴状ピット〕 住居南東隅と推定される位置に隅丸長方形の貯蔵穴状ピット（P₅・P₆）がある。第1期のP₆は南北軸80cm・東西軸50cm・深さ40cm、第2期のP₅は南北軸50cm・東西軸60cm・深さ60cmである。P₅がP₆を切っている。

〔堆積土〕 第1期の住居跡堆積土は、第2期住居跡の貼り床層である。第2期住居跡堆積土は3層あり、将棋倒しの堆積状況を示している。第1層は褐色シルト層で住居全体に分布して

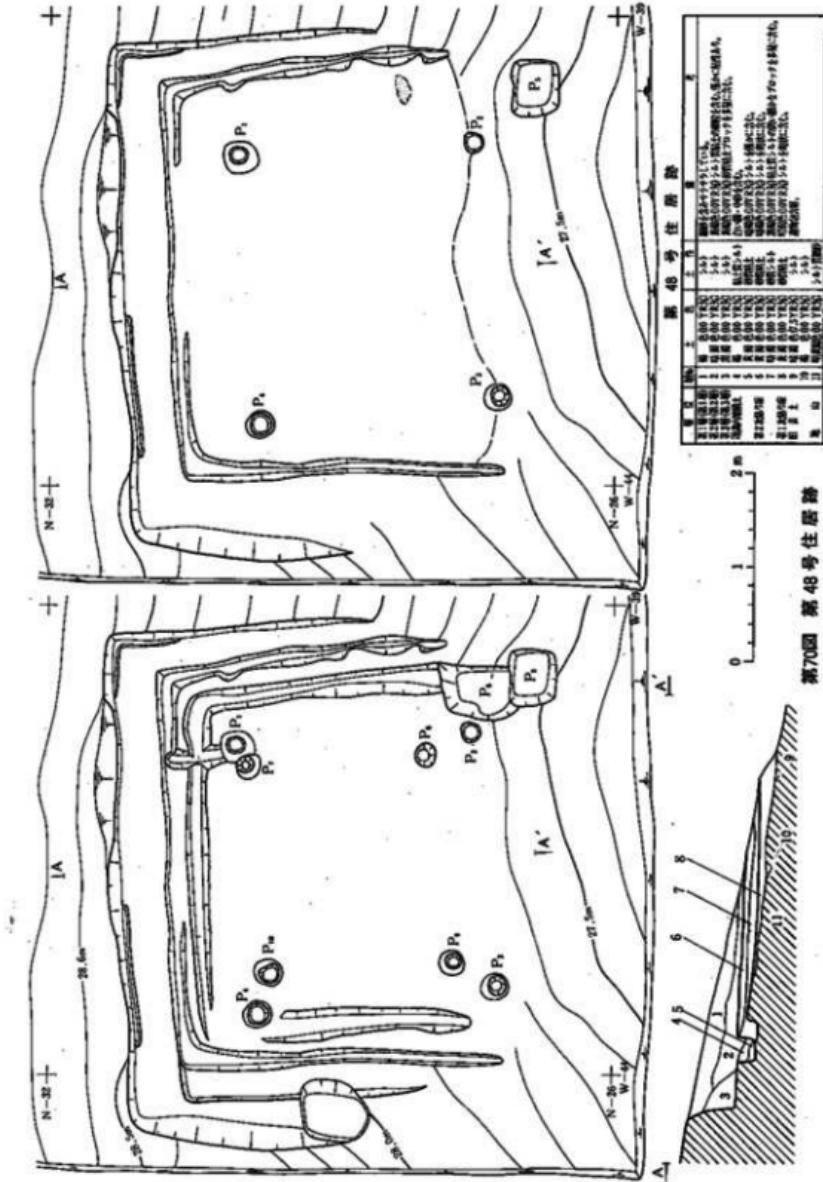
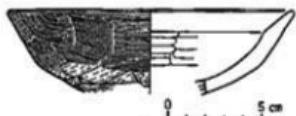


图700 第48号住宅房

いる。第3層は黄褐色砂質粘土と黒褐色シルトが斑状になつた層で壁際には分布している。

〔遺物の出土状況〕 遺物は第2期住居の各層から出土しており、出土状況にまとまりはみられない。第1層：甕口縁部破片4点 第2層：甕口縁部被片2点 第3層：甕底部破片1点 床面：坏1点・甕口縁部破片1点



| 層位 | 層次 | 形状 | 特徴 | 度量 |
|----|----|----|----------------|-----------|
| 1 | 底 | 片 | 外縁：ナラカズリ 内縁：1枚 | 48E-Pl. 1 |

第71図 第48号住居跡出土土器

第49号住居跡

〔平面形・重複〕 住居平面形は隅丸正方形である。規模は南北軸4.2m・東西軸4.2mである。第50号住居跡と重複し、その堆積土・床面を切っている。なお、住居東南隅の部分は後世の溝（桑植裁）によって破壊されている。

〔壁〕 検出された壁は上部が、第50号住居跡の堆積土、下部が地山である。壁は周溝からほぼ垂直に立ちあがる。

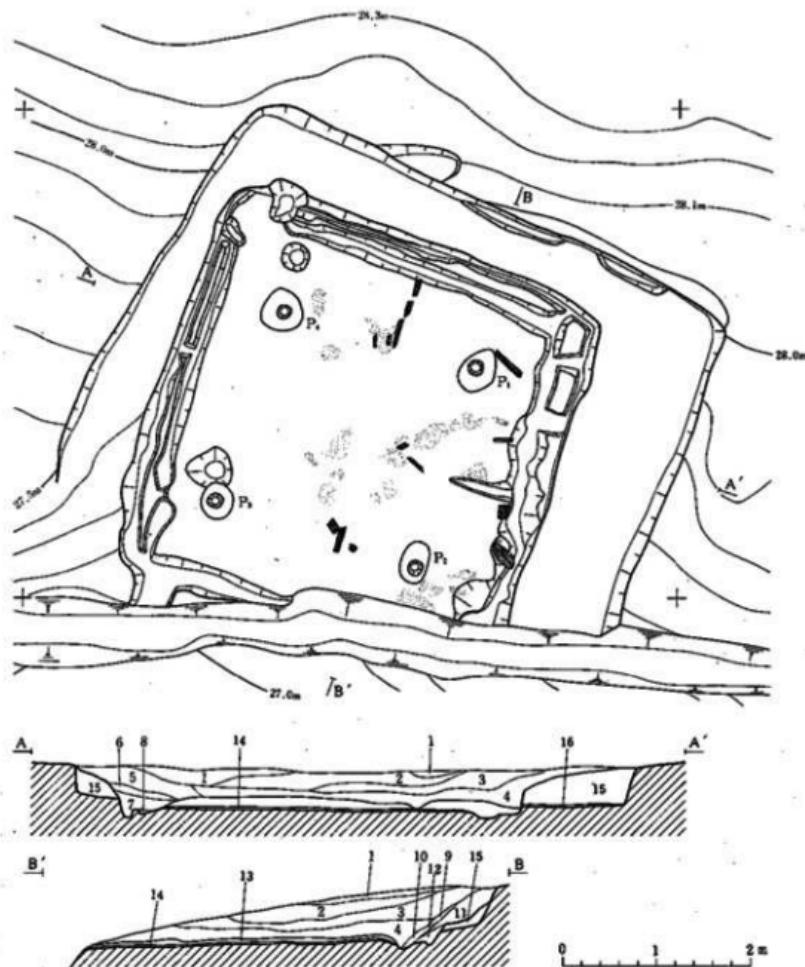
〔床面〕 床面はほぼ平坦で、部分的に薄い貼り床がなされている。床面上には暗褐色をした有機質層が薄く貼りついており、生活層と推定される。また、その上には焼土・灰が10~20cmの厚さで堆積し、炭化材が散乱していた。火災によって上部構造が崩落したものと推定される。

〔柱穴〕 柱穴は4個（P₁～P₄）検出され、いずれも掘り方と柱痕跡の識別ができる。柱間は東西軸・南北軸とも2.1mである。

〔周溝〕 周溝は壁に沿って二重にめぐっている。壁直下の周溝は東壁の北側から北壁・西壁にめぐっており断面「レ」状で、幅10~20cm・深さ約5cmである。内側の周溝は東・北・西壁にめぐり断面「W」状で、幅20~30cm・深さ5~10cmである。南壁では壁直下と内側の周溝が一体となっている。断面は「W」状で、幅30cm・深さ15cmである。また、住居南西隅の部分では内側と外側の周溝が一体となり、さらに住居外にのびている。この溝は断面「W」状で、幅40cm・深さ5cmである。

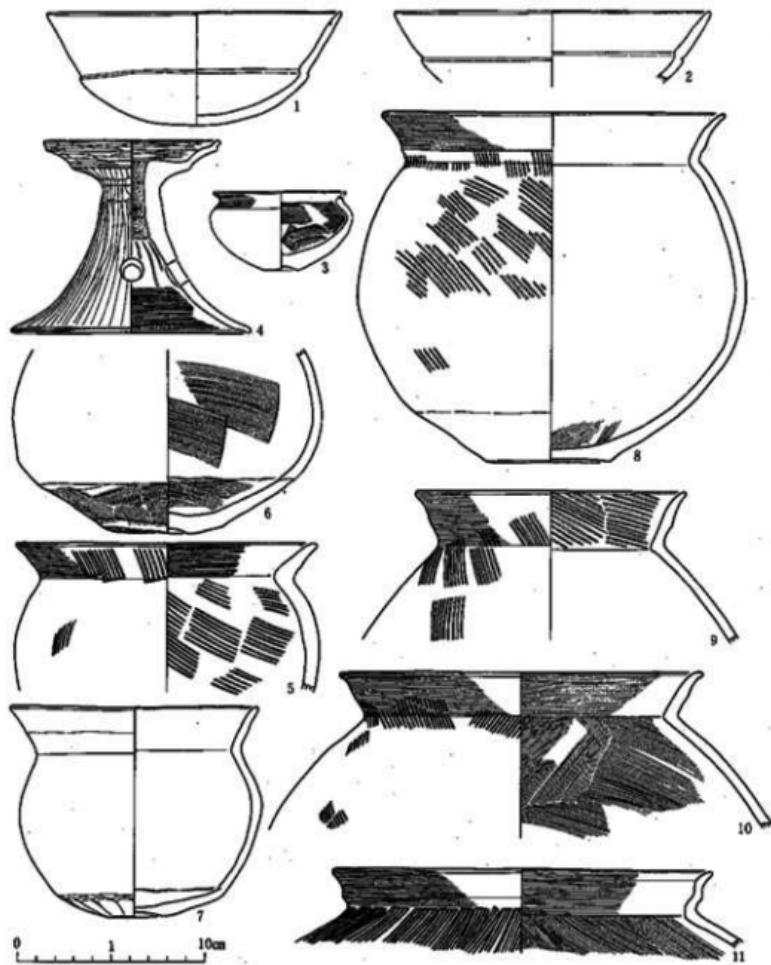
〔その他の施設〕 炉・貯蔵穴状ピットなどの施設は不明確で、検出できなかった。

〔堆積土〕 住居内堆積土は6層に大別される。第1～4層は将棋倒し状、第5・6層は水平状の堆積状況を示している。第1層は褐色シルト層で、住居中央の上部に小規模な分布をしている。第2層は黒褐色シルト層で、第1層下にやや広く分布している。第3層は暗褐色シルト層で第2層下にあって、住居中央から東側に広い分布を示す。第4層は色相が多様なシルト層で住居全体に分布し、壁際に向うに従って層厚を増す。第5層は火災層、第6層は生活層と推定されるものである。



| 區 | 號 | 土名 | 土種 | 面積 | 基 | 號 | 土名 | 土性 | 面 | 積 | |
|--------|---|----------|------|-------------------------|---------|----|---------|---------|-------------------------|-------------------------|--|
| 第1區第1號 | 1 | 新田009Y30 | 5.63 | | 9 | 新 | 老03 Y30 | 5.4 | 明里0.57M地土質5.55Y7.0Z5.5E | | |
| 第2區第2號 | 2 | 新田009Y30 | 5.43 | 明里-水稻耕作土壤(水田) | 10 | 新 | 老03 Y30 | 5.4 | 小河村多處有之。 | | |
| 第3區第3號 | 3 | 新田009Y30 | 5.43 | 明里-水稻耕作土壤(水田) | 11 | 新 | 老03 Y30 | 5.4 | 明里-水稻耕作土壤(水田) | | |
| 第4區第4號 | 4 | 新田009Y30 | 5.43 | 明里0.57M地土質5.55Y7.0Z5.5E | 12 | 新 | 老03 Y30 | 5.4 | 明里0.57M地土質5.55Y7.0Z5.5E | | |
| | 5 | 新田009Y30 | 5.43 | 明里0.57M地土質5.55Y7.0Z5.5E | 13 | 新 | 老03 Y30 | 5.4 | 明里-水稻耕作土壤(水田) | | |
| | 6 | 新田009Y30 | 5.43 | 明里0.57M地土質5.55Y7.0Z5.5E | 14 | 新 | 老03 Y30 | 5.4 | 明里-水稻耕作土壤(水田) | | |
| | 7 | 老03 Y30 | 5.43 | 明里0.57M地土質5.55Y7.0Z5.5E | 2020年1月 | 15 | 老 | 老03 Y30 | 5.4 | 明里0.57M地土質5.55Y7.0Z5.5E | |
| | 8 | 新田009Y30 | 5.43 | 明里0.57M地土質5.55Y7.0Z5.5E | 2020年2月 | 16 | 新 | 老03 Y30 | 5.4 | 明里0.57M地土質5.55Y7.0Z5.5E | |

第72圖 第49・50号住居跡



| 番号 | 部位 | 器形 | 特徴 | 基盤 | 番号 | 部位 | 器形 | 特徴 | 基盤 |
|----|-------|----|-----------------------------|--------|----|-----|----|---------------------------|--------|
| 1 | 第5層 | 環 | 内：外面：摩滅 | Po. 1 | 7 | 第5層 | 甕 | 内・外側：摩滅 | Po. 5 |
| 2 | 床 | 环 | 外側：滑減 内側：ミガキ | Po. 2 | 8 | 第5層 | 甕 | 外側：ミコナゲ・刷毛目 内側：ナゲ・摩滅 | Po. 12 |
| 3 | 床? | 鉢? | 外側：ミコナゲ・摩減 内側：ナゲ・ハラナゲ | Po. 11 | 9 | 第5層 | 甕 | 外側：ミコナゲ・刷毛目 内側：刷毛目 | Po. 4 |
| 4 | 第5層 | 器台 | 底：滑減 1件：コロナゲ・刷毛目 1件：ミコナゲ・ナゲ | Po. 3 | 10 | 第5層 | 甕 | 外側：ミコナゲ・刷毛目 内側：ミコナゲ・ナゲ | Po. 6 |
| 5 | 第5~9層 | 甕? | 外側：ミコナゲ・刷毛目 内側：ミコナゲ・刷毛目 | Po. 8 | 11 | 第5層 | 甕 | 1件：滑減 外側：ミコナゲ・刷毛目 内側：ミコナゲ | Po. 7 |
| 6 | 床 | 甕? | 外側：ナゲ・ナズリ 内側：ヘラナゲ・ナゲ | Po. 9 | | | | | 10 |

第73図 第49号住居跡出土土器

〔遺物の出土状況〕 遺物は床面と第5層（火災層）からまとめて出土している。第1層：甕口縁部破片4点 第2層：甕口縁部破片2点 第3層：甕底部破片1点 第5層：壺1点・器台1点・甕5点 床面：壺1点・壺口縁部破片1点・鉢1点・壺1点・甕口縁部破片1点 層不明：脚台1点

第50号住居跡

〔概要〕 第50号住居跡は、東・北・西壁は残っていたが、南壁は削平のため失なわれている。また、第49号住居跡と重複し、その堆積土・床面が壊されているため、床面は壁に近い部分だけが残っていた。残存部分から、その判明する事についてその概要を記す。

平面形は隅丸方形で、規模は南北軸4.7×2・東西軸5.8mである。検出された壁は地山で床面からほぼ垂直に立ちあがるが、上部は崩落が著しい。床面は地山で、その上に生活層と推定される有機質に富む暗褐色粘土質シルト層が薄く貼りついている。周溝は北壁直下に一部みられる。断面「L」状で、幅約10cm・深さ約5cmである。この他柱穴や炉・貯蔵穴状ピットなどの施設については不明である。

〔堆積土〕 住居内堆積土は保存のよい所で層厚が40cmあり、いずれも褐色シルトを斑状に含む明褐色粘土質シルトである。すなわち、地山の土を斑状に含んだ層が一様に堆積していた。このような層相は、壁崩壊土が、人為的に埋められた場合の土に見うけられるものである。この点、第50号住居跡は壁周辺だけが残っていたので、そのいずれか決め難い。ただ、住居東側は幅120cmにわたって残っており、その間で将棋倒し状堆積を示すような複数の層の堆積がみられず、一様な層相を示すことから人為的に埋められた可能性のほうが強いと考えられる。

〔遺物の出土状況〕 遺物は堆積土から高壺1点、床面から高壺・器台が1点ずつ出土しただけである。



第74図 第50号住居跡出土土器

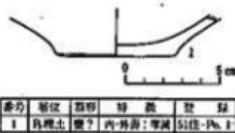
第51号住居跡

〔平面形・重複〕 第51号住居跡は第25・26号住居跡と重複し、北西部分が両者に切られている。平面形は隅丸方形で、南北軸4.9m・東西軸5.2mである。

〔施設の概要〕 壁は地山で、床面からゆるやかに立ちあがる。床面はほぼ平坦で、住居掘り方底面（地山）と一致している。柱穴は4個（P₁～P₄）検出された。柱穴は住居対角線上に位置し、それを結んだ線は住居平面形と相似形になる。柱間は南北軸2.8m・東西軸2.7mである。

東壁と北壁の下に周溝状の構が検出された。しかし、これらの溝は、東壁下が40cm・北壁下が80cmと一般的な周溝に較べ幅が広すぎる。むしろ、住居掘り方が、壁付近で深くなり、周溝状になったものと考えられる。住居中央北側の床面が焼けており（焼面）炉と考えられる。この焼面は椭円形をしており、その範囲は90×30cmである。

〔堆積土・遺物の出土状況〕 住居内堆積土は2層あり、将棋倒し状の堆積状況を示している。第1層は暗褐色シルト層で全体に分布し、第2層は極暗褐色シルト層で住居西側から南側の壁際に分布している。遺物はP₃から甕が1点出土している。



第75図 第51号住居跡出土土器

第52号住居跡

〔概要〕 第52号住居跡は第53号住居跡を調査中に検出したが、第53号住居跡の堆積土を掘り込んで、その内部に構築されていたため、平面形を明確にとらえることができなかった。

床面には火熱を受け暗褐色に焼けている部分があり、その直上に多量の木炭・焼土を含む層が5～10cmの厚さで堆積している（第4層）。これらは火災によるものと考えられる。その上の堆積土は3層あり、将棋倒し状の堆積状況を示している。第1層は褐色シルト、第2層は暗褐色シルト、第3層は褐色シルトである。遺物は出土していない。

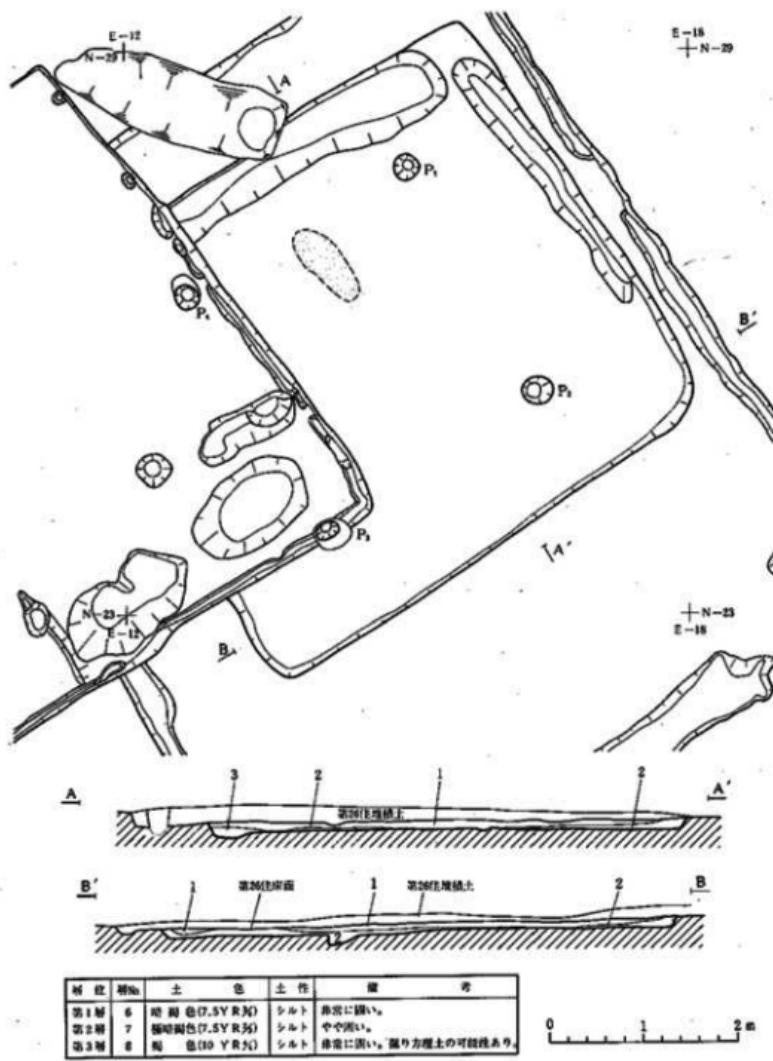
第53号住居跡

〔平面形・重複〕 第53号住居跡は第28・29・52号住居跡と重複し、すべての住居跡によって堆積土の上部が切られている。また、住居南側は調査を行なったが、北側は調査区外にのびている。調査を行なった部分から住居平面形を推定すると、南壁中央がやや膨らむ方形である。

〔壁〕 検出した壁は地山で、周溝からほぼ垂直に立ちあがる。

〔床面〕 床面は掘り方底面（地山）と一致し、ほぼ平坦である。

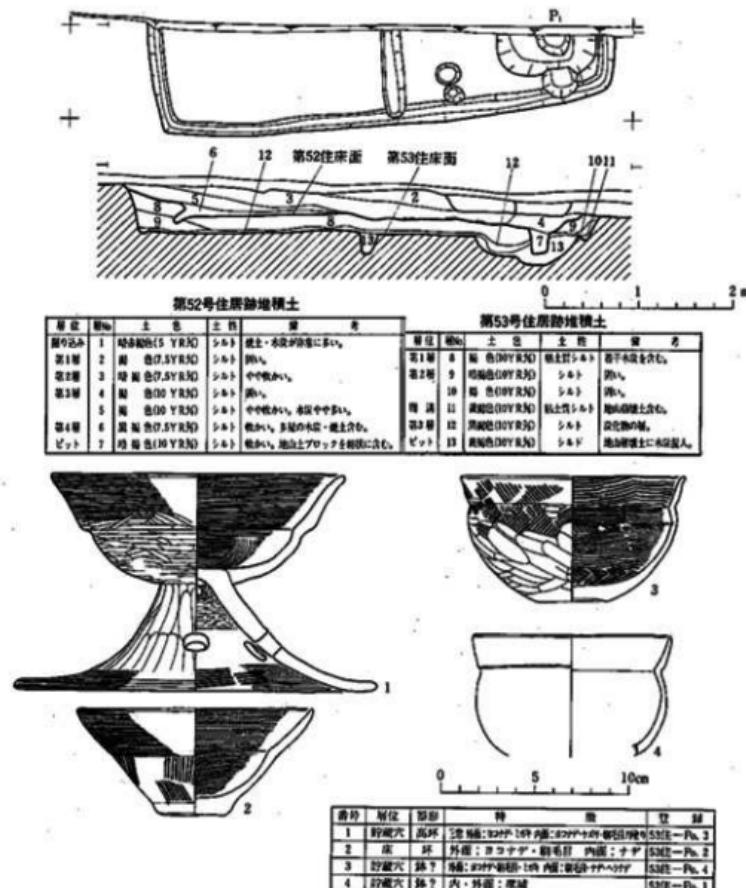
〔周溝〕 住居壁直下に周溝があげている。周溝は断面「V」状、幅15～20cm・深さ約5cmである。また同様な断面・規模（幅・深さ）をもつ溝が、南壁中央に直交してみられ、調査区外にのびている。



第76図 第51号住居跡

[その他の施設] 住居南東隅の部分に貯蔵穴状ピット (P_1) がある。 P_1 は調査区外にのびているが、調査部分から隅丸方形と推定される。大きさは東西軸が105cmである。底面は二段になっており、全体の深さは35cm、上段の深さは20cmである。ピット内部には木炭を含む地山土の崩壊土（黄褐色シルト）が堆積していた。この他、柱穴・炉などの施設は調査区内で検出されなかった。

[堆積土] 住居内堆積土は3層あり、第1・2層は特模倒し状、第3層は水平状の堆積状況を示している。第1層は褐色の粘土質シルトで住居全体に分布し、第2層は暗褐色シルトで住居



第77図 第53号住居跡

壁沿いに分布している。第3層は黒褐色シルトで炭化物の層で、床面全体を覆い、貯蔵穴状ピットにも及んでいる。床面に貼りついた状況と炭化物の層であることから、生活層と考えられる。

〔遺物の出土状況〕 遺物貯蔵穴状ピット（P 1）と床面から出土している。貯蔵穴状ピットからは高壙1点・鉢2点が出土している。これらの遺物は生活層（第3層）が貯蔵穴状ピットに及び、囲んだ状態になっている部分から出土している。また、床面からは壙が1点出土している。

第54号住居跡

〔平面形・重複〕 第54号住居跡は、第55・56号住居跡と重複し、両者を切っている。また、住居跡の大部分は残っていたが、南西隅周辺は削平によって失なわれている。残存部分から、住居平面形は隅丸正方形と推定され、規模は南北軸3.2m・東西軸3.5mである。

〔壁〕 住居壁は、第55・56号住居跡と重複している部分はその堆積土、その他は地山である。この壁は東壁など保存のよい所ではほぼ垂直に立ちあがるが、上部はかなり崩落している。

〔床面〕 床面は掘り方底面（地山）と一致し、ほぼ平坦である。柱穴は検出されなかった。

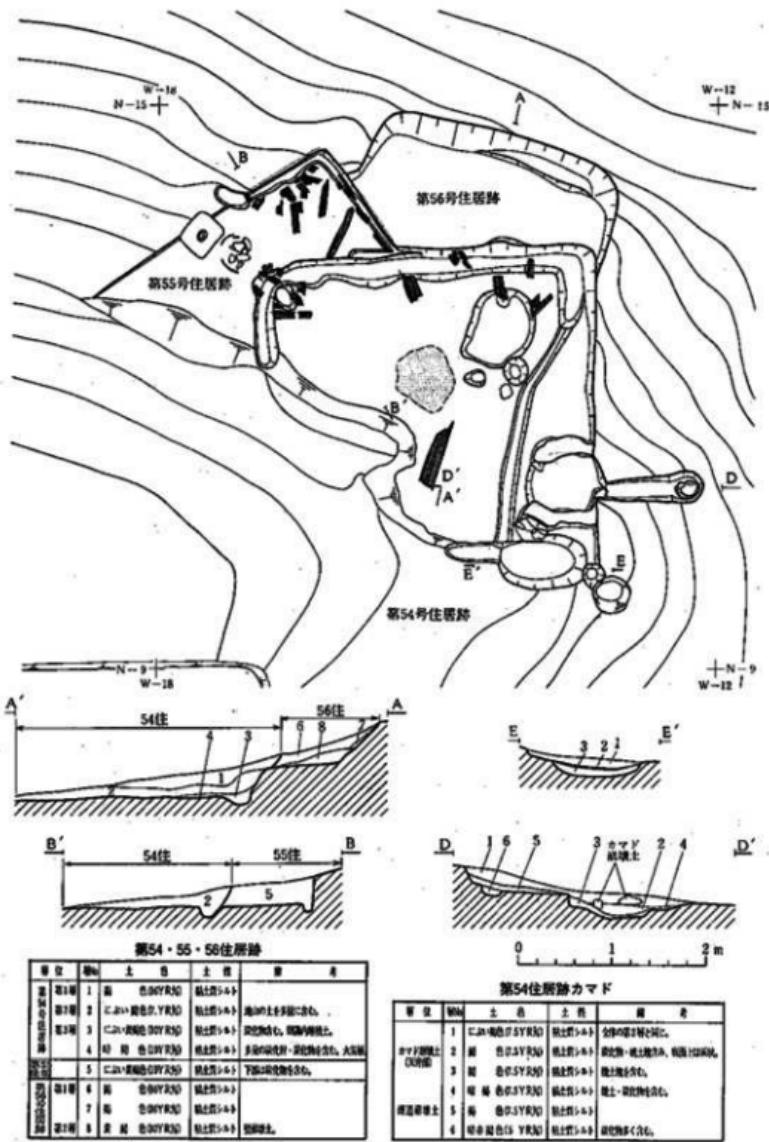
〔周溝〕 東壁を除き、ほぼ全体の壁直下に周溝がめぐっている。周溝の断面は「U」状で幅20~30cm、深さ約5cmである。この他、東壁直下で周溝が途切れている部分をつなぐような溝がカマドの内側にある。この溝は断面「U」状であるが、規模は周溝より小さく幅約15cm・深さ約5cmである。

〔カマド〕 住居東壁南側にカマドが設置されている。このカマドは燃焼部と煙道部からなり、全長190cmである。燃焼部は底面を僅かに掘りくぼめ、側壁・天井を粘土を積みあげて築いたもので、幅80cm・奥行90cmある。煙道は住居外にトンネル状に掘り抜いたもので、先端はピット状になっている（煙り出し）。煙道の長さは70cm・幅25cm、煙り出しの径は30cmである。

〔貯蔵穴状ピット〕 カマド右脇に梢円形のピットがある。このピットは南壁直下の周溝と接続している。ピットの大きさは長さ95cm・幅60cm・深さ18cmである。ピット内には暗褐色（10YR3/4）粘土質シルト（第3層）が堆積し、その上にピットを覆うように炭化物の薄い層（第2層、1~3cm）がみられた。

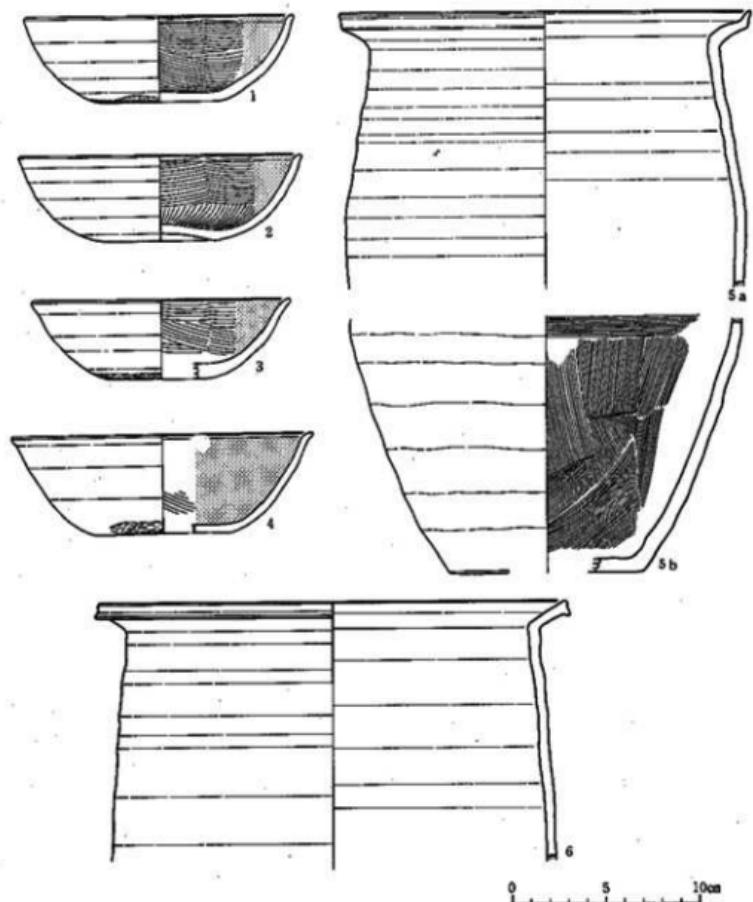
〔堆積土〕 住居内堆積土は3層にわかれれる。第1層は褐色粘土質シルトで住居北側に分布している。第2層はにぶい褐色の粘土質シルトで地山の土を多量に含み、住居全体に分布している。第3層は暗褐色粘土質シルトで、多量の炭化材・炭化物を含み、床面状に堆積している。第3層に含まれる炭化材は、住居の上部構造が崩れ落ちた出土状況を示し、火災によるものと推定される。

〔遺物の出土状況〕 遺物はいずれも土師器で床面・細部（貯蔵穴状ピット・カマド）からまと



第78図 第54・55・56号住居跡

まつて出土している。第1層：甕口縁部破片1点 貯藏穴状ピット：坏2点・坏口縁部破片2点・甕1点・甕口縁部破片1点 カマド：坏2点・坏口縁部破片1点・甕2点 床面：甕1点・甕底部破片1点 層不明：甕底部破片1点



| 番号 | 部位 | 器形 | 特徴 | 登録 | 番号 | 部位 | 器形 | 特徴 | 登録 |
|----|-----|----|---------------------------|-----------|----|------|----|------------------------------|------------|
| 1 | カマド | 坏 | 施墨：ロクロナゲ・横引目・手縫縫隙 内面：1面-墨 | 54E-Po. 1 | 5a | 椎頭部周 | 甕 | 内・外面：ロクロナゲ | 54E-Po. 5a |
| 2 | カマド | 坏 | 施墨：ロクロナゲ・甕底 内面：火附灰と墨・墨 | 54E-Po. 2 | 5b | 底造痕 | 甕 | Po. 5b-2-側壁？ 施墨：手縫縫隙 内面：ヘタツメ | 54E-Po. 5b |
| 3 | 貯藏穴 | 坏 | 施墨：ロクロナゲ・指毛目・甕底 内面：1面-墨 | 54E-Po. 3 | 6 | カマド | 甕 | 内・外面：ロクロナゲ | 54E-Po. 7 |
| 4 | 貯藏穴 | 坏 | 施墨：ロクロナゲ・指毛目・甕底 内面：1面-墨 | 54E-Po. 4 | | | | | |

第79図 第54号住居跡出土土器（1）

第55号住居跡

〔平面形・重複〕第55号住居跡は第54・56号住居跡と重複し、第56号住居跡を切っているが、第54号住居跡によって切られている。住居残存部分から、平面形は方形と推定されるが、規模については不明である。

〔概要〕検出された壁は、第56号住居跡と重複している部分の上部ではその堆積土、その他の部分では地山である。また、壁は保存の良い所ではほぼ垂直に立ちあがる。周溝は東壁と北壁東側の直下にみられ、断面「S」状で、壁の外側に喰い込んでいる。幅約15cm・深さ約10cmである。床面は掘り方底面（地山）と一致し、ほぼ平坦である。

この他、住居残存部分では柱穴等の施設は検出されなかった。

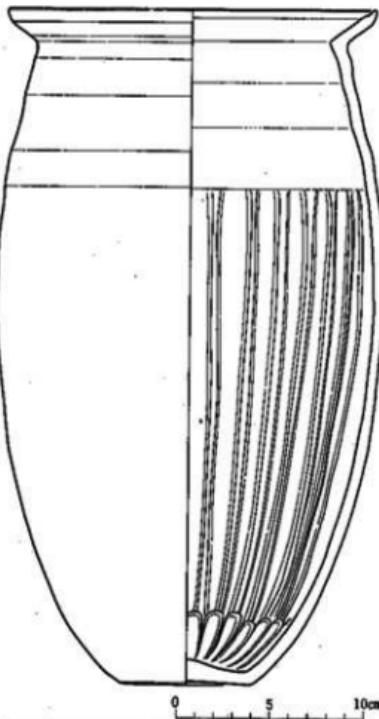
遺物としては、甕が1点床面から出土している。

〔堆積土・遺物の出土状況〕住居内堆積土はにぶい黄褐色粘土質シルトで、下部は炭化物・炭化材を含む。炭化材は床面上に放射状に分布し、住居上部構造の崩落したもので、火災によるものと考えられる。

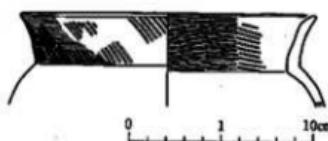
第56号住居跡

〔平面形・重複〕第56号住居跡は第54・55号住居跡と重複し、両者に切られ住居中央から南側が失なわれている。残存部分から、住居平面形は隅丸方形と推定され、規模は東西軸2.6mである。

〔概要〕壁・床面は地山である。壁面は崩壊著しく斜めになり、北壁では段状の部分もある。床面は掘り方底面（地山）と一致し、平坦である。住居残存部分からは柱穴等の施設は検出されなかった。



第80図 第54号住居跡出土土器（2）



第81図 第55号住居跡出土土器

〔堆積土〕住居内堆積土は2層あり、特徴倒し状の堆積状況を示している。第1層は褐色粘土質シルトで、広い範囲に分布する。第2層は黄褐色粘土質シルト層で壁際に分布し、壁崩落土と考えられる。遺物は出土していない。

第57号住居跡

〔平面形・重複〕第57号住居跡は第58号住居跡と重複し、堆積土・床面が切られている。また住居南側は削平され、失なわれている。残存している住居北側から平面形を推定すると、方形と考えられる。規模は東西軸5.5mである。

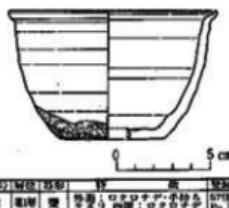
〔壁〕住居壁は地山で周溝からほぼ垂直に立ちあがるが、上部は崩壊が著しい。

〔床面〕床面は掘り方底面（地山）と一致し、ほぼ平坦である。

〔周溝〕壁直下に周溝がめぐっている。周溝は断面「U」状で、幅約30cm・深さ10~15cmである。この他、住居東壁と平行に内側1.2mの所を溝が走っている。この溝は断面「U」状、幅約15cm・深さ2~3cmで、第58号住居跡によって切られている部分まで続いている。

〔その他の施設〕住居内からピットは検出されたが、配置に規則性がみられず、柱穴とは認められない。この他、住居残存部分で施設等は検出されなかった。

〔堆積土・遺物の出土状況〕住居内堆積土は2層あり、住居全体に水平状の堆積している。第1層は褐色（10YR4/4）粘土質シルト、第2層はにぶい黄褐色（10YR4/3）粘土質シルトである。遺物としては土器窯1点が第1層から出土している。



第57号住居跡出土土器

| | | |
|----|----|----|
| 高さ | 幅 | 厚さ |
| 2 | 30 | 5 |
| 底 | 内側 | 外側 |

第58号住居跡

〔平面形・重複〕第58号住居跡は第57号住居跡と重複し、その堆積土・床面を切っている。しかし、住居南側は削平によって失なわれている。残存している住居北側から平面形を推定すると、方形と考えられる。規模は東西軸4.1mである。

〔壁〕住居壁は第57号住居跡と重複している部分ではその堆積土と地山、その他の部分は地山である。壁は周溝からほぼ垂直に立ちあがるが、上部は崩壊し、第57号住居跡堆積土を壁としている部分では特に顕著である。

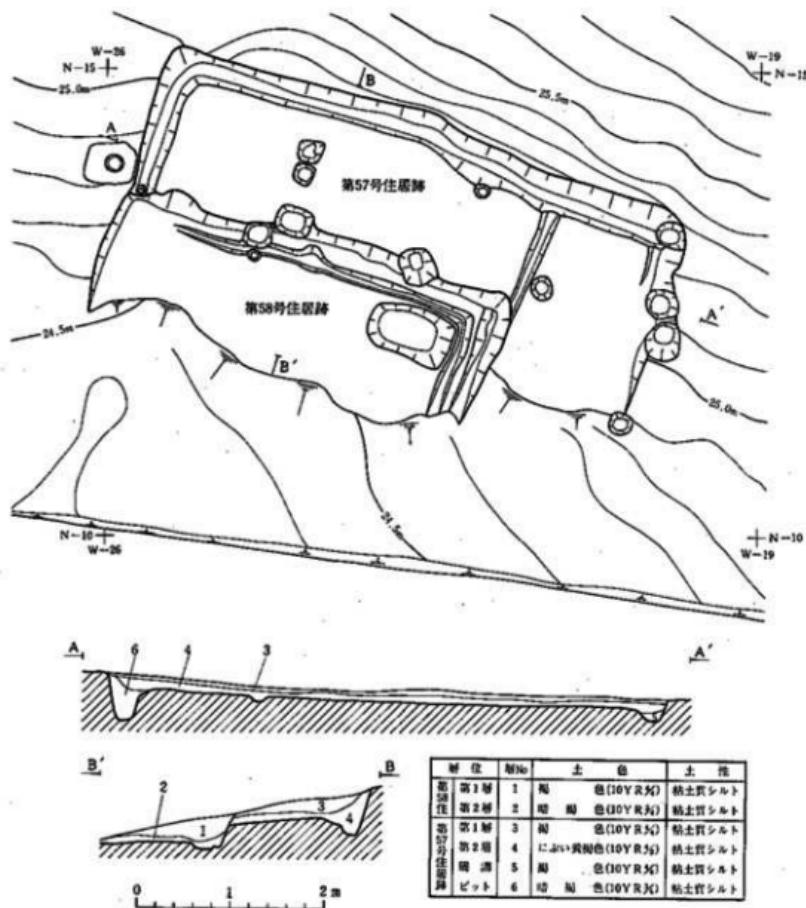
〔床面〕床面は掘り方底面と一致し、ほぼ平坦である。

〔周溝〕周溝は壁に沿って二重にめぐっているが、西壁付近では不明確となっている。周溝は両者とも断面「U」状で、壁直下のものが幅約30cm・深さ約5cm、内側のものが幅15~20cm・深さ3~4cmである。ただ、壁直下の周溝は北壁部分で浅くなり、溝というより段に近い形状を示している。

【その他の施設】住居北東隅に貯蔵穴状のピットがある。平面形は隅丸長方形で、規模は東西軸90cm・南北軸55cm・深さは約10cmである。ピット内には黄褐色ないしは明黄褐色砂質粘土が水平状に3層堆積している。この他の施設等は住居残存部分では検出されなかった。

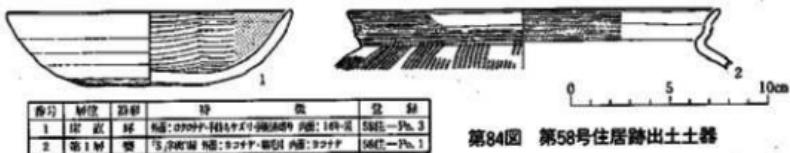
【堆積土】住居内堆積土は残存が少ないが2層ある。第1層は褐色粘土質シルト、第2層は暗褐色粘土質シルトである。

【遺物の出土状況】遺物は第1層と床面から出土している。第1層からは甕2点、床面からは



第83図 第57・58号住居跡

壺2点（1点は磨滅頗著で図化できなかった）が出土している。床面から出土した壺2点は製作にロクロを使用した平安時代のものである。それに対し、第1層の甕は古墳時代前期のものである。第1層の甕のうち1点は、第49号住居跡第5層の甕と接合した。第49号住居跡は、第58号住居跡の斜面上方に位置し、住居南端部分が崩れて失なわれている。したがって第49号住居跡の南端部分が崩れた時、甕の一部が第58号住居跡に転落したものと考えられる（この甕は第49号住居跡の項に収録した）。このため、第83図2に示した甕も、同様に第49号住居跡から転落したもの可能性がある。



第84図 第58号住居跡出土土器

第2号土壙

平面形は楕円形で、北端部分が第45号住居跡と重複している。重複部分が小さいため、切り合いは明確にできなかった。規模は南北軸1.5m・東西軸0.8m・深さ0.6mである。底面は平坦で、壁は傾斜をもつて立ちあがる。堆積土は3層に細別されるが、いずれも褐色ないしは黄褐色の粘土質シルトで、水平状の堆積状況を示している。遺物は出土していない。

第3号土壙

平面形は楕円形で、底面両端がピット状になっている。壁は垂直に近い角度で立ちあがる。規模は、南北軸1.2m・東西軸0.8m・深さ0.8m（両端のピット状部分では0.9m）である。堆積土は3層に細別されるが、いずれも褐色粘土質シルトで、下部程黒色中砂ブロックや浅黄色砂質粘土ブロックを斑状に含んでいる。堆積状況は水平状である。遺物は出土していない。

第4号土壙

平面形は楕円形で、東側部分が第40号住居跡を切っている。壁・底面は丸底状である。規模は南北軸0.8m・東西軸0.9m・深さ0.22mである。土壤壙内部から高壺・甕・瓶が1点ずつ出土している。

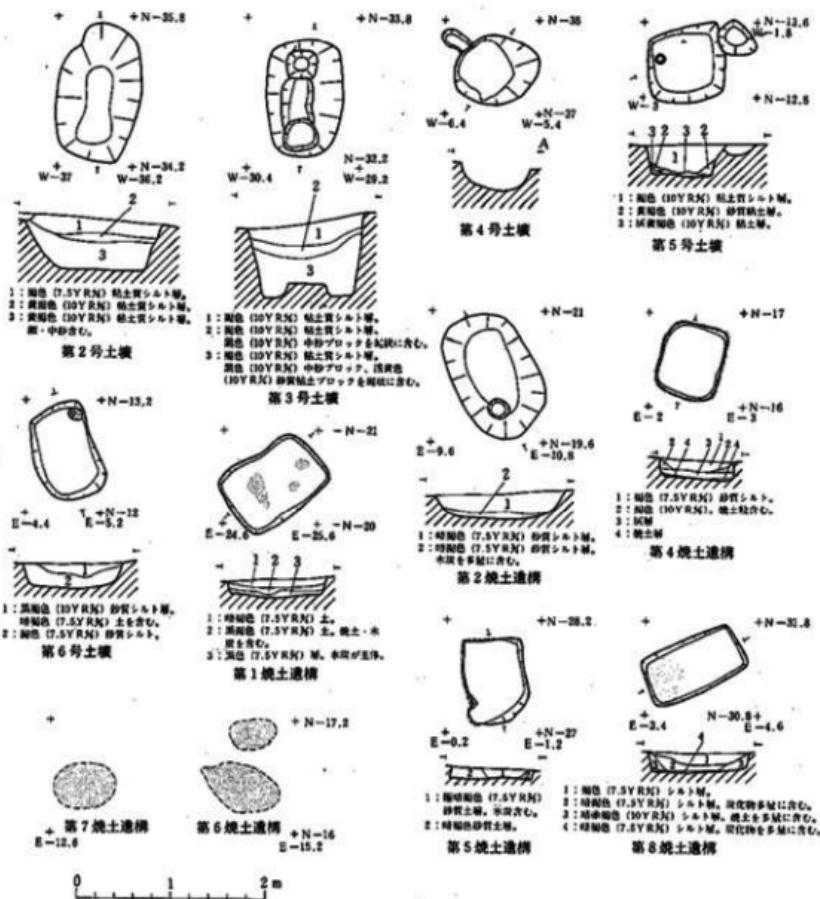
第5号土壙

平面形は歪んだ正方形で、規模は東西・南北軸とも0.9m・深さ0.3mである。底面は平坦で壁は僅かに傾斜して立ちあがる。堆積土の大部分は褐色粘土質シルト層で、底面に近い部分に

黄褐色砂質粘土層・灰黃褐色粘土層がみられる。土壤内から高坏・甕が1点ずつ出土している。

第6号土塘

平面形は長方形で、規模は南北軸1.0m・東西軸0.6m・深さ0.3mである。底面は平坦で、壁は緩かに立ちあがる。堆積土は2層にわかれる。第1層は明褐色土を含む黒褐色砂質シルト、第2層は褐色砂質シルトである。遺物は出土していない。



第85圖 燒土遺構・土壠

第1焼土遺構

平面形は長方形で、規模は南北軸1.1m・東西軸0.8m・深さ0.2mである。底面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ちあがる。底面および壁面は赤褐色に焼けており、それは上部程顕著である。堆積土は3層あり、水平状の堆積状況を示している。第1層は暗褐色土、第2層は焼土・木炭を含む黒褐色土、第3層は木炭を主体とする層である。遺物は出土していない。

第2焼土遺構

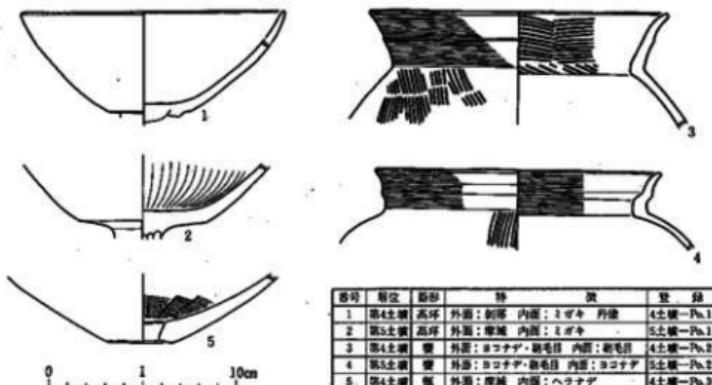
平面形は梢円形で、規模は南北軸1.4m・東西軸0.8m・深さ0.3mである。底面は中央部に向って、僅かに凹み、壁はゆるやかに立ちあがる。堆積土の大部分は暗褐色砂質シルトで、底面に近い部分に木炭を多量に含む暗褐色砂質シルト層がみられる。遺物は土師器細片が少量、底面近くから出土している。

第4焼土遺構

平面形は長方形で、規模は南北軸0.8m・東西軸0.65m・深さ0.2mである。底面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ちあがる。底面および壁面は赤褐色に焼けており、壁上部程顕著である。堆積土は4層あり、第1・2層は将棋倒し状、第3・4層は水平状の堆積状況を示している。第1・2層は褐色シルト、第3層は灰層、第4層は焼土層である。遺物は出土していない。

第5焼土遺構

平面形は歪んだ長方形で、規模は南北軸0.9m・東西軸0.6m・深さ0.15mである。底面は平

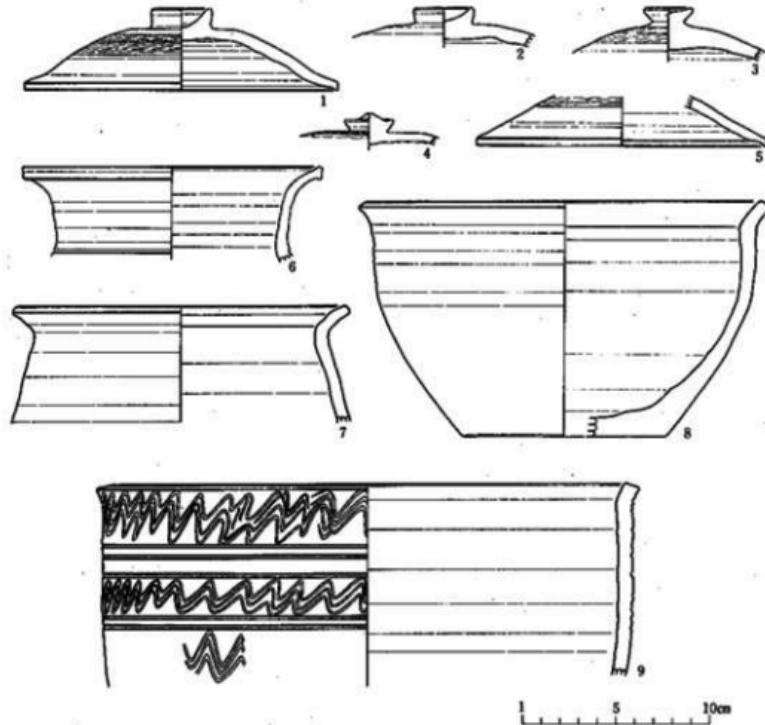


第86図 第4・5号土壙出土土器

垣で、壁は北・西部分が内傾して、東・南部分が外傾して立ちあがる。底・壁面は赤褐色に焼けており、壁上部程顕著である。堆積土は2層に細分され、将棋倒し状の堆積状況を示している。第1層は極暗褐色砂質土、第2層は暗褐色砂質土である。遺物は出土していない。

第6・7焼土遺構

第6・7焼土遺構は焼面で、住居跡床面の一部である可能性もある。第6焼土遺構は不整梢円形(90×50cm)、第7焼土遺構は梢円形(60×50cm)である。第6焼土遺構の北側約15cmの所にも小規模な焼面(50×30cm)がある。

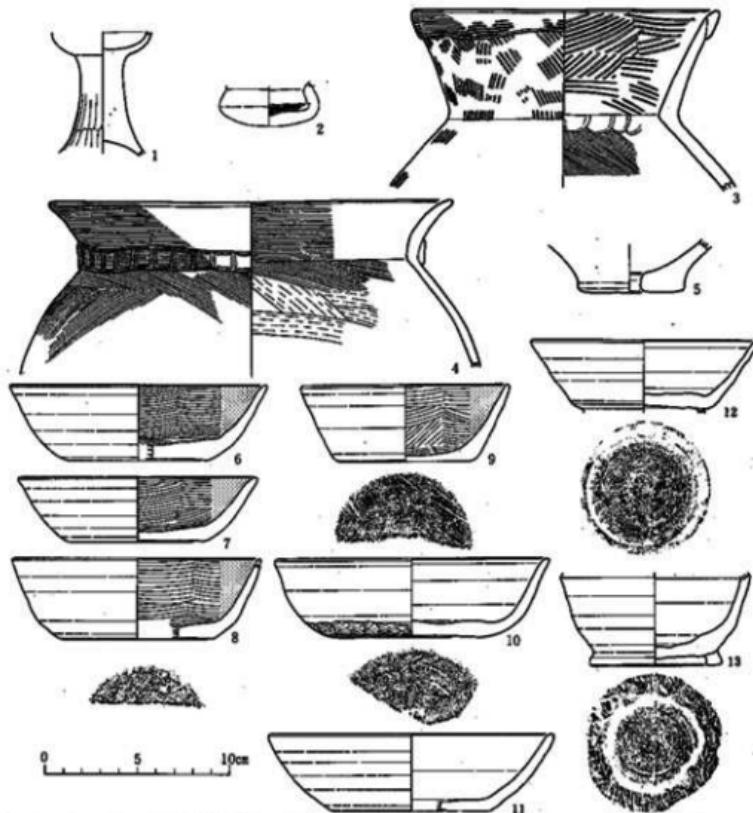


第87図 各地区出土土器(1)

| 番号 | 厚さ | 形状 | 特徴 | 定 錄 | 番号 | 厚さ | 形状 | 特徴 | 定 錄 |
|----|---------|----|------------------------|-------|----|--------|----|------------------------|-------|
| 1 | BC-6-3 | 底 | 外面:ロクロナフ・凹凸アリ 内面:ロクロナフ | Pn.16 | 6 | B-F-2 | 底? | 内・外面:ロクロナフ | Pn.22 |
| 2 | BC-6-3 | 底 | 外面:ロクロナフ・凹凸アリ 内面:ロクロナフ | Pn.19 | 7 | BD-6-1 | 壁 | 内・外面:ロクロナフ | Pn.7 |
| 3 | BL-6-3 | 底 | 外面:ロクロナフ・凹凸アリ 内面:ロクロナフ | Pn.17 | 8 | BL-6-3 | 壁? | 内・外面:ロクロナフ | Pn.12 |
| 4 | BL-6-3 | 底 | 外面:ロクロナフ・凹凸アリ 内面:ロクロナフ | Pn.18 | 9 | BL-6-3 | 板? | 外面:ロクロナフ・凹凸アリ 内面:ロクロナフ | Pn.13 |
| 5 | SE-F-01 | 底 | 外面:凹凸アリ・ロクロナフ 内面:ロクロナフ | Pn.20 | | | | 1 ~ 6: 渣迹器 7 ~ 9: 土器器 | |

第8 烧土遺構

平面形は長方形で、第30号住居跡を切っている。規模は東西軸1.1m・南北軸0.6m・深さ0.2である。底面および壁面が焼けしており、上部程顕著である。堆積土は4層あり、第1～3層は将棋倒し状の堆積状況を示し、第4層は底面に薄く堆積している。第1層は褐色シルト、第2層は炭化物を多量に含む暗褐色シルト、第3層は焼土を多量に含む暗褐色シルト、第4層は炭化物を多量に含む暗褐色シルトである。遺物は出土していない。



| 番号 | 種類 | 特徴 | 登録番号 | 備考 | 形状 | 特徴 | 登録番号 |
|----|-------|-----|---------------------------|---------|---------|----------------------------|---------|
| 1 | BM-45 | 高脚? | 外面：ミギキ 内面：ミギキ・厚壁 | 区-Po.5 | X-X | 外面：ロクロナダ・厚壁 内面：厚壁 | 区-Po.9 |
| 2 | AP-67 | 环? | 土製模造 | 区-Po.7 | X-X | 外面：ロクロナダ・厚壁 内面：厚壁 | 区-Po.6 |
| 3 | AM-07 | 盆? | 外面：ロクロナダ・厚壁 内面：厚毛目・ミギキ・ナダ | 区-Po.3 | BN-67 | 外面：ロクロナダ・厚壁 内面：厚壁 | 区-Po.5 |
| 4 | AM-07 | 盤? | 外面：ロクロナダ・ミギキ・ナダ 内面：ナダ・ミギキ | 区-Po.6 | BL-54-3 | 外・内面：ロクロナダ・手付もミギキ・厚壁 | 区-Po.14 |
| 5 | AM-07 | 瓶? | 外面：ロクロナダ・ミギキ・ナダ 内面：ナダ・ミギキ | 区-Po.4 | BL-54-3 | 外・内面：ロクロナダ・手付もミギキ・厚壁 | 区-Po.15 |
| 6 | X-X | 环? | 外面：ロクロナダ・厚壁 内面：厚壁 | 区-Po.10 | BL-54-3 | 外・内面：ロクロナダ・ヘラ切り | 区-Po.1 |
| 7 | X-X | 环? | 外面：ロクロナダ・厚壁 内面：厚壁 | 区-Po.11 | BL-54-3 | 外・内面：ロクロナダ | 区-Po.23 |
| | | | | | | ■ 1～9：土器 10：赤陶土器 11～15：須恵器 | |

第88図 各地区出土土器 (2)

III. 遺物の検討

弥生土器

弥生土器は口縁部資料25点（口縁上端部を破損しているものも含む）・底部資料1点・胴部資料平箱約1/2が出土している。このように、弥生土器は量的に少なく、いずれも破片で、出土状況の点でも、各地区・各層位から出土するなどまとめはみられない。そこで、今回は口縁部資料25点と特徴の明瞭な胴部資料5点をとりあげて分類し、編年的位置づけを行なうことにする。

土器の分類

第1類：太い沈線によって文様を描いているもの（1～5）

1・2は蓋である。口縁部に数条の沈線をめぐらし、その上部に地文を施文している。1の地文は不明だが、2はLR縞文である。1の口縁部内面には一条の沈線がめぐっている。3は鉢である。口縁部には帯状にLR縞文が施文され、口縁部下端に沈線がめぐっている。沈線は口縁部内面にもめぐっている。4・5は口縁部が内湾する鉢である。沈線で区画文様を描き、地文を施文している。4の地文は不明だが、5はLR縞文である。

第2類：横位連続刺突文のめぐるもの（6）

6は甌の頸部で、横長の刺突文がめぐっている。

第3類：沈線で文様を描き地文を充填するもの（7）

7は鉢の胴部で、地文は摩滅のため不明である。

第4類：細い沈線で文様を描くもの（8～10）

8は鉢の胴部で、重層する方形区画文を描いている。9・10は壺の胴部で、渦巻文を描いている。10の胴下部に施文されている地文はLR縞文である。

第5類：二条の平行沈線で文様を描くもの（11～13）

11・12は壺の口縁部で補修孔？がある（11は1個、12は2個確認される）。両者とも線間の狭い二条の平行沈線で、密接して重層する山形文を描いている。13は鉢の胴部で、重層する連弧文間に鋸歯状文を描いている。

第6類：口縁部下端に刺突文をめぐらすもの（14～30）

a類：交互刺突文をめぐらすもの（14～20）

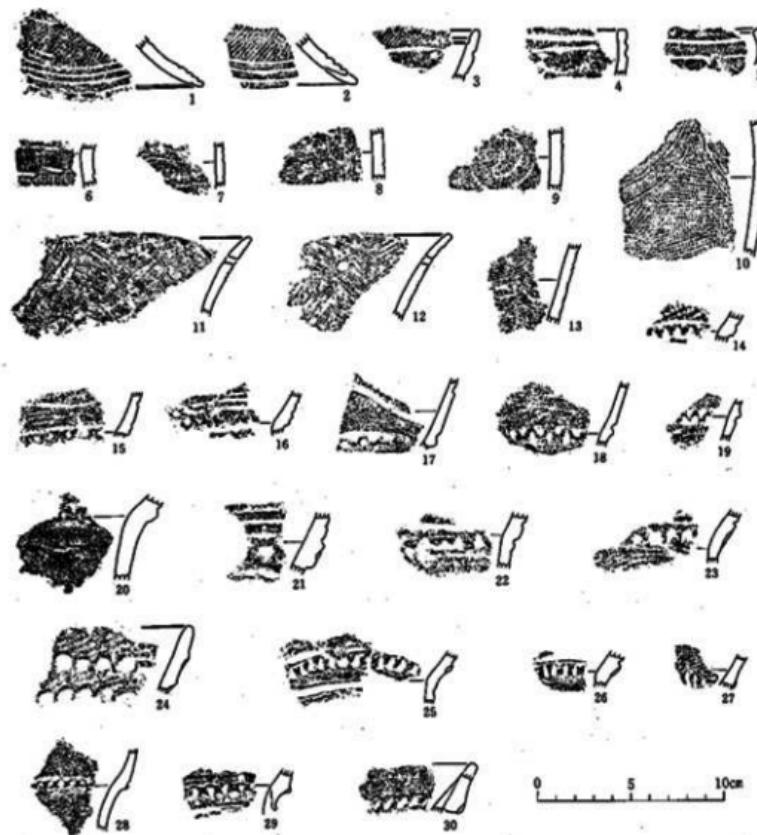
14～18は口縁部に太い沈線で平行状・弧状の文様を描いている。15にはLR縞文が施文されているが、その他は不明である。なお、19～20は口縁上半部を破損している。

b類：単純刺突文をめぐらすもの（21～22）

21・22とも口縁部に太い沈線で平行状文様を描いている。

c類：押捺状刺突文をめぐらすもの（23・24）

23は口縁部に沈線を引き、頭部にR L繩文を施文している。24は押捺状刺突文が二段になつ



| 番号 | 地 区・場 所 | 號款番号 | 8 | AP-6区-第2層 | Y.Po.1 | 9 | AP-6区-第2層 | Y.Po.2 | 10 | AP-6区-第2層 | Y.Po.3 | 11 | AP-6区-第2層 | Y.Po.4 | 12 | AP-6区-第2層 | Y.Po.5 | 13 | AP-6区-第2層 | Y.Po.6 | 14 | AP-6区-第2層 | Y.Po.7 | 15 | AP-6区-第2層 | Y.Po.8 | 16 | AP-6区-第2層 | Y.Po.9 | 17 | AP-6区-第2層 | Y.Po.10 | 18 | AP-6区-第2層 | Y.Po.11 | 19 | AP-6区-第2層 | Y.Po.12 | 20 | AP-6区-第2層 | Y.Po.13 | 21 | AP-6区-第2層 | Y.Po.14 | 22 | AP-6区-第2層 | Y.Po.15 | 23 | AP-6区-第2層 | Y.Po.16 | 24 | AP-6区-第2層 | Y.Po.17 | 25 | AP-6区-第2層 | Y.Po.18 | 26 | AP-6区-第2層 | Y.Po.19 | 27 | AP-6区-第2層 | Y.Po.20 | 28 | AP-6区-第2層 | Y.Po.21 | 29 | AP-6区-第2層 | Y.Po.22 | 30 | AP-6区-第2層 | Y.Po.23 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|----|-----------|--------|---|-----------|--------|----|-----------|--------|----|-----------|--------|----|-----------|--------|----|-----------|--------|----|-----------|---------|----|-----------|--------|----|-----------|---------|----|-----------|--------|----|-----------|---------|----|-----------|---------|----|-----------|---------|----|-----------|---------|----|-----------|---------|----|-----------|---------|----|-----------|---------|----|-----------|---------|----|-----------|---------|----|-----------|---------|----|-----------|---------|----|-----------|---------|----|-----------|---------|----|-----------|---------|-----|-----------|---------|--|--|--|-----|-----------|---------|--|--|--|-----|-----------|---------|--|--|--|-----|-----------|---------|--|--|--|-----|-----------|---------|--|--|--|-----|-----------|---------|--|--|--|-----|-----------|---------|--|--|--|-----|-----------|---------|--|--|--|-----|-----------|---------|--|--|--|-----|-----------|---------|--|--|--|-----|-----------|---------|--|--|--|
| 1 | BF-6区-第1層 | Y.Po.1 | | | | 9 | AP-6区-第2層 | Y.Po.2 | | | | 16 | AP-6区-第2層 | Y.Po.3 | | | | 24 | AP-6区-第2層 | Y.Po.4 | | | | 31 | AP-6区-第2層 | Y.Po.5 | | | | 38 | AP-6区-第2層 | Y.Po.6 | | | | 45 | AP-6区-第2層 | Y.Po.7 | | | | 52 | AP-6区-第2層 | Y.Po.8 | | | | 59 | AP-6区-第2層 | Y.Po.9 | | | | 66 | AP-6区-第2層 | Y.Po.10 | | | | 73 | AP-6区-第2層 | Y.Po.11 | | | | 80 | AP-6区-第2層 | Y.Po.12 | | | | 87 | AP-6区-第2層 | Y.Po.13 | | | | 94 | AP-6区-第2層 | Y.Po.14 | | | | 101 | AP-6区-第2層 | Y.Po.15 | | | | 108 | AP-6区-第2層 | Y.Po.16 | | | | 115 | AP-6区-第2層 | Y.Po.17 | | | | 122 | AP-6区-第2層 | Y.Po.18 | | | | 129 | AP-6区-第2層 | Y.Po.19 | | | | 136 | AP-6区-第2層 | Y.Po.20 | | | | 143 | AP-6区-第2層 | Y.Po.21 | | | | 150 | AP-6区-第2層 | Y.Po.22 | | | | 157 | AP-6区-第2層 | Y.Po.23 | | | |
| 2 | AQ-6区-第2層 | Y.Po.2 | | | | 10 | AP-6区-第2層 | Y.Po.3 | | | | 17 | AP-6区-第2層 | Y.Po.4 | | | | 25 | AP-6区-第2層 | Y.Po.5 | | | | 33 | AP-6区-第2層 | Y.Po.6 | | | | 41 | AP-6区-第2層 | Y.Po.7 | | | | 49 | AP-6区-第2層 | Y.Po.8 | | | | 57 | AP-6区-第2層 | Y.Po.9 | | | | 65 | AP-6区-第2層 | Y.Po.10 | | | | 73 | AP-6区-第2層 | Y.Po.11 | | | | 81 | AP-6区-第2層 | Y.Po.12 | | | | 89 | AP-6区-第2層 | Y.Po.13 | | | | 97 | AP-6区-第2層 | Y.Po.14 | | | | 105 | AP-6区-第2層 | Y.Po.15 | | | | 113 | AP-6区-第2層 | Y.Po.16 | | | | 121 | AP-6区-第2層 | Y.Po.17 | | | | 129 | AP-6区-第2層 | Y.Po.18 | | | | 137 | AP-6区-第2層 | Y.Po.19 | | | | 145 | AP-6区-第2層 | Y.Po.20 | | | | 153 | AP-6区-第2層 | Y.Po.21 | | | | 161 | AP-6区-第2層 | Y.Po.22 | | | | 169 | AP-6区-第2層 | Y.Po.23 | | | | | | | | | |
| 3 | 第1住P。 | Y.Po.3 | | | | 11 | BG-6区-第3層 | Y.Po.4 | | | | 18 | BG-6区-第3層 | Y.Po.5 | | | | 26 | BG-6区-第3層 | Y.Po.6 | | | | 34 | BG-6区-第3層 | Y.Po.7 | | | | 42 | BG-6区-第3層 | Y.Po.8 | | | | 50 | BG-6区-第3層 | Y.Po.9 | | | | 58 | BG-6区-第3層 | Y.Po.10 | | | | 66 | BG-6区-第3層 | Y.Po.11 | | | | 74 | BG-6区-第3層 | Y.Po.12 | | | | 82 | BG-6区-第3層 | Y.Po.13 | | | | 90 | BG-6区-第3層 | Y.Po.14 | | | | 98 | BG-6区-第3層 | Y.Po.15 | | | | 106 | BG-6区-第3層 | Y.Po.16 | | | | 114 | BG-6区-第3層 | Y.Po.17 | | | | 122 | BG-6区-第3層 | Y.Po.18 | | | | 130 | BG-6区-第3層 | Y.Po.19 | | | | 138 | BG-6区-第3層 | Y.Po.20 | | | | 146 | BG-6区-第3層 | Y.Po.21 | | | | 154 | BG-6区-第3層 | Y.Po.22 | | | | 162 | BG-6区-第3層 | Y.Po.23 | | | | | | | | | | | | | | | |
| 4 | x区-2層 | Y.Po.4 | | | | 12 | BG-6区-第3層 | Y.Po.5 | | | | 19 | BG-6区-第3層 | Y.Po.6 | | | | 27 | BG-6区-第3層 | Y.Po.7 | | | | 35 | BG-6区-第3層 | Y.Po.8 | | | | 43 | BG-6区-第3層 | Y.Po.9 | | | | 51 | BG-6区-第3層 | Y.Po.10 | | | | 59 | BG-6区-第3層 | Y.Po.11 | | | | 67 | BG-6区-第3層 | Y.Po.12 | | | | 75 | BG-6区-第3層 | Y.Po.13 | | | | 83 | BG-6区-第3層 | Y.Po.14 | | | | 91 | BG-6区-第3層 | Y.Po.15 | | | | 99 | BG-6区-第3層 | Y.Po.16 | | | | 107 | BG-6区-第3層 | Y.Po.17 | | | | 115 | BG-6区-第3層 | Y.Po.18 | | | | 123 | BG-6区-第3層 | Y.Po.19 | | | | 131 | BG-6区-第3層 | Y.Po.20 | | | | 139 | BG-6区-第3層 | Y.Po.21 | | | | 147 | BG-6区-第3層 | Y.Po.22 | | | | 155 | BG-6区-第3層 | Y.Po.23 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 5 | 第6住E1層 | Y.Po.5 | | | | 13 | AP-6区-2層 | Y.Po.6 | | | | 20 | AP-6区-2層 | Y.Po.7 | | | | 28 | AP-6区-2層 | Y.Po.8 | | | | 36 | AP-6区-2層 | Y.Po.9 | | | | 44 | AP-6区-2層 | Y.Po.10 | | | | 52 | AP-6区-2層 | Y.Po.11 | | | | 60 | AP-6区-2層 | Y.Po.12 | | | | 68 | AP-6区-2層 | Y.Po.13 | | | | 76 | AP-6区-2層 | Y.Po.14 | | | | 84 | AP-6区-2層 | Y.Po.15 | | | | 92 | AP-6区-2層 | Y.Po.16 | | | | 100 | AP-6区-2層 | Y.Po.17 | | | | 108 | AP-6区-2層 | Y.Po.18 | | | | 116 | AP-6区-2層 | Y.Po.19 | | | | 124 | AP-6区-2層 | Y.Po.20 | | | | 132 | AP-6区-2層 | Y.Po.21 | | | | 140 | AP-6区-2層 | Y.Po.22 | | | | 148 | AP-6区-2層 | Y.Po.23 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 6 | AB-6区-第1層 | Y.Po.6 | | | | 14 | AP-6区-2層 | Y.Po.7 | | | | 21 | AP-6区-2層 | Y.Po.8 | | | | 29 | AP-6区-2層 | Y.Po.9 | | | | 37 | AP-6区-2層 | Y.Po.10 | | | | 45 | AP-6区-2層 | Y.Po.11 | | | | 53 | AP-6区-2層 | Y.Po.12 | | | | 61 | AP-6区-2層 | Y.Po.13 | | | | 69 | AP-6区-2層 | Y.Po.14 | | | | 77 | AP-6区-2層 | Y.Po.15 | | | | 85 | AP-6区-2層 | Y.Po.16 | | | | 93 | AP-6区-2層 | Y.Po.17 | | | | 101 | AP-6区-2層 | Y.Po.18 | | | | 109 | AP-6区-2層 | Y.Po.19 | | | | 117 | AP-6区-2層 | Y.Po.20 | | | | 125 | AP-6区-2層 | Y.Po.21 | | | | 133 | AP-6区-2層 | Y.Po.22 | | | | 141 | AP-6区-2層 | Y.Po.23 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 7 | x区-2層 | Y.Po.7 | | | | 15 | AP-6区-2層 | Y.Po.8 | | | | 22 | AP-6区-2層 | Y.Po.9 | | | | 30 | AP-6区-2層 | Y.Po.10 | | | | 38 | AP-6区-2層 | Y.Po.11 | | | | 46 | AP-6区-2層 | Y.Po.12 | | | | 54 | AP-6区-2層 | Y.Po.13 | | | | 62 | AP-6区-2層 | Y.Po.14 | | | | 70 | AP-6区-2層 | Y.Po.15 | | | | 78 | AP-6区-2層 | Y.Po.16 | | | | 86 | AP-6区-2層 | Y.Po.17 | | | | 94 | AP-6区-2層 | Y.Po.18 | | | | 102 | AP-6区-2層 | Y.Po.19 | | | | 110 | AP-6区-2層 | Y.Po.20 | | | | 118 | AP-6区-2層 | Y.Po.21 | | | | 126 | AP-6区-2層 | Y.Po.22 | | | | 134 | AP-6区-2層 | Y.Po.23 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |

第89図 弥生土器

ている。

d類：刻目状刺突文をめぐらすもの（25～30）

25・26は口縁部に沈線、27はLR縦文を施文している。28～30は口縁部が無文である。

第6類の中で、a～c類（14～24）と口縁部に文様のあるd類（25～27）は口縁部が外傾し頸部でしまる深鉢状の器形をしているが、口縁部が無文のd類（28～30）は壺である。特に30は明瞭な壺で、複合口縁となっている。

土器の編年的位置

第1類は鱗沼遺跡（志間泰治：1971・12）・船渡前遺跡（宮教委：1973・3）などで出土しており、大泉式とされるもの（伊東信雄：1957・3）である。第3類の山形文は南小泉遺跡などで出土しており、樹形式とされるもの（伊東信雄：1957・3）である。第2類の甕は船渡前遺跡の大泉式や南小泉遺跡の樹形式の両者にあり、どちらに伴うものか区別ができない。第4類は北沢遺跡などにみられ（斎藤・真山：1978・3）円田式とされている。第5類は南小泉遺跡などから出土しており、十三塙式とされるものである（伊東信雄：1957・3 1981・10）。第6類は交互刺突文をもつ（a類）という点で、天王山式（坪井清足：1953・6）と共通する点が多い。しかし、b類～d類は単純な刺突文であったり刻目をもつもので、かなり相違する要素をもっている。特にd類の一部は壺の器形を示し、口縁部無文化の傾向が著しい。さらに、d類の30は明瞭な複合口縁の壺で、土師器的要素が強い。近年、天王山式土器の細分や後続する土器の存在が指摘されているが、その内容については未だ明確でない（目黒吉明：1969・3 中村五郎：1976・10 伊東信雄：1974・11 興野・遠藤：1970・6）。ここでは第6類を天王山式として一括したが、いずれも新しい要素をもつものである。そして、d類については直接土師器との関連をうかがえる程である。

古代の土器

第I群土器

第I群土器は第・22・38・49・53号住居跡からまとまって出土している土器群で、高壺・器台・壺・壺・甕・瓶から成っている（第90図）。しかし、これらの土器群も詳細に観察すると各々の住居跡において器形細部・器面調整などの特徴に種々の相違がみられる。このような相違がどのような理由に基づくものなのかを、土器の分類と住居跡における共伴関係を検討することによって明らかにしたい。

土器の分類

高坏

第1類：脚部が裾の広がる円錐台状のもの（1）

坏口縁部が外反気味に外傾し、胴・底部は脛みをもった丸底状をしている。脚部は円錐台状で、裾が強く広がる。丸窓が3個あり、直径は約1.4cmである。外面の器面調整は口縁部がヨコナデ、口縁下部から胴・底部・脚部がヘラミガキ、脚裾部がヨコナデである。ヘラミガキは丁寧である。内面の器面調整は坏部がヨコナデ・ナデ、脚上部がヘラケズリ、脚下部がヨコナデで、脚下部には前段階の刷毛目痕を残している。全体に力強く、丁寧に仕上げられている。

第2類：脚上部が柱状で、脚下部が円錐台状のもの（2）

坏部と脚下部を破損している。脚上部は柱実で、脚中央部が円錐台状に開き、直径約1.2cmの丸窓を3個（破損のため数は推定）もつ。器面調整は外面が丁寧なヘラミガキ、内面がヘラナデである。

第3類：脚上・中部が柱状で、脚下部が円錐台状のもの（3）

坏口縁・胴部は外傾し、底部は幾分丸味をもった平底である。脚上・中部は柱実で、脚下部が円錐台状に開くが、その大部分を破損している。器面調整は、脚柱状部分の外面はヘラミガキであるが、その他の部分は摩滅のため不明である。

器台

第1類：脚部が外反しながらびる円錐台状のもの（4）

受け部は口縁部と胴部下端に段がある。口縁部は直立気味に外反する。胴部は外傾気味に外反する。底部は内面側で平坦となる。受け部と脚部の間には直径約6mmの貫通孔があり、その長さは約4cmである。脚部は高い円錐台状で、外反しながら据部にのび、端部が内側に僅かに折れ曲る。脚中央部には直径約1.3cmの丸窓が3個あいている。器面調整は外面全体と受け部内面が丁寧なヘラミガキ、内面は脚上部がヘラケズリ、胸中部がナデツケ、脚下部がヨコナデである。

坏

第1類：有段の坏

a類：段が上部にあるもの（5）

口縁・胴部とも内弯気味に外傾する。底部は小さいが、平底である。器面調整は口縁上部外面から内面全体がナデ・ヨコナデ、口縁下部から胴部の外面が刷毛目である。底部外面は不明確な調整である。

b類：段が中央部にあるもの（6）

口縁部は内弯気味に外傾し、胴・底部は脣みのない丸底状である。器面調整は摩滅のため不

明である。

c類：段が中央下部にあるもの（7）

口縁部は内弯気味に外傾し、大きく開く。胴・底部の大部分を破損しているが、脹みをもつ丸底状になるものと推定される。器面調整は摩滅のため不明である。

d類：段が下部にあるもの（8）

口縁部は大きく内弯しながら開く。胴・底部は丸底状である。外面の器面調整は口縁部が不明調整、胴・底部がヘラケズリである。内面の器面調整は口縁上部がヨコナデ、口縁下部から底部がナデおよびヘラナデである。

第2類：口縁部が外傾し、胴部が内弯する鉢状のもの

a類：口縁部が肥厚するもの（9）

口縁部は上端が肥厚気味に外反し、中下部が脹みをもつ。胴部は上部で強く脹み、下部に向って丸味をもちながらすぼまる。底部は小さくて、凹んでいる。外面の器面調整は口縁部がヨコナデ、口縁部から胴部が刷毛目、胴中央部から底部がヘラミガキである。内面の器面調整は口縁部から胴中央部までが刷毛目で、胴上部ではその上をナデている。胴下部から底部はヘラナデである。全体に丁寧に仕上げられている。

b類：口縁部が複合口縁のもの（10）

口縁部は複合口縁で、内弯気味に外傾する。胴部は内弯し、中央部が強く脹む。底部は破損しているが、小さくなるものと推定される。器面調整は摩滅のため不明である。

壺

第1類：複合口縁の大型壺

a類：口縁部が強く外傾するもの（11）

内面の口縁部と頸部の境に軽い稜がある。外面の器面調整は口縁部がヨコナデ、頸部が刷毛目である。内面の器面調整は口縁・頸部ともヨコナデである。

b類：口縁・頸部の外傾が同じもの（12）

内外面の器面調整は口縁・頸部とも刷毛目であるが、口縁下部内面はその上をさらにナデられている。

第2類：胴中央部が強く脹む小型壺

a類：胴中央部の張りが強いもの（13）

胴中央下部に強く屈曲する部分がある。底部は中央が凹んでいる。外面の器面調整は胴下部がナデ、底部がヘラケズリであるが、胴上・中央部は摩滅のため不明である。内面の器面調整は胴上・中央部がヘラナデ、胴下・底部がナデである。

b類：胴中央部の張りが弱いもの（14）

胴中央下部に屈曲はあるが弱い。底部は全体が凹んでいる。器面調整は不明である。

観

第1類：口縁部が外反し、胴部は球形になるもの

a類：外面の器面調整に刷毛目を多用するもの (15)

口縁中央下部が肥厚する。底部は平底である。外面の器面調整は口縁部がヨコナデ、頸部から胴部が刷毛目である。内面の器面調整は、底部がナデであるが、口縁・胴部は摩減のため不明である。別個体の資料には刷毛目とヘラナデのものがある。

b類：外面の器面調整にヘラミガキ・ヘラナデを多用するもの (16)

口縁中央下部の肥厚はa類に較べて小さい。底部は破損している。外面の器面調整は口縁部がヨコナデ、胴部がヘラミガキとヘラナデである。内面の器面調整は口縁部がヨコナデ、胴部が不明調整である。

第2類：口縁部が外反し、胴部は下半部が脹むもの（下脹み）

a類：器面調整に刷毛目を多用するもの (17)

口縁中央下部が肥厚する。外面の器面調整は口縁部がヨコナデ、胴部が刷毛目で、胴部の刷毛目が口縁下部に及ぶものもある。内面の器面調整は口縁部が刷毛目とヨコナデのものがある。胴部は摩減のため不明である。

b類：器面調整にヘラミガキ・ヘラナデを多用するもの (18)

口縁部は頸部に向って肥厚する。外面の器面調整は口縁部がヨコナデで、胴部はヘラミガキ・ヘラナデを多用し、部分的に刷毛目を採用している。内面の器面調整は口縁部がヨコナデ、胴部がヘラナデである。

第3類：口縁部が外反する小型の壺 (19)

胴部に対する口縁部の比が、第1～3類に較べて大きい。胴部は球形で、胴中央下部に張りがある。底部は全体が凹んでいる。器面調整は摩減のため不明である。

第4類：口縁部が直立気味に外傾し、胴部は上半部が脹むもの (20)

外面の器面調整は口縁部がヘラミガキとヨコナデ、胴部がヘラナデ・ナデで、部分的に刷毛目痕がある。内面の器面調整は口縁部がヘラミガキとヨコナデ、胴部が軽いヘラミガキとヘラケズリである。

第5類：「S」字状口縁のもの

a類：胴部が大きく脹むもの (21)

器面調整は口縁部内外面がヨコナデ、胴部外面が単位の密接する刷毛目、胴部内面がナデ・オサエである。

b類：胴部の脹みが小さいもの (22)

器面調整は口縁部内外面がヨコナデ、胴部外面が単位の間隔のあいた刷毛目である。

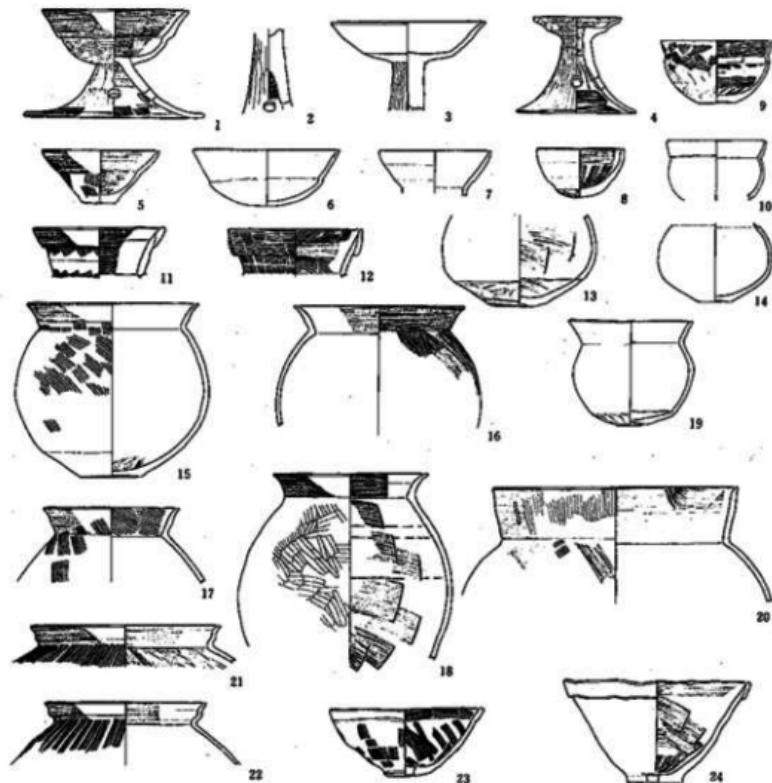
瓶

第1類：複合口縁で、丸底の鉢状のもの（23）

複合口縁はあまり顕著でない。全体に丸味をもつ鉢状をした單孔の瓶である。器面調整は口縁部外面がオサエ、胴部外面と内面全体が刷毛目、底部外面がヘラケズリである。

第2類：複合口縁で、平底の鉢状のもの（24）

複合口縁は顕著である。口縁・胴部が直線的に外傾し、底部が平底の鉢状になる單孔の瓶である。平底の底部は全体が厚く、台状になっている。



第90図 第I群土器

土器の共伴関係

分類を行なった土器の各住居跡における出土状況を検討してみたい。土器群の組み合せとその同時性を検証するには床面上の一括遺物が望ましい。しかし、宮前遺跡ではそのような良好な出土状況を示す資料があまり多いと言えず、それのみにこだわると各々の器形の欠落現象が顕著になり、相互の比較が困難となる。そこで、ここでは住居廃絶時から埋没終了時までの間に遺棄あるいは廃棄された土器群を広義の共伴関係の資料として取り扱うことにする。したがって、各住居跡における土器組成は一定の時間幅をもつことになる。ただし、この時間幅は土器の変化（形態・調整技法などの特徴）を引き起す程のものであってはならない。その点は、床面や貯蔵穴状ピットから出土した同時性の強い遺物によって補なうこととする。

住居跡における土器の出土状況

第2・22・38・49・53号住居跡における土器の出土状況をみると次のようになる。なお、第2・38・49・53号住居跡の土器は大部分が床面・貯蔵穴状ピット出土のものである。また第22号住居跡の土器は堆積土でも床面に近い部分から出土したものである。

第2号住居跡：高坏第3類2点・坏第1d類1点・壺第1b類1点・壺第2b類1点・甕第1b類1点・甕第2a類4点・甕第2b類3点・甕第4類1点・甕第5b類1点・瓶第2類1点

第22号住居跡：高坏第2類1点・坏第1c類1点・甕第1a類2点。

第38号住居跡：器台第1類1点・壺第1a類1点・甕第1a類3点・瓶第1類1点。

第49号住居跡：器台第1類1点・坏第1b類2点・壺第2a類1点・甕第1a類4点・甕第3類2点・甕第5a類1点。

第53号住居足：高坏第1類1点・坏第1a類1点・坏第2a類1点・坏第2b類1点。

以上のような土器の出土状況を整理すると次の三つのグループにわかれる。

A群：高坏第1類・坏第1a類・坏第2a類・坏第2b類からなるグループ（第53号住居跡）

B群：高坏第2類・器台第1類・坏第1b類・坏第1c類・壺第1a類・壺第2a類・甕第1d類・甕第2a類・甕第3類・甕第5a類・瓶第1類からなるグループ（第22・38・49号住居跡）

C群：高坏第3類・坏第1d類・壺第1b類・甕第1b類・甕第2a類・甕第2b類・甕第4類・甕第5b類・瓶第2類からなるグループ（第2号住居跡）

これら三つのグループにおける土器の組み合せをみると、甕第2a類をB群とC群が共有している以外は、それぞれ異なる土器組成となっている。また、甕第2a類についても、B群では僅か1点で、全体の中で1/13の比率で少ない存在であるのに対し、C群では4点で4/10の比率を占め非常に特徴的な存在である。このように、A・B・C群はそれぞれまとまりをもつた土器群とすることができる。

編年の位置

第I群土器は高壺・器台・壺・壺・甕からなり、その器形的特徴から東北地方の土師器の編年で塩釜式に位置づけられる（氏家和典：1957・3）。また、第I群土器は住居跡における共伴関係の相違からA・B・Cの三つの土器群にわかれることが明らかとなった。塩釜式土器におけるA・B・Cの三つの土器群の存在が、どのような理由に基づくものであろうか。このことを、これまで発見されている塩釜式土器と比較し、検討することにしたい。

A群土器

A群土器と共通した内容をもつ土器群としては刈田郡藏王町大橋遺跡出土土器をあげることができる（太田昭夫：1980・9）。大橋遺跡では3軒の住居跡が調査され、塩釜式土器がまとまって出土している（第91図）。第1～3号住居跡からは高壺・器台・壺・壺・甕が出土し、ほぼ同時期のものと考えられている。

高壺第1類に類似するものは第1号住居跡から出土している。壺部は口縁部が内湾気味に外傾し、胴・底部は強い脛みをもつ丸底状のもので、脚部は裾の大きく広がる円錐台状で大きな円窓がある。口縁部が内湾気味に外傾することを除けば、高壺第1類と良く似ている。壺第1・2類は住居跡周辺の第I・II層、やや似たものが第2・3号住居跡から出土している。壺第1・2類は宮前遺跡第53号住居跡において床面・貯蔵穴状ピットから高壺第1類とともに出土しており同時性の高いものである。

大橋遺跡の土器は塩釜式でも古い段階の可能性が強いものと考えられている（太田昭夫：1980・9）。

B群土器

B群土器と共通した内容をもつものは、名取市清水遺跡第IV層出土土器（丹羽・阿部・小野寺：1981・3）・仙台市遠見塚古墳第12トレンチ第I土器群（結城・工藤：1979・3）・加美郡色麻町色麻古墳群第12号住居跡出土土器（古川一明：1983・3）・栗原郡志波姫町鶴ノ丸遺跡第5・6号住居跡出土土器群（手塚均：1981・9）などがある（第91図）。清水遺跡第IV層からは高壺第2類・壺第1c類・甕第3類とともに、B群土器では欠落している脚部円錐台状の高壺・縁帶をもつ壺が出土している。遠見塚古墳第12トレンチでは自然溝の小さな段から多量の土器がまとまって出土し、壺3点（1点は高壺の可能性もある）・壺1点・甕4点が実測図で報告されている。これらのうち壺1点は第1c類、甕3点は第1a類である。ここで注意すべきことは有段口縁の壺が共伴していることである。有段口縁の壺は仙台市今泉城第19号土壙からも壺第1b類・壺第1a類・壺第2a類・甕第1a類・鼓形器台とともに出土している（篠原・工藤他：1980・8）。色麻古墳群第12号住居跡からは、壺第1b類1点・壺第1c類1点・壺第2a類1点・甕第1a類1点と、B群土器では欠落している高壺1点・壺4点が出土している。鶴ノ丸遺跡第5号住

居跡からは、壺第1 b類と第1 c類の中間的なもの2点・壺第1 c類1点・壺第1 a類2点・壺第2 a類1点・甕第2 a類の他脚部円錐台状の高壺1点・鉢状の壺1点が出土している。第6号住居跡からは第1号住居跡と同様な壺・壺とともに鼓形器台・円錐台状の短脚器台が出土している。

これらの土器群は、いずれも塩釜式として報告されている。その中で、清水遺跡・鶴ノ丸遺跡の報告では大橋遺跡と同様に古い段階に属するが、大橋遺跡の土器群とは相違する様相を示すことを指摘し、資料の増加を待つて解決すべき問題としている（丹羽・小野寺・阿部：1981・3、手塚均：1981・9）。

C群土器

C群土器と共にした内容をもつものは、名取市清水遺跡第III層・第10溝出土土器（丹羽・小野寺・阿部：1981・3）・名取市西野田遺跡第5号住居跡出土土器（丹羽・柳田・阿部：1974・3）・古川市留沼遺跡第1・2次調査出土土器（手塚均：1980・3）などである（第91図）。

清水遺跡第III層・第10溝からは、甕第1 b類1点・甕第2 a類2点とともにC群土器では欠落している高壺、退化した複合口縁や継ぎ浮文をもつ壺などが出土している。西野田遺跡第5号住居跡からは高壺第3類1点・壺第2 b類2点・甕第2類1点とともに鼓形の器台1点、退化した有段口縁の壺1点、台付甕の台部1点が出土している。このように、清水遺跡・西野田遺跡では出土量が限られているため、土器組成を知る上ではやや偏ったあり方をしている。この点、留沼遺跡第1・2次調査地区の第1号住居跡・竪穴遺構・第1～4遺物集中地点・遺物包含層からまとめて出土している。すなわち、高壺第1類・壺第2 b類・甕第2 a類・甕第2 b類・甕第2類とともに、各種の高壺・器台・壺・壺・甕が出土している。高壺・器台には丸窓や貫通孔の小さいものやないものが多い。壺は第1 b・c類にも似るが、張りや脛みが弱い。有段口縁の壺は退化した形態のものである。甕には口縁・胴部が内寄するものもあるが底部の形状は第2類と同じで台状になっている。器面調整の刷毛目・ヘラミガキはA・B群土器と較べると粗雑である。

これらの土器群は、塩釜式土器として位置づけられ、さらに西野田遺跡では大橋遺跡出土土器と比較した上で「塩釜式土器内部の新しい要素」をもつもの（丹羽・柳田・阿部：1974・3）、留沼遺跡では「西野田のものと強い類似性を示し」……中略……「西野田における器種の欠損をある程度まで補うもの」（手塚均：1980・3）、清水遺跡では「第II群土器（第III層・第10溝出土土器）は第I群土器（第IV層出土土器）より新しいもの」（丹羽・小野寺・阿部：1981・3）としている。したがって、C群土器の類例としたものは、いずれも塩釜式土器の中で新しい段階のものとして理解されている。さらに、清水遺跡ではB群土器よりも新しいことが層位的（第IV層土器—第III層土器）に確認されている。

塩釜式土器の諸段階

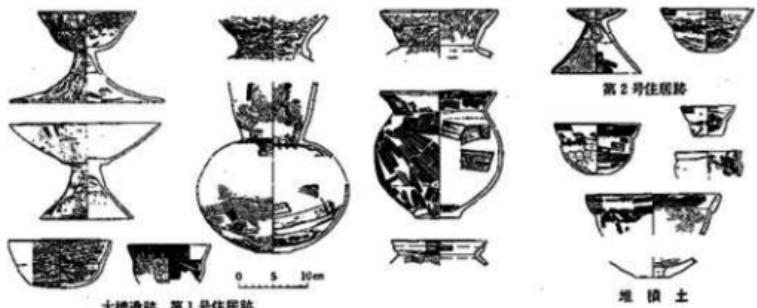
A群土器・B群土器・C群土器の類例を検討した結果、塩釜式土器の中でA群土器・B群土器は古い段階に、C群土器は新しい段階に属すること、さらにB群土器とC群土器の関係は清水遺跡において層位的に示されることを確認した。次に問題となるのは、A群土器とB群土器の関係である。この点を器形ごとに各群の土器を比較し検討してみたい。

高坏：A群土器の高坏には、脚部が裾の大きく広がる円錐台状と単純な円錐台状のものがあり、両者とも大きい円窓を3個以上もっている。器面調整は丁寧である。C群土器の高坏には脚上・中部が柱状で下部が円錐台状になるものと、脚下部で屈曲をもつ円錐台状のものがある。これらの高坏に共通しているのは、脚部に円窓をもたないものが多く、あっても小さいことである。また、器面調整はA群土器の高坏に較べると粗雑である。この点B群土器の高坏は、脚上部が柱状で脚中・下部で円錐台状に聞くものと、単純な円錐台状のものがある。円窓はあるが、A群土器の高坏に較べると小さく、その数も3個に限られる。器面調整はC群土器よりは丁寧であるが、A群土器程ではない。

器台：A群土器の器台は脚部が円錐台状で、大きな円窓と貫通孔をもち、丁寧に仕上げられている。B群土器の器台には脚部が円錐台状と鼓形のものがあり、貫通孔をもつ。円錐台状のものは円窓をもつが、A群土器の円窓と較べると小さい。また、円錐台状の器台は仕上げが丁寧であるが、鼓形のものは刷毛目やナデ・オサエを多用し、やや粗雑である。C群土器の器台にも脚部が円錐台状のものと鼓形のものがある。円錐台状のものには円窓をもつものもあるが円窓をもたないものも多い。また、脚部内面の仕上げが粗雑で、成形時のナデツケ痕や積み上げ痕を残すものもある。

坏：A群土器の坏には丸底状のもの、鉢状のもの、皿状のものがあり、いずれも丁寧に仕上げられている。丸底状のものはヘラミガキで仕上げられる。鉢状・皿状のものはヘラミガキの他に刷毛目・ナデが多用され、底部付近がヘラケズリされる。B群土器の坏にも丸底状・鉢状のものがあるが、A群土器の坏に較べ張りを失ない、仕上げもやや粗雑である。器面調整にヘラミガキ・刷毛目・ナデ・ヘラケズリが多用され、丸底状のものにもヘラケズリが及んでいる。C群土器の坏にも、丸底状・鉢状のものがあり、ヘラミガキ・刷毛目・ナデ・ヘラケズリで仕上げられるが、B群土器よりもさらに粗雑である。

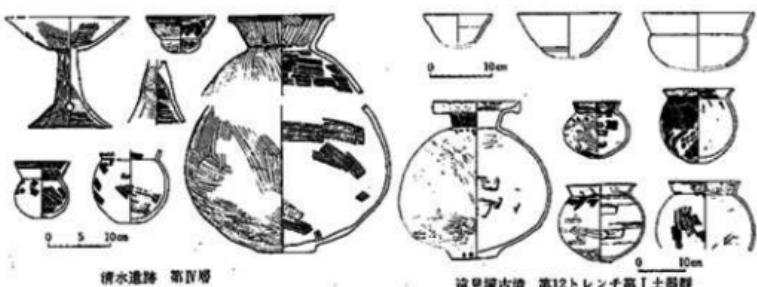
壺：A群土器には、複合口縁で頸部に刻目の加えられた凸帶のめぐる大型壺がある。小型の壺は口縁部が直立気味に外傾し高くなり、胴部は中央部に脛みと張りのある横長椭円形をしている。器面調整はヘラミガキを多用し、力強くそして丁寧に仕上げられている。B群土器の大型壺には複合口縁と有段口縁のものがある。小型の壺は口縁部が僅かに外傾し、胴部は中央部に脛みと張りをもつ横長椭円形もしくは球形である。器面調整として、ヘラミガキ・刷毛目



大橋遺跡 第1号住居跡

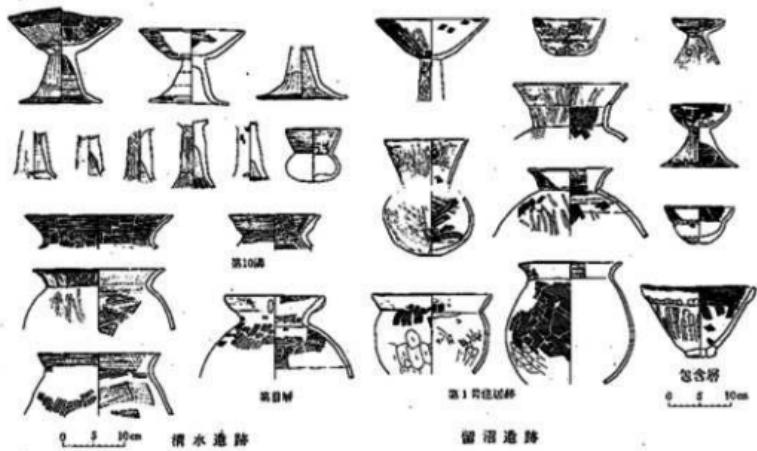
第2号住居跡

堆積土



清水遺跡 第12号

追見塚古墳 第12トレンチ第1土器群



第10號

第1号住居跡

第1号住居跡

包含器

0 5 10cm 清水遺跡

留沼遺跡

第91図 第I群土器の類例

を多用し、丁寧に仕上げられるが、A群土器程の力強さはない。C群土器の大型壺には複合口縁と有段口縁のものがあるが、いずれも退化した形態のものが多い。小型壺は口縁部が外傾し胴部は球形に近いものと横長楕円形のものがある。器面調整としてヘラミガキ・刷毛目を多用するが、B群土器よりさらに粗雑である。

甕：A・B・C群土器のそれぞれに単純口縁・「S」字状口縁の大型甕、単純口縁の小型甕がある。その中で主体を占めるのは単純口縁の大型甕である。また「S」字状口縁の大型甕は特徴的相違が顕著である。したがって、単純口縁と「S」字状口縁の大型甕について比較する。

A群土器の単純口縁大型甕の口縁部は、下部が屈曲をもって肥厚しながら外反し、胴部は中央部に脛みと張りをもち、力強い。器面調整として刷毛目を多用する。B群土器の単純口縁大型甕はA群土器の甕に似るが、口縁下部の屈曲が弱く、胴部の張りが小さい。C群土器の単純口縁大型甕は、B群土器の甕に似たものと胴下部が脹む下脛みのものがある。両者とも器形細部の屈曲が小さく、滑かに移行する。器面調整は刷毛目の他にヘラケズリ・ヘラナデのものが多い。

「S」字状口縁の甕は各群にあるが、A群土器では胴部を欠いている。このため、B群土器とC群土器の甕について比較する。B群土器の「S」字状口縁の甕は肩から胴部へ大きく脛み、器面調整の刷毛目は縦方向に密接して加えられる。C群土器の「S」字状口縁の甕は肩から胴への脛みが小さい。器面調整の刷毛目は縦方向に加えられるが、刷毛目は一単位ごとに間隔があいている。

瓶：瓶はいずれも複合口縁の鉢状をしており、単孔式のものである。また、器面調整に刷毛目を多用している。A群土器の瓶は口縁部が外傾し、胴・底部の内弯する丸底状をしている。B群土器の瓶は口縁・胴・底部の内弯する丸底状をしている。C群土器の底部には、口縁・胴部が内弯するものと口縁・胴部が直線的に外傾するものがある。両者とも底部は分厚い平底で、台状になっている。

以上、器形ごとにA群土器・B群土器・C群土器を比較した。その結果、器形・器面調整など種々の特徴において、B群土器はA群土器とC群土器の過渡的様相を備えていることが明らかとなった。A群土器からC群土器への変遷はB群土器の存在を介在させることによって容易に理解することが可能である。そして、その変遷は高坏にあっては円窓の消失化、器台にあっては貫通孔と円窓の消失過程にあらわれている。また器台における貫通孔の消失化は器台そのものの役割が失なわれることを示している。壺では複合口縁・有段口縁が次第に退化していく様子がうかがわれる。有段口縁の壺はB・C群土器のものは把握できたが、A耕土器に伴うものがどのような形態をしているのか未だ明らかでない。甕は胴中央部に脛みと張りのあるものから、それらが失なわれ、下張みのものへと変化する。そして、そのような器形変化に応じながら

ら器面調整も変化し、刷毛目からヘラナデ・粗いヘラミガキのものへと変化する。「S」字状口縁の壺も胴部の脛みの大きいものから小さいものへ、器面調整の刷毛目も密接しているものから間隔のあいたものへという変化がみられる。瓶は単孔式という点では共通しながら、胴部の内寄するものから直線的に外傾するものへ、丸底状のものから平底状のものへという変化がみられる。

そして、A群土器の壺頸部にめぐる刻目凸帯は弥生土器末期の壺にみられる口縁下部の刻目と通ずる要素をもっている。また、C群土器の高坏にみられる円窓の消失化、壺にみられる複合口縁・有段口縁の退化現象、壺の下張み胴部にみられる長胴化の傾向、そして器面調整のヘラナデや粗いヘラミガキの盛行は、南小泉式土器との連続性をうかがわせるに充分である。

このように、宮前遺跡においてその出土状況の相違から摘出されたA群土器・B群土器・C群土器は、宮城県内の類似資料とあわせて時期的な差をもって変遷していることが明らかとなった。すなわち、A群土器・B群土器・C群土器は塙釜式土器における時期的な諸段階である。

なお、今回は宮城県内における塙釜式土器の細かな地域差の有無については検討できなかった。また、各段階における器形の変遷を知る上で未だ資料的に不充分なものもある。さらに、方形周溝墓・古墳出土の塙釜式土器については検討を加えることができなかつた。これらの点は、今後の課題としたい。

第II群土器

第II群土器は第25・42・45号住居跡からまとまって出土している土器群で、高坏・坏・壺・甕・瓶からなっている（第92図）。器形組成の上で第I群土器と相違するのは器台が消失していることである。第II期土器も詳細に観察すると各々の住居跡において器形細部および器形の組み合せに相違がみられる。そこで、第II群土器についても第I群土器と同様に土器の分類と住居跡における土器の共伴関係を検討し、そのような相違がどのような理由に基づくものか明らかにしたい。

土器の分類

高坏

第1類：脚部が外反気味に開く円錐台状のもの（1）

坏口縁・胴部は外傾し、胴下部から底部において器厚を増し平底状になる。脚部は下部へ向て外反気味に開く円錐台状をしているが、脚下・裾部を破損している。外面の器面調整はヘラミガキである。内面の器面調整は坏部が軽いミガキ・ナデ・ヘラナデ、脚上部がナデツケ、脚中央部がヘラナデである。

第2類：脚上半部が脛みをもち、下半部が外反して聞く円錐台状のもの（2）

脚上半部は脛みをもちら僅かに開き、下半部は強く外反しながら開き据へのびる。脚端部は裾が捲れた状態になっている。外面の器面調整は上半部がヘラミガキ、裾部がヨコナデである。内面の器面調整は上半部がヘラナデ、裾部がヨコナデである。

坏

第1類：口縁・胴部が内弯するもの

a類：口縁上部が内弯するもの（3）

a類には口縁上部が強く内弯するもの、内弯が弱いもの、直立気味のものなどがある。胴・底部は丸底状のものと小さな平底状になるものがある。外面の器面調整は口縁部がヨコナデ、胴・底部がヘラミガキである。平底の場合、木葉底のものもある。内面の器面調整はヨコナデ・ナデ・ヘラナデである。

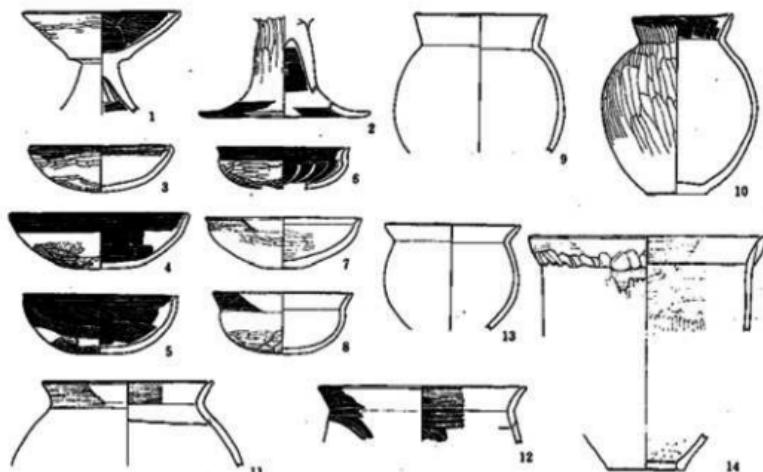
b類：口縁端部に変化をもつもの（4・5）

b類の口縁端部には、屈曲して内傾するもの（4）と外反するもの（5）がある。胴・底部は丸底状である。外面の器面調整は口縁・胴上半部がヨコナデ・ナデ、胴下半から底部が軽いヘラミガキ・ヘラケズリである。内面の器面調整はヨコナデ・ナデ・ヘラナデである。

第2類：口縁部が小さく外反するもの

a類：直立気味に外反するもの（6）

口縁部は直立気味に外反し、胴部との屈曲が大きい。胴・底部は肩の張る丸底状をしている。



第92図 第II群土器

外面の器面調整は口縁部がヨコナデ、胴上部がヘラミガキ、胴下・底部がヘラケズリである。内面の器面調整はヨコナデ・ナデで、胴部にはその上に間隔をおいた放射状のヘラミガキがある。

b類：外傾気味に外反するもの（7）

口縁部は外傾気味に外反し、胴部との屈曲が小さい。胴・底部は緩やかな弯曲の丸底状をしている。外面の器面調整は口縁部がヨコナデ、胴・底部がヘラミガキである。内面の器面調整は、口縁部は摩滅して不明であるが、胴・底部はヘラミガキである。

第3類：口縁部が大きく外反するもの（8）

口縁部が外傾気味に大きく外反し、胴・底部は肩の張る丸底状をしている。外面の器面調整は口縁部がヨコナデ、胴部がヘラミガキ、胴下・底部がヘラケズリである。内面の器面調整は摩滅のため不明である。

壺

第1類：短頸壺

a類：口縁・頸部が直立気味に外傾し、胴部が球形のもの（9）

器面調整は摩滅のため不明である。

b類：口縁・頸部が外傾し、胴部が球形に近い長胴のもの（10）

口縁部はa類よりも僅かに開く。胴部もa類より僅かに長胴気味である。底部は平底である。外面の器面調整は口縁部がヨコナデ、頸・胴部がヘラミガキ、底部がヘラケズリである。内面の盤面調整は、口縁部がヘラナデであるが、胴・底部は剥落のため不明である。

甕

第1類：口縁部が「く」字状に外反し、胴部が緩やかに脹むもの（11）

胴中央部以下を破損しているが、胴部は長胴気味になるものと推定される。器面調整は口縁部内外面がヨコナデであるが、胴部は摩滅のため不明である。

第2類：口縁部が緩やかに外反し、胴部が僅かに脹むもの（12）

頸部の屈曲は第1類より小さい。胴中央部以下を破損しているが、胴部は中央部で僅かに脹む長胴のものと推定される。器面調整は内外面とも口縁部がヨコナデ、胴部がナデである。

第3類：口縁部が外反し、胴部が球形の小型甕（13）

口縁部は外傾気味で、端部は丸くおさまる。器面調整は摩滅のため不明である。

瓶

第1類：無底式深鉢状のもの（14）

口縁部が外反し、胴上部は円筒状で胴下部がすぼまる。口縁部は複合口縁で、下半部が指頭状のもので連続してオサエられている。器面調整は内外面とも口縁部がヨコナデ、胴部がヘラミガキである。

土器の共伴関係

分類を行なった土器の各住居跡における出土状況を：第Ⅰ群土器の場合と同様な方法で検討してみたい。

住居跡における土器の出土状況

第25・42・45号住居跡における土器の出土状況をみると次のようになる。なお、第42・45号住居跡出土土器はいずれも床面・細部（カマド・柱穴・貯藏穴状ピット・周溝）から出土したものである。第25号住居跡出土土器もその大部分は床面・細部から出土したものである。したがって、いずれも同時性の強いものである。

第25号住居跡：高坏第2類1点・坏第1a類1点・坏第1b類2点・坏第2a類1点・坏第3類1点・壺第1b類2点・甕第2類1点・甕第3類1点

第42号住居跡：高坏第1類1点・坏第1a類3点・壺第1a類1点

第45号住居跡：坏第1a類1点・坏第2b類1点・坏第3類1点・甕第1類2点・瓶第1類1点
以上のような土器の出土状況を整理すると次の二つのグループにわかれる。

A群：高坏第1類・坏第1a類・壺第1a類からなるグループ（第42号住居跡）

B群：高坏第2類・坏第1a類・坏第1b類・坏第2a類・坏第2b類・坏第3類・壺第1b類・甕第1類・甕第2類・甕第3類・瓶第1類からなるグループ（第25・45号住居跡）

この二つのグループは、高坏・壺に相違がみられる。また、坏ではA群土器が第1a類を主体としているのに対し、B群土器では第1a・1b・2・3類が同程度に存在し、第1a類は主体とならない。したがって、A群土器・B群土器はそれまとまりをもつた土器群とみることができる。

また、A群土器・B群土器を出土する住居跡間には、重複して切り合っているものはない。したがって、第Ⅰ群土器の場合と同様に、これまでの研究成果・調査資料と比較し検討してみたい。

縦年の位置

第Ⅱ群土器は高坏・坏・壺・甕・瓶からなり、その器形的特徴から東北地方における土師器の編年で南小泉式に位置づけられる（氏家和典：1957・3 白鳥・加藤他：1974・3）。それではA群土器・B群土器は南小泉式土器の中でどのような位置づけを与えられるものであろうか。これまで発見されている南小泉式土器と比較してみたい。

A群土器

A群土器と共にした内容をもつ土器群としては、古川市留沼遺跡第3次調査出土土器（土岐山武：1981・3）・多賀城市山王遺跡第3号遺構出土土器（高倉敏明：1981・3）をあげること

ができる（第93図）。留沼遺跡は第1・2次調査で第I C群土器が多量に出土しているが、そこから北西に約40m離れた地点において第3次調査の際にBトレンチ第VI・VII層から南小泉式の土師器が少量ではあるがまとまって出土している（壺5点・壺1点・甕2点）。壺は4点が第1a類で、もう1点は口縁部が小さく外反する鉢状のものである。壺は口縁部が外傾して開く小壺である。甕は第1・3類に似たものである。山王遺跡第3号遺構からは多量の土器が出土している。実測図で示された中で器形の判明するものは壺8点・高壺6点・壺3点・甕6点である。壺の大部分は第1a類（6点）で、他の3点は留沼遺跡にもみられたような口縁部が小さく外反する鉢状のものである。高壺は第1類が1点、脚上・中部が円錐台状で下部が開くもの1点、脚上・中部が円筒状で下部が開くもの4点である。壺は大型壺2点と小型壺1点である。大型壺は複合口縁の退化した形態で、胴部は球形である。小型壺は外傾する頸部から折れ曲るようにして口縁部が直立するものである。大型甕は4点で、第1類に近い。小型甕は2点で第3類に近い。

このように、A群土器は留沼遺跡でも出土しているが出土量が少ないため高壺などを欠落している。この点山王遺跡第3号遺構出土土器は出土量が多く、甕を除きすべてそろっており、土器組成・器形の特徴を知る上で現在の所最も良好な資料である。

これらの土器群に対し、留沼遺跡では西野田遺跡出土土器・留沼遺跡第1・2次調査出土土器と比較した結果、両者の過渡的な様相を示すとし、「全体的な土器組成という意味では岩切鴻ノ巣遺跡に近い」ことから、「南小泉式に位置づけられ、岩切鴻ノ巣遺跡の資料より古い段階のものである可能性がみられる。」としている（土岐山武：1981・3）。山王遺跡では土器の分類を行なっているものの、遺構・遺物の細部検討は後日報告するとして、古墳時代（中期）とだけしている。

B群土器

B群土器と共通した内容をもつ土器群としては仙台市岩切鴻ノ巣遺跡第1号住居跡出土土器がある（第93図）。壺7点・高壺2点・壺3点・甕2点・瓶1点からなる良好な資料である。壺は第1類が3点・第2類が3点、第3類が1点である。高壺は脚上・中部が円錐台状で、下部の開くものが1点で、もう1点は壺部である。壺は第1b類が1点で、他の2点は小型壺である。甕は第1類が1点、第2類が1点である。瓶は無底式で、甕第1類に一対の把手をつけたものである。

このように、岩切鴻ノ巣遺跡第1号住居跡出土土器は、壺の形態が多種類におよぶこと、壺・甕の形態など、B群土器と強い類似性がうかがわれる。岩切鴻ノ巣遺跡では引田式とされてきた壺・壺・甕と類似するものを含んでいることに対して「本遺跡の住居跡における出土状況からみても、本群の土師器の中から引田式に類似する土器だけを抽出して分離することには、

多くの無理がある。……中略……引田式類似のものも含めて、一括して南小泉式に位置づけるのが妥当と思われる。」としている。このような土器群のあり方は宮前遺跡においても第II B群土器として確認されたことになる。

南小泉式土器の諸段階（Ⅰ）

A群土器・B群土器の類例を検討した結果、B群土器（岩切鴻ノ巣遺跡第1号住居跡など）は南小泉式の良好な資料であり、A群土器（留沼遺跡第3次調査地区・山王遺跡第3号遺構など）はB群土器よりも古い段階のものである可能性が生じてきた。ただ、留沼遺跡第3次調査地区的資料は量的に少なかったため、相互の比較検討は必ずしも充分なものとは言い難い。そこで、ここでは器形ごとにA・B群土器を比較し、さらに確実性の高いものにしていきたい。

高坏：高坏はB群土器の宮前遺跡・岩切鴻ノ巣遺跡でそれぞれ1点ずつなので、A群土器の山王遺跡のものと直接比較するのは困難である。そこで、山王遺跡の高坏は塩釜式土器の第III段階に位置づけられた第I C群土器の清水遺跡第III層・第10溝出土のものと比較することにしたい。山王遺跡の高坏は脚上・中部が円筒状で下部で開くものが主体で、円錐台状のものは少ない。これに対し、清水遺跡の高坏は脚上部が円柱状で下部で開くものと円錐台状のものの両者からなっている。脚が円錐台状のものは脚下部で裾に向って開き円窓をもたない点両者は似ている。ただ、清水遺跡の高坏は脚内面をヘラケズリしているものが多いのに対し、山王遺跡のものは脚上部が円筒状のものと同様にナデツケかヘラナデとなっている点相違している。器面調整の相違を除けば第II A群土器の山王遺跡と第I C群土器の清水遺跡は相互に近似した器形の高坏を共有していることになる。

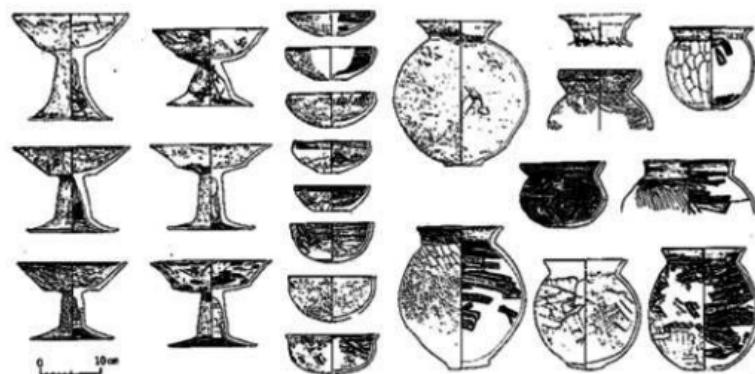
坏：坏はA・B群土器とも第1類を共有する。しかし、A群土器では第1類が主体となるのに対し、B群土器では第2類・第3類が同様な比率で存在する。

壺：壺は第1類で比較するとA群土器では胴部が球形に近いが、B群土器では長胴化の傾向がみられる。また、大型壺はA・B群土器で直接比較できないが、A群土器の複合口縁の壺は第I C群土器のものと良く似ており、区別が難しい程である。

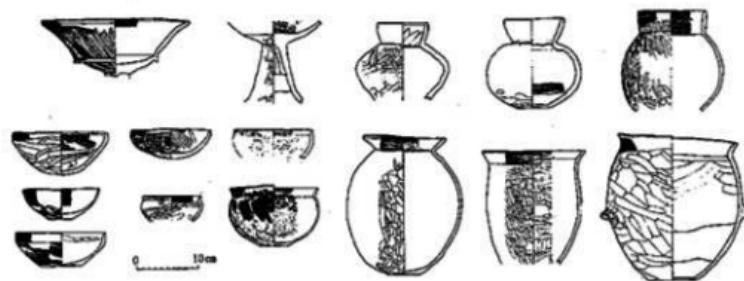
甕：甕の胴部はA群土器が球形に近いのに対し、B群土器では長胴に近いが長胴である。なお、A群土器の甕は複合口縁の壺同様に第I C群のものに良く似ている。

瓶：瓶はA群土器のものが不明なため直接比較できない。しかし、B群土器の瓶は深鉢状か長胴化した甕に把手をつけたもので、第I C群土器の瓶とは隔絶感がある。

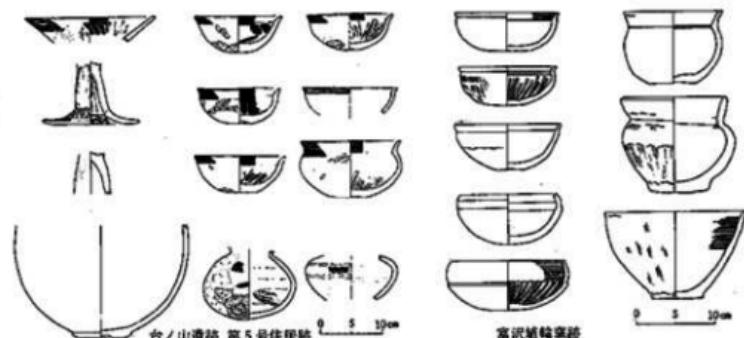
以上のようにA群土器・B群土器は南小泉式という点では共通しても、器形細部とその組み合せという点で相違がみられた。そして、A群土器は高坏・壺・甕で検討したように第I C群土器との関連が深く、両者は時期的に近接するものと考えられる。しかし、B群土器は第I C群土器とは大きく相違し、A群土器を介在させない限り、両者の関連を理解することができない。



山王遺跡 第13号住居跡



岩切池ノ集落跡 第2号住居跡



第93図 第II群土器の類例

い。したがって、このような点に立脚するとA群土器はB群土器に先行し、留沼遺跡の報告における指摘は妥当なものと考えられる。

南小泉式土器の諸段階（Ⅱ）

南小泉式土器に位置づけられている土器群には上述したA・B群土器の他に柴田郡大河原町台ノ山遺跡第5号住居跡出土土器がある（阿部・千葉：1980・1）（第93図）。第5号住居跡からは土師器の坏6点・高坏3点・壺1点と須恵器壺？1点が出土している。坏はいずれも厚手のもので、口縁部が外反し、坏第2・3類に似ている。また、坏第1類に類似するものがみられない。このことは、坏第1類は存在したとしても少量で、主体となるのは坏第2・3類に類似するものであることを示している。高坏は脚上・中部が円筒状で下部の開くものである。壺は小型のものである。高坏や壺でA・B群土器と区別するのは困難であるが、坏の特徴と第2・3類に類似するものが主体を占めるという点で、相違がみられる。このような土器群はA・B群土器に先行する要素はみられず、それらに後続するものと考えられる。また、仙台市富沢埴輪窯跡の前庭部からは石製模造品とともに土師器坏5点・鉢3点がならべおかれた状態で出土し、埴輪窯の祭祀に関するものと考えられている（渡辺泰伸他：1974・9）（第93図）。これらの坏を見ると、第2類が3点で、その他に口縁部が直立気味に内弯する有投の坏が2点ある。このような坏のあり方は台ノ山遺跡第5号住居跡出土土器と共に通するもので、B群土器に後続するものと考えられる。なお、有段の坏は須恵器有蓋坏の蓋を模倣したかの感をいただかせるものである。これらの土器群をC群土器としておきたい。

第II群土器の年代

第II群土器は南小泉式に位置づけられ、それらはA群土器→B群土器と変遷し、さらにそれらに後続するものとして台ノ山遺跡第5号住居跡・富沢埴輪窯跡祭祀土器群の存在を指摘した。台ノ山遺跡からは須恵器壺？が出土し、富沢窯跡は仙台市裏町古墳（伊東・伊藤・岩渕：1974・3）に埴輪を供給したことから、これらを手懸りとして第II群土器の年代について考えてみたい。渡辺泰伸氏の教示によると裏町古墳から出土した須恵器は仙台市大蓮寺窯跡のものより新しく、大阪府陶邑古窯跡群のTK208窯式の時期に比定されるという。また、台ノ山遺跡の須恵器壺？も裏町古墳の須恵器とほぼ同時期のもので、陶邑古窯跡群のTK208窯式の時期に比定されるという。TK208窯式の須恵器は、田辺昭三氏によれば古墳時代中期5世紀後葉のものとされている（田辺昭三：1981・7）。

また、B群土器については宮前遺跡・岩切鴻ノ巣遺跡では須恵器を伴出していないが、福島県国見町下入ノ内遺跡第1号住居跡では多量の土師器とともに須恵器蓋・蓋坏・把手付壺・壺が出土している（佐藤博重：1980・3）。下入ノ内遺跡の土師器は実見していないが、実測図と写真から判断すると坏は第1類・第2類・第3類が一定程度に存在し、壺も第1・2・3類から

なり、B群土器の内容と共通している。須恵器については「TK216の時期か、TK216の特徴を強く残したTK208の初期の段階のもの」で「5世紀中葉末に想定されるものであろう。」としている（佐藤博重：1980・3）。この点、渡辺泰伸氏も大蓮寺窯とほぼ同じ時期のもので、5世紀中葉ではないかと言う。

このように、土師器の編年と須恵器の編年は相互に矛盾するところがない。したがって、B群土器を5世紀中葉、C群土器を5世紀後葉頃の土器群とみることは妥当なことと考えられる。そしてA群土器についてはB群土器に先行することが明らかであるから、5世紀前葉頃に比定して大きな誤りはないであろう。もちろん、このような年代観はまだ土師器と須恵器との共伴例があまり多くないことから、多少の時間幅は考慮しなければならないが、大きく変動することはないと思われる。

第III群土器

第14号住居跡から出土した土器群であるが、量的には少ない。土師器壺・甕・須恵器壺が1点ある。土師器壺は口縁部が外反し、胴・底部が丸底状のもので、内面の器面調整はヘラミガキで黒色処理されている。外面の器面調整は口縁部がヨコナデ、胴・底部がヘラケズリである。甕は口縁部が外反する長胴形のもので、肩から胴中央部へ僅かに脛みをもって移行する。外面の器面調整は口縁部がヨコナデ、胴部が刷毛目である。内面の器面調整は口縁部がヨコナデ、胴部がナデである。須恵器壺は口縁部が外傾し、段を境として胴底部は浅い丸底状をしている。このような土器群は、清水遺跡の第IV・V群土器と類似している。土師器壺はやや特異な器形をしているが、甕は清水遺跡第VI群の第4類・第V群の第3類、須恵器壺は清水遺跡第IV群の第1a類、第V群の第1類と似ている。第III群土器としたものは量が少ないので、清水遺跡の第IV群か第V群のいずれに該当するか定かでない。いずれにしても、清水遺跡の第IV・V群土器は栗田式に位置づけられており、第III群土器も栗田式の幅の中で理解するのが妥当と考えられる。（図は第14号住居跡の項を参照）

第IV群土器

第20・54号住居跡からロクロ使用の土師器と赤焼土器・須恵器が出土しており、これらを第IV群土器とする。ロクロを使用して製作した土師器は、東北地方における土師器の編年で表杉ノ入式とされており（氏家和典：1957・3）、第IV群土器の土師器も表杉ノ入式に位置づけられる。また、第20・54号住居跡出土土器を詳細に観察すると、器形や器面調整技法などの特徴に相違が認められることから、前者をA群土器、後者をB群土器とする。

表杉ノ入式土器は近年資料の増加に伴い再検討が加えられ、細分の可能性が指摘されるとと

もに、具体的研究成果も積み重ねられてきている（阿部義平：1968・10 小笠原好彦：1976・10 早坂・阿部：1980・3 白鳥良一：1980・3 小井川和夫：1981・3 1982・9 丹羽・小野寺・阿部：1981・3 森貴喜：1982・3）。したがって、ここでは表杉ノ入式土器を細分する立場から、A群土器とB群土器について検討を加えてみたい。

A群土器（第20号住居跡出土土器）

第20号住居跡からは土師器坏8点・蓋口縁部1点・甕12点（口縁部1点・底部5点を含む）・赤焼土器坏5点・須恵器坏6点・蓋（つまみ1点・口縁部2点）・壺底部1点・甕肩部1点と土師器・赤焼土器・須恵器の小破片（表参照）が出土している（第94図）。第20号住居跡は遺構の項でも述べたように二度拡張を行なっており、土器は掘り方・床面・カマド・ピット・周溝・堆積土から出土しているが、出土状況による土器の相違は認められない。したがって、このことは第20号住居跡出土土器が住居構築時から二度の拡張を経て廃絶後埋まるまでの時間幅をもち、その時間幅は土器の変化を引き起す程のものではなかったことを示している。

土器の分類

土器の分類は完形品を中心として行なうが、全体の数量が限られているのでやや個別説明に近い形になる。また、不充分な点については破片資料でさらに補うことにする。

土師器

坏

全体の器形が判明する坏は5点ある。いずれも製作にロクロを使用し、内面はヘラミガキ・黒色処理されている。外面は口縁・胴部にロクロナデが加えられているが、ロクロ目は弱く不明瞭である。胴下端部から底部は回転ヘラケズリされているものが3点ある。他の2点は砂粒の動きが観察されずヘラ切りの可能性がある。底部破片ではこの種のものが多く（9点）、この他手持ちヘラケズリのもの（6点）回転糸切りのもの（1点）がある。内面のヘラミガキは口縁に平行で、底部では井桁状になる。

器形は底径が大きく分厚いのが特徴である。口径と底径の比は1:0.55～0.66で、0.6前後のものが多い。また、底径は内面側が外面側よりもはるかに大きい。底部の器厚は口縁・胴部の1.5～2倍である。器形を細分すると次の二種類のものがある。

第1類：壇状のもの

口縁：胴部が内弯し、口縁端部が軽く外反する。（1・2）

第2類：皿状のもの

a類：口縁・胴部が外傾する（3）

b類：口縁・胴部が内湾し、口縁端部が軽く外反する。（4・5）

なお、塊状・皿状の用語は便宜的なもので、口径と器高の比がほぼ3:1、4:1のものを指している。以後使用する鉢状のものはほぼ2.5以下:1のものである。すなわち、深目のものを鉢状・浅目のものを皿状・両者の中間を塊状とし、その中で、口縁・胴部が外傾するものをa類、内湾するものをb類とした。

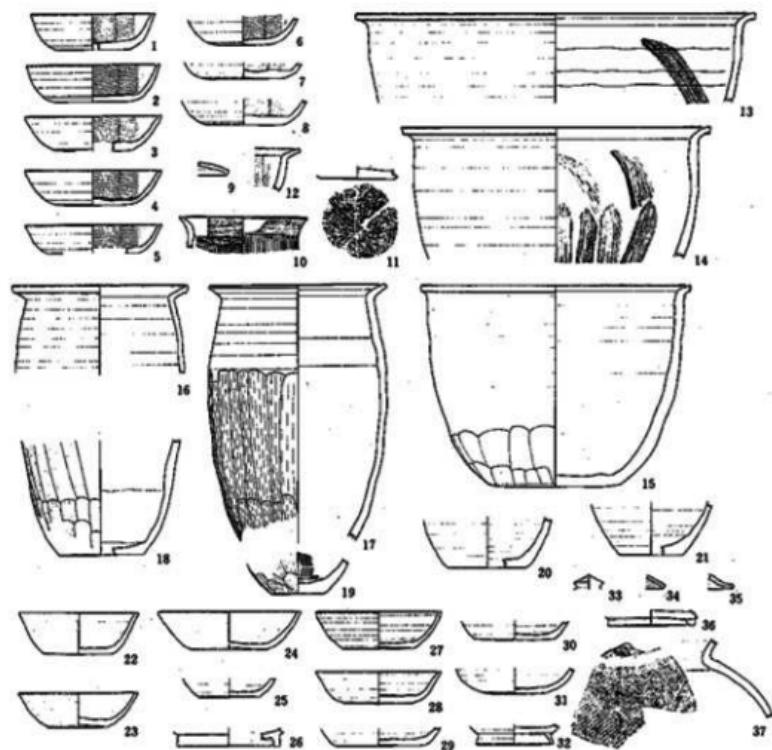
蓋

蓋は口縁端部を直角に折り曲げたもので、内外面はヘラミガキ・黒色処理されている。（9）

甕

甕はほぼ器形の判明するものが6点ある。

第1類：ロクロを使用せずに製作しているもの（10）



第94図 第IV A群土器

口縁・胴上部のものが1点ある。口縁部は外反し、肩から胴部に円筒状に移行する。胴部以下を破損しているが長胴形の甕と推定される。外面は口縁部がヨコナデ、胴部が刷毛目である。内面は口縁部がヨコナデ、胴部がヨコナデである。

第2類：ロクロを使用して製作しているもの

a類：鉢状のもの (12~15)

a類は3点あり、完形に近いものでは器高より口径の方が僅かに大きい(15)。また、口径自体も29.7~43.5cmと大きい。器面は外面ともロクロナデのものと、外面がロクロナデで内面がナデのものがある。前者のものでも胴下部はヘラケズリされている。この他、破片ではあるが、内面がヘラミガキ・黒色処理されているものが1点ある(12)。

b類：長胴形のもの (16・17)

b類は2点ある。両者とも口径は20cm前後と小さい。器内外面はロクロナデであるが、胴中央部以下はヘラケズリされている。b類と推定される胴下・底部は2点あり(18・19)、外面はヘラケズリされている。ヘラケズリされた底部破片は8点あり、b類に含まれる可能性がある。

この他、回転糸切りの底部が2点(20・21)、木葉底の底部が1点ある(11)。前者は第2 b類に含まれるのか、それとも小型の甕なのか明確でない。後者は第1類の可能性はあるが明確でない。

赤焼土器

壺

赤焼土器壺は内外面のロクロ目が明瞭である。底部は回転糸切りのものが9点、ヘラ切りのものが2点ある。器形として底径の大きいことが特徴であるが、口径と底径の比は1:0.51~0.59で土師器よりやや小さい。底部は分厚いものと、口縁・胴部と同程度のものがある。器形を細分すると次の3種類がある。

第1類：塊状のもの (22・23)

口縁・胴部が内弯する。口縁端部は軽く外反するものとそのままのものがある。

第2類：皿状のもの (24)

口縁胴部は内弯し、口縁端部はそのまま丸くおさまる。

第3類：高台付 (26)

高台部分だけが残っている。高台は直立気味である。

須恵器

壺

須恵器壺内外面のロクロ目は明瞭である。底部は回転ヘラケズリのものが4点、回転ヘラケ

ズリであるが回転糸切り痕を残すものが2点、ヘラ切りのものが3点である。器形としては底径の大きいことが特徴であるが、口径と底径の比は1:0.55と赤焼土器同様土師器よりやや小さい。底部も分厚いものと口縁・胴部と同程度のものがある。器形を細分すると次の3種類がある。

第1類：塊状のもの（27）

口縁・胴部が内湾し、端部はそのまま丸くおさまる。

第2類：皿状のもの（28）

胴部が内湾し、口縁部は軽く外傾する。

第3類：高台付（32）

高台・底部が残っている。高台は「ハ」字状である。

須恵器はこの他に蓋つまみ（宝珠形）・蓋口縁部（口縁端部を直角に折り曲げている）・壺高台・底部・甕肩部がある。

編年の位置

第20号住居跡から出土したA群土器は、土師器・赤焼土器・須恵器からなり、土師器坏にあっては底径が大きいこと、底部が回転ヘラケズリされるか、ヘラ切りによって切り離されるものが多いという特徴をもっている。土師器坏のこのような特徴は表杉ノ入式土器の比較的古い段階に位置づけられている刈田郡蔵王町東山遺跡土器群（真山悟：1981・9）の一部と共に、表杉ノ入式土器の後半に位置づけられている仙台市安久東遺跡第2号住居跡出土土器（土岐山武：1980・9）とは明らかに相違している。したがって、A群土器は表杉ノ入式土器の比較的古い段階のものと考えられるが、さらに詳細にみると東山遺跡出土土器とも相違し、国分寺下層式土器最終段階の名取市清水遺跡第58号住居跡出土土器（丹羽・小野寺・阿部：1981・3）と器形上共通点がみられる。このため、次にA群土器と東山遺跡土器溜出土土器・清水遺跡第58号住居跡出土土器との比較検討を行なうことにしたい。

東山遺跡

東山遺跡土器群からは器形の判明する土師器坏45点・甕4点・須恵器坏19点・灰釉陶器坏1点の出土が報じられている（第96図）。この中で須恵器坏としたものの中には赤焼土器も少量含まれている^{注1)}。

ここでは土師器坏について検討する。土師器坏には鉢状のもの（1～9）、塊状のもの（10～29）、皿状のもの（30～45）の3種類があり、それらにはそれぞれの口縁・胴部が外傾するものと、口縁・胴部が軽く内湾するものがある。前者は口縁部がそのままおさまるが、後者にはそのままおさまるものと口縁端部が軽く外反するものがある。口径と底径の比は1:0.36～0.56で、1:0.46前後に集中する傾向が

ある。底部から胴部への移行は、口縁胴部が外傾する鉢状

のものでは屈折しているが、その他のものでは緩やかである。この相違は内面のヘラミガキ、外面のヘラケズリ調整にもあらわれ、前者では底部のヘラミガキが井桁状、後者では放射状になるものが多い。

清水遺跡

清水遺跡第58号住居跡からは器形の判明する土師器壺9点・甕1点・須恵器壺1点が出土している(第96図)。土師器壺には内外面をヘラミガキして丁寧に仕上げているものと、ヘラケズリやヨコナデを多用し仕上げの粗雑なものがある。前者は器形が端正なのに対し、後者は歪んでいる。ここでは器形の整った前者の壺について検討する。

前者の壺には鉢状のもの(1)、塊状のもの(2~4)、皿状のもの(5)の3種類がある。いずれも丸底に近い平底で、口縁・胴部は内窓気味に外傾する。口縁端部は内窓気味のものとそのまま丸くおさまるものがある。口径と底径の比は1:0.46~0.7で、1:0.5~0.6に集中する傾向がある。また、器厚は全体に平均しており厚手である。

A群土器と東山遺跡出土土器の関係

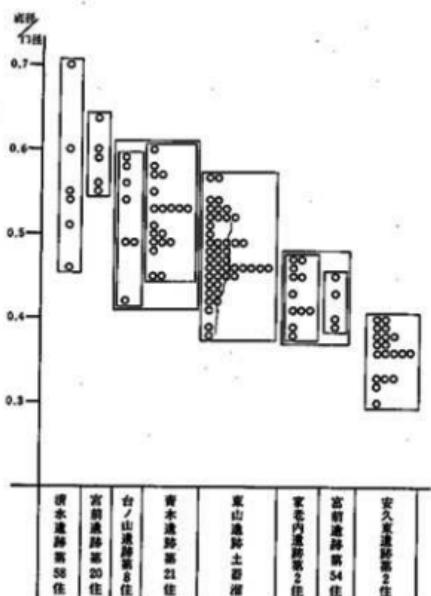
A群土器と東山遺跡土器溜出土土器は製作にロクロを使用しており表杉ノ入式土器という点では共通しているが、器形・器面調整のあり方などを比較すると次のような相違が認められる。

1. 口径と底径の比はA群土器が1:0.6前後に集中するのに対し、東山遺跡土器溜出土土器は、1:0.46前後に集中し、A群土器の方が底径の比率が大きい。

2. 底径の大きさはA群土器では内面側の方が外面側よりも大きいのに対し、東山遺跡土器溜出土土器群ではほぼ同じか外面側の方が大きい。

3. 内面側における底部から胴部への移行は、A群土器では屈曲をもつたに対し、東山遺跡土器溜出土土器群は一部の器形(口縁・胴部が外傾するもの)を除き、緩やかである。

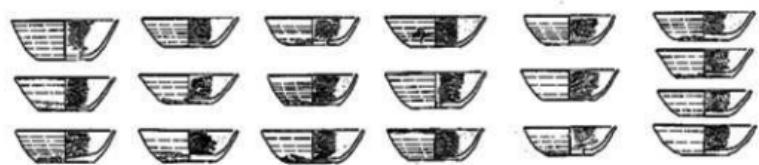
4. A群土器の底部内面のヘラミガキは井桁状であるのに対し、東山遺跡土器溜出土土器群では一部の器形(口



第96図 土師器壺の口径に対する底径の比



清水遺跡 第58号住居跡



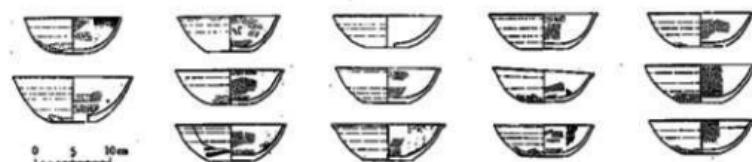
青木遺跡 第21号住居跡



台ノ山遺跡 第8号住居跡



東山遺跡土器群



0 5 10cm

室老内遺跡 第2号住居跡

第96図 第Ⅳ群土器関連資料

縁・胸部の外傾する鉢状のもの）を除き放射状である。

A群土器と清水遺跡出土土器の関係

A群土器は表杉ノ入式土器、清水遺跡第58号住居跡出土土器は国分寺下層式で、両者は異なった土師器の型式である。その相違点には次のようなものがある。

1. A群土器では製作にロクロを使用しているのに対し、清水遺跡第58号住居跡出土土器はロクロを使用していがない。

2. A群土器の口縁端部は軽く外反するか、そのままおさまるのに対し、清水遺跡第58号住居跡出土土器は口縁端部が内弯気味になるものとそのまま丸くおさまるものがある。

3. A群土器は底部が分厚く、口縁・胸部が薄いのに対し、清水遺跡第58号住居跡出土土器は全体が分厚い。

しかし、ここで大きく相違するのはロクロ使用の有無であり、口縁・胸部が薄くなり、口縁端部が外反気味になるのは小さな相違に過ぎない。このような点を除くと、口径と底径の比が $1:0.5\sim0.6$ に集中し、底径が大きいという器形上の強い共通点がうかがわれる。また、底部内面のヘラミガキも井桁状で同じである。

A群土器の位置

A群土器と東山遺跡土器溜出土土器・清水遺跡第58号住居跡出土土器を比較した結果導びき出されたことは、ロクロ使用の有無を除くとA群土器と清水遺跡第58号住居跡出土土器が器形上強い類似性をもつてていることである。それは内面のヘラミガキの方向によっても裏づけられた。すなわち、A群土器は清水遺跡第58号住居跡出土の国分寺下層式終末段階の土器を、ロクロを使用してそのまま製作したかの感がある。口縁・胸部が薄くなり、口縁端部が外反するのはその時に生じた小さな器形変化にすぎないものと考えられる。

一方、A群土器と東山遺跡土器溜出土土器との間には大きな器形上の差がある。すなわち、A群土器では口径に対する底径の比が $1:0.6$ 前後に集中するのに対し、東山遺跡では $1:0.46$ 前後に集中する。東山遺跡土器溜出土土器の口径に対する底径の比はかなり小さい。また内面のヘラミガキの方向やロクロ目の特徴なども相違している。両者の間を埋める資料としては、白石市青木遺跡第21号住居跡出土土器をあげることができる（小川淳一：1980・9）（第96図）。すなわち、青木遺跡の坏は器形の判明するものが19点あり、口径と底径の比は $1:0.45\sim0.60$ で、 $1:0.52$ 前後に集中している。底径の大きさという点で、両者はほぼ中間に位置する。青木遺跡第21号住居跡出土土器はロクロ目が明瞭で、内面のヘラミガキも放射状のものが多い^(注2)。

以上のことから、A群土器は土師器にロクロが導入された最初の段階と考えられる。このため、国分寺下層式終末段階の器形を継承し、ロクロ目も弱いものとなつたのであろう。すなわち、ロクロ技術導入の揺籃期とすることができる。器形と同様、内面のヘラミガキの方向も前

段階のものを継承している。そして、土師器製作におけるロクロ技術が軌道にのったのは青木遺跡第21号住居跡出土土器や東山遺跡出土土器の段階であろう。ロクロ目は明瞭になり、内面のヘラミガキは放射状のものが多くなる。この放射状ヘラミガキは以後長い期間にわたって継承される^(注3)。次に、A群土器の年代について検討してみたい。

A群土器の年代

上述のように、ロクロ技術が導入される前後の土師器は清水遺跡第58号住居跡土器群→A群土器→青木遺跡第21号住居跡土器群→東山遺跡土器溜土器群と変遷することがほぼ明らかである。この中で、年代推定が行なわれているのは東山遺跡土器溜土器群である。すなわち、東山遺跡土器溜では「平城宮跡 S D650 A様式に類似する」灰釉陶器が共存している。この灰釉陶器は9C中葉とされていることから、東山遺跡土器溜出土土器群もそれに近い年代のものと考えられている（真山悟：1981・9）。次に、清水遺跡第58号住居跡出土土器群に先行するものとして、陸奥国分寺増坊西建物南基段内側構から出土した国分寺下層式土器がある（伊東信雄他：1961 氏家和典：1967）。この国分寺下層式土器は国分寺創建期の重弁蓮華文軒丸瓦とともに出土しており、その時期は「創建後まもなくか、あるいは後に瓦のふきかえの際に放置されたままであったとみるべきかもしれない。」とされている（氏家和典：1967）。したがって、この土師器の遺棄年代は8世紀中葉の創建時がそれ以降の改築時と考えられる。土師器の変遷とその年代を整理すると次のようになる。

国分寺下層式

陸奥国分寺→清水遺跡第58住→官前遺跡第IV A群（第20住）→青木遺跡第21住→東山遺跡土器溜
8C. 中葉以降

表彰ノ入式

9C. 中葉付近

すなわち、陸奥国分寺僧坊西建物出土土器と東山遺跡土器溜出土土器群との間には、三段階の土器の変遷があり、A群土器はそれらのほぼ中間の位置にある。したがって、A群土器はまだ明確な決め手には欠けるが、ある程度の幅をもった8世紀末から9世紀初頭を中心とした時期、すなわち平安時代の初期の頃のものではないかと考えられる。土師器壺以外のものについては直接検討を加えなかつたが、これらも平安時代初期の頃のものと考えられる。

次に赤焼土器についてふれておきたい。第20号住居跡からは、土師器・須恵器と同様にそれらに匹敵する量の赤焼土器が出土している。既に検討したように、土師器の壺は前段階の国分寺下層式の器形を継承しているのに対し、赤焼土器の壺はむしろ須恵器に近い。しかし、焼成という点では、土師器と同じであるか、それに近いものである。このことは、赤焼土器が器形の点で須恵器に近いものの、焼成という点で土師器の範疇に含まれることを示している。すなわち、集落で消費される須恵器は須恵器窯から供給を受けなければならないのに対し、土師器・赤焼土器は集落内で生産・消費されるという基本的需給関係において相違がみられる。

そして、A群土器のあり方は、集落に対する須恵器供給の増加に伴ない土師器製作にロクロ技術が導入されると同時に須恵器を模倣したとも言える赤焼土器が集落内で生産・消費されるに至ったことを示している。ところが、このような赤焼土器はこの地域では定着をみず、その後青木遺跡や東山遺跡の段階から急速に減少し、衰退する。再び赤焼土器が盛行するのは須恵器の供給が減少する安久東遺跡第2号住居跡出土土器（土岐山武：1980・9）の段階である。

注1) 真山悟氏の教示による。

注2) このような土器群としては柴田郡大河原町台ノ山遺跡第8号住居跡出土土器群がある（阿部・千葉：1980・1）。土師器件数は8点あり、口径に対する底径の比は1:0.41～0.59で、1:0.52前後に集中している。

注3) 土師器件における底部切り離し技法とその後の再調整技法について補足的に述べておきたい。時期差を指摘した各遺跡出土土器群の底部切り離し技法とその後の再調整のあり方を器形の判明する資料について整理すると次のようになる。

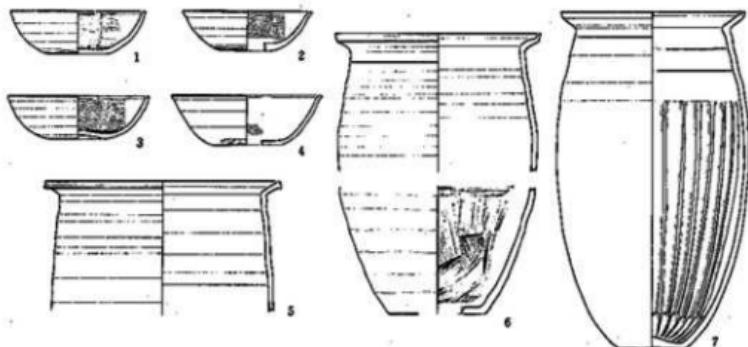
| 土師器 技 法 | 回転ケズリ | 回転ケズリ + ヘラ切り | 回転ケズリ + 手 破り | 手持ケズリ | 手持ケズリ + 手 破り | ヘラ 切り | 回転糸切り |
|------------|-------|-----------------|-----------------|-------|-----------------|-------|-------|
| 宮前遺跡第20住 | | 2 | | | | 3 | |
| 青木遺跡第21住 | 2 | 2 | | 4 | 6 | | 4 |
| 台ノ山遺跡第8住 | | | 1 | 1 | 3 | 2 | |
| 東山遺跡土器群 | 4 | | 1 | 25 | 9 | | 6 |
| 安久東遺跡第2住 | | | | | | | 19 |

表を見ると技術的には、回転ケズリやヘラ切りは古い要素であり、回転糸切りは新しい要素であることが明らかである。手持ちケズリは青木遺跡や東山遺跡などに多く、両者の中間的様相を示している。また、東山遺跡にも回転ケズリのものが4点あるが、これらは口縁・胴部が直線的に外傾する鉢状のものに多い。これに対し、宮前遺跡・青木遺跡の場合土塊や皿状のものにもみられる点相違がある。

B群土器（第54号住居跡出土土器）

第54号住居跡からは土師器坏4点・壺3点が出土している（第97図）。坏はいずれも塊状のもので、胴部が内弯し口縁部分が軽く外反するものである。口径に対する底径の比は1:0.39～0.45で、1:0.4前後に集中している。内面はヘラミガキ・黒色処理されている。ヘラミガキの方向は口縁・胴部が口縁に平行、底部が放射状である。底部は磨滅しているものが多いが、切り離し技法が判明するものとして回転糸切りが1点ある。また、3点は胴部下端が手持ちヘラケズリされている。壺はいずれも長胴壺で、製作にロクロが使用されている。このような土器群と類似するのは白石市家老内遺跡第2号住居跡出土土器である（真山悟：1981・9）。坏は口径と底径の比・口縁部の形状・内面のヘラミガキ・外面のヘラケズリなど種々の点で強い類似性がう

かかけられる。これらの土器群は口径・底径比という点では藏王町東山遺跡の一部（底径が小さい値を示す部分）と共に通する。しかし、口縁部の外反、胴部の内弯の程度が大きく、器形的に新しい特徴を備えている。このように、B群土器は東山遺跡出土土器と一部共通した特徴をもつと同時に相違する新しい特徴をもっていることになる。したがって、B群土器は東山遺跡出土土器に直接後続するものと考えられる。



第97図 第IV B群土器

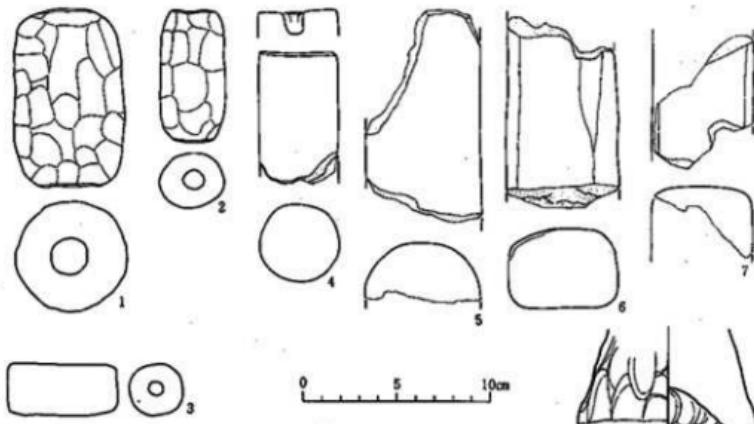
土製品

土製品としては土錐・柱状土製品・支脚・輪の羽口がある。土錐は3点あり南斜面の遺物包含層から出土している。1は大形、2は小形のものである。包含層からは表杉ノ入式土器が多く出土していることから平安時代頃のものと考えられる。

柱状土製品は断面が円形のものと隅丸長方形のものがある。両者とも柱実で、直徑ないしは厚さが5cm前後である。支脚の可能性はあるが明確でない。これらは塩釜式期・南小泉式期・表杉ノ入式期の住居跡から出土しており、時期を特定できない。

支脚は第49号住居跡から出土している。上半部を欠くが、下部は脚下部に向って台状に開き安定した形になっている。内・外面は指頭状のものによってオサエ調整がなされている。塩釜式土器とともに出土しており古墳時代前期のものと考えられる。

輪の羽口は第21号住居跡から1点出土している。破損が著しく図化できなかった。表杉ノ入式土器とともに出土しており平安時代のものと考えられる。



| 番号 | 地区・層位 | 登録 | 3 BM-54区-第3解 | C.M. T | 6 第2住内 | C.M. 1 |
|----|------------|--------|--------------|--------|-----------|--------|
| 1 | BM-57区-2解 | C.M. 8 | 4 第20住-床底 | C.M. 4 | 7 第25住-床底 | C.M. 3 |
| 2 | BM-54区-第3解 | C.M. 6 | 5 第25住-床底 | C.M. 5 | 8 第40住内 | C.M. 9 |

第98図 土 製 品

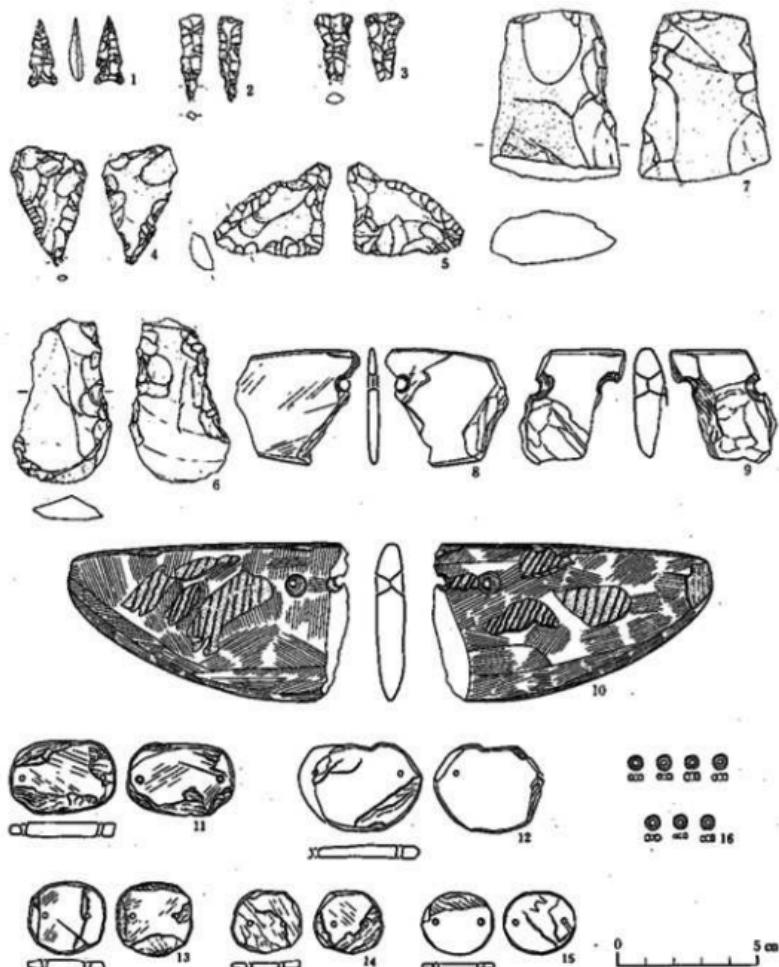
石製品

石製品としては石鎌・石錐・石匙・不定形剥片石器・石鍔状石器・石庖丁・石製模造品（有孔円板・白玉）・砥石がある。

1はアメリカ式石鎌で、基部両側に抉りが入っている。2～4は石錐で基部は平たいが錐部は細身で厚味が増している。いずれも錐部先端を破損している。5は石匙で、つまみが主要刃部に対して斜めについている。6は不定形剥片石器で、縦長剥片の両側刃に調整剝離を加えたものである。7は石鍔状石器の基部である。8～10は石庖丁で、いずれも平背である。9は刃部を破損しているが、8・10は外弯刃である。紐孔は9・10は2孔である。8は破損のため1孔しか確認できない。これらの石器は各地区・各住居跡内から古代の土器に混入した状態で出土している。同様な状況で弥生土器も出土していることから、これらの石器も弥生時代のものと考えられる。

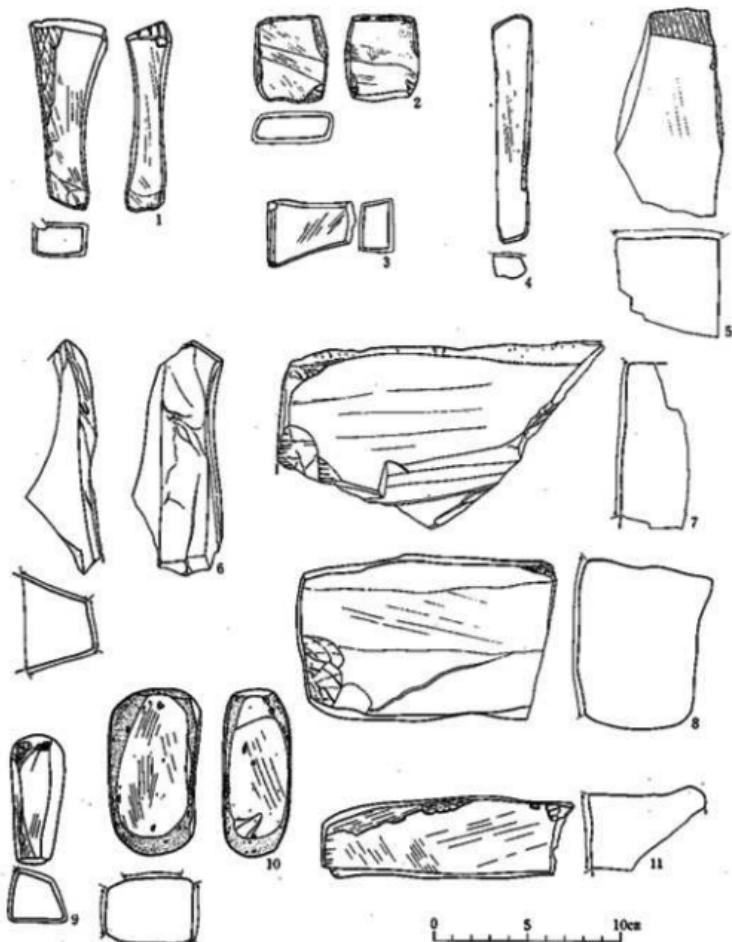
石製模造品としては有孔円板（11～15）と白玉（16）が出土している。有孔円板は出土状況が明確でないが、白玉は5点とも第25号住居跡の床面から南小泉式の土師器とともにまとまって出土しており、古墳時代中期のものと考えられる。

砥石は16点出土しており、いずれも肌理の細かいものである。第100図1～8は塩釜式期の住居跡から出土したもので古墳時代前期のものである。1～3は小形のもので整形され、複数面（4面以上）が使用されている。5～7は大形のもので、5・7・8は自然面（節理面を含む）を



| 番号 | 地区 | 層位 | 號 | 第20坑内 | S.M. 64 | 第6住-第1層 | S.M. 1 |
|----|-------------|----|---------|-------|------------|---------|--------|
| 1 | A.R.-6区-第2層 | | S.M. 26 | 7 | 第14住-第4層 | S.M. 30 | 13 |
| 2 | 第13住-第2層 | | S.M. 28 | 8 | x区-9層 | S.M. 8 | 14 |
| 3 | 第32住-床 | | S.M. 29 | 9 | 第16住-第2層 | S.M. 7 | 15 |
| 4 | 第14住内 | | S.M. 31 | 10 | 第20住-第1層 | S.M. 6 | 16 |
| 5 | A.O.-6区-第2層 | | S.M. 27 | 11 | AD-61区-第2層 | S.M. 4 | |

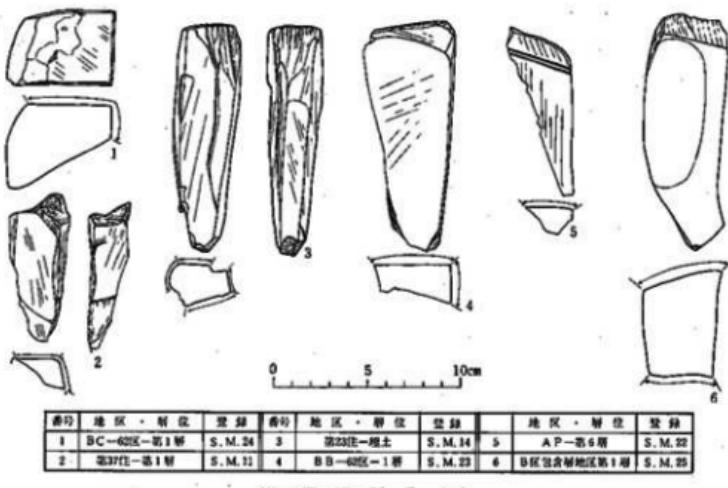
第99圖 石 製 品 (1)



| 番号 | 地区 | 層位 | 量 績 | 4 | 第34住-野鹿穴 | S. M. 18 | 8 | 第10住-鹿廬 | S. M. 13 |
|----|---------|----|----------|---|----------|----------|----|-----------|----------|
| 1 | 第40住-鹿廬 | | S. M. 15 | 5 | 第53住-第1層 | S. M. 21 | 9 | 第43住-堆土 | S. M. 20 |
| 2 | 第31住-鹿廬 | | S. M. 10 | 6 | 第2住-鹿廬 | S. M. 9 | 10 | 第25住-鹿廬 | S. M. 19 |
| 3 | 第49住-鹿廬 | | S. M. 17 | 7 | 第5住-松1層 | S. M. 12 | 11 | 第20住-P 23 | S. M. 15 |

第100図 石 製 品 (2)

多く残し、一面だけを使用している。4は小形であるが一面だけ使用、6はやや大形であるが複数面を使用している。大形のものは床に置いて、小形のものは手で持つて使用するもので、それぞれ使用方法が異なる。鉄器そのものは出土していないが、砥石の存在から、鉄製農工具が集落内にかなり普及していたと考えられる。第100図9・10は南小泉式期の住居跡から出土したもので古墳時代中期のものである。9は小形で4面の他に下端面も使用されている。10は梢円錐の自然面を残し、四面と上端面を使用している。この砥石を出土した第25号住居跡は土壌があり、粘土塊なども出土し、工房的性格をもつもので、何らかの関連が想定される。第100図11は表杉ノ入式期の住居跡から出土したもので、平安時代のものである。大形で自然面を多く残し、一面だけを使用している。第101図は時期を特定できない遺構や層から出土したものである。



第101図 石 製 品 (3)

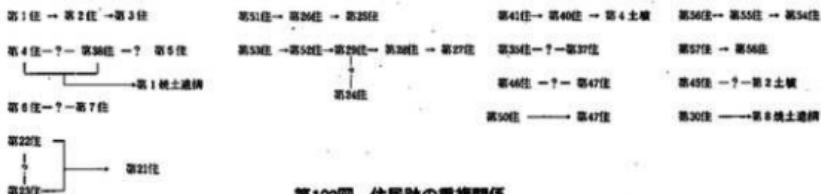
IV 遺跡の構成

遺構の年代

宮前遺跡からは今回の調査で住居跡・焼土遺構・土壙が発見されている。これらの遺構からは第I～IV群土器が出土し、それらは第I群土器：古墳時代前期・第II群土器：古墳時代中期・第III群土器：古墳時代後期・第IV群土器：平安時代に位置づけられ、さらに第I群土器はA群土器・B群土器・C群土器、第II・IV群土器はA群土器・B群土器に細分されることを指摘した。各遺構における土器群の出土状況は下表に示した通りである。また、宮前遺跡の遺構は重複しているものが多く、それらの切り合い関係を示したのが第102図である。遺構から出土した土器と遺構の重複関係に基づいて、遺構の年代を推定してみたい。出土土器によって遺構の年代を推定する場合、床面・細部のものを資料とするのが望ましい。しかし、床面・細部から土器が出土せず、堆積土からだけの場合もある。床面・細部および堆積土から土器を出土している遺構をみると、両者にあまり相違がみられないことが多い。したがって、堆積土だけから出土している場合も、それらを資料として使用する。その場合は廃絶後埋るまでという時間幅をもつことになる。しかし、それは分類された土器群の時間幅を越えるものではないと思われる。出土土器によって推定される遺構の年代は次のようになる。

遺構(住居跡・土壙)出土の土器群

| 住居跡 | 床面・細部 | 堆積土 | 住居跡 | 床面・細部 | 堆積土 | 住居跡 | 床面・細部 | 堆積土 |
|---------|-----------|-----------|---------|--------------|----------|---------|---------|-----------|
| 第1号住居跡 | 第I B群土器 | — | 第24号住居跡 | 第I A・II A群土器 | 第I群土器 | 第45号住居跡 | 第I B群土器 | — |
| 第2号住居跡 | 第I C群土器 | 第I C群土器 | 第25号住居跡 | 第I B群土器 | 第I B群土器 | 第46号住居跡 | — | 第I B群土器 |
| 第3号住居跡 | — | — | 第26号住居跡 | 第I B群土器 | — | 第47号住居跡 | 第I B群土器 | — |
| 第4号住居跡 | 第I B+C群土器 | — | 第27号住居跡 | 第I A・B群土器 | 第I B群土器 | 第48号住居跡 | — | — |
| 第5号住居跡 | — | 第I B+C群土器 | 第28号住居跡 | 第I B群土器 | — | 第49号住居跡 | 第I C群土器 | — |
| 第6号住居跡 | 第I B+C群土器 | — | 第29号住居跡 | — | — | 第50号住居跡 | 第I B群土器 | 第I B群土器 |
| 第7号住居跡 | — | 第I B+C群土器 | 第30号住居跡 | 第I B群土器 | 第I B群土器 | 第51号住居跡 | — | 第I B群土器? |
| 第8号住居跡 | 第I B群土器 | 第I B群土器 | 第31号住居跡 | 第I C群土器 | — | 第52号住居跡 | — | — |
| 第9号住居跡 | — | 第I B+C群土器 | 第32号住居跡 | 第I C群土器 | — | — | — | — |
| 第10号住居跡 | — | 第I B+C群土器 | 第34号住居跡 | — | 第I群土器 | 第53号住居跡 | 第I A群土器 | — |
| 第11号住居跡 | — | 第I B+C群土器 | 第35号住居跡 | — | 第I群土器? | 第54号住居跡 | 第I B群土器 | — |
| 第12号住居跡 | — | 第I B群土器 | 第37号住居跡 | — | 第I群土器? | 第55号住居跡 | 第I B群土器 | — |
| 第14号住居跡 | 第I B群土器 | 第I B群土器 | 第38号住居跡 | 第I B群土器 | — | 第56号住居跡 | — | — |
| 第15号住居跡 | — | — | 第39号住居跡 | — | — | 第57号住居跡 | — | 第I群土器 |
| 第16号住居跡 | 第I B群土器 | 第I B群土器 | 第40号住居跡 | — | 第I B群土器 | 第58号住居跡 | — | 第I B+A群土器 |
| 第18号住居跡 | — | 第I C-N群土器 | 第41号住居跡 | — | — | 第4 土 壕 | — | 第I B群土器 |
| 第20号住居跡 | 第I A群土器 | 第I A群土器 | 第42号住居跡 | 第I A群土器 | — | 第 5 土 壹 | — | 第I B群土器 |
| 第21号住居跡 | 第I B群土器 | — | 第43号住居跡 | — | 第I C群土器? | — | — | — |
| 第22号住居跡 | — | 第I B群土器 | 第44号住居跡 | 第I B群土器 | — | — | — | — |



第102図 住居跡の重複関係

古墳時代前期（塩釜式期）

A群土器段階：第53号住居跡

B群土器段階：第1・13・16・22・26・28・30・38・40・46・47・49・50・55号住居跡・第4号土壤

C群土器段階：第2・32号住居跡

AorB群土器段階：第27号住居跡

BorC群土器段階：第4・5・10・11号住居跡・第5号土壤

A～C群土器段階：第34号住居跡

古墳時代中期（南小泉式期）

A群土器段階：第42号住居跡

B群土器段階：第8・25・44・45号住居跡

古墳時代後期（栗田式期）

第14号住居跡

平安時代（表杉ノ入式期）

A群土器段階：第20号住居跡

B群土器段階：第54号住居跡

AorB群土器段階：第21・57号住居跡

遺跡の構成

今回の調査で出土した最も古い段階の遺物は弥生土器であるが住居跡などの遺構は発見されていない。住居跡などの遺構は、いずれも古墳時代と平安時代のものである。

微地形と集落：宮前遺跡の立地する独立小丘陵は、沢状の地形によって区画された平坦面をもつ三つの尾根状地形からなっている。東尾根は南北に長く、長井戸古墳群（前方後方墳1基・方墳1基・円墳4基からなるという。志間泰治：1975・10）が立地している。中央尾根は平坦面が広く、平坦面とその緩斜面から住居跡54軒・土壤5基・焼土遺構7基が密集して発見されている。西尾根は平坦面が狭く、遺物・遺構等の発見はない。したがって、宮前遺跡の古代集落

は中央尾根を中心として形成されたものと考えられる。住居跡は調査区の東端と北端で分布がまだのびているが、地形的な面からみると、調査区東端は中央尾根の東端に近く、調査区北端は約5mで斜面になっていることから、集落の東・北端が大きく拡大することはないものと思われる。

集落の立地

集落の立地を時代ごとにみると、古墳時代前・中期の住居は平坦面を中心として立地しているのに対し、古墳時代後期と平安時代の住居は緩斜面に立地するという大きな相違を示している。この点を少し詳しく検討してみたい。

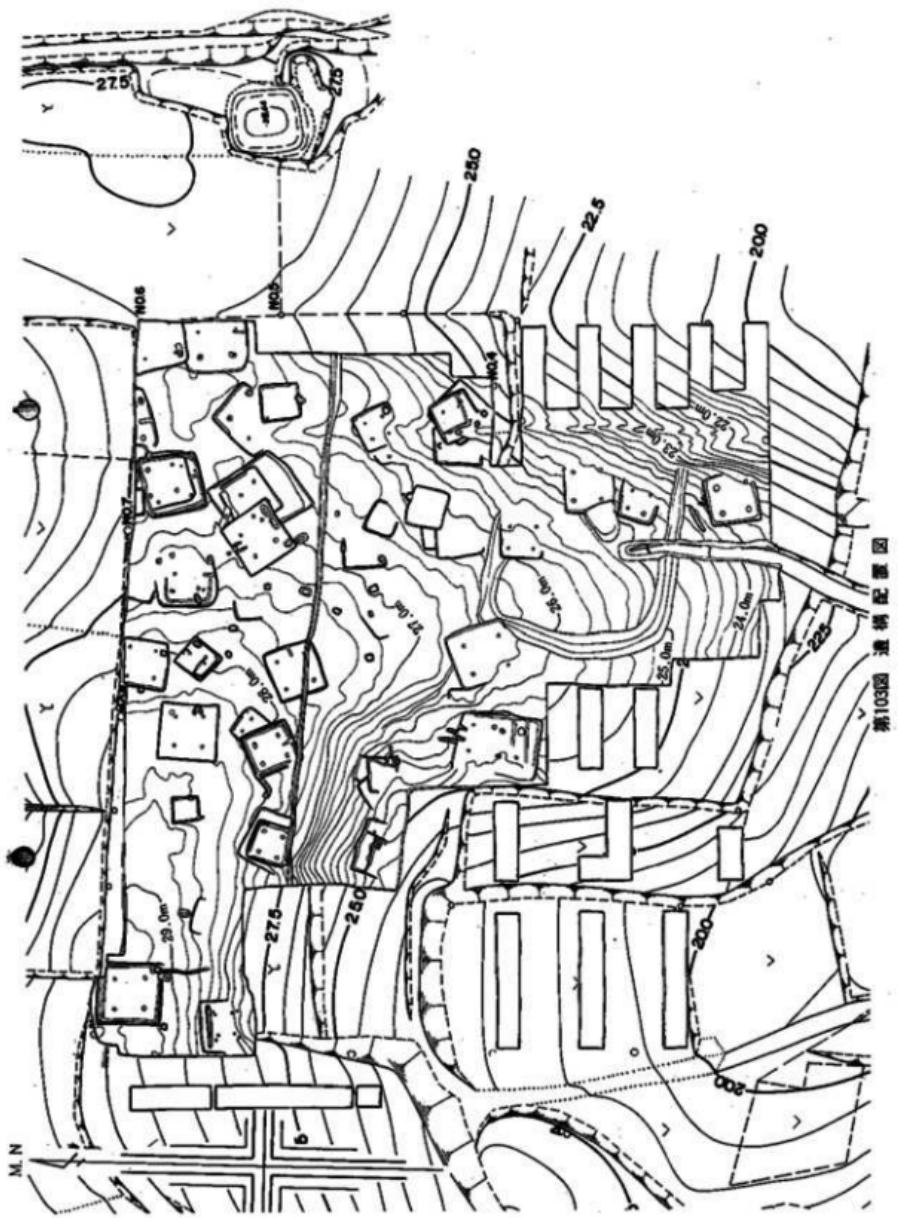
古墳時代前・中期の集落：古墳時代前・中期の住居跡は38軒あり、中央尾根平坦面と一部緩斜面にも分布し、時期的な変遷がみられる。すなわち、古墳時代前期A群土器段階のものは第53号住居跡1軒で、他にこの時期の可能性がみられるものは第24・52号住居跡などだけで、数が少なく、立地する場所も中央尾根平坦面の北東部分に限られている。したがって、A群土器段階では小規模な集落であったと考えられる。住居の数が増えるのは次のB群土器段階で、14軒を数え中央尾根の平坦面全体に広く分布し、さらには南西斜面の小さな平坦面にも立地するようになる。この時期は集落の発展期と考えられる。ところが、C群土器段階になると、明確なものは2軒だけとなり、立地も中央尾根の東側に限られ、集落の衰退期と考えられる。もちろん、時期不明の住居跡で、この時期のものが存在することも予想されるが、B群土器段階に較べ住居数は激減したものと思われる。

古墳時代中期の住居跡はA群土器段階が1軒、B群土器段階が4軒で、いずれも中央尾根北側平坦面を中心に立地している。A群土器段階からB群土器段階に移行すると住居数は増えているが、古墳時代前期のB群土器段階の比ではない。また、集落はこの時期で一時途絶えてしまう。

古墳時代後期・平安時代の集落：この時期の集落は、中央尾根南側が舌状にのびた部分の緩斜面に立地している。古墳時代後期の住居は第14号住居跡1軒で、中央尾根南端付近の緩斜面に立地するが、集落は再び途絶える。その後、隻落が営まれるのは平安時代になってからで、5軒の住居が、中央尾根の舌状平坦面を囲むように緩斜面に立地している。また、これらの住居は緩斜面に立地しているにもかかわらず、住居の方向は斜面の傾斜方向に必ずしも一致せず、むしろ真北側に偏る傾向がある。古墳時代の住居にも真北に近い方向を示すものもあるが、それらは全体から見れば一部に過ぎず、集落構成の方向性を示すものではない。同時代の住居がまとまりをもって真北に対する方向性を示しているのは平安時代のものだけである。

住居構造の変化

古墳時代の前期から平安時代の住居は平面形が方形を基調とし、4個の柱（穴）が住居対角



線上に配されるという点で共通している。しかし、平面形の細部形態・施設の種類・構造では相違を示している。

平面形：古墳時代前期の住居跡は平面形が団丸正方形のものが多い。それに対し、中期の住居跡は小型のものを除くといづれも隅が直角か角張る正方形を示しているのが特徴である。古墳時代後期・平安時代のものは正方形と長方形のものがみられるが、隅が特に丸くなったり角張ることはない。

施設：古墳時代前期の住居跡の炉は焼面である。これに対し、古墳時代中期以降はカマドを備えたものが多い。最も古いカマドはA群土器段階の第42号住居跡に設置されたものである。カマドは粘土で構築したもので燃焼部だけでなく煙道部も住居内にある。両者は底面の段と側壁にはさまれた幅によって区別されている。これに対し、B群土器段階の第25号住居跡では住居内にあるのは粘土構築による燃焼部だけで、煙道はトンネル式となり住居外にのびている。第25号住居跡にみられるカマドの基本形は以後継続され平安時代まで継承される。したがってA群土器期の第42号住居跡のカマドは出現期の姿を示すもので、構造的に完成されるのはB群土器期の第25号住居跡の段階ではないかと考えられる。

引用・参考文献

- 阿部義平（1968・10）：「東国の土師器と須恵器－多賀城外の出土土器をめぐって－」『帝塚山考古学』No.1
- 阿部・千葉（1980・1）：「台ノ山遺跡－東北新幹線関係施設調査報告書II」『宮城県文化財調査報告書』第62集
- 伊東信雄（1957・3）：「古代史」『宮城県史』第1巻
- 伊東信雄他（1961・）：『陸奥国分寺跡調査報告書』
- 伊東信雄（1974・11）：「弥生文化」『水沢市史』
- 伊東・伊藤・岩渕（1974・3）：「裏町古墳発掘調査報告書」『仙台市文化財調査報告書』第7集
- 氏家和典（1957・3）：「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』第14輯
- 氏家和典（1967）：「陸奥国分寺跡出土の丸底壺をめぐって」『柏倉亮吉教授顕彰記念論文集』
- 小笠原好彦（1976・10）：「東北地方における平安時代の土器についての二三の問題」『東北考古学の諸問題』
- 小川博一（1980・9）：「青木遺跡－東北自動車道遺跡調査報告書IV」『宮城県文化財調査報告書』第71集
- 太田昭夫（1980・9）：「大橋遺跡－東北自動車道遺跡調査報告書IV」『宮城県文化財調査報告書』第71集
- 興野・遠藤（1970・6）：「宮城県玉造郡岩出山町の考古学遺跡」『岩出山町史』
- 小井川和夫（1970・3）：「上新田遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第78集
- 小井川和夫（1982・9）：「御駒堂遺跡－東北自動車道遺跡調査報告書VI」『宮城県文化財調査報告書』第83集

- 佐藤博重（1980・3）：「下入ノ内遺跡」『福島県文化財調査報告書』第82集
- 斎藤・真山（1978・3）：「北沢遺跡発掘調査概報」『宮城県文化財調査報告書』第56集
- 志間泰治（1971・12）：『鹽沼遺跡』
- 志間泰治（1975・10）：「亘理町の原始・古代」『亘理町史上巻』
- 糸原・工藤他（1980・8）：「今泉城跡」『仙台市文化財調査報告書』第24集
- 白鳥・加藤他（1974・3）：「岩切鴉ノ巣遺跡－東北新幹線関係遺跡調査報告書I」『宮城県文化財調査報告書』第35集
- 白鳥良一（1980・3）：「多賀城跡出土土器の変遷」『宮城県多賀城跡調査研究会研究紀要』VII
- 田崎敬修（1971・2）：「沖積世における海面変化（高度・時期）について」『福島考古』第12号
- 田辺昭三（1981・7）：『須恵器大成』
- 高倉敏明（1981・3）：「山王遺跡」『多賀城市文化財調査報告書』第2集
- 糸原一郎（1981・11）：「平城京における平安時代の焼き物」シンポジウム『平安時代の土器・陶器』発表要旨（愛知県陶磁資料館）
- 高島忠平（1971・7）：「平城京東三坊大路東側出土の施釉陶器」『考古学雑誌』第57巻第1号
- 坪井清足（1953・6）：「福島県天王山遺跡の弥生式土器－東日本弥生式文化の性格一」『史林』第36巻第1号
- 手塚均（1980・3）：「留沼遺跡－東北新幹線関係遺跡調査報告書III」『宮城県文化財調査報告書』第65集
- 手塚均（1981・3）：「鶴ノ丸遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第81集
- 土崎山武（1981・3）：「安久東遺跡－東北新幹線関係遺跡調査報告書IV」『宮城県文化財調査報告書』第72集
- 奈良国立文化財研究所（1975・3）：「平城宮発掘調査報告書VI」『奈良国立文化財研究所学報』第23冊
- 中村五郎（1976・10）：「東北地方南部の弥生式土器編年」『東北考古学の諸問題』
- 丹羽・柳田・阿部（1974・3）：「西野田遺跡－東北新幹線関係遺跡調査報告書I」『宮城県文化財調査報告書』第35集
- 丹羽・阿部・小野寺（1981・3）：「清水遺跡－東北新幹線関係遺跡調査報告書V」『宮城県文化財調査報告書』第77集
- 早坂・阿部（1980・3）：「西手取・手取遺跡－東北自動車道遺跡調査報告書II」『宮城県文化財調査報告書』第63集
- 古川一明（1983・3）：「色麻古墳群」『宮城県文化財調査報告書』第95集
- 真山悟（1981・9）：「東山遺跡－東北自動車道遺跡調査報告書V」『宮城県文化財調査報告書』第81集
- 真山悟（1981・9）：「家老内遺跡－東北自動車道遺跡調査報告書V」『宮城県文化財調査報告書』第81集
- 宗教委（1973・3）：「船渡前遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第49集
- 目黒吉明（1969・3）：「弥生時代」『福島県史』第1巻
- 森貢喜（1982・3）：「水入遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第84集
- 結城・工藤（1979・3）：「史跡遠見塚古墳昭和53年度環境整備予備調査概報」『仙台市文化財調査報告書』
- 渡辺泰伸他（1974・9）：「富沢窯跡」『古窯跡研究会研究報告』第3冊

昭和57年度発掘届等一覧

(昭和58年2月1日現在)

●宮城県文化財調査報告書第90集(1982)に収録済のあった昭和57年2月3日以降のものを含む

(1) 文化財保護法第57条の2、3による届出及び通知

56年度

| 登録番号 | 登録跡名 | 所在地 | 申請者 | 発掘の原因 | 運送の性質 | 監督官 | 登録跡名 | 所在地 | 申請者 | 発掘の原因 | 運送の性質 |
|------|--------|------|----------------|-----------|-------|-----|-----------|-----|-----------|------------|-------|
| 369 | 中野田城跡 | 仙台市 | 宮城県知事 | 都心部活用改修工事 | 地盤調査 | 304 | JR東日本仙台支社 | 仙台市 | 柴田 雄男 | 共同住宅新築工事 | 寺 路 |
| 370 | 宮城城跡 | 多賀城市 | 多賀城市長 | 上水路の改良工事 | 地盤調査 | 395 | 成町東野 | 仙台市 | 庄原 和雄 | 住宅増築工事 | 京 路 |
| 372 | 御室平遺跡 | 仙台市 | 武・山・島・津 | 宅地造成工事 | 住居跡 | 396 | 内・東・堀 | 白石市 | 仙台鐵道会社監査課 | 内側のコンクリート板 | 京 路 |
| 373 | 二の森遺跡 | 仙台市 | 8-18・19・20 | 排水管敷設工事 | 古跡 | 397 | 登谷田遺跡 | 仙台市 | 仙台市考古学研究会 | 事務所建設工事 | 京 路 |
| 374 | 南ノ馬鹿跡 | 仙台市 | 近・江・宮・房 | 住宅新築工事 | 地盤調査 | 399 | 長命寺跡 | 仙台市 | 森 江 真 | 公園整備工事 | 寺 路 |
| 375 | 下の内遺跡 | 仙台市 | 庄平一郎・誠司 | * | 基盤調査 | 400 | 白河・御所跡 | 仙台市 | 水道事業管理者 | 下水道改修工事 | 当社地 |
| 376 | 上野 進跡 | 仙台市 | 大・原・利・昌 | * | 馬鹿跡 | 403 | 大連寺跡 | 仙台市 | 仙台市地下排水課 | 道路整備工事 | 京 路 |
| 377 | 鶴形山遺跡 | 仙台市 | 森 直彦 | * | 瓦窯跡 | 405 | 北日城跡 | 仙台市 | * | 下水処理施設工事 | 城跡 |
| 378 | 西分櫻塚 | 仙台市 | 三 原 茂士郎 | * | 城跡 | 405 | 土手内蔵跡 | 仙台市 | * | 下水管敷設工事 | 京 路 |
| 379 | 今丘城跡 | 仙台市 | 經 久 久 | * | * | 404 | 勧孝寺遺跡 | 仙台市 | 菅野 明治 | 赤堀堀が物置開発工事 | 古跡 |
| 380 | 琴ノ木園廻塚 | 仙台市 | 桃 英 一 | 宅地造成工事 | 貝塚 | 405 | 仙台城跡 | 仙台市 | 柳 伏 三郎 | 作物の新築工事 | 城跡 |
| 381 | 千石城跡 | 仙台市 | 松 山 町 長 | 辻井松坂、在戸工事 | 城跡調査 | 406 | 神櫛城跡 | 仙台市 | 津 野 陽 子 | 住宅新築工事 | 当社地 |
| 382 | 鉢巻御陵跡 | 仙台市 | 元 兵 稔 実 K.C. | 宅地造成工事 | 城跡 | 407 | 後川原遺跡 | 仙台市 | 鈴 木 利 子 | 共同住宅新築工事 | 包含地 |
| 383 | 大畠郡立遺跡 | 白石市 | 六ヶ所土地区画整理事業執行課 | 開発整理事業 | 包含地 | 408 | 小幡城跡 | 仙台市 | 佐 藤 高 | 仙台駅新築工事 | 城跡 |
| 387 | 山王 進跡 | 仙台市 | 八 岐 信 康 | 宅地造成工事 | 馬鹿跡 | 409 | 伊伴古墳 | 仙台市 | 化 庫 伸 宏 | 駐車場改修工事 | 古 墓 |
| 388 | 南小泉遺跡 | 仙台市 | 庄子正一・貴枝子 | 住宅新築工事 | 馬鹿跡 | 410 | 仙人遺跡 | 仙台市 | 佐藤 道治郎 | 宅地造成工事 | 城跡 |
| 389 | 込ノ馬鹿跡 | 仙台市 | 鶴 戸 早 弘 | * | 馬鹿跡 | 411 | 白浪遺跡 | 仙台市 | 鶴 山 丽子 | アパート新築工事 | 馬鹿跡 |
| 390 | 曲小泉遺跡 | 仙台市 | 日 下 研 治 | 倉原新築工事 | 馬鹿跡 | 412 | 鶴山遺跡 | 仙台市 | 水 戸 美 久 | 住宅新築工事 | 官邸跡 |
| 391 | 北日城跡 | 仙台市 | 菅 野 庄 作 | 赤堀堀新築工事 | 城跡 | 413 | 郡山遺跡 | 仙台市 | 柴 田 敏 夫 | 街角の住宅新築工事 | * |
| 392 | 生台城跡 | 仙台市 | 坂 本 俊 | 住宅新築工事 | 城跡 | 414 | 西合遺跡 | 仙台市 | 坂 田 実 俊 | 病院建設工事 | 包含地 |
| 393 | 郡山遺跡 | 仙台市 | 寺 沢 テル子 | * | 官邸跡 | | | | | | |

(2) 文化財保護法第57条の2、3による届出及び通知

昭和57年度

| 登録番号 | 登録跡名 | 所在地 | 申請者 | 発掘の原因 | 運送の性質 | 監督官 | 登録跡名 | 所在地 | 申請者 | 発掘の原因 | 運送の性質 |
|------|--------|------|-------------|------------|-------|-----|--------|-----|------------|------------|-------|
| 1 | 郡山遺跡 | 仙台市 | 中 村 み よ | 住宅増築工事 | 官邸跡 | 21 | 若宮前遺跡 | 仙台市 | 永 野 誠 | 住宅新築工事 | 馬鹿跡 |
| 2 | 油ノ原遺跡 | 仙台市 | 水 野 寛 治 | * | 基盤調査 | 22 | 鶴巣1遺跡 | 仙台市 | 佐藤 博 律 | * | * |
| 3 | 鶴巣2遺跡 | 仙台市 | 川 上 信 | * | 古跡 | 23 | 若沢遺跡 | 仙台市 | 糸 佐 真 寿 | 住宅新築工事 | 包含地 |
| 4 | 南小泉遺跡 | 仙台市 | 仙台市水道管理者 | 下水道管敷設工事 | 馬鹿跡 | 24 | 南小泉遺跡 | 仙台市 | 小 田 武 英 | 住宅新築工事 | 馬鹿跡 |
| 5 | 仙台城跡 | 仙台市 | 小 野 満 夫 | 住宅新築工事 | 城跡 | 25 | 東 通 遺跡 | 仙台市 | 田 司 譲 一 | * | * |
| 6 | 人来田遺跡 | 仙台市 | 小 松 實 | * | 馬鹿跡 | 26 | 若 沢 遺跡 | 仙台市 | 仙台市水道事業管理者 | 上水道配水管敷設工事 | 尼寺跡 |
| 7 | 鶴1-赤堀跡 | 多賀城市 | 加 藤 伸 威 | 水道管理設工事 | 基盤調査 | 27 | 鶴谷遺跡 | 仙台市 | 赤堀公良 | 水道管敷設工事 | 包含地 |
| 8 | 高野餘跡 | 白石市 | 宮城県公営企事業管理者 | 送水管設工事 | 城跡 | 28 | 山中遺跡 | 角田町 | 高 野 正 志 | 土取工事 | * |
| 9 | 鬼田遺跡 | 柴田町 | 柴 田 町 長 | 国際建設工事 | 瓦窯跡 | 29 | 竹ノ内遺跡 | 仙台市 | 佐藤 清 三郎 | 住宅新築工事 | 馬鹿跡 |
| 10 | 城生橋跡 | 中野町 | 中 新 田 町 長 | 株式会社水道新築工事 | 城跡 | 32 | 南小泉遺跡 | 仙台市 | 小 田 義 善 | * | * |
| 11 | 城生橋跡 | 中野町 | 山 田 伸 一 | 住宅改修工事 | * | 33 | 南小泉遺跡 | 仙台市 | 渡 道 伸 | 事務室新築工事 | * |
| 19 | 下野代1遺跡 | 源味町 | 源味町教育委員会教育監 | 医療所新築工事 | 基盤調査 | 34 | 南小泉遺跡 | 仙台市 | 渡 道 伸 男 | 住宅新築工事 | * |
| 20 | 足利御真跡 | 源味町 | 七 谷 達 伸 | 宅地造成工事 | 馬鹿跡 | 35 | 仙台城跡 | 仙台市 | 千 葉 保 康 | * | 城跡 |

| 登録番号 | 地名 | 所在地 | 申請者 | 発展の原因 | 開拓の時期 | 登録番号 | 地名 | 所在地 | 申請者 | 発展の原因 | 開拓の時期 |
|------|-------|-----|----------|-----------|-------|------|-------|-----|------------|------------|-------|
| 36 | 相模原遺跡 | 仙台市 | 村上ハナ子 | 住宅新築工事 | 城南町 | 44 | 北星牧遺跡 | 仙台市 | 柴地秋雄 | 住宅新築工事 | 集落跡 |
| 37 | 六浦河遺跡 | 仙台市 | 高野洋・美智子 | 住宅新築工事 | 毛馬町 | 45 | 福岡町遺跡 | 仙台市 | 柴淮光明 | * | * |
| 38 | 人来田遺跡 | 仙台市 | 佐木恒彦 | * | * | 46 | 御前水遺跡 | 仙台市 | 吉田山野喜 | 住宅新築工事 | 包含地 |
| 42 | 今泉城跡 | 仙台市 | 山田繁雄 | * | 城南町 | 47 | 茂ヶ崎城跡 | 仙台市 | 仙台市長 | 下水管敷設工事 | 城跡跡 |
| 43 | 西沢遺跡 | 仙台市 | 堀平一 | * | 黒川町 | 48 | 南小泉遺跡 | 仙台市 | 大久礼次郎 | 住宅新築工事 | 集落跡 |
| 44 | 西小泉遺跡 | 仙台市 | 早瀬寅吉 | * | 鳴瀬町 | 49 | 八幡山遺跡 | 仙台市 | 横山町井 | 道路改良工事 | 城跡跡 |
| 45 | 西小泉遺跡 | 仙台市 | 見田洋昌 | * | 鳴瀬町 | 50 | 仙台城跡 | 仙台市 | 庄子恭子 | 住宅新築工事 | * |
| 46 | 燕沢遺跡 | 仙台市 | 地主城一・ジエス | * | 鳴瀬町 | 51 | 今泉城跡 | 仙台市 | 押子文男 | * | * |
| 47 | 吉塚沢遺跡 | 仙台市 | 大上剛司 | * | 鳴瀬町 | 52 | 向山遺跡 | 仙台市 | 木村治郎・ますえ | 住宅新築工事 | 包含地 |
| 48 | 南小泉遺跡 | 仙台市 | 高橋陽一 | * | 鳴瀬町 | 53 | 鶴巣遺跡 | 仙台市 | 凌輝武夫 | 住宅新築工事 | * |
| 49 | 十三河遺跡 | 名取市 | 浅野代治 | 老人ホーム建設工事 | 日隈町 | 54 | 西谷遺跡 | 仙台市 | 波瀬みい子 | 長屋新築工事 | * |
| 51 | 吉岡城跡 | 大和町 | 大和町長 | 多目的施設建設工事 | 城南町 | 55 | 高畠日遺跡 | 仙台市 | 東藤地夫 | 老練地盤用後工事 | * |
| 52 | 越谷合遺跡 | 石巻市 | 野木嘉太郎 | 埋蔵改良工事 | 包含地 | 56 | 郡山遺跡 | 仙台市 | 白鳥洋一 | 住宅新築工事 | 吉安跡 |
| 53 | 那山遺跡 | 仙台市 | 鈴木誠 | 住宅新築工事 | 宮町跡 | 57 | 郡山遺跡 | 仙台市 | 田中津允壽 | * | * |
| 54 | 人来田遺跡 | 仙台市 | 佐藤透之 | 住宅新築工事 | 鳴瀬町 | 58 | 鶴巣町遺跡 | 仙台市 | 森みき子 | * | 包含地 |
| 55 | 柳原跡 | 仙台市 | 菊田正 | * | 又室跡 | 59 | 南小泉遺跡 | 仙台市 | 佐々木忠夫 | 住宅新築工事 | 集落跡 |
| 56 | 鶴巣遺跡 | 仙台市 | 平手浩 | 住宅増築工事 | 鳴瀬町 | 60 | 原町跡 | 宮城町 | 小畠勝博 | 道産業工事 | 駅跡跡 |
| 57 | 鶴巣遺跡 | 仙台市 | 小野寺弓夫 | 車庫新築工事 | * | 61 | 南小泉遺跡 | 仙台市 | 東北少年院長 | 東北少年新築工事 | 集落跡 |
| 58 | 南小泉遺跡 | 仙台市 | 庄司龍夫 | 住宅新築工事 | * | 62 | 六反田遺跡 | 仙台市 | 東北電気通信局長 | 社宅建設工事 | * |
| 59 | 泉崎山遺跡 | 仙台市 | 林謙 | 住宅新築工事 | 包含地 | 63 | 志賀遺跡 | 泉町 | 宮城県知事 | 河川改修工事 | 包含地 |
| 60 | 南小泉遺跡 | 仙台市 | 川村博 | 住宅増築工事 | 集落跡 | 64 | 南小泉遺跡 | 仙台市 | 高橋忠一・山田忠 | 車庫新築工事 | 集落跡 |
| 61 | 鶴巣遺跡 | 仙台市 | 幸野辰一 | * | * | 65 | 仲野城跡 | 仙台市 | 小島一右衛門 | 吉田使用住宅新築工事 | 城跡跡 |
| 62 | 人来田遺跡 | 仙台市 | 小形廣 | 住宅新築工事 | * | 66 | 相馬駆逐隊 | 仙台市 | 森 会 員 | 用水排水溝工事 | * |
| 63 | 那山遺跡 | 仙台市 | 佐藤章・弘子 | 住宅増築工事 | 宮町跡 | 67 | 堤町遺跡 | 仙台市 | 森田正 | 住宅新築工事 | 瓦窯跡 |
| 64 | 芦原沢遺跡 | 仙台市 | 青藤春男 | 物置新築工事 | 集落跡 | 68 | 六反田遺跡 | 仙台市 | 白石義幸 | * | 集落跡 |
| 65 | 芦原沢遺跡 | 仙台市 | 中村良典 | 住宅造成工事 | * | 69 | 那山遺跡 | 仙台市 | 秋半昭彦 | 住宅増築工事 | 官街跡 |
| 66 | 南小泉遺跡 | 仙台市 | 渡辺一男 | 住宅新築工事 | * | 70 | 那山遺跡 | 仙台市 | 生井金藏 | * | * |
| 67 | 御堂原跡 | 仙台市 | 渡谷弘 | * | 集落跡 | 71 | 仙台城跡 | 仙台市 | 寺島貞吉 | 住宅新築工事 | 城跡跡 |
| 68 | 福岡町遺跡 | 仙台市 | 且野昭二 | * | 鳴瀬町 | 72 | 六反田遺跡 | 仙台市 | 庄子幸一郎・誠司 | * | 集落跡 |
| 69 | 今泉城跡 | 仙台市 | 今野武雄 | * | 城南町 | 73 | 北目城跡 | 仙台市 | 仙台市長 | 下水道管敷設工事 | 城跡跡 |
| 70 | 小畠勝博跡 | 仙台市 | 大友信一 | 住宅新築工事 | 瓦窯跡 | 74 | 北目城跡 | 仙台市 | 村井沢二 | 住宅新築工事 | * |
| 71 | 人来田遺跡 | 仙台市 | 東峰勝彦 | 住宅新築工事 | 集落跡 | 75 | 仙台城跡 | 仙台市 | 田中武夫 | * | * |
| 72 | 山口遺跡 | 仙台市 | 桑上次郎 | 新幹線建設工事 | * | 76 | 鶴巣遺跡 | 仙台市 | 森野正志 | * | 包含地 |
| 73 | 玉子遺跡 | 仙台市 | 詫保栄 | 住宅新築工事 | * | 77 | 鶴巣遺跡 | 仙台市 | 森本重雄 | * | 集落跡 |
| 74 | 土手内廻跡 | 仙台市 | 安藤久美 | ヨリドウ工事 | 東路 | 78 | 山口遺跡 | 仙台市 | 松本幸 | * | * |
| 75 | 福岡町遺跡 | 仙台市 | 瀬戸文雄 | 住宅新築工事 | 集落跡 | 79 | 鶴巣遺跡 | 仙台市 | 高木正 | * | 集落跡 |
| 76 | 上野山遺跡 | 仙台市 | 仙台市長 | 道路改良工事 | * | 80 | 美堂平遺跡 | 仙台市 | 吉城教育副会長 | 吉城教育副会員教育会 | 集落跡 |
| 77 | 長尾城 | 仙台市 | 松山町長 | 町道改良工事 | 城南町 | 81 | 美堂平遺跡 | 仙台市 | 吉城教育副会員教育会 | 吉城教育副会員教育会 | 城南跡 |
| 78 | 大野田古跡 | 仙台市 | 想山武 | 病院建築工事 | 古墳跡 | 82 | 上野山遺跡 | 仙台市 | 高山酒喜 | 基盤工事、給排水工事 | 集落跡 |
| 79 | 南小泉遺跡 | 仙台市 | 生藤烈 | 住宅新築工事 | 集落跡 | 83 | 福岡町遺跡 | 仙台市 | 早坂らよ | 住宅新築工事 | 包含地 |
| 80 | 折根遺跡 | 仙台市 | 鶴本英男 | * | * | 84 | 翠嶺跡 | 仙台市 | 六友由治 | * | 集落跡 |
| 81 | 東側御殿跡 | 仙台市 | 七井実恵 | * | 瓦窯跡 | 85 | 翠嶺跡 | 仙台市 | 高橋信行 | * | * |
| 82 | 東側御殿跡 | 仙台市 | 菅元大三 | * | * | 86 | 仙台城跡 | 仙台市 | 佐藤昇 | 吉田使用住宅新築工事 | 城跡跡 |
| 83 | 仙台城跡 | 仙台市 | 庄野得樹郎 | * | 城跡跡 | 87 | 六反田遺跡 | 仙台市 | 中村志夫 | 住宅新築工事 | 集落跡 |

| 番号 | 地名 | 所在地 | 申請者 | 発注の相談 | 建設の相談 | 登録 | 地名 | 所在地 | 申請者 | 発注の原因 | 建設の相談 |
|-----|---------|-----|-----------------------|----------------|-------|-----|-----------|-------|---------------|--------------|-------|
| 132 | 六度山道跡 | 仙台市 | 仙台市都市計画部工事課 | ガス本管敷設工事 | 基盤跡 | 180 | 太田 道 達 | 仙台市 | 太田 真一 | 堆肥化施設工事 | 基盤跡 |
| 133 | 宮城県教育館跡 | 宮城町 | 宮城県教育委員会 | 鳥立高等学校建工事 | * | 181 | 中田 勝也 | 仙台市 | 佐藤 滉 治 | 宅地造成工事 | * |
| 134 | 神明社跡跡 | 仙台町 | 宮城県文教事務局 | 河川整理工事 | * | 182 | 小畠謙輔 | 仙台市 | 岡部 良見・マサヒ | 共同住宅新築工事 | 宮城町 |
| 135 | 高畠道跡 | 丸森町 | 戸 盛 美 | 住宅新築工事 | * | 183 | 鶴渡原昌郎 | 仙台市 | 高 繁 徳 | 住宅新築工事 | 高畠道跡 |
| 136 | 郡山道跡 | 仙台市 | 中 村 芳 守 | 住宅増築工事 | 官邸跡 | 184 | 八木田道跡 | 仙台市 | 近 野 道 雄 | * | 郡山道跡 |
| 137 | 明星駅跡跡 | 仙台市 | 青 瑞 き の ハ | 住宅新築工事 | 駅跡跡 | 185 | 上野 道 雄 | 仙台市 | 白 木 市 伸 | 道路改良工事 | * |
| 138 | 半小金道跡 | 仙台市 | 青 野 伸 信 | 新規開拓2.99ヘクタール | 包含地 | 187 | ケケ洋自作 | 仙台町 | 鈴 木 邦 夫 | 市街地新築工事 | 日 本 |
| 139 | 郡山道跡 | 仙台市 | 鶴 翔 六 郎 | 共同住宅建築工事 | 官邸跡 | 188 | 南 道 雄 | 仙 台 市 | 崎 土 地 改 善 事 長 | 仙台空港事業 | 包含地 |
| 140 | 黒道跡 | 仙台市 | 柳 野 雅 夫 | 住宅新築工事 | 基盤跡 | 189 | 片山道跡 | 道 町 | 兵 川 道 雄 | 道路改良工事 | 黒道跡 |
| 141 | 黒道跡 | 仙台市 | 佐 那 順 | * | * | 190 | 若狭山道跡 | 仙台市 | 阿 部 順 | 住宅新築工事 | 黒道跡 |
| 142 | 南城城跡 | 仙台市 | 永 井 秀 力 | ビル新築工事 | 城跡跡 | 194 | 桂 江 道 雄 | 仙台市 | 鈴 木 誠 三 | 事務所・倉庫新築工事 | 南 城 |
| 143 | 馬堀町道跡 | 仙台市 | 佐 那 順 | 住宅新築工事 | 包含地 | 195 | 東城崎道跡 | 仙台市 | 所 澤 駿 右衛 門 | 共同住宅新築工事 | 包含地 |
| 144 | 御町町道跡 | 仙台市 | 鈴 木 照 | * | 基盤跡 | 196 | 麻崎町道跡 | 仙台市 | 阿 邦 権 右衛 門 | 住宅新築工事 | 御町町道跡 |
| 145 | 山口道跡 | 仙台市 | 加 藤 義 明 | * | * | 197 | 常磐山道跡 | 仙台市 | 根 沢 保 | * | 山口道跡 |
| 146 | 砂押道跡 | 仙台市 | 伊、東 実 岩 | 上木田配水管敷設工事 | 包含地 | 198 | 仙 台 道 雄 | 仙台市 | 小 島 季 | * | 砂押道跡 |
| 147 | 黒一村道跡 | 仙台市 | 中 野 錠 夫 | 給水管新設工事 | 瓦窓跡 | 199 | 原 田 道 雄 | 御町町 | 他、藤 清 吉 | * | 黒一村道跡 |
| 149 | 長崎道跡 | 泉 町 | 今 野 作 之 | 宅地造成工事 | 包含地 | 200 | 若林 城 鮎 | 仙台市 | 東 北 少 年 駅 | 震災時被災地新築工事 | 城跡跡 |
| 150 | 神棚道跡 | 仙台市 | 仙台市下水道事業管理者 | 上木田配水管敷設工事 | 包含地 | 204 | 泉 町 道 雄 | 仙台市 | 仙 台 市 長 | 病院建設工事 | 集落跡 |
| 152 | 櫻木木道跡 | 仙台町 | 引 出 山 町 長 | 駐車場整備工事 | 包含地 | 205 | 櫻木 木 道 雄 | 仙台市 | 仙 台 市 長 | 街路整備工事 | 城越跡 |
| 153 | 色森古墳跡 | 色森町 | 高 橋 利 人 | 埋地造成工事 | 古墳跡 | 206 | 高ヶ丘道跡 | 仙台市 | 仙 台 市 長 | 埋地造成工事 | 包含地 |
| 154 | 西 清 道 | 仙台市 | 笠 原 真 幸 | 住宅新築工事 | 基盤跡 | 207 | 北 里 城 雄 | 仙台市 | 日本石油㈱協合支店 | 給油所新築工事 | 城跡跡 |
| 155 | 下内浦道跡 | 仙台市 | 今やアーバン開発企画 | 宅地造成工事 | * | 208 | 明恵荘道跡 | 仙台市 | 佐 藤 幸 一 | 賃貸別荘新築工事 | 包含地 |
| 156 | 製铁道跡 | 泉 町 | 泉 町 土 地 計 划 設 置 事 務 所 | * | 製鐵跡 | 209 | 安 久 道 雄 | 仙台市 | 准 進 洋 三 | 住宅新築工事 | 基盤跡 |
| 158 | 郡山道跡 | 仙台市 | 伊 藤 兼 一 | 住宅増築工事 | 官邸跡 | 210 | 南北木道跡 | 仙台市 | 司 司 滅 | * | * |
| 159 | 御小舟道跡 | 仙台市 | 久 山 隆 英 | 住宅新築工事 | 基盤跡 | 211 | 御 小 舟 道 雄 | 仙台市 | 財 田 大 吉 | 工場・事務所新築工事 | 包含地 |
| 160 | 人来田道跡 | 仙台市 | 井 口 駿 孝 | * | * | 212 | 芦津汎道跡 | 仙台市 | 佐 藤 幸 一 | 住宅新築工事 | * |
| 161 | 新川道跡 | 多賀城 | 仙台市営農業代用耕種 | 宅地造成工事 | * | 213 | 恩 田 道 雄 | 仙台市 | 岡 つ や 子 | * | 宮御跡 |
| 162 | 北星敷道跡 | 仙台市 | 石 田 宜 | 住宅新築工事 | 包含地 | 214 | 南 小 木 道 雄 | 仙台市 | 秋 山 兼 一 | * | 黒原跡 |
| 163 | 上野道跡 | 仙台市 | 高 石 一 喜 | 住宅増築工事 | 基盤跡 | 215 | 新田城跡 | 仙台市 | 木 村 寛 久 子 | 建完住宅新築工事 | 城跡跡 |
| 164 | 山口道跡 | 仙台市 | 中 武 錠 | 住宅新築工事 | 包含地 | 216 | 鶴巣駒塚跡 | 仙台市 | 高 井 寺 駿 生 | 住宅新築工事 | 寺院跡 |
| 165 | 新町中道跡 | 奥町 | 柴 田 信 | 水道管敷設工事 | * | 217 | 後原町道跡 | 仙台市 | 加 藤 文 敏 | 宅地造成工事 | 集落跡 |
| 167 | 免田道跡 | 免町 | 柴 田 信 | 歩道舗装新築工事 | 瓦窓跡 | 218 | 灰ヶ丘道跡 | 仙台市 | 遠藤桃子・美 一 | 住宅新築工事 | 包含地 |
| 168 | 杉押道跡 | 仙台市 | 道 駒 崇 夫 | 築堤工事及び外構工事 | 包含地 | 219 | 仙 山 道 雄 | 仙台市 | 土 保 明 | 住宅新築工事 | 宮御跡 |
| 169 | 赤坂城跡 | 仙台市 | 大 田 佐 四 郎 | 住宅新築工事 | 城跡跡 | 220 | 明徳院道跡 | 仙台市 | 化 連 駒 男 | * | 赤坂城跡 |
| 170 | 仙 台 城 道 | 仙台市 | 武 田 忠 真 | * | * | 221 | 虎峰道跡 | 代府町 | 藏 戸 文 朗 | 宅地造成工事 | * |
| 171 | 下内浦道跡 | 仙台市 | 庄 子 実 一 | 庄子町住宅新築工事 | 基盤跡 | 222 | 室ヶ峰道跡 | 河南町 | 河 南 町 長 | 一般地上・駐輪場新築工事 | * |
| 172 | 南小泉道跡 | 仙台市 | 妹 尾 錠 夫 | 倉庫新築工事 | * | 223 | 北 木 道 雄 | 仙台市 | 建設省仙台工事事務所 | 道路整備工事 | 城跡跡 |
| 173 | 山田上・合宿跡 | 仙台市 | 浦 田 行 力 | 新潟県立農業短期大学新築工事 | 基盤跡 | 225 | 郡 山 道 雄 | 仙台市 | 尾 彩 康 滉 | 住宅新築工事 | 宮御跡 |
| 174 | 南小泉道跡 | 仙台市 | 高 橋 孝 夫 | 住宅新築工事 | 基盤跡 | 226 | 長谷郷道跡 | 河内町 | 吉 善 加 田 伸 謙 | 淨水池建設工事 | 包含地 |
| 175 | 桃原町道跡 | 仙台市 | 井 美 駿 治 | * | 包含地 | 227 | 吉瀬河津道跡 | 仙台市 | 波 野 宜 行 | 汽船岸壁在宅新築工事 | * |
| 176 | 南小泉道跡 | 仙台市 | 柳 井 駒 子 | * | 基盤跡 | 228 | 南小泉道跡 | 仙台市 | 白 石 国 昭 | 住宅新築工事 | 基盤跡 |
| 177 | 黄緑園道跡 | 仙台市 | 木 村 信 | * | * | 229 | 鳴ヶ丘道跡 | 仙台市 | 薄 口 克 己 | * | 包含地 |
| 178 | 五本松京築跡 | 仙台市 | 高 橋 駒 市 | * | 包含地 | 230 | 北 京 道 雄 | 仙台市 | 下 山 波 行 | 事務所新築工事 | 基盤跡 |
| 179 | 新町道跡 | 仙台市 | 小 保 公 夫 | * | 包含地 | 231 | 青石川築跡 | 仙台市 | 佐 藤 は な | 住宅新築工事 | 新町道跡 |

| 路線名 | 所在地 | 中継者 | 発展の原因 | 特徴 | 路線名 | 所在地 | 中継者 | 発展の原因 | 特徴 | |
|-----------------|-----|-------------|------------|-----------|---------------|-------------|-----------------|------------|--------|-----|
| 222 西河町道路 | 仙台市 | 中 安 順 夫 | 宅地造成工事 | 包含地 | 279 瑞ヶ崎道路 | 仙台市 | 賀 黒 か つ | 住宅軒高工事 | 城跡跡 | |
| 233 江田町道路 | 仙台市 | 石 田 信 一 | 宅地造成工事 | 包含地 | 280 岩林城跡 | 仙台市 | 宮 城 刑 槻 所 長 | 疗告新築工事 | * | |
| 234 横田町道路 | 仙台市 | 渡 達 政 美 | 住宅建築工事 | 包含地 | 281 下/内連絡 | 仙台市 | 加 碇 信 夫 | 住宅軒高工事 | 城跡跡 | |
| 235 横田町道路 | 仙台市 | 大 宮 康 美 | 住宅建築工事 | 包含地 | 284 岩林城跡 | 仙台市 | 宮 城 刑 槻 所 長 | 住宅軒高工事 | 城跡跡 | |
| 236 仙台第二北洋 | 仙台市 | 東 北 大 学 兵 | 研究施設新築工事 | 地盤地 | 285 仙 口 道 路 | 仙台市 | 田 中 実 | 住宅軒高工事 | 官街跡 | |
| 237 新田A道路 | 仙台市 | 宮 城 朝 知 事 | 県免農道整備工事 | 包含地 | 286 新田B道路 | 仙台市 | 宮 城 朝 知 事 | * | 実 | |
| 238 一本庄道路 | 仙台市 | * | * | 古 墓 | 287 赤 井 道 路 | 矢 千 町 | 手 代 木 や す み | 宅地造成工事 | 包含地 | |
| 239 成田山道路 | 仙台市 | * | * | 包含地 | 288 鶴 山 道 路 | 仙台市 | 大 信 春 夫 | 住宅新築工事 | 官街跡 | |
| 240 向山自造路 | 仙台市 | * | * | * | 289 鶴野町道路 | 仙台市 | 第 地 彦 夫 | * | 古 墓 | |
| 241 一本松道路 | 仙台市 | * | * | * | 290 鶴野町道路 | 仙台市 | 原 修 国 寿 | * | 鶴落跡 | |
| 242 西ノ入道跡 | 丸森町 | * | * | 稻荷は場整備事業 | 包含地 | 291 稲 市 道 路 | 仙台市 | 東 伸 林 司 一 | * | 包含地 |
| 243 千賀田道路 | 丸森町 | * | * | * | 292 小 仙 舍 道 路 | 仙台市 | 阿 附 伸 根 | 菅家新築工事 | 鶴落跡 | |
| 244 矢ノ内道路 | 丸森町 | * | * | 岡水駅周辺建設工事 | 包含地 | 293 山 口 道 路 | 仙台市 | 木 村 京 三 | 住宅新築工事 | 鶴落跡 |
| 245 田代坂道 | 丸森町 | * | * | 稻荷は場整備事業 | 包含地 | 297 明理敷道路 | 仙台市 | 角 田 伸 藏 | 宅地造成工事 | 包含地 |
| 246 佐藤 安 喜 | 丸森町 | * | * | 古墳跡 | 298 伊 江 道 路 | 仙台市 | 酒 山 伸 男 | 住宅軒高工事 | 丸森跡 | |
| 247 亘山 通 路 | 色麻町 | 高 桥 庄 五 郎 | 共同住宅新築工事 | 官街跡 | 299 瑞ヶ崎城跡 | 仙台市 | 仙台ガス事業管理者 | 郡谷バス本営新築工事 | 或越跡 | |
| 248 亂小泉道路 | 仙台市 | 水 會 信 雄 | 住宅新築工事 | 包含地 | 300 岩林城跡 | 仙台市 | 宮 城 刑 槻 所 長 | 郡谷バウ各自営工事 | * | |
| 249 亂小泉道路 | 仙台市 | 野 木 真 康 | 住宅新築工事 | * | 301 岩林城跡 | 仙台市 | * | 農耕小屋新築工事 | * | |
| 250 亂小泉道路 | 仙台市 | 菅 原 俊 治 | ビル新築工事 | * | 304 中 菊 通 路 | 中村町 | 宮 城 朝 知 事 | 郡谷明治道路新築工事 | 城跡跡 | |
| 251 亂小泉道路 | 仙台市 | 菅 原 伸 一 | * | * | 305 南 小 泉 通 路 | 仙台市 | 南 小 泉 伸 一 | 会津軒高工事 | 鶴落跡 | |
| 252 亂小泉道路 | 仙台市 | 今 桂 雄 | 住宅新築工事 | * | 306 稲 市 道 路 | 仙台市 | 細 長 淳 伸 | 道筋が付設整備工事 | 包含地 | |
| 253 五斗笠道路 | 仙台市 | 内 保 伸 | * | 五斗笠跡 | 307 下/内連絡 | 仙台市 | 庄 木 木 吉 | 住宅新築工事 | 基路跡 | |
| 254 七崎山道路 | 仙台市 | 三 国 文 行 郎 | 事務所新築工事 | 包含地 | 308 稲荷山道路 | 白石市 | 白 石 勝 長 | 公認下水道事業工事 | 包含地 | |
| 255 猪 之 通 路 | 仙台市 | 仙 台 市 洪 滅 局 | 防火水槽設置工事 | * | 309 仙田町道路 | 仙台市 | 市 川 実 二 | 店舗埋新築工事 | 鶴落跡 | |
| 256 上野 通 路 | 仙台市 | * | * | 尾跡 | 310 南 小 泉 通 路 | 仙台市 | 高 梶 伸 弘 | アパート新築工事 | 鶴落跡 | |
| 257 沼津 保 墓 | 石巻市 | 保 沢 駿 伸 | 上水道配水管設工事 | 貝 墓 | 311 地藏道通路 | 仙台市 | 油 井 寛 治 | 住宅新築工事 | 包含地 | |
| 258 鶴見 保 墓 | 石巻市 | * | * | 貝 墓 | 312 明理敷道路 | 仙台市 | 石 田 伸 | 住宅新築工事 | * | |
| 259 金崎山道路 | 仙台市 | 京 良 滅 勝 | 春華新築工事 | 包含地 | 315 仙台駅分岐跡 | 仙台市 | 藤 嶋 伸 夫 | 住宅軒高工事 | 寺跡跡 | |
| 260 堀尾人道跡 | 吉川町 | 宮 城 朝 知 事 | 城跡駅跡・土塁跡工事 | * | 316 通路西通路 | 仙台市 | 岡 田 審 三 | 住宅埋新築工事 | 鶴落跡 | |
| 261 堀尾人道跡 | 吉川町 | * | * | 古 墓 | 317 鶴巣I 通 路 | 仙台市 | 村 国 伸 謙 | 住宅軒高工事 | 包含地 | |
| 262 堀尾人道跡 | 吉川町 | * | * | 出土工事 | 318 南 / 月 城 路 | 仙台市 | 山 彦 ミ ャ シ | 基礎地盤工事 | 城跡跡 | |
| 263 鶴 通 路 | 仙台市 | 菅 原 伸 治 | 住宅諸特工事 | 官街跡 | 319 仙 口 道 路 | 仙台市 | 千 鶴 伸 太 郎 | 住宅新築工事 | 官街跡 | |
| 264 鶴 山 道 路 | 仙台市 | 渡 田 伸 右 二 門 | 総合埋新築工事 | 官街跡 | 320 南 小 泉 通 路 | 仙台市 | 市 川 志 作 | * | 基路跡 | |
| 265 人来頭道路 | 仙台市 | 高 桂 伸 康 | 住宅新築工事 | 龜跡跡 | 321 下/内連絡 | 仙台市 | 小 沢 伸 幸 | 住宅新築工事 | 鶴落跡 | |
| 266 鶴 山 道 路 | 仙台市 | 平 武 伸 | * | 官街跡 | 322 南 小 泉 通 路 | 仙台市 | 今 野 伸 旗 | 住宅新築工事 | 包含地 | |
| 267 鶴 山 道 路 | 仙台市 | 沼 清 伸 | 合宿新築工事 | 包含地 | 323 鶴 山 道 路 | 仙台市 | 東 北 電 気 通 氣 局 長 | 電線ケーブル新築工事 | 水田跡 | |
| 268 明神高直道路 | 仙台市 | 沼 清 み づ 子 | 合宿新築工事 | 包含地 | 324 鶴 山 道 路 | 仙台市 | 大 街 村 長 | 村道改良工事 | 美原跡 | |
| 269 欠ノ上通路 | 仙台市 | 野 木 伸 太 郎 | 住宅軒高工事 | 包含地 | 325 鶴 山 道 路 | 仙台市 | 東 北 電 气 通 氣 局 長 | 電線ケーブル新築工事 | 水田跡 | |
| 270 鶴山町道路 | 仙台市 | 山 口 伸 二 | * | * | 326 仙崎通路 | 仙台市 | 松 通 华 | ビーム新築工事 | 包含地 | |
| 271 仙 区 七 古 道 路 | 仙台市 | 杜 本 審 実 | * | 龜跡跡 | 328 老 々 峰 通 路 | 角 田 伸 | 漫 川 純 直 | 郡谷土取場 | * | |
| 272 田 之 通 路 | 仙台市 | 生 野 伸 実 | * | 包含地 | 332 沢 之 通 路 | 仙台市 | 森 場 伸 三 | 住宅新築工事 | 鶴落跡 | |
| 273 山 口 通 路 | 仙台市 | 横 山 雅 子 | * | 龜跡跡 | 333 仙 岛 通 路 | 石 巻 市 | 鷹 井 伸 一 | 住宅軒高工事 | 城跡跡 | |
| 275 南 小 泉 通 路 | 仙台市 | 千 葵 伸 雄 | * | 龜跡跡 | 334 吹 付 通 路 | 大 阿 村 | 大 街 村 長 | 村道改良工事 | 美原跡 | |
| 277 下/内連絡 | 仙台市 | 岡 部 菊 南 浩 | * | 包含地 | 335 座 野 原 通 路 | 田 前 町 | 小 山 田 審 要 | 住宅造成工事 | 包含地 | |
| 278 今 井 通 路 | 仙台市 | 保 伸 忠 一 | * | 城経跡 | 336 保 伸 伸 路 | 登 來 町 | 岡 部 一 郎 | 住宅新築工事 | * | |

| 番号 | 道路名 | 所在地 | 申請者 | 発掘の原因 | 道路の性格 | 番号 | 道路名 | 所在地 | 申請者 | 発掘の原因 | 道路の性格 |
|-----|-------|-----|------|-----------|-------|-----|---------|-----|----------|----------|-------|
| 337 | 八谷路 | 大和町 | 大和町長 | 都府県地盤整備工事 | 都道 | 345 | 若林坂路 | 仙台市 | 宮城県教育委員会 | 保通改修工事 | 都道 |
| 338 | 上野道 | 仙台市 | 今野豊男 | 住宅整備工事 | 都道 | 346 | 南小泉道路 | 仙台市 | 宮城県教育委員会 | 保通改修工事 | 都道 |
| 339 | 鶴田町道 | 仙台市 | 鶴田国寿 | * | 住宅地 | 347 | 郡山道 | 仙台市 | 庄子志郎 | 住宅整備工事 | 都道 |
| 340 | 明原町道 | 仙台市 | 喜多哲義 | * | 都道 | 348 | 仙台城跡 | 仙台市 | 今野清志 | * | 都道 |
| 341 | 朝日Ⅰ道路 | 仙台市 | 愛宿二郎 | * | 都道 | 351 | 北荒沢駒形 | 仙台市 | 治町長 | 都市公園整備工事 | 都道 |
| 342 | 北花道 | 仙台市 | 大賀功二 | 店舗建築工事 | 都道 | 352 | 呂田沢道路 | 仙台市 | 柳田賀廣 | 住宅新築工事 | 都道 |
| 343 | 天神路 | 大和町 | 高橋東 | 土取り工事 | 都道 | 353 | NST高崎駒形 | 角田市 | 宮城昌加泰 | 私道は坦整備事業 | 都道 |
| 344 | 南小泉道路 | 仙台市 | 佐藤吉治 | 住宅整備工事 | 都道 | | | | | | |

(3) 文化財保護法第57条の6による通知

56年度

| 番号 | 道路名 | 所在地 | 申請者 | 発掘の原因 | 道路の性格 | 番号 | 道路名 | 所在地 | 申請者 | 発掘の原因 | 道路の性格 |
|-----|-------|-----|----------|----------|-------|----|-----|-----|-----|-------|-------|
| 386 | 御陵坂古跡 | 松山町 | 山口町教育委員会 | 考古学調査による | 古跡 | | | | | | |

(3) 文化財保護法第57条の5、6による届出及び通知

昭和57年度

| 番号 | 道路名 | 所在地 | 申請者 | 発見の原因 | 道路の性格 | 番号 | 道路名 | 所在地 | 申請者 | 発見の原因 | 道路の性格 |
|-----|-------|-----|----------|-------------|-------|-----|--------|-----|----------|-------------|-------|
| 148 | 喜地道路 | 泉市 | 石巻文化芸術会 | 分布測量の際発見 | 包含地 | 328 | 西國島南道路 | 角田市 | 内閣府教育委員会 | 工事等に見出された結果 | 包含地 |
| 190 | 宮林東路 | 色麻町 | 色麻町教育委員会 | 文化財整備の一環で発見 | 直線 | 329 | 新浜A道 | 福塙市 | 福塙市教育委員会 | 定期巡回中に見出 | 直線 |
| 282 | 米ヶ浜道路 | 岩瀬町 | 岩瀬町教育委員会 | 住民からの通報による | 包含地 | 330 | 内原島道路 | 福塙市 | 福塙市教育委員会 | 定期巡回中に見出 | * |
| 295 | 宮山南道路 | 石巻市 | 石巻市教育委員会 | 開拓地歩道中に見出 | 横断 | 331 | 新浜B道 | 福塙市 | 福塙市教育委員会 | 定期巡回中に見出 | * |
| 327 | 乳賀東路 | 内田市 | 内田市教育委員会 | 海水管理課工事 | 包含地 | 350 | 白石成子洋岸 | 松島町 | 松島町教育委員会 | 埋蔵文化財調査 | * |

(4) 文化財保護法第98条の2による通知

56年度

| 番号 | 道路名 | 所在地 | 申請者 | 担当者 | 発掘の原因 | 道路の性格 |
|-----|------------|-----|----------|----------|----------------|-------|
| 371 | 保翠平成路 | 白石市 | 宮城県教育委員会 | 文化財保護課 | 県道改修工事に伴う事前調査 | 包含地 |
| 384 | 扶桑御藏坂路 | 泉市 | 泉市長 | 泉市教育委員会 | 宅地開発 | * |
| 385 | 小野佐六穴坂小谷支所 | 古川市 | 古川市教育委員会 | 古川市教育委員会 | 安全確保のための定期調査 | 横穴古墳 |
| 398 | 大雄B道 | 白石市 | 白石市教育委員会 | 白石市教育委員会 | 土地改良事業のための緊急調査 | 包含地 |

(4) 文化財保護法第98条の2による通知

昭和57年度

| 番号 | 道路名 | 所在地 | 申請者 | 担当者 | 発掘調査の目的 | 道路の性格 |
|----|-----------|------|----------|----------|-------------------|-----------|
| 12 | 城生橋 | 中野町 | 中野町教育委員会 | 中野町教育委員会 | 防大雨時水害対策工事に伴う事前調査 | 官街路 |
| 13 | 北側通 | 仙台市 | 仙台市長 | 仙台市教育委員会 | 土地改良事業に伴う事前調査 | 馬頭跡 |
| 14 | 小瀬川通 | 七ヶ宿町 | 宮城県 | 文化財保護課 | 七ヶ宿ダム建設工事に伴う | 包含地 |
| 15 | 矢ノ目通 | 丸森町 | 宮城県 | * | 震度4度前後緑水施設建設に伴う | 馬頭跡 |
| 16 | 色麻古墳群上郷支所 | 色麻町 | 宮城県 | * | 宮城県安芸郡整備事業に伴う | 古墳群及び包含地 |
| 17 | 民主病院裏通 | 源味町 | 源味町 | * | 源味町教育委員会 | 宅地造成工事に伴う |
| 18 | 下原武Ⅱ通 | 源味町 | 源味町 | * | 震度の範囲調査 | 堀 |
| 29 | 郡山通 | 仙台市 | 仙台市長 | 仙台市教育委員会 | 郡山通の範囲、追跡調査 | 官街路 |
| 30 | 西谷坂通 | 仙台市 | 仙台市長 | 仙台市教育委員会 | 開発に伴う事前調査 | 包含地 |
| 39 | 泉崎通 | 仙台市 | 仙台市長 | 仙台市教育委員会 | 仙台市高架道南北継続工事に伴う | 馬頭跡 |

| 番号 | 地名 | 所在地 | 申請者 | 担当者 | 発掘調査の目的 | 遺跡の性格 |
|-----|------------|------|----------|-----------|-----------------------|---------|
| 40 | 下の内造跡 | 仙台市 | 仙台市教育委員会 | 仙台市教育委員会 | 仙台市高架鉄道南北線建設工事に伴う事前調査 | 尾張跡 |
| 41 | 御室平成跡 | 仙台市 | 宮城県* | 文化財保護課 | 宮城県立高等学校建設に伴う* | * |
| 50 | 十三塚造跡 | 名取市 | 名取市* | 名取市教育委員会 | 遺構確認調査 | 包含地 |
| 114 | 西小泉造跡 | 仙台市 | 宮城県* | 文化財保護課 | 東北平野開拓工事に伴う* | 包含地 |
| 115 | 坂下吉城跡 | 村田町 | 村田町* | 村田町教育委員会 | 宅地造成工事に伴う* | 円墳 |
| 116 | 城生塚跡 | 中野田町 | 中野田町* | 中野田町教育委員会 | 遺構確認調査 | 古代城塁跡 |
| 117 | 中田城中造跡 | 仙台市 | 仙台市* | 仙台市教育委員会 | 宅地造成工事に伴う* | 集落跡 |
| 151 | 西ノ里造跡 | 仙台市 | 仙台市* | 仙台市教育委員会 | * | * |
| 157 | 下ノ内造跡 | 仙台市 | 仙台市* | 仙台市教育委員会 | 仓库新築に伴う* | * |
| 165 | 越田台造跡 | 石巻市 | 石巻市* | 石巻市教育委員会 | 土取り工事に伴う* | 包含地 |
| 166 | 西武道跡 | 仙台市 | 仙台市* | 仙台市教育委員会 | 仙台市崎東土地整理組理事業に伴う* | 包含地 |
| 191 | 藤ヶ浜貝塚 | 唐桑町 | 唐桑町* | 文化財保護課 | 南谷所兼住宅建築に伴う* | 包含地 |
| 192 | 高柳造跡 | 若泉市 | 泉市* | 泉市教育委員会 | 高柳川改修工事に伴う* | * |
| 201 | 千賀田造跡 | 丸森町 | 宮城県* | 文化財保護課 | 宮城縣營鶴鳴町整備事業に伴う* | * |
| 202 | 矢ノ目造跡 | 丸森町 | 宮城県* | * | 雨水施設建設工事に伴う* | 兔塚跡 |
| 203 | 七ノ入造跡 | 丸森町 | 宮城県* | * | 宮城縣營海培整備事業に伴う* | 包含地 |
| 224 | 桜野原造跡 | 利府町 | 利府町* | * | 宅地造成工事に伴う事前調査 | 散布地 |
| 260 | 鹿沢山造跡 | 宮城町 | 宮城町* | 宮城町教育委員会 | 道路の範囲確認調査 | 包含地 |
| 273 | 名生塚造跡 | 古川市 | 宮城県* | 宮城県教育委員会 | 遺跡追跡確認調査 | 古代王道遺跡地 |
| 276 | 長老塚跡 | 河原町 | 河南町* | 文化財保護課 | 浄水場建設工事に伴う事前調査 | 城塁跡 |
| 283 | 吉野城跡 | 角田市 | 角田市* | 角田市教育委員会 | 市道改良工事に伴う事前調査 | 城塁跡 |
| 294 | 製鉄造跡 | 泉市 | 泉市* | 泉市教育委員会 | 宅地造成に伴う* | 製鉄遺跡 |
| 295 | 吉ノ内造跡 | 泉市 | 宮城県* | 文化財保護課 | 免許センター建設に伴う* | 包含地 |
| 302 | 吉田造跡(朝倉造跡) | 米山町 | 米山町* | 米山町教育委員会 | 農業深耕確認調査 | 吉田跡 |
| 303 | 五松山制高點跡 | 石巻市 | 石巻市* | 石巻市教育委員会 | 予防治治事業陸連駆逐工事に伴う事前調査 | 包含地 |
| 313 | 中新田城跡 | 中新田町 | 中新田町* | 中新田町教育委員会 | 那根脇御街道改良工事に伴う* | 城塁跡 |
| 314 | 南小泉造跡 | 仙台市 | 仙台市* | 仙台市教育委員会 | 仓库新築に伴う事前調査 | 馬落跡 |
| 349 | 堀井・瀬越橋西造跡 | 内田市 | 宮城県* | 文化財保護課 | 用水管理施設の事前調査 | 兔塚跡 |
| 358 | 鳥居原造跡 | 仙台市 | 仙台市* | 仙台市教育委員会 | 仙台市高架鉄道南北線建設工事に伴う* | 水田跡 |
| 359 | 東崎前造跡 | 仙台市 | * | * | 地下鉄工事に係る事前調査 | 水田跡 |
| 360 | 中谷地・鳥居原造跡 | 仙台市 | * | * | 仙台市高架鉄道南北線建設工事に伴う* | 水田跡 |

宮城県文化財調査報告書刊行一覧

| 刊行年月日 | 報 告 書 名 |
|--------------------|---|
| 1954 (昭和29年3月) | 宮城県文化財調査報告書第1集「仙台東照宮・遠見塚・かめ塚古墳」 |
| 1956 (昭和31年3月) | 宮城県文化財調査報告書第2集「茶切谷廬寺跡」 |
| 1958 (昭和33年3月) | 宮城県文化財調査報告書第3集「高藏寺阿弥陀堂・高藏寺の仏像」 |
| 1958 (昭和33年3月) | 「陸奥國分寺跡発掘調査報告書」 |
| 1962 (昭和37年3月) | 「昭和36年度多賀城発掘調査概報」 |
| 1963 (昭和38年3月) | 「昭和37年度多賀城発掘調査概報」 |
| 1964 (昭和39年3月) | 「昭和38年度多賀城跡発掘調査概報」 |
| 1965 (昭和40年3月) | 宮城県文化財調査報告書第8集「埋蔵文化財緊急発掘調査概報 (崎山圓洞窟・藤塚古墳調査概報・田町裏遺跡・救世道跡・合戰原古墳群)」 |
| 1966 (昭和41年3月) | 宮城県文化財調査報告書第9集「宮城県造跡地名表」 |
| 1966 (昭和41年3月) | 宮城県文化財調査報告書第10集「宮城の民俗(民俗資料緊急調査報告)」 |
| 1966 (昭和41年3月) | 宮城県文化財調査報告書第11集「埋蔵文化財緊急発掘調査報告書(字ノ崎古墳)」 |
| 1967 (昭和42年3月) | 宮城県文化財調査報告書第12集「埋蔵文化財発掘調査報告書 (柳形圓穴古墳群・麗の巣古墳群・松崎古墳)」 |
| 1967 (昭和42年3月) | 宮城県文化財調査報告書第13集「新庄市都市指定地区」埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 (西ノ浜貝塚・三十三間堂)」 |
| 1967 (昭和42年12月) | 宮城県文化財調査報告書第14集「埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 陸奥國分寺跡東北部発掘調査報告」 |
| 1968 (昭和43年3月) | 宮城県文化財調査報告書第15集「埋蔵文化財第三次緊急発掘調査概報(南境貝塚)」 |
| 1968 (昭和43年3月) | 宮城県文化財調査報告書第16集「埋蔵文化財第二次緊急発掘調査概報(西ノ浜貝塚)」 |
| 1968 (昭和43年3月) | 宮城県文化財調査報告書第17集「埋蔵文化財緊急調査概報 (東北縦貫自動車道造跡地名表・同試掘調査略報)」 |
| 1968 (昭和43年3月) | 「藏王山麓民俗図誌(豪雨ダム水没地区)」 |
| 1969 (昭和44年3月) | 宮城県文化財調査報告書第18集「埋蔵文化財緊急調査概報 東北縦貫自動車道造跡地名表・湯ノ倉跡調査概報」 |
| 1969 (昭和44年3月) | 宮城県文化財調査報告書第19集「埋蔵文化財緊急発掘調査概報(長根貝塚)」 |
| 1969 (昭和44年3月) | 宮城県文化財調査報告書第20集「埋蔵文化財第四次緊急発掘調査概報(南境貝塚)」 |
| 1969 (昭和44年3月) | 宮城県文化財調査報告書第21集「藏王山麓の社会と民俗」 |
| 1970 (昭和45年3月) | 宮城県文化財調査報告書第22集「日の出山窓跡群」 |
| 1970 (昭和45年3月) | 宮城県文化財調査報告書第23集「東北自動車道関係造跡発掘調査概報 (下原田遺跡・二層敷遺跡・持長地遺跡)」 |
| 1971 (昭和46年3月) | 宮城県文化財調査報告書第24集 「東北自動車道関係造跡発掘調査概報(刈田郡藏王町地区)」 |
| 1972 (昭和47年3月) | 宮城県文化財調査報告書第25集「東北自動車道関係造跡発掘調査概報 (白石市・柴田郡村田町地区)」 |
| 1972 (昭和47年3月) | 宮城県文化財調査報告書第26集「宮城県指定天然記念物跡状斑れい岩調査報告」 |
| 1972 (昭和47年3月) | 宮城県文化財調査報告書第27集「東北新幹線関係造跡分布調査報告書 (地名表・試掘調査概報(白石・高瀬水地区)」 |

| | |
|--------------------|--|
| 1973 (昭和48年3月) | 宮城県文化財報告書第28集「宮城県遺跡地名表」 |
| 1973 (昭和48年3月) | 宮城県文化財調査報告書第29集「菅生田遺跡調査概報」 |
| 1973 (昭和48年3月) | 宮城県文化財調査報告書第30集「東北新幹線関係遺跡発掘調査略報」 |
| 1973 (昭和48年3月) | 宮城県文化財調査報告書第31集「東北自動車道関係遺跡発掘調査略報 (白石市・仙台市～大和町地区)」 |
| 1973 (昭和48年3月) | 宮城県文化財調査報告書第32集「山畠塚跡横穴古墳群発掘調査概報」 |
| 1973 (昭和48年3月) | 宮城県文化財調査報告書第33集「金剛寺貝塚・今熊野遺跡調査概報」 |
| 1974 (昭和49年3月) | 宮城県文化財調査報告書第34集「山中七ヶ宿の民俗」 |
| 1974 (昭和49年3月) | 宮城県文化財調査報告書第35集「東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅰ(荒屋敷横穴古墳群・山下横穴古墳群・北沢遺跡・西野田遺跡・岩切鴻ノ墓遺跡・中ノ墓A遺跡)」 |
| 1974 (昭和49年3月) | 「宮城県の古民家」(宮城県民家緊急調査報告書) |
| 第37集 欠番 | |
| 1975 (昭和50年3月) | 宮城県文化財調査報告書第38集「宮前遺跡」 |
| 1975 (昭和50年3月) | 宮城県文化財調査報告書第39集「土平遺跡発掘調査概報」 |
| 1975 (昭和50年3月) | 宮城県文化財調査報告書第40集「宮城県文化財発掘調査略報(昭和48・49年度分)」 |
| 1975 (昭和50年3月) | 宮城県文化財調査報告書第41集「天然記念物ヨコグラノキ北限地帯調査報告書」 |
| 1976 (昭和51年3月) | 宮城県文化財調査報告書第42集「宮城県文化財発掘調査略報(昭和50年度分)」 |
| 1976 (昭和51年3月) | 宮城県文化財調査報告書第43集「貞山堀運河」 |
| 1976 (昭和51年3月) | 宮城県文化財調査報告書第44集「砂山横穴古墳群調査報告書」 |
| 1976 (昭和51年3月) | 宮城県文化財調査報告書第45集「特別名勝松島(保存管理計画策定書)」 |
| 1976 (昭和51年10月) | 宮城県文化財調査報告書第46集「宮城県遺跡地名表」 |
| 1976 (昭和51年10月) | 宮城県文化財調査報告書第47集「宮城県遺跡地図」 |
| 1977 (昭和52年3月) | 宮城県文化財調査報告書第48集「宮城県文化財発掘調査略報(昭和51年度分)」 |
| 1977 (昭和52年3月) | 宮城県文化財調査報告書第49集「清太原西遺跡・船渡前遺跡」 |
| 1977 (昭和52年3月) | 宮城県文化財調査報告書第50集「清水側遺跡」 |
| 1977 (昭和52年10月) | 宮城県文化財調査報告書第51集「宮城県民俗分布図」緊急民俗資料分布調査報告書 |
| 1978 (昭和53年3月) | 宮城県文化財調査報告書第52集「東北自動車道関係遺跡調査報告書Ⅰ(上深沢遺跡)」 |
| 1978 (昭和53年3月) | 宮城県文化財調査報告書第53集「宮城県文化財発掘調査略報(昭和52年度分)」 |
| 1978 (昭和53年3月) | 宮城県文化財調査報告書第54集「湯ノ坪遺跡」 |
| 1978 (昭和53年3月) | 宮城県文化財調査報告書第55集「歴史の道調査結果略報」 |
| 1978 (昭和53年3月) | 宮城県文化財調査報告書第56集「北沢遺跡」 |

| | |
|-------------------|--|
| 1979 (昭和54年3月) | 宮城県文化財調査報告書第57集「宮城県文化財発掘調査略報(昭和53年度分)」 |
| 1979 (昭和54年3月) | 宮城県文化財調査報告書第58集「は場整備間連遺跡詳細分布調査報告書」 |
| 1979 (昭和54年3月) | 宮城県文化財調査報告書第59集「宇南遺跡」 |
| 1979 (昭和54年3月) | 宮城県文化財調査報告書第60集「歴史の道調査結果略報」 |
| 1979 (昭和54年8月) | 宮城県文化財調査報告書第61集「五輪C遺跡」 |
| 1980 (昭和55年3月) | 宮城県文化財調査報告書第62集「東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅰ」 |
| 1980 (昭和55年3月) | 宮城県文化財調査報告書第63集「東北自動車道関係遺跡調査報告書Ⅱ」 |
| 1980 (昭和55年3月) | 宮城県文化財調査報告書第64集「は場整備間連遺跡詳細分布調査報告書」 |
| 1980 (昭和55年3月) | 宮城県文化財調査報告書第65集「東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅲ」 |
| 1980 (昭和55年3月) | 宮城県文化財調査報告書第66集「歴史の道調査報告書」 |
| 1980 (昭和55年3月) | 宮城県文化財調査報告書第67集「金剛寺貝塚・宇賀崎貝塚・宇賀崎一号墳他」 |
| 1980 (昭和55年3月) | 宮城県文化財調査報告書第68集「玉造遺跡」 |
| 1980 (昭和55年3月) | 宮城県文化財調査報告書第69集「東北自動車道関係遺跡調査報告書Ⅳ」 |
| 1980 (昭和55年3月) | 宮城県文化財調査報告書第70集「金取遺跡」 |
| 1980 (昭和55年9月) | 宮城県文化財調査報告書第71集「東北自動車道関係遺跡調査報告書Ⅴ」 |
| 1980 (昭和55年9月) | 宮城県文化財調査報告書第72集「東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅵ」 |
| 1981 (昭和56年3月) | 宮城県文化財調査報告書第73集「宮城県遺跡地名表」 |
| 1981 (昭和56年3月) | 宮城県文化財調査報告書第74集「宮城県遺跡地図」 |
| 1981 (昭和56年3月) | 宮城県文化財調査報告書第75集「宮城県営は場整備間連遺跡調査報告書」 |
| 1981 (昭和56年3月) | 宮城県文化財調査報告書第76集「東北地連バイパス間連遺跡調査報告書」 |
| 1981 (昭和56年3月) | 宮城県文化財調査報告書第77集「東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅶ」 |
| 1981 (昭和56年3月) | 宮城県文化財調査報告書第78集「長者原貝塚・上新田遺跡」 |
| 1981 (昭和56年3月) | 宮城県文化財調査報告書第79集「仙南仙塙広域水道関係遺跡調査報告書」 |
| 1981 (昭和56年3月) | 宮城県文化財調査報告書第80集「歴史の道調査報告書」 |
| 1981 (昭和56年6月) | 宮城県文化財調査報告書第81集「東北自動車道遺跡調査報告書Ⅷ」 |
| 1981 (昭和56年3月) | 宮城県文化財調査報告書第82集「宮城県の民俗芸能」 |
| 1982 (昭和57年3月) | 宮城県文化財調査報告書第83集「東北自動車道遺跡調査報告書Ⅸ」 |
| 1982 (昭和57年3月) | 宮城県文化財調査報告書第84集「多賀城市水入遺跡発掘調査報告書」 |
| 1982 (昭和57年3月) | 宮城県文化財調査報告書第85集「青木畠遺跡」 |

| | |
|-------------------|---|
| 1982 (昭和57年3月) | 宮城県文化財調査報告書第86集「宮城県宮城は場整備関連遺跡等調査報告書」 |
| 1982 (昭和57年3月) | 宮城県文化財調査報告書第87集「松島有料道路関連遺跡」(館山館・山下) |
| 1982 (昭和57年3月) | 宮城県文化財調査報告書第88集「仙南仙塩広域水道関係遺跡調査報告書Ⅱ」 |
| 1982 (昭和57年3月) | 宮城県文化財調査報告書第89集「天神山遺跡」 |
| 1982 (昭和57年3月) | 宮城県文化財調査報告書第90集「文化財発掘調査略報」 |
| 1982 (昭和57年3月) | 宮城県文化財調査報告書第91集「宮城県におけるニホンカモシカの生息状況 —特別天然記念物カモシカ緊急調査—」 |
| 1982 (昭和57年9月) | 宮城県文化財調査報告書第92集「東北自動車道遺跡調査報告書Ⅱ」 |
| 1983 (昭和58年3月) | 宮城県文化財調査報告書第93集「東北自動車道遺跡調査報告書Ⅲ」 |
| 1983 (昭和58年3月) | 宮城県文化財調査報告書第94集「南小京遺跡」 |
| 1983 (昭和58年3月) | 宮城県文化財調査報告書第95集「宮城県宮城場整備関連遺跡調査報告書」 |
| 1983 (昭和58年3月) | 宮城県文化財調査報告書第96集「朽木横横穴古墳群・宮前遺跡」 |
| 1983 (昭和58年3月) | 宮城県文化財調査報告書第97集「御堂平遺跡」 |
| 1983 (昭和58年3月) | 宮城県文化財調査報告書第98集「近世寺社建築緊急調査報告書」 |